岐阜県教育文化財団文化財保護センター
調査報告書　第96集

大　杉　西　遺　跡

2006
財団法人岐阜県教育文化財団

大杉西遺跡（おおすぎにし）

2006

財団法人岐阜県教育文化財団

序

清らかな長良川が市域を南流し、「関の刀鍛冶」として独自の鍛刀法を確立し、全国的に刀剣生産の名声が高い関市は、豊かな景観に恵まれ、堂々たる歴史を物語る町です。そして、今なお情緒ある町並みがいたるところに残っており、人々の暮らしの中にも風情と人情が感じられます。

このたび、岐阜県基盤整備部による一般国道248号関バイパス道路改良工事に伴い、工事予定地内の埋蔵文化財の記録保存を図るため、関市大杉に所在する大杉西遺跡の発掘調査を実施しました。

今回の調査では、縄文時代中期と弥生時代後期～終末期の掘立柱建物跡、竪穴住居跡などを検出し、縄文土器、弥生土器、石器などの当時の様相の分かる遺物が出土しました。特に縄文時代中期の掘立柱建物跡や、弥生時代後期～終末期の方形周溝墓は県内の検出事例が少なく、貴重な資料となりました。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成に当たりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、関市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成18年３月

財団法人岐阜県教育文化財団

理事長　日比　治男

例　言

1　本書は、岐阜県関市大杉地内に所在する大杉西遺跡（岐阜県遺跡番号21205-10132）の発掘調査報告書である。

2　本調査は一般国道248号関バイパス道路改良工事に伴うもので、岐阜県基盤整備部道路建設課から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが実施した。

3　発掘調査は、八賀晋三重大学名誉教授の指導のもとに、平成15年度に実施した。整理作業は16年度に実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当などは、本書第１章第２節に一括掲載した。

5　本書の執筆分担は目次に示した。編集は小野木が行った。

6　発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、地形測量・空中写真測量などの業務は株式会社帝国建設コンサルタントに委託して行った。

7　遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。

8　自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託して行った。その結果は第４章に掲載した。

9　発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）

　赤塚次郎、石黒立人、泉拓良、篠原英政、田中弘志、長屋幸二、松岡千年、渡邉博人

10　本文中の方位は、世界測地系第Ⅶ系の座標北を示している。

11　土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1998『新版　標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

12　調査記録及び出土遺物は財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターで保管している。

目　次

序
例言

第１章　調査の経緯……（總山・小野木）……１
　第１節　調査に至る経緯……１
　第２節　調査の経過と方法……２
第２章　遺跡の環境……６
　第１節　地理的環境……（藤岡）……６
　第２節　歴史的環境……（小野木）……８
第３章　調査の結果……（小野木）……12
　第１節　基本層序……12
　第２節　遺構・遺物概要……14
　第３節　縄文時代の遺構と遺物……22
　第４節　弥生時代の遺構と遺物……44
　第５節　縄文時代～弥生時代の遺構と遺物……70
　第６節　近世～近代の遺構と遺物……77
第４章　自然科学的手法による報告・検討……98
　第１節　土器の胎土分析……98
　第２節　赤彩土器の赤色顔料 ……106
第５章　まとめ ……（小野木）……108

引用・参考文献
写真図版
報告書抄録

挿図目次

図１　調査地位置図……１
図２　グリッド設定及び地形測量図……３
図３　周辺の地形……７
図４　周辺遺跡位置図……９
図５　明治時代の土地利用図……10
図６　試掘坑位置図……11
図７　基本層序（調査区南壁）……13
図８　遺構分類模式図……14
図９　遺構全体図……15
図10　主要遺構配置図……15
図11　柱穴の可能性のある土坑配置図……15
図12　縄文土器の分類……17
図13　縄文土器の時期別の出土位置図……17
図14　縄文土器施文工具模式図……18
図15　弥生土器の器種別の出土位置図……19
図16　古代以降の遺物出土位置図……20
図17　土器の実測図の表記方法……21
図18　縄文時代の遺構位置図……22
図19　縄文土器の出土位置図……23
図20　石器の出土位置図……23
図21　SB４（１）……25
図22　SB４（２）……26
図23　SB４遺物出土位置図・接合図……27
図24　SH３（１）……28
図25　SH３（２）……29
図26　SH３周辺遺物出土位置図……30
図27　縄文時代の土坑（１）……31
図28　縄文時代の土坑（２）……33
図29　縄文時代の土坑（３）……34
図30　縄文時代の土坑（４）……35
図31　縄文時代の遺構出土遺物（１）……38
図32　縄文時代の遺構出土遺物（２）……39
図33　縄文時代の遺構出土遺物（３）……40
図34　縄文時代の遺構出土遺物（４）……41
図35　縄文時代の遺構出土遺物（５）……42
図36　縄文時代の遺構・包含層出土遺物……43
図37　弥生時代の遺構位置図……44
図38　弥生土器の出土位置図……45
図39　石器の出土位置図……45
図40　SB１（１）……47
図41　SB１（２）……48
図42　SB１主要遺物出土位置図……48
図43　SB１遺物出土位置図・接合図……49
図44　SB２（１）……50
図45　SB２（２）……51
図46　SB２（３）……52
図47　SB２遺物出土位置図……52
図48　SB３……53
図49　SB３遺物出土位置図……54
図50　SH１……55
図51　SH１・２周辺遺物出土位置図……56
図52　SH２……57
図53　SA１……58
図54　SZ１……60
図55　SZ２・３……61
図56　SZ１～３遺物出土位置図……61
図57　弥生時代の土坑……62
図58　弥生時代の土坑・溝……64
図59　弥生時代の遺構出土遺物（１）……67
図60　弥生時代の遺構出土遺物（２）……68
図61　弥生時代の遺構・包含層出土遺物……69
図62　縄文～弥生時代の遺構位置図……70
図63　縄文～弥生時代の土坑（１）……70
図64　縄文～弥生時代の土坑（２）……71
図65　縄文～弥生時代の土坑（３）……72
図66　縄文～弥生時代の土坑（４）……73
図67　縄文～弥生時代の土坑（５）……74
図68　縄文～弥生時代の土坑（６）……75
図69　縄文～弥生時代の遺構・包含層出土遺物……76
図70　近世～近代の遺構位置図……77
図71　近世～近代の土坑……78
図72　近世～近代の土坑・溝……79
図73　近世～近代の遺構出土遺物……80
図74　遺構変遷図……109
図75　遺構配置図……112

表目次

表１　周辺遺跡一覧表……８
表２　試掘確認調査の結果……11
表３　検出遺構一覧……14
表４　出土遺物点数……16
表５　弥生土器の器種別破片数……19
表６　石器出土点数……20
表７　縄文時代の遺構分類毎の数量……22
表８　弥生時代の遺構分類毎の数量……44
表９　遺構一覧表（１）……81
表10　遺構一覧表（２）……82
表11　遺構一覧表（３）……83
表12　遺構一覧表（４）……84
表13　遺構一覧表（５）……85
表14　遺構一覧表（６）……86
表15　遺構一覧表（７）……87
表16　出土遺物一覧表（１）……88
表17　出土遺物一覧表（２）……89
表18　遺物観察表（１）……90
表19　遺物観察表（２）……91
表20　遺物観察表（３）……92
表21　遺物観察表（４）……93
表22　遺物観察表（５）……94
表23　遺物観察表（６）……95
表24　遺物観察表（７）……96
表25　遺物観察表（８）……97
表26　土器の詳細とその肉眼的特徴……104
表27　土器胎土の粘土及び砂粒の特徴……104
表28　胎土中岩石片の分類と組み合わせ……104
表29　鉄の輝度が最も高い場所のポイント分析結果……106

挿入写真目次

写真１　調査風景……５
写真２　基本層序……13
写真３　縄文土器の文様分類……18
写真４　胎土中の粒子顕微鏡写真……105
写真５　赤彩土器の元素マッピング……107

写真図版目次

図版１　調査区近景
図版２　縄文時代の遺構（１）
図版３　縄文時代の遺構（２）
図版４　弥生時代の遺構（１）
図版５　弥生時代の遺構（２）
図版６　縄文時代の遺構出土遺物（１）
図版７　縄文時代の遺構出土遺物（２）
図版８　縄文時代の遺構出土遺物（３）
図版９　縄文時代の遺構・包含層出土遺物
図版10　弥生時代の遺構出土遺物（１）
図版11　弥生時代の遺構出土遺物（２）
図版12　縄文～弥生時代・近世～近代の遺構出土遺物

第１章　調査の経緯

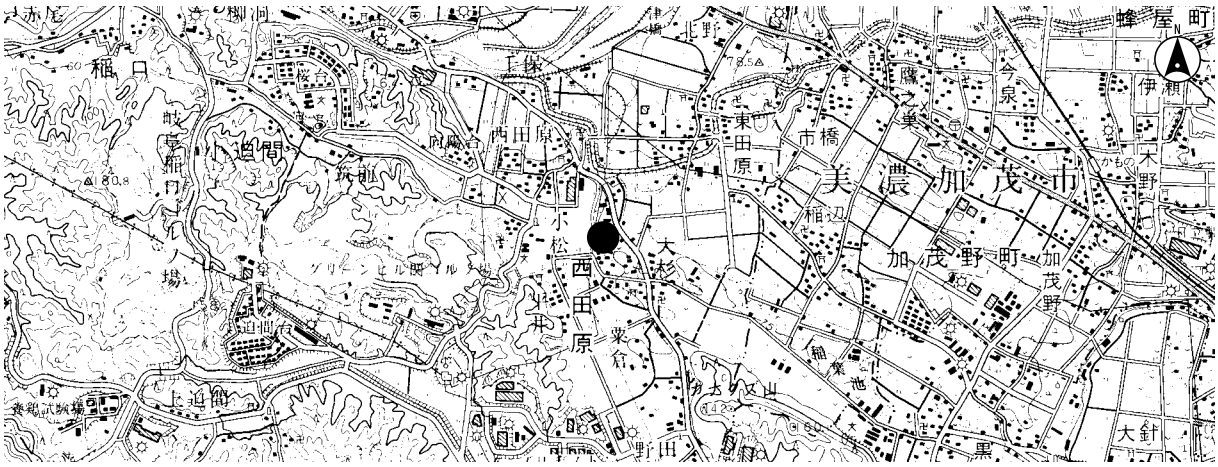
第１節　調査に至る経緯

大杉西遺跡は、岐阜県関市大杉地内に所在し、関市南東部から美濃加茂市加茂野町、加茂郡坂祝町にかけて広がる台地の西端近くに位置している。

岐阜県基盤整備部美濃建設事務所では、一般国道248号関バイパス道路改良工事を計画し、この工事に先立ち、平成14年11月に岐阜県基盤整備部美濃建設事務所から岐阜県教育委員会に工事計画等が示された。そして、道路建設予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地として『改訂版岐阜県遺跡地図』（岐阜県教育委員会1990）に登録されている大杉遺跡が所在することを確認した。

その後、岐阜県教育委員会が遺跡の広がりと遺構面数、深さ等を確認するために平成14年12月16～18日に試掘確認調査を実施した。道路建設予定地内の試掘確認調査対象面積約5,100㎡に対して、195㎡をトレンチ掘削により調査し、遺構・遺物の有無と遺跡の範囲について検討を行った。調査の結果、竪穴住居跡１、方形周溝墓１、土坑、溝などが確認できた。また、これらの遺構埋土中から弥生土器が出土することから、弥生時代の遺構が段丘上の平坦面から斜面に広がる可能性があると判断した。これらの結果を踏まえて、平成14年12月20日に平成14年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会が行われ、遺構・遺物があると判断された1,000㎡の本発掘調査を平成15年度に実施することとなり、それらが確認できなかった丘陵下部の平坦面は本発掘調査対象外となった。

なお、周知の大杉遺跡は県道345号坂祝・関線をまたいで東側と西側に広がっている。県道の東側では関市教育委員会が調査を実施しており、弥生時代～古代の集落跡と位置付けられている。しかし、当センターの調査で縄文時代の遺構を確認したことにより、県道の西側と東側では遺跡の性格が異なることが分かった。岐阜県教育委員会では関市教育委員会との協議に基づき、県道西側を別の遺跡と判断して「大杉西遺跡」と命名し、岐阜県遺跡番号21205-10132として平成15年10月22日に登録した。



国土地理院発行 1:50,000地形図「岐阜」より

図１　調査地位置図

第２節　調査の経過と方法

１　調査期間

平成15年５月７日～平成15年９月30日

２　グリッド設定方法

調査開始前に行った地形測量終了後、世界測地系第Ⅶ系を基準として５ｍ×５ｍのグリッドを設定した（図２）。グリッドの名称は北西端を基準とし、北から南に向かってA～F、西から東に向かって１～13とした。

３　調査の経過

調査に先立ち、平成15年４月21・22日に現況地形測量を行った。調査区は台地の北西斜面に位置し、南～南東側には台地上の平坦面が広がり、西側は津保川の支流である蜂屋川に南から合流する大杉川右岸の比高約３ｍの急崖に接する。遺跡は南～南東側の台地上平坦面に続くと予想し、地形測量は調査区1,000㎡及びその周辺地域を対象に実施した（図２）。

発掘調査は試掘確認調査で確認した層位を基に、基本層序としてⅠ層からⅢ層までを設定した（第３章第１節に詳述）上で、５月７日から重機による表土除去作業を開始した。調査区東半は栗畑として使用されていたため、伐採済みの樹木の根が多く見られた。そのため、遺構を傷つけることがないよう重機での伐根作業は慎重に行ったが、伐根せずに株を残したところもある。一方、調査区西端はB３～F３グリッドから西側の大杉川沿いの崖にかけて雑木林が広がっていたため、地形測量後、重機掘削前に伐採作業を行った。試掘確認調査時に弥生時代以降の包含層の可能性があるとされたⅡ層の上面までは重機を用いて除去したが、表土（耕作土）であるⅠ層の下にⅡ層をはさまないで、Ⅲ層（地山）を検出することが多かった。これは、調査区周辺が畑地として使用された期間が長く、耕作による掘削がⅡ層まで及んでいた結果だと推定される。さらに調査の過程でⅢ層の下の亜角礫混じりの褐色土層にまで下端が達する遺構を確認したので、この褐色土層をⅣ層と位置づけた。表土除去作業後、世界測地系をもとに５ｍ区画でグリッドを設定し、５月19日より人力による掘削作業を開始した。遺物包含層がほとんど認識できなかったため、当初から遺構検出作業を中心に実施し、並行して遺跡全体の略測図を作成した。

出土遺物は、原則としてトータルステーションにより出土位置を測定して取り上げた。遺物が集中している部分は、出土状況図を１／10の縮尺で図化した。遺構はすべて半割して土層を分け、写真記録を残して土層断面図を作成した。その後遺構を完掘し、完掘状況の実測と写真撮影を行った。９月初頭にほぼ完掘作業を終え、９月９日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量・写真撮影を実施し、13日に現地説明会を行った。竪穴住居跡については、すべて最後に断ち割りを行い、下部遺構の調査を行った。また掘立柱建物跡の柱穴についても必要を認めたものについては、断ち割り調査を行った。

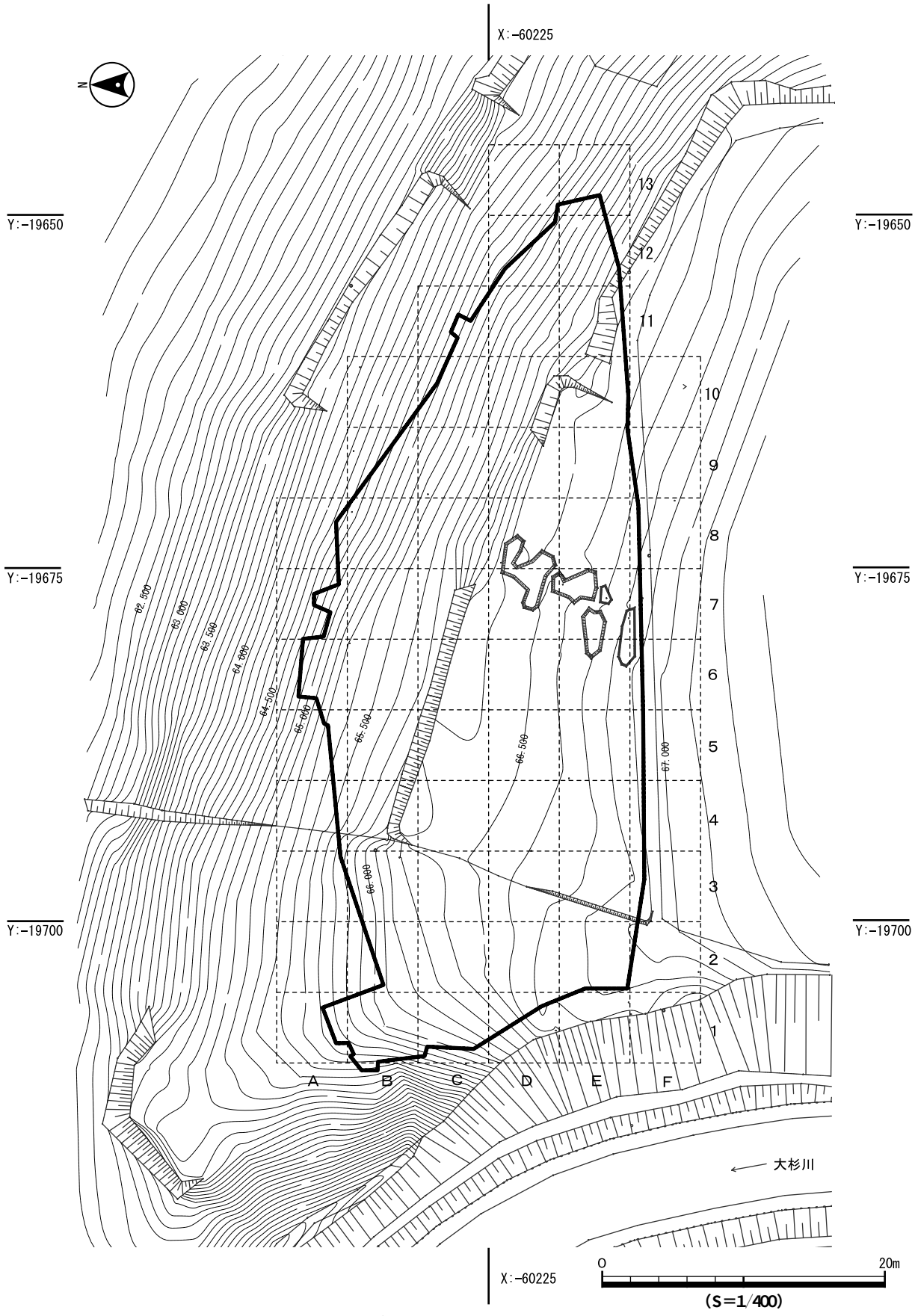


図２　グリッド設定及び地形測量図

以下，発掘調査日誌から抜粋して、週毎の調査経過を記述する。

調査日誌抄

第１週（5.7～5.9）　重機による表土掘削開始。

第２週（5.12～5.16）　重機による表土掘削完了。SB１及びSZ１検出。排土置場設営、排水溝掘削。

第３週（5.19～5.23）　発掘作業員による人力掘削開始。遺物取上げ開始。調査区南壁土層図作成。遺構検出作業（西端のＡ１～Ｆ２グリッドを終えた後、東端のE13グリッドへ）及び略測図作成開始。SB３検出。

第４週（5.26～5.30）　Ｃ８～Ｅ８グリッド以東では遺構密度が高くなる。また東南東－西北西に延びる平行する２本の溝（SD16・18）を確認。SB１は北側に調査区を拡大してプラン確定。SB２、SZ２・３検出。SZ３に隣接して埋設土器（SK88）を検出。

第５週（6.2～6.6）　遺構検出作業終了。遺構半割作業開始。上部平坦面では柱穴の可能性のあるピットを複数確認。SB１床面調査開始。

第６週（6.9～6.13）　SK88埋設土器掘削、実測作業開始。

第７週（6.16～6.20）　SZ１掘削開始。

第８週（6.23～6.27）　SH１柱穴列確認。SK88埋設土器取上完了。

第９週（6.30～7.4）　SB２床面調査開始。

第10週（7.8～7.11）　SB２内の土坑から遺物まとまって出土。SB３床面調査開始。

第11週（7.14～7.18）　SB４の北側の調査区を拡大してプラン確定。

第12週（7.21～7.25）　遺構の半割作業をほぼ終了。完掘作業開始。

第13週（7.28～8.1）　羽島高校発掘体験（7.28）。出土遺物洗浄開始。

第14週（8.4～8.8）　指導調査員（三重大学名誉教授八賀晋氏）現地指導。

第15週（8.18～8.22）　SB４床面調査開始。SB１～３完掘。

第16週（8.25～8.29）　SB４を除き遺構掘削ほぼ終了。

第17週（9.1～9.5）　空中写真測量準備。

第18週（9.8～9.13）　空中写真測量実施（9.9）。記者発表（9.9）。現地説明会（9.13）。

第19週（9.16～9.19）　追加掘削調査及び断ち割り作業開始。４基の竪穴住居跡の貼床構造等確認。セクションピン座標取付。エレベーション図作成。遺構実測作業終了。

第20週（9.22～9.26）　埋め戻し作業。現場事務所等撤去作業。

第21週（9.29～9.30）　現地調査終了。県基盤整備部美濃建設事務所へ引き渡し（9.30）。

４　遺跡・遺物公開

平成15年９月９日に記者発表を行い、平成15年９月13日に現地説明会を開催し、119名の参加をみた。

５　遺物・調査記録の整理作業

発掘現場での調査終了後、三田洞整理所において、平成15年10月～平成16年３月に一次整理を実施した。さらに引き続き、平成16年４月～平成17年３月に二次整理を実施した。

６　発掘調査及び整理作業の体制は以下のとおりである

	平成15年度	平成16年度
理事長	日比　治男	日比　治男
副理事長	高橋　宏之	高橋　宏之
副理事長	平光　明彦	平光　明彦
常務理事兼センター所長	福田　安昭	福田　安昭
調査部長	武藤　貞昭	川部　　誠
調査課長	藤岡比呂志	藤岡比呂志
担当調査員	總山　俊行	小野木　学
整理作業従事者	小木曽美智、後藤悦子、酒衛成功、菅原祐子、竹部　泉、長屋和子、野尻みどり	

調査前風景

作業風景

実測風景

現地説明会風景

写真１　調査風景

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

当遺跡は、美濃加茂市加茂野町、加茂郡坂祝町にかけて広がる標高70～80ｍの台地の西端近くに位置している。

周辺を見ると、当遺跡も含めて東南東―西北西方向に台地やそれよりやや低い平地が広がり、関市街地へと続いている。南西及び北西には山地が見られ、特に南西の山地は東南東―西北西方向に連なっている。また、津保川の支流である蜂屋川が北方0.4㎞のところを東から西に流れている（図３）。

当遺跡のある台地は、南西約10㎞に東西に長く広がる各務原台地に対比される台地で、東方はやや高く、西方に向かって高度が低くなっている。この台地は、当遺跡の東南東約3.2㎞の坂祝町黒岩からほぼ連続してつながっているが、東南東―西北西方向に延びる何本かの凹地が見られる。

このように、当遺跡は東南東―西北西方向に延びる台地の縁に存在し、遺跡の北東にはやや低い平地が広がる。このような地形は地質を反映しているため、以下に周辺の地質の概要を述べる。

周辺の地質としては、山地部は主に美濃帯堆積岩類からなり、チャート、砂岩、泥岩などである。平地部は、各務原層に対比される段丘堆積物が台地を形成し、それを開析して小河川による礫、砂及び泥が堆積している。

山地は前述したように、南西部のものは東南東―西北西方向に連なっているが、それは次の２つの地質現象が大きく作用している。

・当遺跡より南南西へ4.5㎞ほどのところに、坂祝向斜と呼ばれる褶曲の軸が東南東―西北西方向に存在する。
・周辺の美濃帯堆積岩類は、砂岩主体の地層とチャート主体の地層の繰り返しからなっている。

この周辺の山地の方向は坂祝向斜によって規制されており、その軸の方向に同じ地質で同程度の高さの山地が分布することになる。また、山地をつくるチャートと砂岩は、物性がかなり異なる。チャートは浸食風化に強いため急崖をなす山体を形成し、砂岩層は浸食風化に弱いため比較的なだらかな山体を形成する。そのような特徴を持っているため、東南東―西北西方向に急崖をなす山体と比較的なだらかな山体が交互に配列することになる。そして特に、山地部の北側2.5㎞ほどは砂岩層のため200ｍ未満のやや低い山地が続いている。台地は各務原層に対比される段丘堆積物からなる。各務原層は、御嶽火山起源の御嶽火山第一軽石層、御嶽火山第三軽石層をはさむという特徴をもつ砂礫層及び砂層である。当遺跡のある台地の段丘堆積物においても、当遺跡から東南東へ約600ｍの台地の縁の南斜面で御嶽火山の軽石を含んだ砂層を確認している。現在、形成時期については、９～６万年前頃という考えとそれより古くなるという考えがある。台地より低い低地は、各務原層に対比される段丘堆積物を浸食して形成したものである。小河川によって削られ、礫、砂及び泥が堆積してできた何本かの凹地が東南東－西北西方向に見られ、浸食されていない部分が台地として残っている。

参考文献　吉田史郎・脇田浩二1999「岐阜地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１地質図幅）」地質調査所　71p

図３　周辺の地形

第２節　歴史的環境

当遺跡周辺には周知の遺跡が数多く存在しており（図４・表１）、発掘調査によってその内容が明らかとなった遺跡も多い。ここでは、それらの遺跡を中心に時代順に概略を述べる。なお、図４は『改訂版岐阜県遺跡地図』（岐阜県教育委員会2002）を基に作成し、遺跡の説明は関市教育委員会1994・2002、㈶岐阜県文化財保護センター2002を参考とした。

旧石器時代の遺跡は、津保川による段丘上に位置する関市東部の唐鋤遺跡（17）、平井遺跡（27）、野田遺跡（32）の一群と、富加町の丘陵上に位置する海老山遺跡（７）、北野遺跡（９・10）、鷹之巣駅西遺跡（11）の一群に分かれる。海老山遺跡は昭和41年に南山大学人類学教室により、小規模な発掘調査が行われている。北野遺跡では、ナイフ形石器や台形石器が表面採集されている。

縄文時代の遺跡は、旧石器時代の遺跡の立地をほぼ踏襲しているが、戸尻遺跡(23)、大杉遺跡(28)、稲辺遺跡（31）などは山地や丘陵以外の平坦地に位置している。海老山遺跡（７）では、前期後半の赤彩された北白川下層Ⅱ式の土器や抉状耳飾、部分磨製石鏃などが採集されている。なお、図４の範囲外（当遺跡から北西約８㎞）にある長良川沿いに位置する関市塚原遺跡では、中央の広場を囲むようにして円形に配置された掘立柱建物と、その外側に竪穴住居が配置された中期の遺構が検出されている。

弥生時代の遺跡は、縄文時代から引き続き同じ場所に位置するものが多い。海老山遺跡（７）では、条痕文系土器が採集されている。大杉遺跡（28）では、昭和30年代の前半に関高等学校社会研究部などにより、中期の土器片や石包丁、扁平片刃石斧などが採集されている。また、当遺跡は関市教育委員会が発掘調査を継続しており、第１次調査と第５次調査で竪穴住居跡を各１軒検出している。

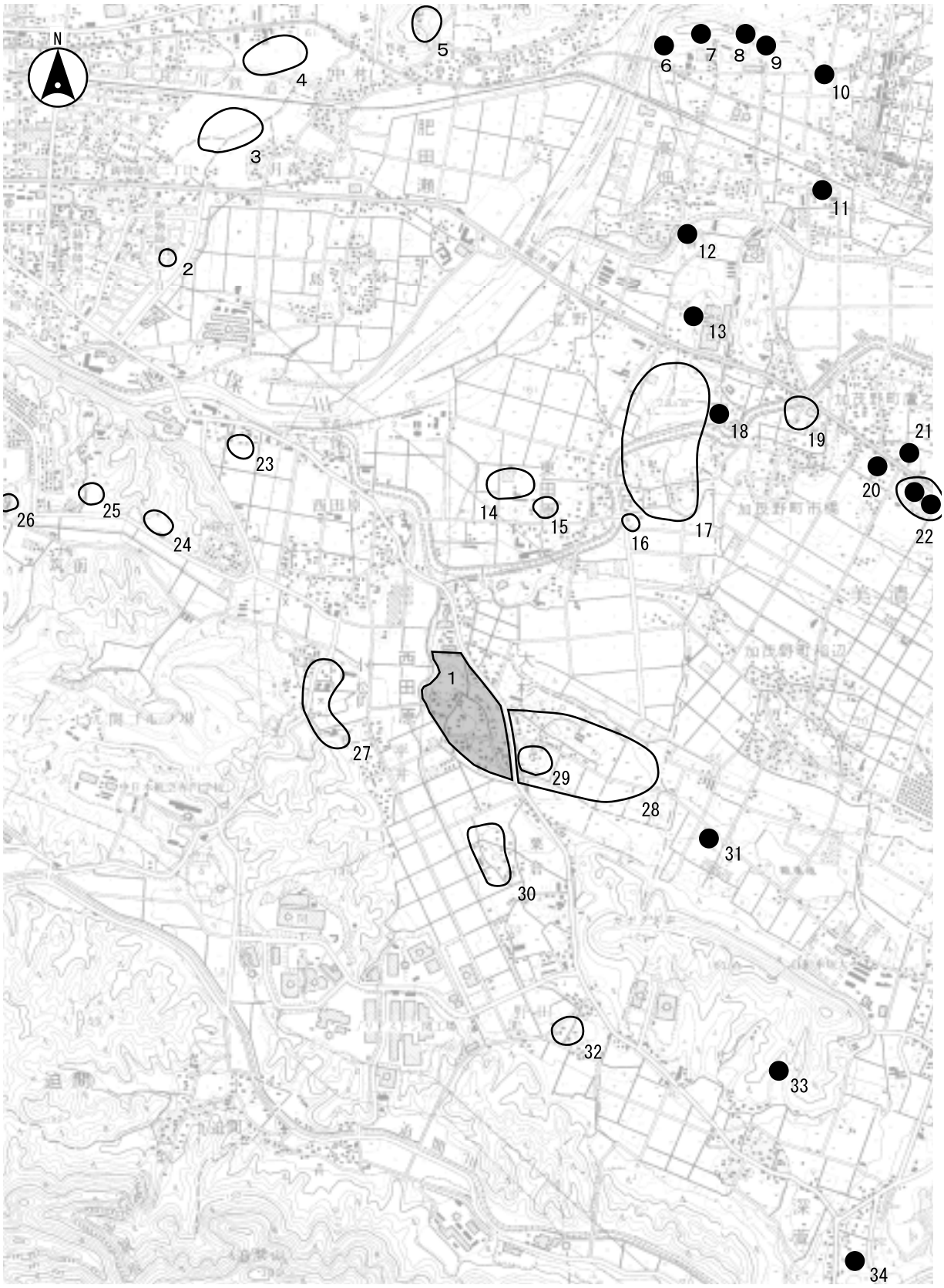
古墳時代の遺跡は、その多くが古墳そのもので、集落遺跡は少ない。愛宕古墳（８）は全長約23mの前方後円墳で、埋葬施設は横穴式石室と考えられている。高畑２号古墳周辺では、弥生時代末～古墳時代初頭の土器が採集されている。大杉遺跡（28）では、平成14年10月までの発掘調査で竪穴住居跡を39軒検出しており、焼失住居もある。また、古墳時代の区画施設と考えられる溝も発見されており、注目される。

古代の遺跡として、大杉廃寺跡（29）とその南に位置する粟倉遺跡（30）がある。大杉廃寺跡は昭和31年と50年に発掘調査が行われており、一辺７ｍ前後の基壇を検出している。出土遺物は、軒丸瓦、軒平瓦、須恵器、角釘などがある。

表１　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時　代
1	大杉西遺跡	縄文・弥生
2	門田石塚遺跡	不明
3	笠屋石塚	不明
4	柳畷石塚	不明
5	立岩遺跡	縄文
6	北野古墳	古墳
7	海老山遺跡	旧石器～弥生
8	愛宕古墳	古墳
9	北野遺跡	旧石器～弥生
10	北野遺跡	旧石器
11	鷹之巣駅西遺跡	旧石器
12	春日古墳	古墳
13	高畑２号古墳	古墳
14	樫塚古墳群	古墳
15	西浦古墳	古墳
16	於前屋敷跡	江戸
17	唐鋤遺跡	旧石器～古墳

番号	遺跡名	時　代
18	市橋遺跡	縄文・弥生・奈良
19	法幢寺１号古墳	古墳
20	大塚古墳	古墳
21	西今泉古墳	古墳
22	きつね塚１号古墳	古墳
23	戸尻遺跡	縄文
24	長洞古墳群	古墳
25	桧洞古墳群	古墳
26	宮洞古墳	古墳
27	平井遺跡	旧石器
28	大杉遺跡	縄文・弥生
29	大杉廃寺跡	奈良
30	栗倉遺跡	弥生～平安
31	稲辺遺跡	縄文
32	野田遺跡	旧石器
33	輪形古窯跡	平安
34	南大洞古墳	古墳



国土地理院発行 1:25,000地形図「美濃関」より

0　1000m

図４　周辺遺跡位置図

当遺跡が所在する大字大杉周辺の地籍図のうち、最も古いものは明治時代まで遡る。明治時代の地籍図の地割はそれ以前の旧地形を反映していることがあり、調査で検出した遺構と関連付けられる場合がある。また、当時の遺跡周辺の土地利用や字境などがわかることから、ここで当遺跡周辺の明治時代の地籍図を掲載し、概要を説明する。

地籍図は岐阜地方法務局関出張所所蔵のものを利用した。しかし、これは１／1,000の縮尺で小字毎に分割して作成されており、若干の歪みがある。そのため、関市役所都市整備課所蔵の現在の都市計画図（縮尺１／1,000）を参照して歪みを補正し、トレースした（図５）。

当遺跡は字「西屋敷」の北端に所在する。字「西屋敷」の南側の台地上には、字「東屋敷」、「宮前」、「粟倉屋敷」、「香林庵」などの屋敷地名があり、低地部には字「芝田」、「八反田」、「向田」などの耕作地に由来する地名がある。「西屋敷」の地名は、「粟倉屋敷」の西方にある屋敷であることに由来し、粟倉屋敷には土堤で囲まれた屋敷があったとされている（関市教育委員会1996）。

当遺跡周辺の明治年間の土地利用状況をみると、台地上は現在の県道坂祝・関線を挟んで西側が林や薮地、東側が畑地であり、当遺跡西側の低地部には水田が広がっている。図５では、屋敷地特有の方形区画はみられず、台地端の斜面は地形に沿った地割がみられ、平坦部は不定形な地割が展開している。西屋敷の地名の由来となった屋敷地は図５の南端の平坦地に展開しており、調査区周辺は林ないし薮地で、地割にも際立った単位が認められない。

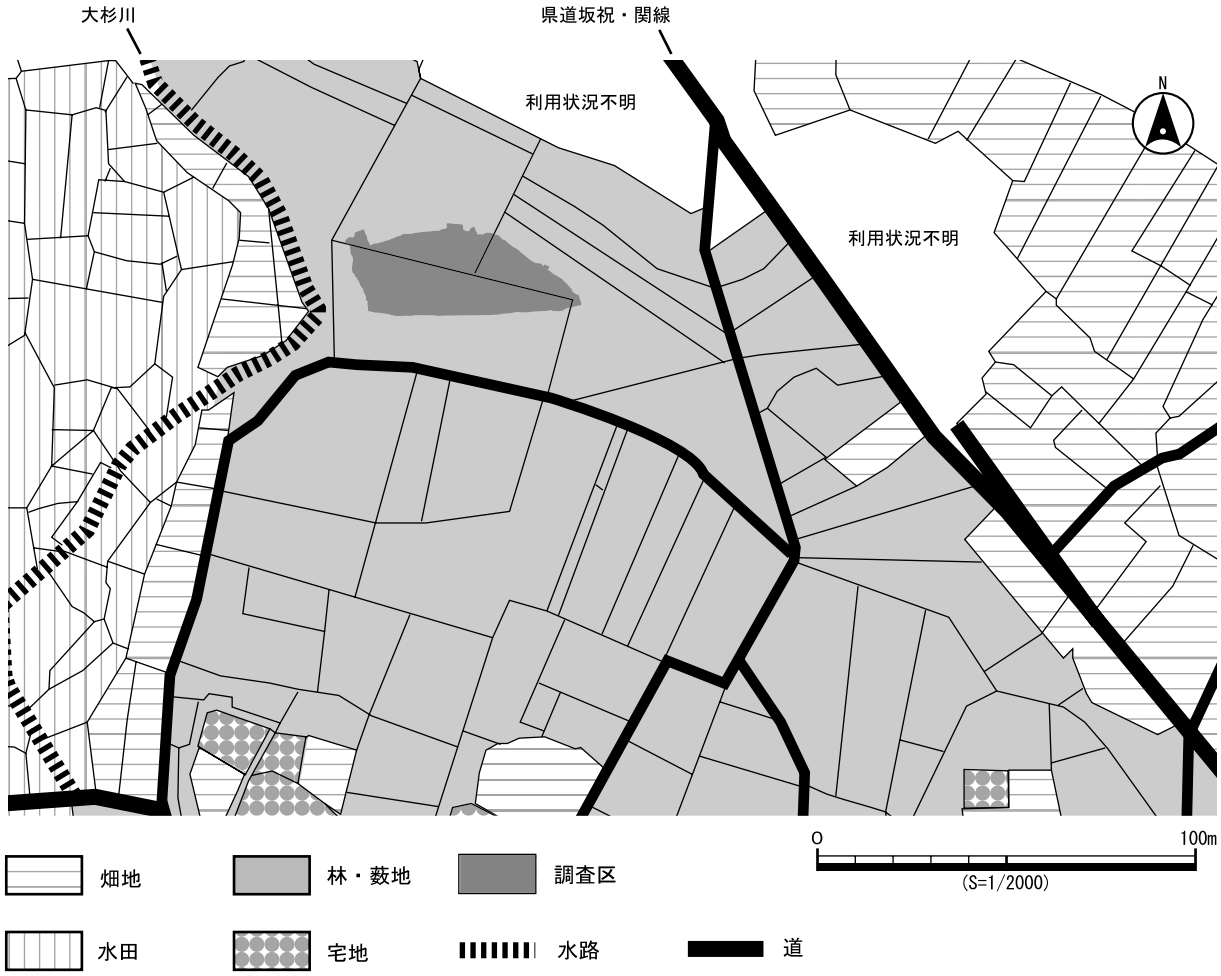


図５　明治時代の土地利用図

また、試掘確認調査では本調査範囲外の情報も得ることができたので、ここでその概要を述べる（図６・表２）。

試掘坑は７箇所（TR１～７）に設定され、その層序は以下のとおりであった。

Ⅰ層：表土層。暗褐色（7.5YR2/3）シルト。粘性あり、しまりなし。

Ⅱ層：盛土層。黒色（10YR2/1）シルト。黄褐色礫を含む。粘性・しまりややあり。

Ⅲ層：盛土層。黒色（2.5YR2/1）シルト。粘性・しまりややあり。

Ⅳ層：遺物包含層。黒色（10YR1.7/1）シルト。粘性・しまりなし。

Ⅴ層：地山層。暗灰黄褐色（2.5Y5/2）～褐色（7.5YR4/3）シルト。直径30～50㎜の円礫を含む。

調査の結果、TR４・５・７において、竪穴住居跡、方形周溝墓、土坑、溝などを検出し、弥生土器78点、縄文土器２点、石器２点が出土したため、図６のような本調査範囲1,000㎡が設定された。一方、TR１～３・６の斜面及びその裾部では遺構が確認できず、遺物の出土もなかった。このことから、大杉西遺跡で検出できた縄文時代から弥生時代の集落は、調査区の南側の平坦地に展開し、北側の斜面は縄文時代から近世に至るまで居住域として使用された可能性は低く、近代以降に栗林として活用されたと思われる。

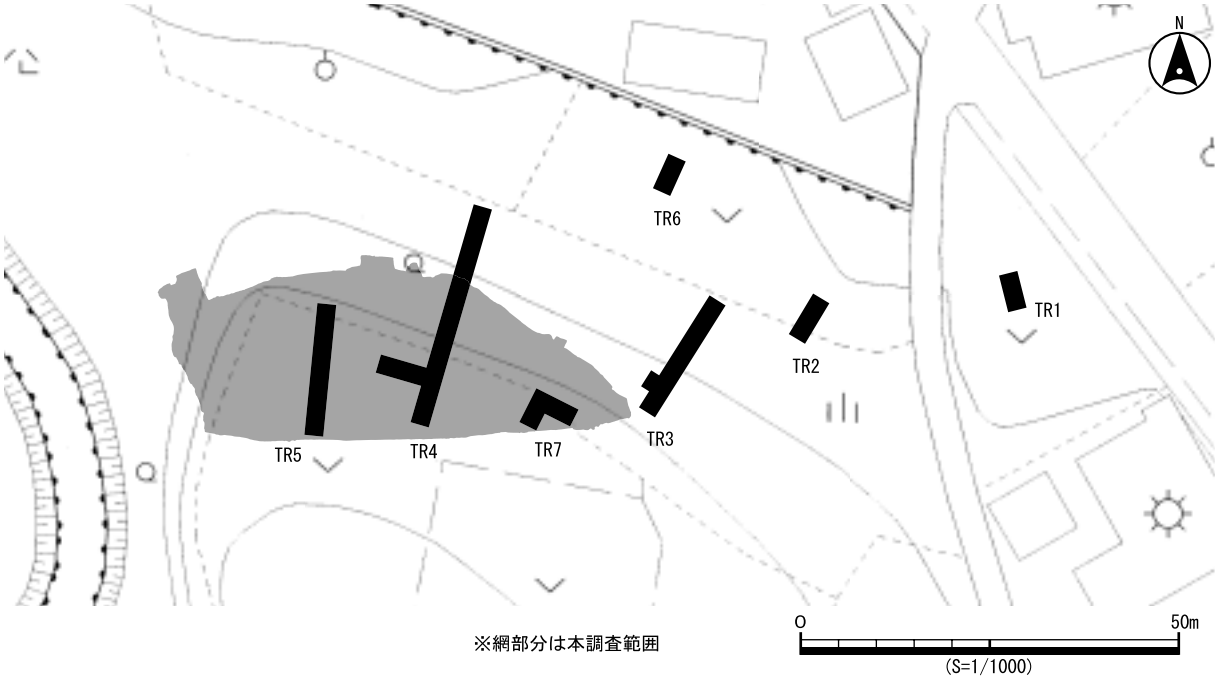


図６　試掘抗位置図

表２　試掘確認調査の結果

試掘坑	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	出土遺物数	検出遺構数
TR１	○30㎝	○10㎝	○10㎝	○30㎝	○	無	無
TR２	○30㎝	○30㎝	×	×	○	無	無
TR３	○50㎝	×	×	×	○	無	無
TR４	○40㎝	×	×	○10㎝	○	弥生59・縄文２・石器２	土坑21・溝４
TR５	○60㎝	×	×	○10㎝	○	弥生15	竪穴住居跡１・土坑４・溝４
TR６	○20㎝	○20㎝	×	○20㎝	○	無	無
TR７	○60㎝	×	×	○10㎝	○	弥生４	方形周溝墓１

※各層の数値は最大層厚を示す

第３章　調査の結果

第１節　基本層序

当遺跡は津保川に合流する蜂屋川の左岸に広がる、標高70～80ｍの台地の北西端に位置する。この台地面上には、大杉川・蜂屋川の下刻作用が進んだ後は新たな堆積作用が大規模に行われることはなく､古木曽川の中位段丘面に比定される段丘堆積物のさらに上面に見られる地層の層厚は非常に薄い。また、発掘前の調査区域現況は畑地・栗畑であり、耕作による削平等が広範囲にわたり行われており、地山にまで掘り込みが進み、改変を受けている場所も確認できた。

当遺跡の基本層序は、試掘確認調査と本調査における観察結果を加味して、Ⅰ層～Ⅳ層に分層した。Ⅰ層は近代以降の農作業等の過程で形成された耕作土である。Ⅱ層が縄文時代・弥生時代の遺物を含む包含層と考えられるが、調査区全域に分布するのではなく、地形の凹部等ごく一部に確認されるだけであった。つまり、調査区の大半の範囲でⅠ層直下からⅡ層をはさまずⅢ層に移行している。このⅢ層上面が遺構検出面であり、各遺構はⅢ層を掘り込んだ状態で検出した。調査区南側ではⅢ層の層厚は厚く、最大深度が60㎝以上あるSZ１の周溝下面でもⅣ層が検出されることはなかったが、台地斜面を調査区北側へ下るにつれて、Ⅲ層に掘り込まれた遺構の底面で礫混じりのⅣ層が検出されるようになり、最も標高が低い調査区北東のＢ８～C11グリッド付近や、SB１西側のＡ４～Ｂ５グリッド付近、さらにＦ３グリッドから北北東方向へ延びる谷筋では、Ⅲ層をほとんどはさまずⅠ層下面から直接Ⅳ層を検出する場所もあった。これらの区域ではⅢ層が浸食等によって失われているものと考えられる。また、Ｅ４グリッド北に広がる現代の土採取の跡と思われる攪乱坑でのⅣ層検出状況や、比較的深い遺構の底部でのⅣ層検出状況なども加味すると、Ⅲ層の層厚は調査区南東端では60～70㎝程度あるものの、北北西方向に進むにつれ地形の傾斜に応じて薄くなっていると思われる。

以下、基本層序のⅠ層から順に説明を行う。

Ⅰ層：7.5YR3/2　黒褐色シルト

試掘確認調査のⅠ～Ⅲ層に対応する。調査区の地表を覆う黒褐色の表土層で、栗畑・畑地として利用されていた時に形成された整地土・耕作土と考えられる。調査区西端部分の現況は雑木林であったが、現地での聞き取り調査でこの部分も30年ほど前まで畑地として利用された事が判明しており、調査区東側と同様にⅠ層が広がっている。

Ⅱ層：10YR2/2　黒褐色シルト

試掘確認調査のⅣ層に対応する。近代以降の耕作による土壌化を受けていない包含層の残存部分と考えられる。Ⅰ層をバックホウで除去した後に行った遺構検出時に、Ⅲ層上面の凹地に部分的に残存しているのが確認できた。なお、試掘確認調査では、Ⅱ層が比較的良好な状態で残存していると認識していたが、本調査の結果、それらの大半は遺構埋土か、地形の凹部に堆積する土であることが判明した。

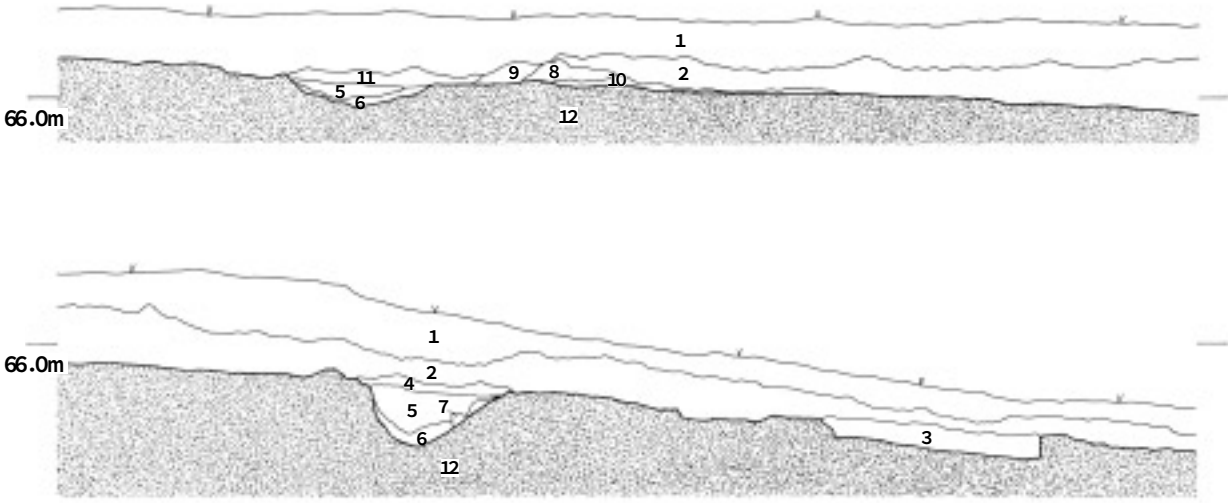
Ⅲ層：10YR4/4　褐色粘土

試掘確認調査のⅤ層に対応する。各務原層に対比される段丘堆積物からなる層であり、この遺跡の

いわゆる「地山」である。前述したように縄文時代・弥生時代の遺物包含層と考えられるⅡ層が遺跡の大半の地域で確認できなかったため、Ⅰ～Ⅱ層中より掘り込まれていると考えられる縄文時代・弥生時代・近世～近代のいずれの遺構も、このⅢ層上面が遺構検出面となった。そのため、遺構の時期比定の根拠として、遺構埋土がⅠ層・Ⅱ層のいずれに近い性質を持つかが重要となった。

Ⅳ層：10YR4/4　褐色砂質シルト

主に調査区北側で検出した礫混じりのしまりのある層である。礫は亜角礫が主体で、大きさはいずれも30㎝以下である。Ⅲ層と同じく古木曽川の中位段丘面と考えられる。



1　7.5YR3/2　黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ５mm 以下)がわずかに混じる。Ⅰ層。
2　7.5YR3/2　黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が１よりも多い。Ⅰ層。
3　7.5YR3/2　黒褐色シルト　しまりなし。SK382埋土。
4　7.5YR3/2　黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)がわずかに混じる。SD１埋土。
5　10YR2/2　黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ２mm 以下)がわずかに混じる。SD１埋土。
6　10YR2/2　黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ２mm 以下)が粒状に多く混じる。SD１埋土。
7　10YR4/4　褐色土　粘性あり。しまりなし。SD１埋土。
8　7.5YR3/2　黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ40mm 以下)が不均等に混じる。SZ１盛土。
9　7.5YR3/2　黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ20mm 以下)が均等に混じる。SZ１盛土。
10　7.5YR3/2　黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が均等に混じる。SZ１盛土。
11　10YR2/2　黒褐色シルト　しまりあり。Ⅱ層。
12　10YR4/4　褐色粘土　しまりあり。Ⅲ層。

図７　基本層序（調査区南壁）

黒褐色シルト（Ⅰ層）直下に、褐色粘土（Ⅲ層）が位置する。写真中央下には、黒褐色シルト中に褐色粘土ブロックが混じる。方形周溝墓（SZ１）に伴う盛土である。

写真２　基本層序

第２節　遺構・遺物概要

１　遺構概要

今回の調査では、縄文時代中期と弥生時代後期～終末期、近世～近代を中心とする遺構を検出した。遺構は調査区南側の平坦地に密に分布し、北側の斜面は比較的希薄である（図９）。いずれの時代の遺構も検出面はⅢ層上面であり、遺構埋土は縄文時代～古墳時代のものは類似し、近世～近代のものは明らかに色・質ともに異なっていた。

遺構種類は、竪穴住居跡（SB）、掘立柱建物跡（SH）、柱列跡（SA）、柱穴（P）、土坑（SK）、焼土（SC）、溝（SD）、方形周溝墓（SZ）に分けた。柱穴は竪穴住居跡内にある小穴と掘立柱建物跡・柱列跡を構成する小穴のみとした。土坑は竪穴住居跡、柱穴、焼土、溝以外の穴をすべて対象とした。検出した遺構数は表３のとおりである。時期区分は①縄文時代、②弥生時代、③縄文～弥生時代、④近世～近代の４期区分とした。時期決定の根拠は、近世～近代の遺構は主に遺構埋土、縄文・弥生時代は遺物出土状況ないしは遺物の最新時期とし、縄文～弥生時代としたものは、基本的に縄文土器・弥生土器などが出土していない近世～近代以外の遺構が該当する。縄文・弥生時代の主要遺構の配置は、竪穴住居跡が調査区中央～北西側の平坦面から斜面に、掘立柱建物跡が調査区中央の平坦面に、方形周溝墓が調査区南側の平坦面にあることがわかる（図10）。

表３　検出遺構一覧

種類＼時代	縄　文	弥　生	縄文～弥生	近世～近代	合　計
竪穴住居跡	1	3	0	0	4
掘立柱建物跡	1	2	0	0	3
柱列跡	0	1	0	0	1
方形周溝墓	0	3	0	0	3
柱　穴	23	59	0	0	82
土　坑	93	25	196	56	370
焼　土	1	1	0	0	2
溝	0	11	0	8	19

検出した遺構のうち、土坑の大半は性格不明であるため、その平面図と断面図をなるべく掲載するように心掛けた。また、土坑の中には断面形態や堆積状況から柱穴の可能性がある遺構が幾つかあり、それらの分布図を作成した（図11）。その結果、調査区の中央北寄りの平坦面に集中していることが判明した。第２章第２節で述べたように縄文・弥生時代の集落が調査区南側から調査区外へと続く台地上に展開していると仮定すると、調査区内においても本報告に掲載する以外に建物跡が存在していた可能性もある。また、各遺構の検出面の平面形態、底部の断面形態、埋土の堆積状況の３項目を分類した（図８）。この分類項目ごとの多寡については、各時代の遺構概要で記載する。

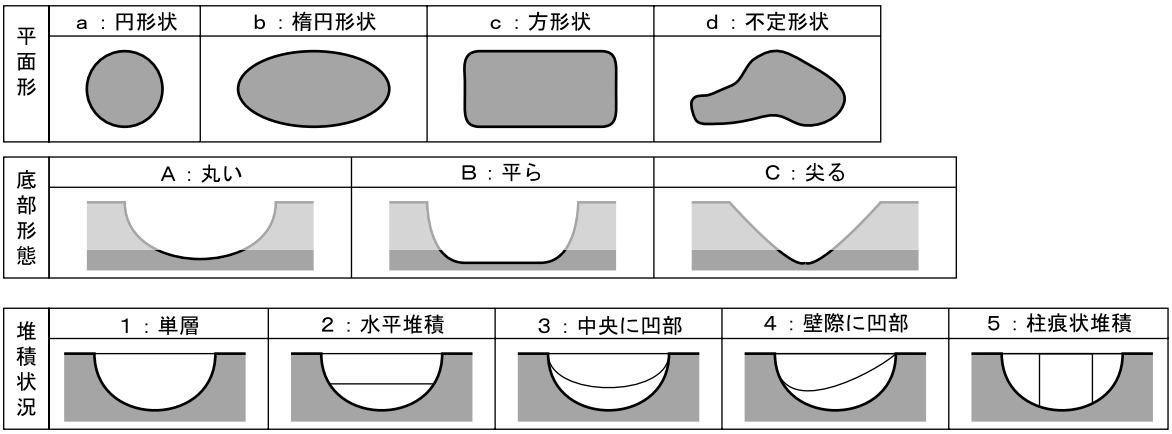


図８　遺構分類模式図

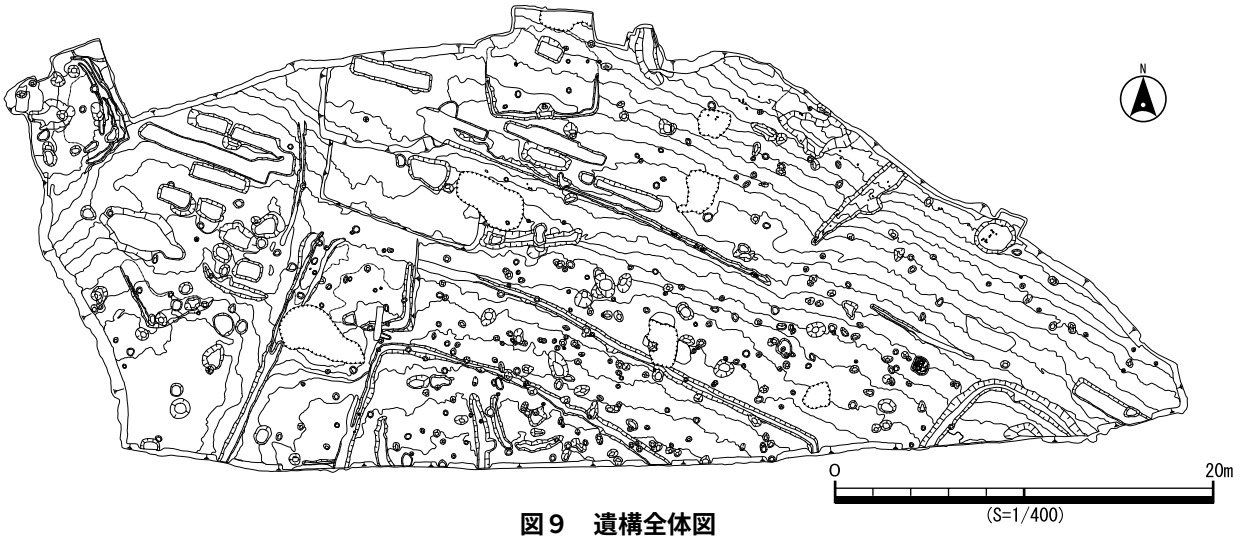


図９　遺構全体図

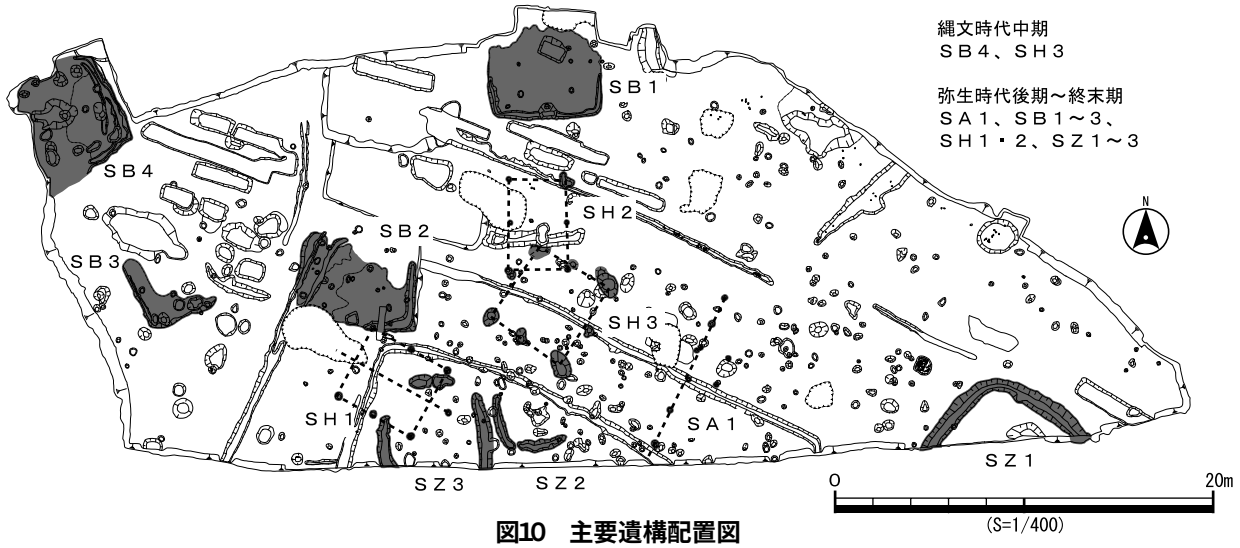


図10　主要遺構配置図

図11　柱穴の可能性のある土抗配置図

２　遺物概要

今回の調査では、縄文土器、弥生土器、須恵器、近世～近代陶磁器、石器、金属製品、その他（炭化物など）が出土した。その内訳は表４のとおりである[*1]。

表４　出土遺物点数

種別＼計測方法	接合前破片数（点）	接合後破片数（点）	口縁部残存率（X／12）
縄文土器	2226	1702	82.2
弥生土器	1158	820	42.4
須恵器	3	3	0.0
近世～近代陶磁器	32	28	10.5
石　器	93	89	—
金属製品	12	12	—
その他	65	65	—
合　計	3589	2719	135.1

各土器の時期幅は、縄文土器が縄文時代中期中葉～末、弥生土器が弥生時代中期後葉～終末期、須恵器が古代、近世～近代陶磁器が江戸時代後期～現代までである。

時代呼称は以下のように、土器様式に対応する用語を用いた。なお、須恵器は土器様式のわかる破片が出土していない。

縄文時代中期中葉：船元Ⅲ式併行期
　　中期後葉：咲畑・醍醐式第１様式併行期
　　中期末　：咲畑・醍醐式第２～３様式併行期
弥生時代中期後葉：高蔵式併行期
　　後期前葉：八王子古宮式併行期
　　後期中葉：山中Ⅰ式併行期
　　後期後葉：山中Ⅱ式併行期
　　終末期　：廻間Ⅰ式併行期
江戸時代後期　　：江戸時代瀬戸美濃窯第３段階併行期

なお、実測図を掲載した土器について、縄文土器は京都大学教授泉拓良氏に、弥生土器は愛知県埋蔵文化財センター赤塚次郎氏に、それぞれ器種名と土器様式名を指導していただいた。しかし、文責はすべて執筆者にある。また、土器様式名を知る上で参考とした文献は、縄文土器が泉1988a、泉1988b、弥生土器が赤塚1990・1992、石黒2003、近世～近代陶磁器が藤澤1998、多治見市教育委員会1993である。また、石器の石材鑑定は藤岡比呂志による。

以下に、各遺物について記載する。

（１）縄文土器

出土した器種は大半が深鉢であり、他に浅鉢、壺、釣手土器などがある。小破片が多いためにすべての破片の器種分類は不可能であるが、少なくとも浅鉢、壺、釣手土器は各１個体ずつ確認した。

土器の分類は最も数の多い深鉢を対象とした。そして、口縁部が残っている破片を中心に行い、胴部と底部は基本的に分類項目を設定しなかった。なお、分類は器形を主とし、器形の大分類をアルファベットの大文字、小分類を算用数字とし、文様はアルファベットの小文字を用いた（図12）。

A類：極端なキャリパー形口縁を呈するもの。
　１類：口縁端部が長く立ち上がるもの。
　２類：口縁端部が短く立ち上がるもの。
　３類：口縁端部が立ち上がらないもの。

B 類：緩やかなキャリパー形口縁を呈するもの。

C 類：キャリパー形口縁を呈しないもの。

１類：口縁部と胴部の境を外面へ肥厚させるもの。肥厚部を縄文帯とするもの（a）、無文帯とするもの（b）がある。

２類：１類以外のもの。

このうち、A 類は咲畑・醍醐式第１様式に該当し、中期後葉とした。また、B・C 類は咲畑・醍醐式第２～３様式併行期に該当し、中期末とした。

これらの時期区分に従い、出土した土器1702点（接合後破片数）を分けた結果、中期中葉１点、中期後葉135点、中期末290点、時期不明1276点であった[*2]。なお、中期中葉の土器は胴部破片であり、船元Ⅲ式の土器である。それらの出土位置は図13のとおりであり[*3]、同一遺構内でも中期後葉の土器と中期末の土器が混在していることが多く、全体的には時期別の出土位置の傾向などが看取できなかった。

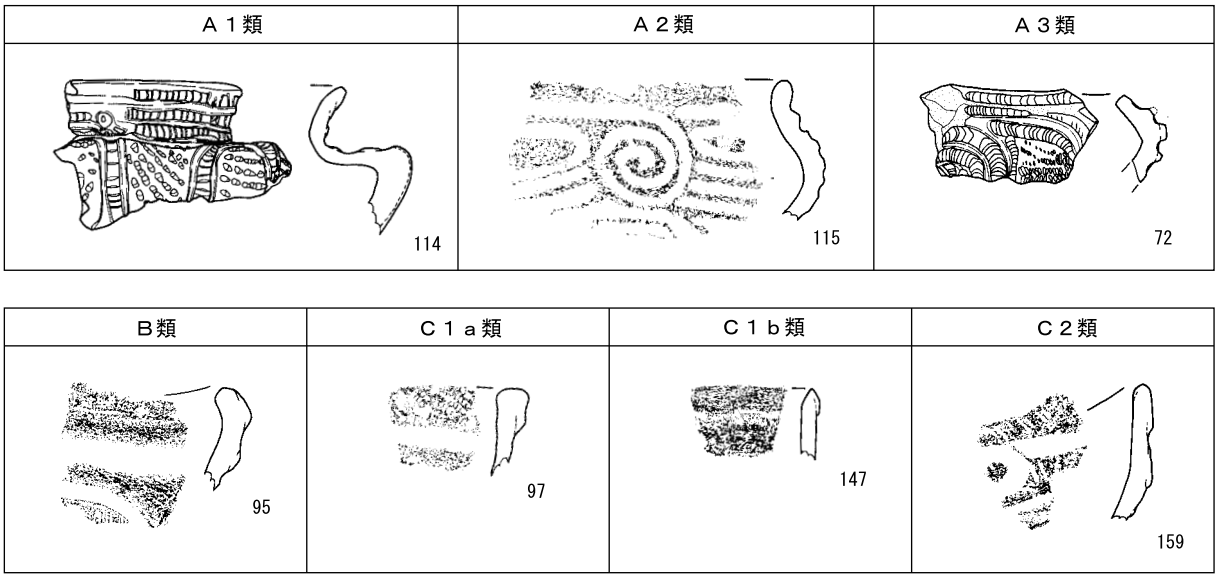


図12　縄文土器の分類

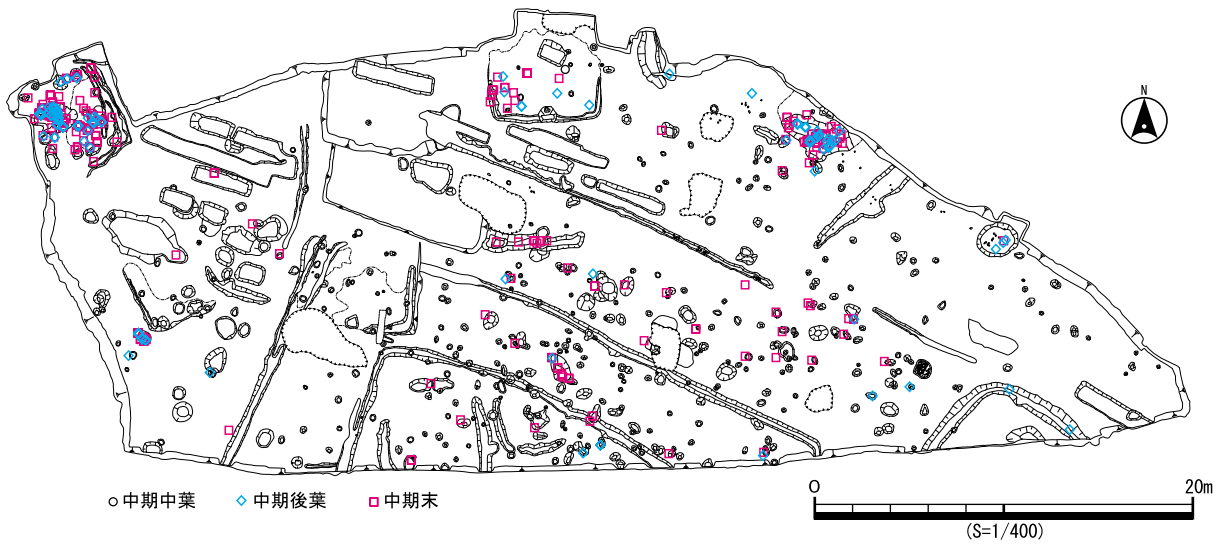


図13　縄文土器の時期別の出土位置図

出土した土器に施されている文様は、過去の研究（佐原1981、泉・家根1985など）を参考として写真３のような用語を用いた。そのうち、押引沈線文と押引沈線状の刺突は、刺突の上端が沈線の上端より低いものを前者、同じ高さのものを後者とした。また、文様の施文工具も過去の研究（内堀1995など）を参考として図14のように分類したが、一つの文様でも数種類の工具を想定できる場合が少なくなかったため、工具Ｂないし Ｃの可能性が想定されるものは工具Ｂ（Ｃ）と記載した。

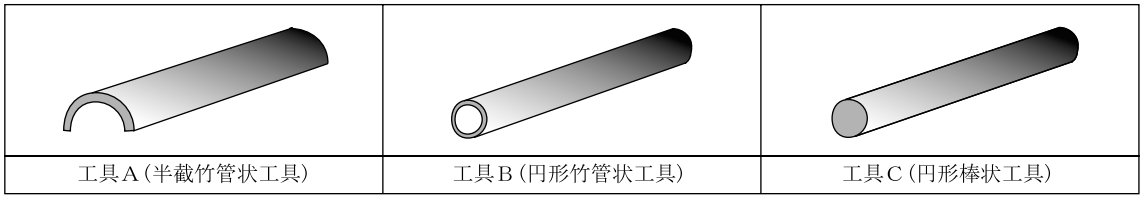


図14　縄文土器施文工具模式図

写真３　縄文土器の文様分類

※写真はすべて原寸大。
カッコ内は掲載番号を示す。

（２）弥生土器

出土した器種は甕、壺、高杯、器台、鉢などである。その内訳は表５のとおりであり、接合前の破片数では甕が最も多いが、口縁部残存率では鉢を除く各器種の量はほぼ近似している。これらの出土位置は図15のとおりである。方形周溝墓には供献土器である壺や高杯、器台の分布が密になるというように、各器種の分布状況と遺構の性格が連動するのではないかと予想したが、結果的には明確に器種による分布状況の偏りは看取できなかった。なお、器種分類と名称、器種内の細分は、先述した土器様式名を知る上で参考とした文献にすべて従った。

表５　弥生土器の器種別破片数

計測方法 / 器　種	接合前破片数（点）	接合後破片数（点）	口縁部残存率（X／12）
甕	503	326	13.5
壺	413	299	12.9
高杯・器台	238	192	16.0
鉢	4	3	0.0
合　計	1158	820	42.4

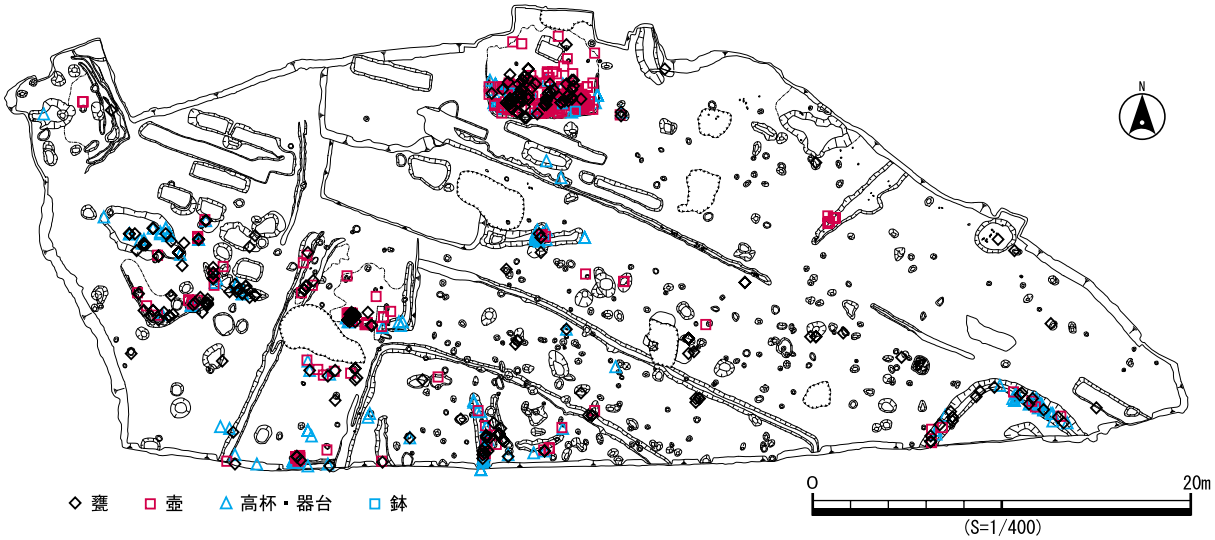


図15　弥生土器の器種別の出土位置図

（３）須恵器

蓋の天井部破片１点と、甕の体部破片２点、合計３点が出土した。いずれも美濃須衛産であり、時期は８世紀代である。

出土位置（図16）は遺構内２点、包含層内１点であるが、遺構内は近世～近代の遺物も出土していることから須恵器はいずれも混入品である。

（４）近世～近代陶磁器

近世陶器は擂鉢４点、練鉢２点、土瓶１点、合計７点（接合後破片数）が出土した。いずれも瀬戸美濃産であり、時期は19世紀前半である。近代～現代にかけての陶磁器は合計21点出土したが、いずれも図化していない。素地に灰釉を塗りその上に鉄で文字が描かれる徳利、摺絵型紙ないしは銅版転写により呉須で文様が描かれた碗や瓶、鉄と呉須で横線が引かれた型打皿などが出土している。

出土位置（図16）は遺構内18点、包含層内10点であり、遺構出土の遺物が多い。全体的には調査区の西側に偏っている。

（５）石器

出土した石器89点（接合後破片数）の器種と石材の内訳は表６のとおりであり、その多くは縄文～弥生時代の遺構から出土している。分類は既存の研究（町田1995・1996、国立歴史民俗博物館1997）に概ね従ったが、剥片類は連続する剥離痕を有する剥片（UF）、微細な剥離痕を有する剥片（RF）、その他の剥片の３種類に分けた。出土点数は剥片類が最も多く、その石材は遺跡付近の山地部にみられるチャートの比率が高いものの、黒曜石や下呂石など遠隔地の石材も数点出土している。出土遺物のうち確実に弥生時代に含まれるものは、磨製石鏃、石包丁、砥石などであり、いずれも泥岩の使用頻度が高い。

なお、石器は大半が縄文～弥生時代の遺構から出土しているが、個別の時代区分は行わず、遺構出土の共伴土器から時期を想定した。また、火打ち石などのような近世～近代の石器と想定されるものは認められなかった。その分布図は本章第３・４節を参照されたい。

表６　石器出土点数

石材／器種	チャート	安山岩	泥　岩	砂　岩	ホルンフェルス	黒曜石	下呂石	凝灰岩	溶結凝灰岩	珪化木	合　計
打製石鏃	1	1									2
磨製石鏃			5								5
石　錐	1										1
石　錘				1							1
石包丁			1								1
打製石斧				1	4					1	6
敲　石				1							1
砥　石			2	1							3
スクレイパー	1										1
UF	8										8
RF	4				1	1					6
その他の剥片	31	1		2		4	4	1			43
器種不明		3	1	5	1				1		11
合　計	46	5	9	11	6	5	4	1	1	1	89

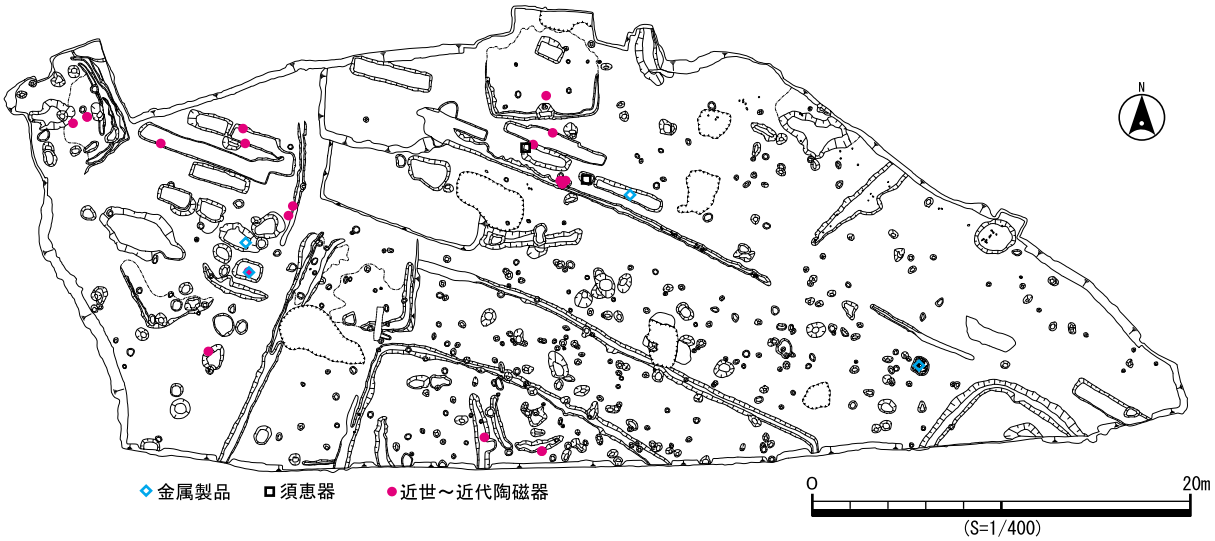


図16　古代以降の遺物出土位置図

（６）金属製品

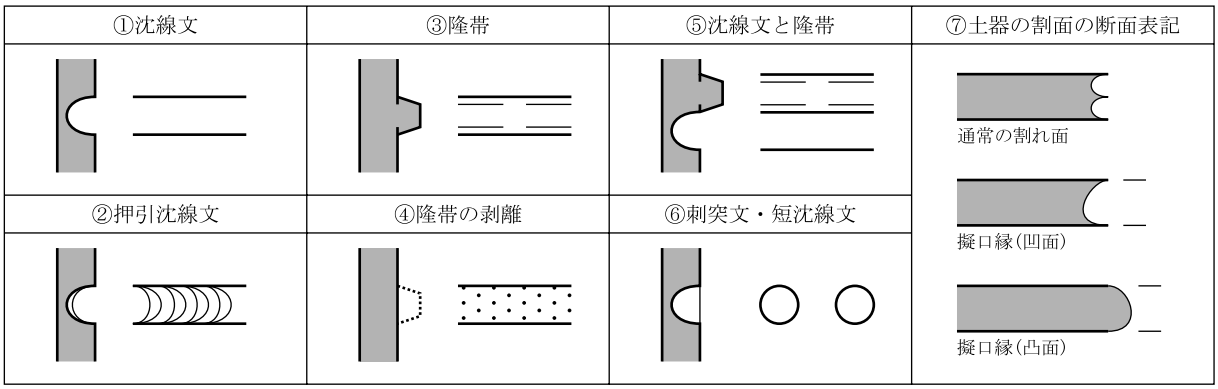
金属製品は釘や留金具、容器の蓋、用途不明品などが12点出土している。釘はすべて頭部が円形であり、明治時代以降のものである。

出土位置（図16）はすべて遺構内である。

（７）その他

炭化物、種子、ガラス、粘土塊などが合計65点出土している。炭化物は包含層であるⅡ層からの出土が多いが、竪穴住居跡などの遺構からの出土も一定量認められる。遺構出土の炭化物は材として残っておらず、大半は長さ１㎝以下の細片である。粘土塊はＦ５グリッドにてⅡ層中より10片が出土した。いずれも長さ1.5㎝以下の小片である。

なお、本書における土器の実測図は図17のような表記方法を採用した。その留意点は２点ある。１点は③・⑤のような胴部と隆帯の接合痕の破線を、隆帯の両下端部から中央に向かって２本のみ描いたことである。通常は破線を連続するが、当遺跡では土器の表面と断面を観察しても粘土の接合痕が確認できなかったり、隆帯が潰れて隆帯か否かの判断ができない破片が多く、土器の破片のみから粘土紐を貼り付けたとの確証を得られなかったためである。もう１点は⑦のようないわゆる擬口縁の表現である。粘土紐の接合部分で土器が剥がれ擬口縁となっている破片の断面は、擬口縁部分の形状をそのまま図化し、通常の割れ面と区別するために土器の復元ラインを記した。これは、擬口縁の形状が土器製作に関わる重要な要素であると判断したためである。



※網部分は土器の断面を示す

図17　土器の実測図の表記方法

＊１　口縁部計測方法は宇野1992に従い、1/12以下の破片は1/12に切り上げた。

＊２　遺構の時期が特定できても、その遺構出土の土器の中に時期不明の破片がある場合は、その破片は「時期不明」として計算している。

＊３　土器の取り上げに際し、土器１点が単独で出土した場合は土器１点に対し１つの座標を、まとまって出土した場合は数点をまとめて１点として座標を付加して取り上げた。そのため、本報告書で示した遺物出土分布図のドット数は土器の出土破片数と対応していない。

第３節　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構として、竪穴住居跡１軒（柱穴14基、焼土１基を含む）、掘立柱建物跡１棟（柱穴９基で構成される）、土坑93基を検出した。本節では遺物が多数出土した竪穴住居跡と掘立柱建物跡、土坑５基の平面図と土層図を提示し、残りの土坑88基は土層図の記録を残した遺構のみ土層図を提示する（平面図は図75参照）。

縄文時代の遺構は、調査区中央付近から東側に展開する遺構群と、西側に展開する遺構群がある（図18）。前者の遺構群の南側は平坦面上にあり、比較的小規模な土坑が多く、中央付近にSH３が位置する。北側は斜面上にあり、SK179・280・349のような大規模な土坑はあるが、遺構密度は低い。後者の遺構群の東端には比較的規模の大きな土坑（SK24・26・35・45）が４基南北に並び、西端にはSB４が位置する。

各遺構の分類毎の数量は表７のとおりである。平面形は楕円形状のもの（b）が多く、縄文か弥生時代の時期の特定ができない遺構（以下「縄文～弥生時代の遺構」とする）でも楕円形状のものが多い。底部断面は平らなもの（B）が多いが、縄文～弥生時代の遺構では丸いもの（A）と平らなもの（B）がほぼ同じ比率である。土の堆積状況は、単層のもの（１）と中央に凹部をもつもの（３）が多い。

縄文土器は接合前破片数が2,226点、接合後破片数が1,702点であり、524点が接合した。2,226点の

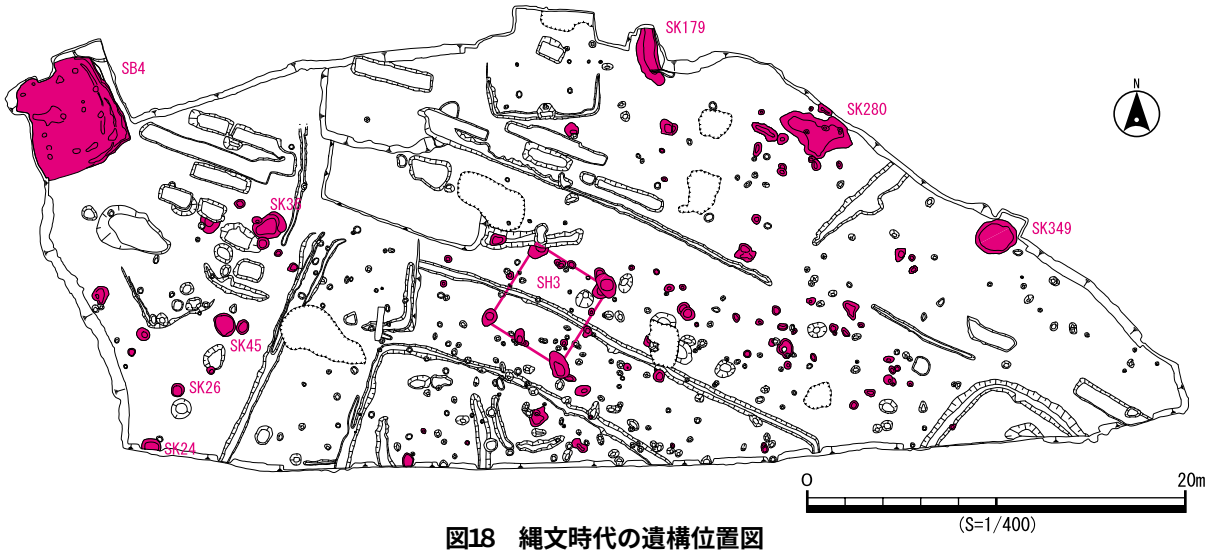


図18　縄文時代の遺構位置図

表７　縄文時代の遺構分類毎の数量

時　代	遺構種類	平面形				底部形態			堆積状況				
		a	b	c	d	A	B	C	1	2	3	4	5
縄文時代	SB			1			1			1			
	P	3	17		3	6	17		7	3	8	3	2
	SK	16	65		12	28	53	12	34	17	28	12	2
	SC				1			1			1		
縄文～弥生時代	SK	52	126	1	17	82	88	26	95	25	46	22	8
合　　計		71	208	2	33	116	159	39	136	46	83	37	12

うち、まとまって出土した土器を１点として座標を与えて取り上げ、合計586点の分布図（図19）を作成した。その結果、縄文土器の分布は遺構位置図と同様に調査区中央付近から東側に展開する遺物群と、西側に展開する遺物群に分けられる。さらに調査区南側ではドットが散在しているのに対し、北側の斜面では数箇所に分かれてドットが集中する傾向にある。また、弥生時代の竪穴住居跡や方形周溝墓、溝などからの出土も多く、廃棄後にかなり遺物が移動している可能性がある。土器の接合状況は、同一遺構内ではSB４が圧倒的に多く、遺構外接合が認められたのは弥生時代の竪穴住居跡であるSB１出土のものと包含層出土のものの１個体のみである。他はすべて同一の取り上げ地点同士の接合であり、図19には線で表現していない。

石器は93点出土し、縄文土器と同様の方法で取り上げ、合計45点の分布図（図20）を作成した。分布は、SB４とSB１（弥生時代）の２箇所に集中し、他は極めて希薄である。なお、縄文時代と弥生時代の石器の識別ができないので、図20では出土した石器をすべて掲載している。

以下、「１竪穴住居跡」、「２掘立柱建物跡」、「３土坑」の順に遺構を説明し、「４出土遺物」として遺構毎に出土遺物の説明を行う。

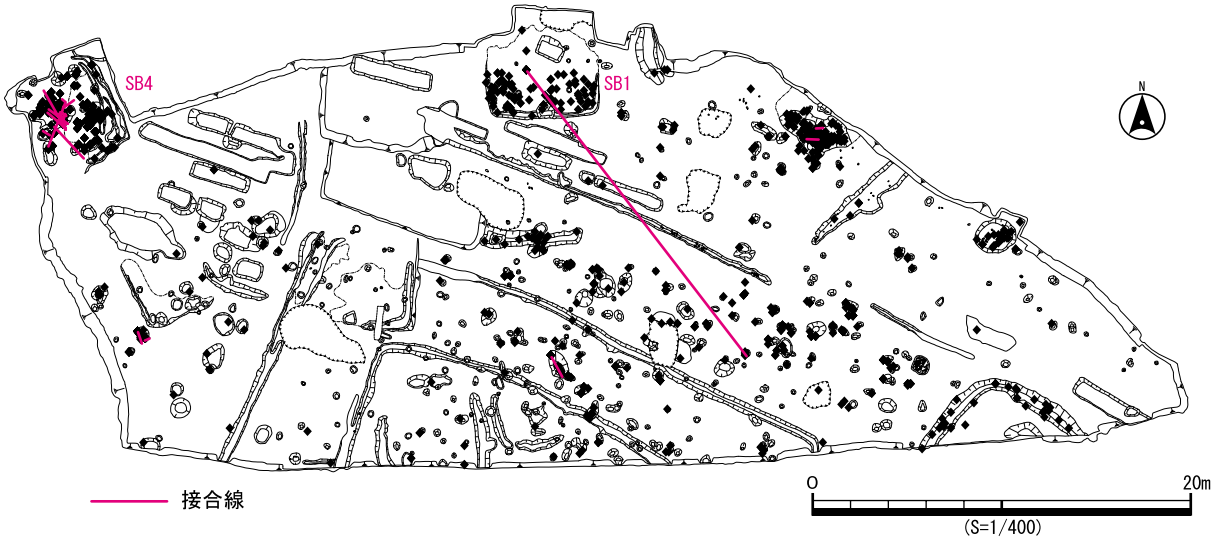


図19　縄文土器の出土位置図

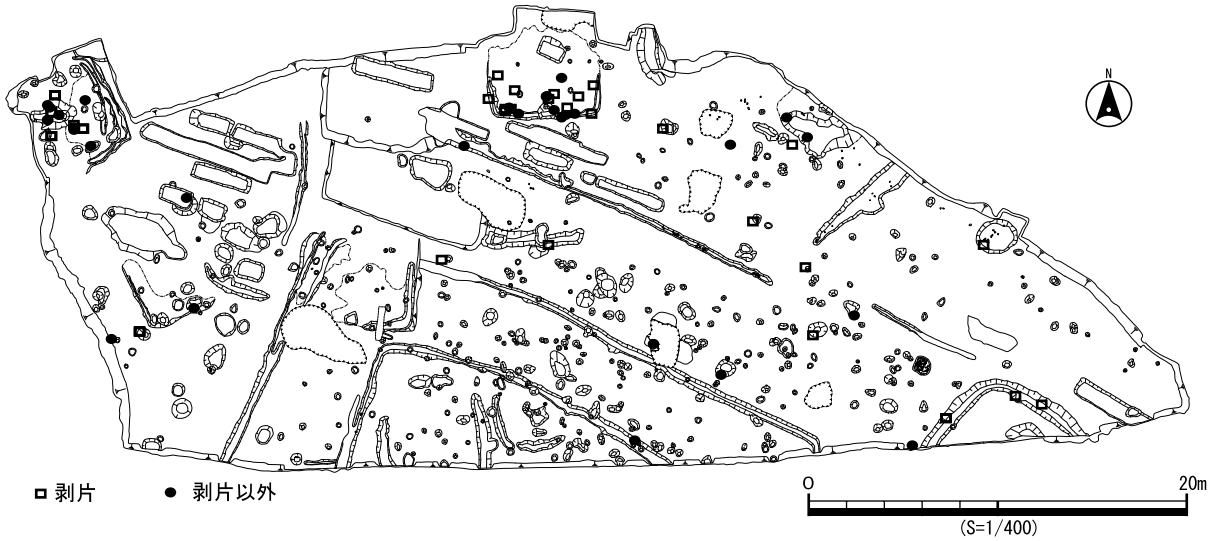


図20　石器の出土位置図

１　竪穴住居跡

SB４（図21～23）

検出状況　Ａ１～Ｂ２グリッドで検出した。南東隅のプランは明瞭であったが、西側は漸移的に不明瞭となる。これは、本遺構が北西に傾斜する斜面に位置するため、埋土及び床面が流失したためと思われる。全体のプランは方形であるが、正方形か長方形かは判断できない。周溝の検出本数から２回以上の重複があったといえる。

壁　東壁の残りがよく、検出面から0.25m掘り込んでいる。周溝壁面はほぼ直立しているが、住居跡の壁面は傾斜している。

周溝　東壁側と南壁東側にて３条検出したため、ここでは仮に内側をSD１、真ん中をSD２、外側をSD３とする。SD３は土層図（図21）の２層上で検出し、SD１・２は２層掘削後に検出できたことから、SD３はSD１・２の埋没後に構築されているといえる。SD１は最大幅0.33m、深さ0.05mであり、P28・34に切られる。P36が浅くて細長い形状を呈するため、P36もSD１と一連の遺構である可能性もある。SD２は最大幅0.38m、深さ0.03mであり、P35とSD３に切られる。南東隅のコーナー部は弧状を呈する。SD３は最大幅0.30m、深さ0.12mであり、SD２を切る。南東隅のコーナー部は角状を呈する。埋土はいずれも単層であり、SD３の埋土は住居跡の埋土と色調が異なっていたが、SD１・２はその差を識別できなかった。なお、SD１・２の先後関係は不明である。

埋土　基本的に水平堆積であるが、埋土上層では皿状の堆積がみられる。図21の２層がSD１・２に伴う竪穴住居跡の埋土で、それ以外の土層はSD３に伴う竪穴住居跡の埋土である。なお、２層が人為的に埋められたか否かは判断できなかった。

床　床面はほぼ水平であるが、北西方向は地形に沿ってわずかに傾斜している。

柱穴　床面では14基の小穴を検出した。そのうちP24・25・26・28・29・30・32は穴の断面形態や底面中央付近に円形の平坦面があることから、柱穴として機能していた可能性がある。しかし、どの柱穴同士が同時期に機能していたかは判断できなかった。

炉　床面中央付近に位置する。竪穴住居跡検出時においてすでに炭化物の面的な広がりが確認でき、数㎝掘削すると多数の土器が横位で出土した。その多くは図22の３層直上に位置し、主に南東方向からの廃棄が予想される。炉の平面形は不定形を呈し、底面東側の円形状の窪み内に焼土が面的に確認できた。底面付近には焼土ブロックを含む層があり、その直上に焼土粒を含む層が堆積している。そのため、底面付近で火を使用していたと思われるが、竪穴住居の床面から約0.6m下に位置することから、炉以外の機能も想定すべきかもしれない。図22の１・２層を上層、３層以下を下層とすると、上層出土の遺物が圧倒的に多く、上下層間の接合はない。

出土遺物　縄文土器1003点、弥生土器４点、石器26点、近世～近代陶磁器３点が出土した。遺物分布（図23）はSC２とP28周辺に集中する。縄文土器のうち、縄文中期後葉の土器はSD１より内側にあり、中期末の土器はSD１より外側まで分布している。しかし、出土標高は両者が混在している。遺物はSC２を中心として住居跡中央付近出土のものが多く接合しているが、東側は遺物が比較的多く出土しているにも関わらず、離れた場所の接合は少ない。

時期　縄文中期後葉と末の土器が混在して出土しており、２回以上の重複があることから、本遺構の時期を縄文中期後葉から末とする。

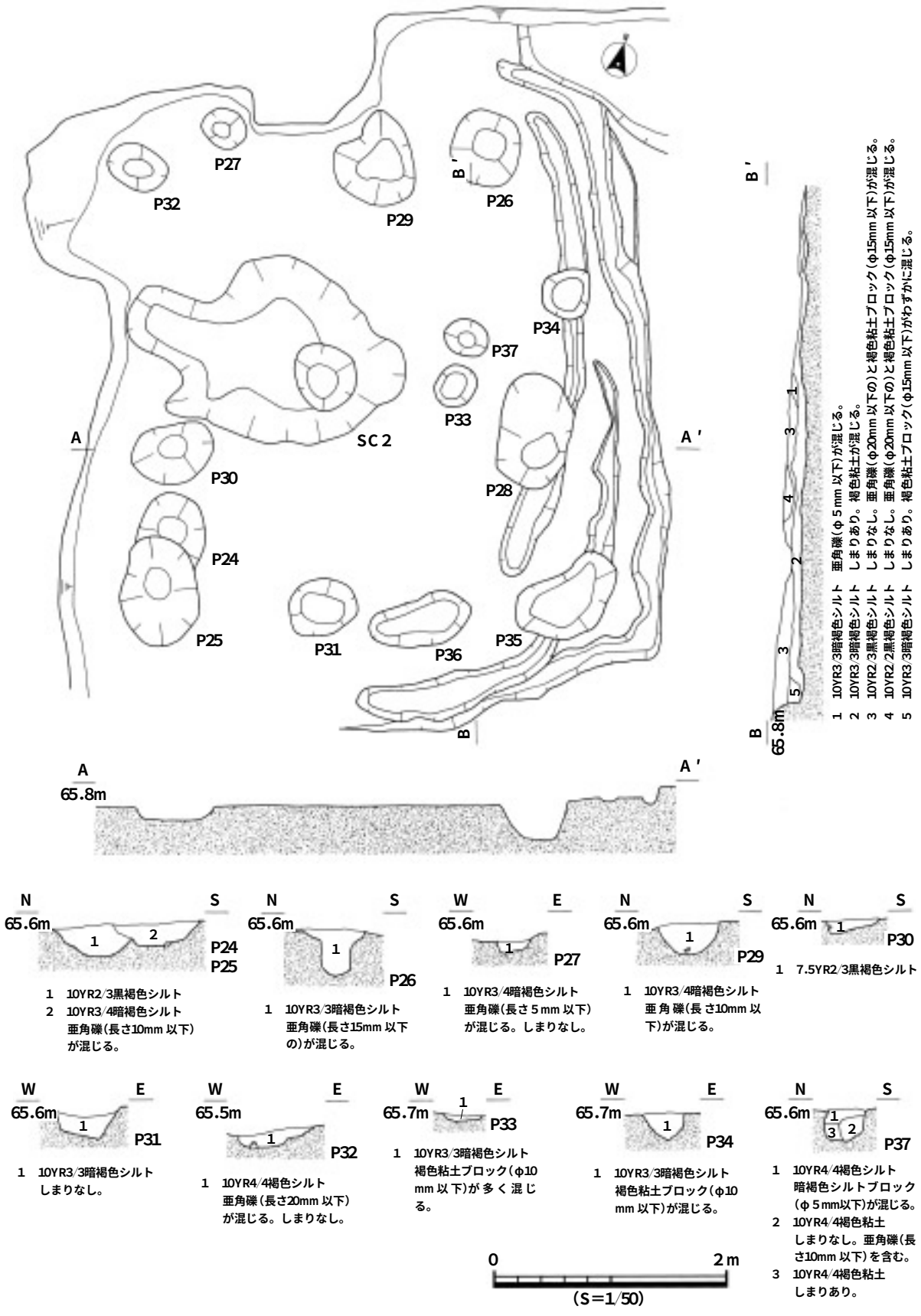

P27
P32
P29
P26
B'
P34
P37
P33
SC2
A
A'
P30
P28
P24
P25
P31
P36
P35
B
A
65.8m
A'
B'
1 10YR3/3暗褐色シルト　亜角礫(φ5mm以下)が混じる。
2 10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり。褐色粘土が混じる。
3 10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。亜角礫(φ20mm以下の)と褐色粘土ブロック(φ15mm以下)が混じる。
4 10YR2/2黒褐色シルト　しまりなし。亜角礫(φ20mm以下の)と褐色粘土ブロック(φ15mm以下)が混じる。
5 10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり。褐色粘土ブロック(φ15mm以下)がわずかに混じる。
B
65.8m
N
S
65.6m
1
2
P24
P25
1 10YR2/3黒褐色シルト
2 10YR3/4暗褐色シルト
亜角礫(長さ10mm以下)
が混じる。
N
S
65.6m
1
P26
1 10YR3/3暗褐色シルト
亜角礫(長さ15mm以下
の)が混じる。
W
E
65.6m
1
P27
1 10YR3/4暗褐色シルト
亜角礫(長さ5mm以下)
が混じる。しまりなし。
N
S
65.6m
1
P29
1 10YR3/4暗褐色シルト
亜角礫(長さ10mm以
下)が混じる。
N
S
65.6m
1
P30
1 7.5YR2/3黒褐色シルト
W
E
65.6m
1
P31
1 10YR3/3暗褐色シルト
しまりなし。
W
E
65.5m
1
P32
1 10YR4/4褐色シルト
亜角礫(長さ20mm以下)
が混じる。しまりなし。
W
E
65.7m
1
P33
1 10YR3/3暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ10
mm以下)が多く混じ
る。
W
E
65.7m
1
P34
1 10YR3/3暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ10
mm以下)が混じる。
N
S
65.6m
1
2
3
P37
1 10YR4/4褐色シルト
暗褐色シルトブロック
(φ5mm以下)が混じる。
2 10YR4/4褐色粘土
しまりなし。亜角礫(長
さ10mm以下)を含む。
3 10YR4/4褐色粘土
しまりあり。
0
2m
(S=1/50)

図21　SB4（1）

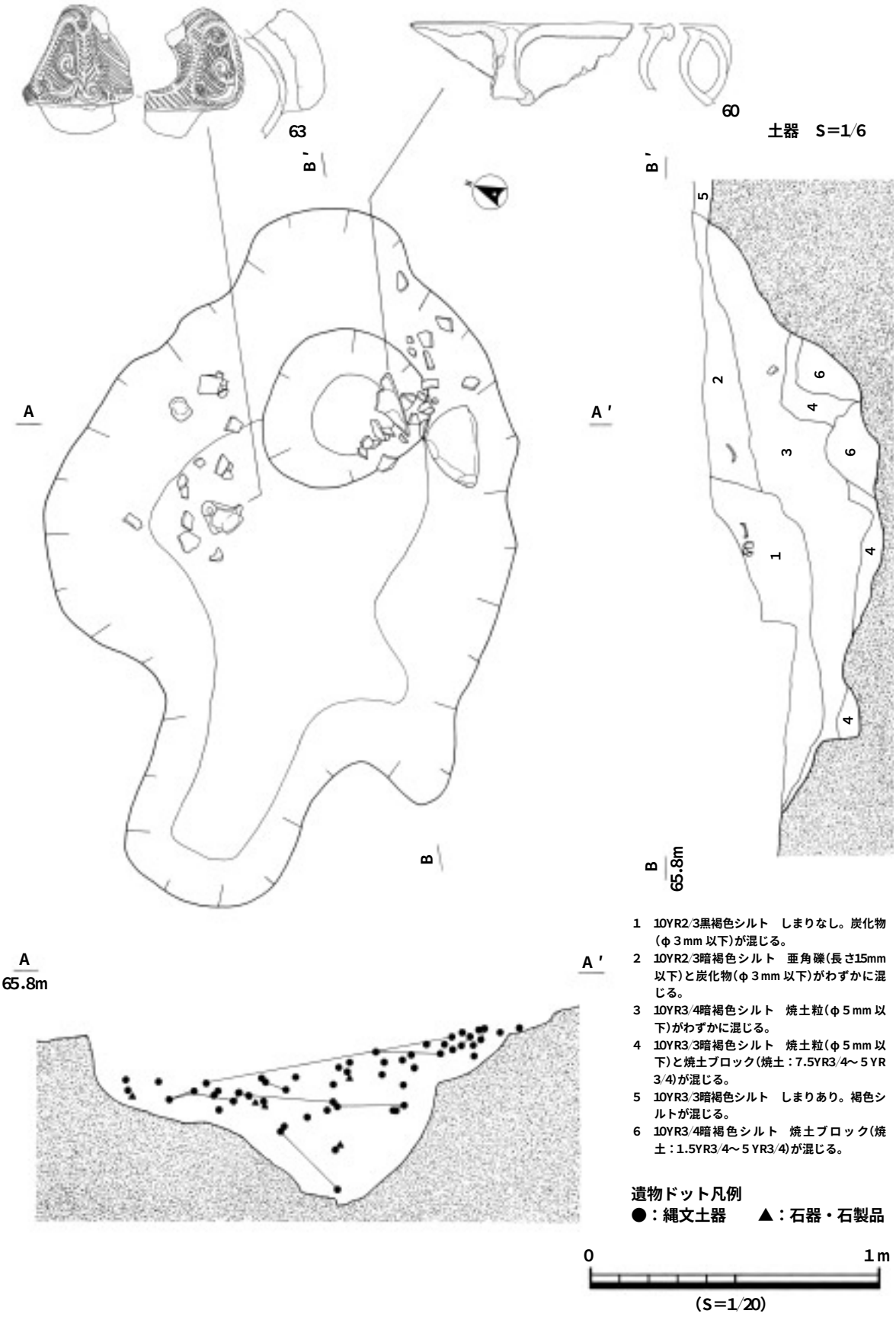

63
60
土器　S＝1/6
B'
B'
A
A'
B
B
65.8m
A
65.8m
A'
5
2
6
4
3
6
1
4
4
1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。炭化物（φ３mm 以下）が混じる。
2　10YR2/3暗褐色シルト　亜角礫（長さ15mm 以下）と炭化物（φ３mm 以下）がわずかに混じる。
3　10YR3/4暗褐色シルト　焼土粒（φ５mm 以下）がわずかに混じる。
4　10YR3/3暗褐色シルト　焼土粒（φ５mm 以下）と焼土ブロック（焼土：7.5YR3/4～５YR 3/4）が混じる。
5　10YR3/3暗褐色シルト　しまりあり。褐色シルトが混じる。
6　10YR3/4暗褐色シルト　焼土ブロック（焼土：1.5YR3/4～５YR3/4）が混じる。
遺物ドット凡例
●：縄文土器　▲：石器・石製品
0
1m
（S＝1/20）

図22　SB４（２）

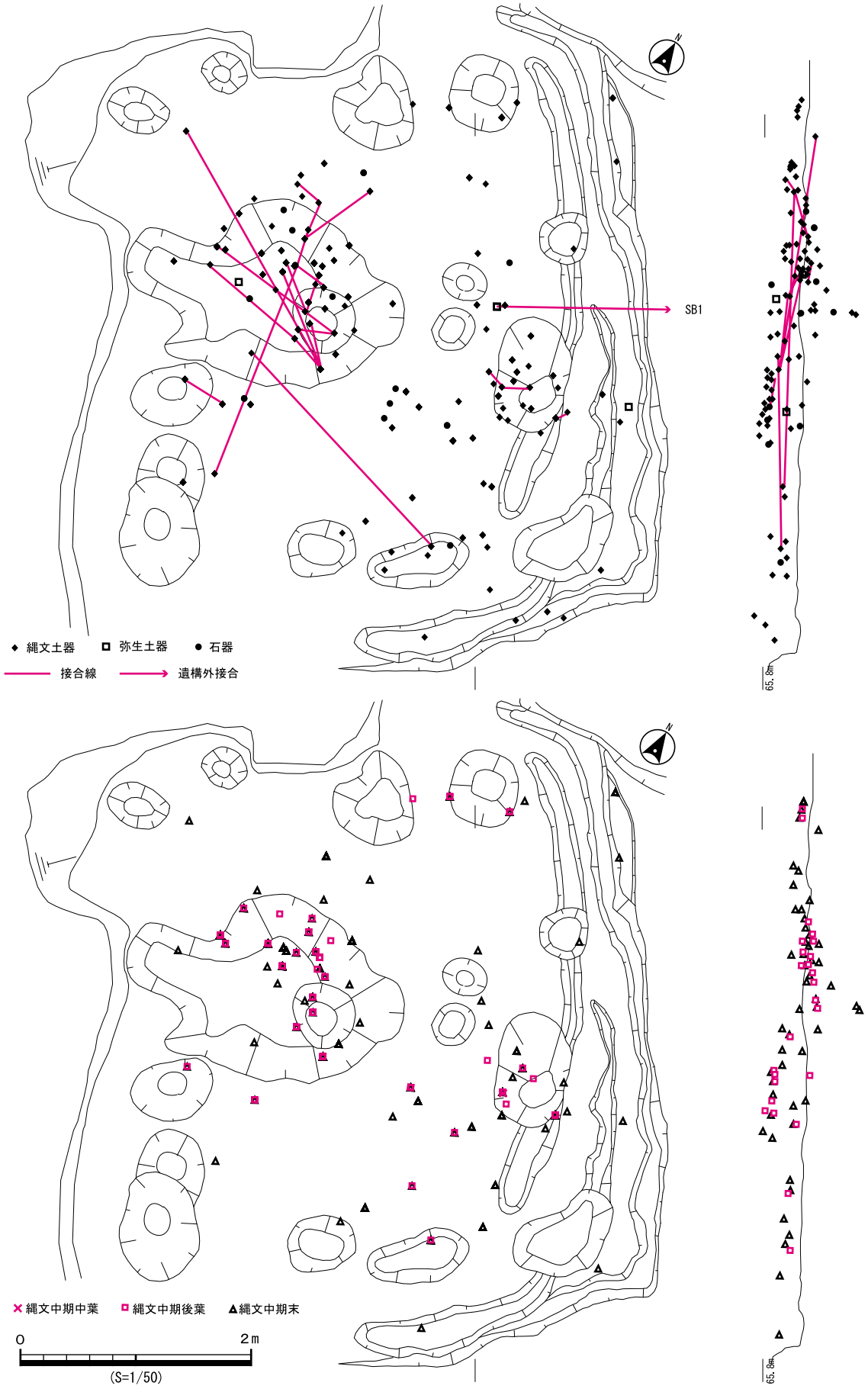


図23　SB４遺物出土位置図・接合図

２　掘立柱建物跡

SH３（図24～26）

検出状況　C６～D７グリッドで検出した。北西隅のP58は弥生時代のSK108とSD14に切られており、それらを掘削した後、P58の底面を確認した。P59は弥生時代のP47に、P54は近世～近代のSD18にそれぞれ切られている。なお、検出面において、掘立柱建物跡の柱穴以外に焼土の広がりや硬化面は確認できなかった。

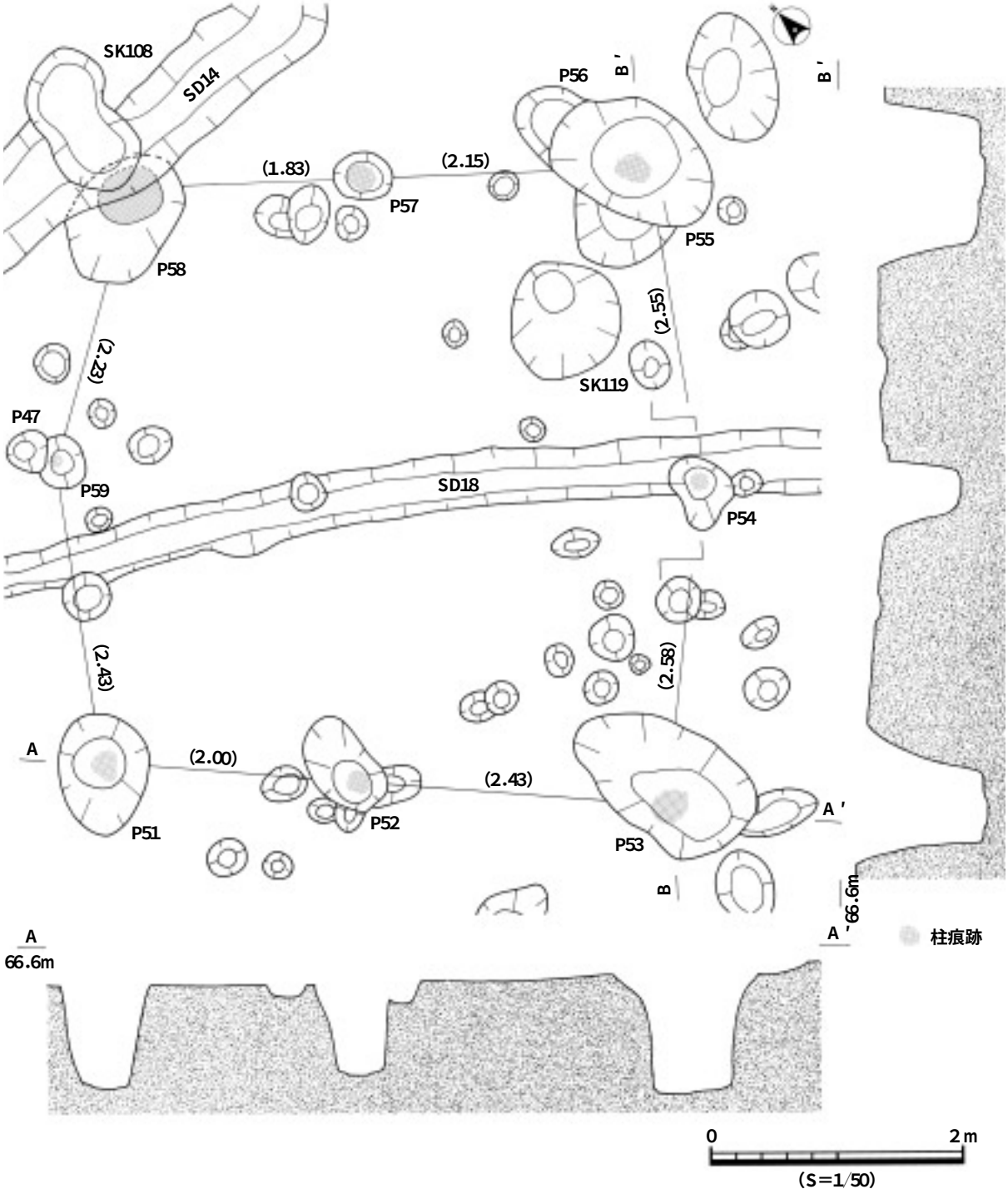
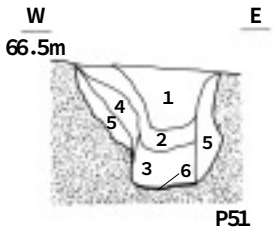


図24　SH３（１）

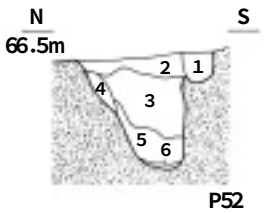
規模　桁行２間×梁行２間の北西―南東方向を主軸とする掘立柱建物跡であり、規模は桁行約4.21m、梁行約4.81m、床面積22.6㎡である。

形態　北西―南東方向の軸上に位置する柱穴（P51～53とP55～58）の柱痕跡は線的に並んでいるが、北東―南西方向の軸上に位置する柱穴（P53～55とP51・58・59）のうち中間の柱痕跡は、軸線上より外側に位置する（P54が約0.35m、P59が0.48m外側にずれる）。そのため、本建物跡は北西―南東方向を主軸とする近接棟持柱建物跡（宮本長二郎1996）であるといえる。なお、建物跡はほぼ等高線に沿って存在している。

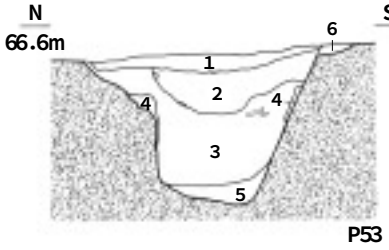
柱穴　８基の柱穴から成る。その平面形は楕円形状を呈するものが多く、主軸は北西―南東方向のものが大半である。また、その断面形はいずれも柱穴上半の一側面が傾斜している点が共通しており、



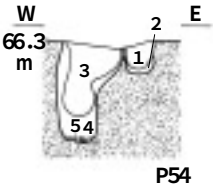
1　10YR2/2黒褐色シルト
2　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ５mm以下）が混じる。
3　10YR3/3暗褐色シルト　しまりなし。亜角礫（長さ10mm以下）が混じる。
4　10YR4/4褐色シルト　しまりなし。暗褐色シルトが不均等に混じる。亜角礫（長さ15mm以下）が混じる。
5　10YR3/4暗褐色シルト　褐色粘土が不均等に混じる。亜角礫（長さ５mm以下）がわずかに混じる。
6　10YR4/4褐色粘土



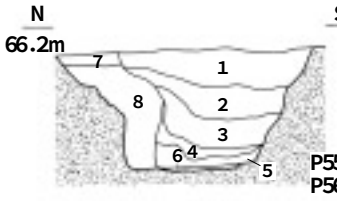
1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ５mm以下）が不均等に混じる。
2　7.5YR3/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ20mm以下）が不均等に混じる。
3　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロックが２より多く混じる。
4　10YR4/4褐色シルト　しまりなし。
5　7.5YR3/2黒褐色と10YR4/4褐色が均等に混じるシルト　しまりなし。
6　10YR4/6褐色粘土　強くしまる。



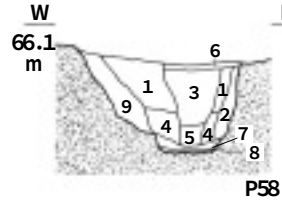
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ５mm以下）が混じる。
2　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ10mm以下）が不均等に混じる。
3　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。
4　10YR4/3にぶい黄褐色粘土　しまりあり。
5　10YR3/3暗褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック（φ20mm以下）が多量に混じる。
6　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土が混じる。



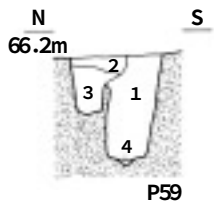
1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ20mm以下）が混じる。
2　10YR3/4暗褐色シルト　褐色粘土が不均等に混じる。
3　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ８mm以下）が細粒状に混じる。
4　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ８mm以下）が細粒状に混じる。３より多い。
5　10YR4/6褐色粘土　しまりあり。



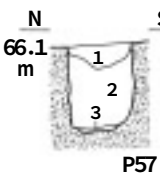
1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。亜角礫（長さ40mm以下）と褐色粘土ブロック（φ５mm以下）が混じる。
2　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ５mm以下）が１よりやや多く混じる。
3　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック（φ50mm以下）が多量に混じる。
4　10YR2/2黒褐色シルト　しまりなし。２よりわずかに濃い。褐色粘土が粒状に混じる。
5　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。３に近いが、粒状に褐色粘土が混じる。
6　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土（φ２mm以下）が粒状にわずかに混じる。
7　10YR3/3黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック（φ５mm以下）が混じる。１よりも多い。
8　10YR4/6褐色粘土　強くしまる。黒褐色シルトが不均等に混じる。



1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ20mm以下）が混じる。３よりしまりあり。
2　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ40mm以下）が多量に混じる。
3　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ10mm以下）が混じる。しまりなし。
4　10YR2/3黒褐色シルト　１に似るが、褐色粘土ブロックが非常に少なく小さい。
5　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ５mm以下）が混じる。
6　10YR2/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ10mm以下）が混じる。
7　10YR4/6褐色粘土　にぶい黄褐色粘土が多量に混じる。しまりあり。黒褐色シルトがわずかに混じる。
8　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。
9　10YR4/4褐色シルト　しまりあり。暗褐色シルトブロック（φ20mm以下）が混じる。



1　10YR2/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック（φ10mm以下）が混じる。
2　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ８mm以下）が混じる。
3　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ30mm以下）が多量に混じる。しまりあり。
4　10YR4/6褐色粘土　亜角礫（長さ15mm以下）が混じる。



1　10YR2/2黒褐色シルト　しまりあり。褐色粘土（φ２mm以下）が粒状に混じる。
2　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土（φ２mm以下）が粒状に混じる。
3　10YR4/6褐色粘土　強くしまる。

（S＝1/50）

図25　SH３（２）

これは、柱の設置ないしは抜き取りの際の痕跡と思われる。しかし、例外としてP57のみ壁面がほぼ垂直である。四隅の柱穴であるP51・53・55・58の法量の平均値は長さ1.25m、深さ0.84mで、その中間に位置するP52・54・57・59の法量の平均値は長さ0.56m、深さ0.69mである。つまり、前者は法量が大きく、後者は前者に比べて小さい。埋土は単層にしか分けられないものから多数に分層可能なものまである。土層で明確に柱痕跡が確認できる柱穴はP51・58であり、掘形埋め戻し土は柱痕跡の両側にある。P55・56は検出時に土質が異なったため別遺構と判断したが、その底面の標高が同じであることや土層の堆積状況から、P56はP55の掘形埋め戻し土の可能性が高い。柱穴底面では、いずれも円形ないしは不定形を呈する硬化面を確認したが、根石や支え石などはなかった。そのため、柱穴掘形に直接柱を設置していたといえる。なお、柱間距離の平均値は桁行が2.10m、梁行が2.45mである。

出土遺物　柱穴内より縄文土器130点、弥生土器３点、石器２点が出土した。特にP53と56からの出土が多い。SH１周辺には縄文土器が散在しているが、特にSH３を含む調査区南側の平坦面の東側に多く、北側の斜面には少ない。また、弥生時代の遺構であるSD14からは比較的多くの縄文土器が出土している。

時期　柱穴出土の土器より、縄文時代中期末と考えられる。

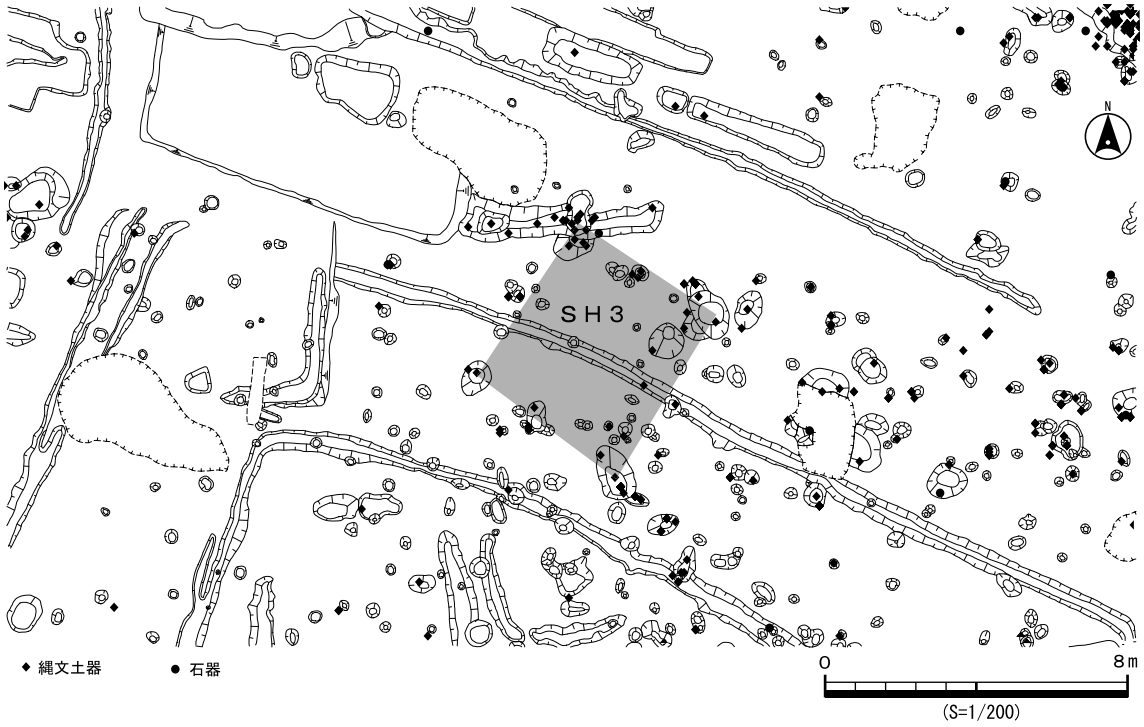


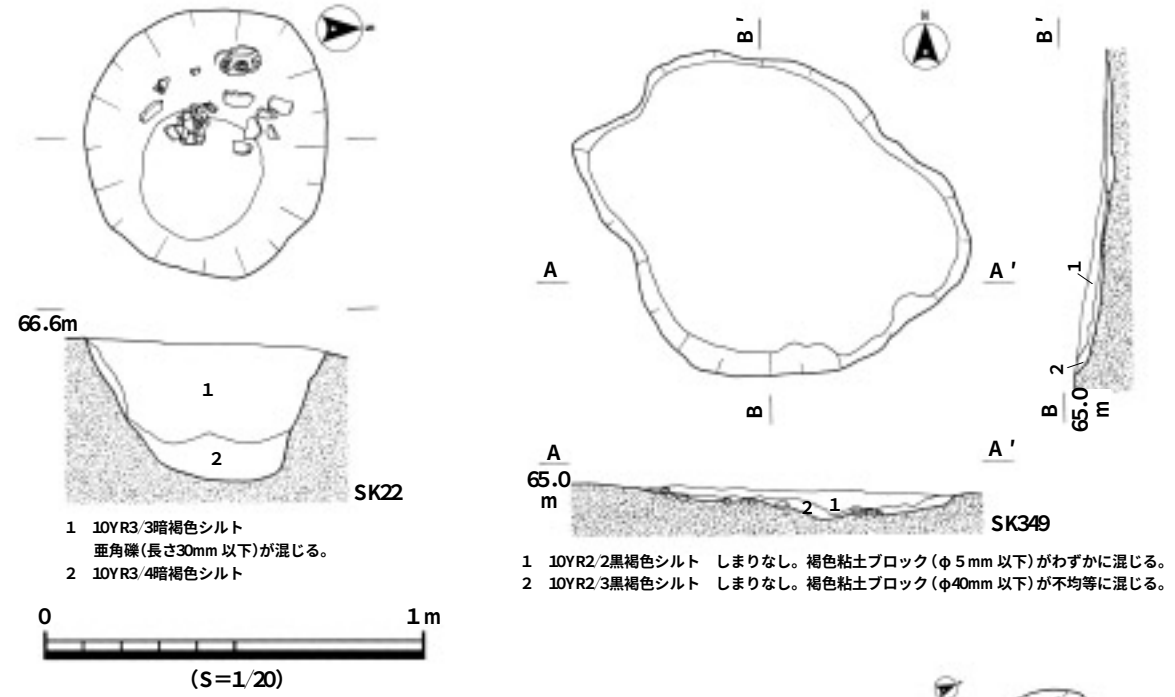
図26　SH３周辺遺物出土位置図

３　土坑（図27～30）

ここでは、遺物が15点以上出土した土坑の平面図と断面図を掲載し、それ以外の土坑は頁数の都合上、土層図のみの掲載とする（平面図は図75参照）。

SK22（図27）

検出状況　Ｄ２グリッドで検出した。平面は円形状、断面は逆台形状を呈し、底面は平らである。遺構検出時より土器が散在しており、約10㎝の深度までに大半の土器が出土した。他の土坑と比較して、出土土器の破片が大きい。



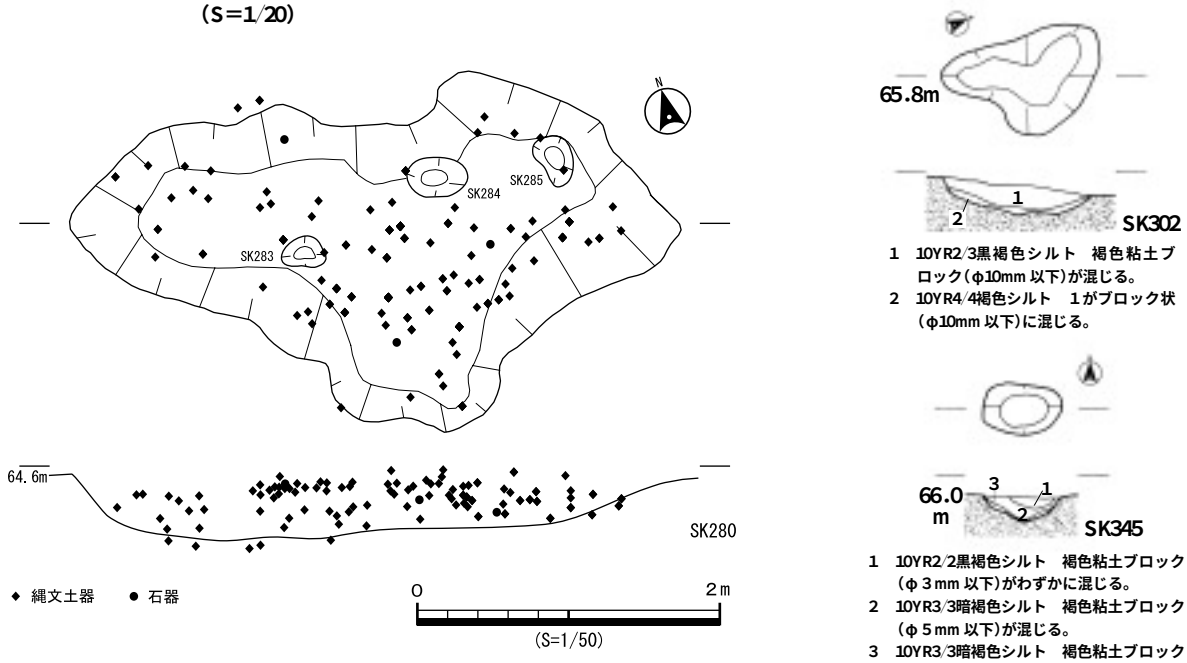


図27　縄文時代の土坑（１）

埋土　２層に分層した。ほぼ水平堆積である。

出土遺物　縄文土器130点、石器３点が出土した。縄文時代中期後葉～末の土器が同一層位より出土している。

時期　出土遺物から縄文時代中期後葉～末と考えられる。

SK280（図27）

検出状況　Ｂ９グリッドで検出した。平面は不定形状、断面は皿状を呈する。検出時に黒褐色シルトが遺構周縁部にみえ、中央やや東寄りには亜角礫を含む褐色粘土が楕円形状に広がっていた。３㎝程掘削すると主に黒褐色シルトより縄文土器が多数出土し始めたが、褐色粘土からの出土は少なかった。なお、底面では小穴（SK283～285）を検出した。

埋土　土層断面図を作成していないが、検出時にみられた褐色粘土は基本層序のⅣ層であり、その下に黒褐色シルトが帯状にあることから、土層堆積が逆転していることは明らかである。そのため、本遺構は風倒木痕である可能性が極めて高い。しかし、出土遺物が多いことや底面で小遺構を確認したことなどから、風倒木痕が縄文時代の遺構を破壊している可能性がある。

出土遺物　縄文土器216点、石器４点が出土した。遺構全域から散在して出土しており、特に中央付近に多い傾向がある。縄文時代中期後葉～末の土器が出土しているが、出土位置にまとまりはなく、混在している。

時期　出土遺物から縄文時代中期後葉～末と考えられる。

SK302（図27）

検出状況　Ｄ９グリッドで検出した。平面は不定形状、断面は皿状を呈する。

埋土　２層に分層し、上層は中央が窪む堆積である。

出土遺物　縄文土器44点、石器２点が出土した。

時期　出土遺物から縄文時代中期後葉～末と考えられる。

SK345（図27）

検出状況　E10グリッドで検出した。平面は楕円形状、断面は皿状を呈し、底面は丸い。

埋土　３層に分層した。いずれも中央付近が窪む堆積状況である。

出土遺物　縄文土器15点が出土した。

時期　出土遺物から縄文時代中期後葉～末と考えられる。

SK349（図27）

検出状況　C11グリッドで検出した。平面は不定形状、断面は皿状を呈し、検出時より土器が散在していた。南側のプランは明瞭であったが、北側は漸移的に不明瞭となった。底面は地山であるⅣ層で、直径10㎝強の亜角礫が露出していた。

埋土　２層に分層し、上層は中央が窪む堆積である。遺物の大半は上層から出土した。

出土遺物　縄文土器37点、弥生土器１点、石器１点が出土したが、いずれも細片である。

時期　出土遺物から縄文時代中期後葉～末と考えられる。

その他の土坑として、出土遺物や遺構の重複関係から縄文時代の遺構と判断できる土坑を以下に報告する。該当する土坑は88基あり、調査区中央南側の平坦面から斜面にかけてに多く分布する。平面形は円形状若しくは楕円形状が多く、規模の平均値は長軸0.43m、短軸0.35m、深さ0.16mである。しかし、SK179やSK238のように長軸が１ｍを超える大型土坑が８基存在し、その性格は検討を要する。また、SK31やSK304のように柱穴の可能性もある土坑もある。

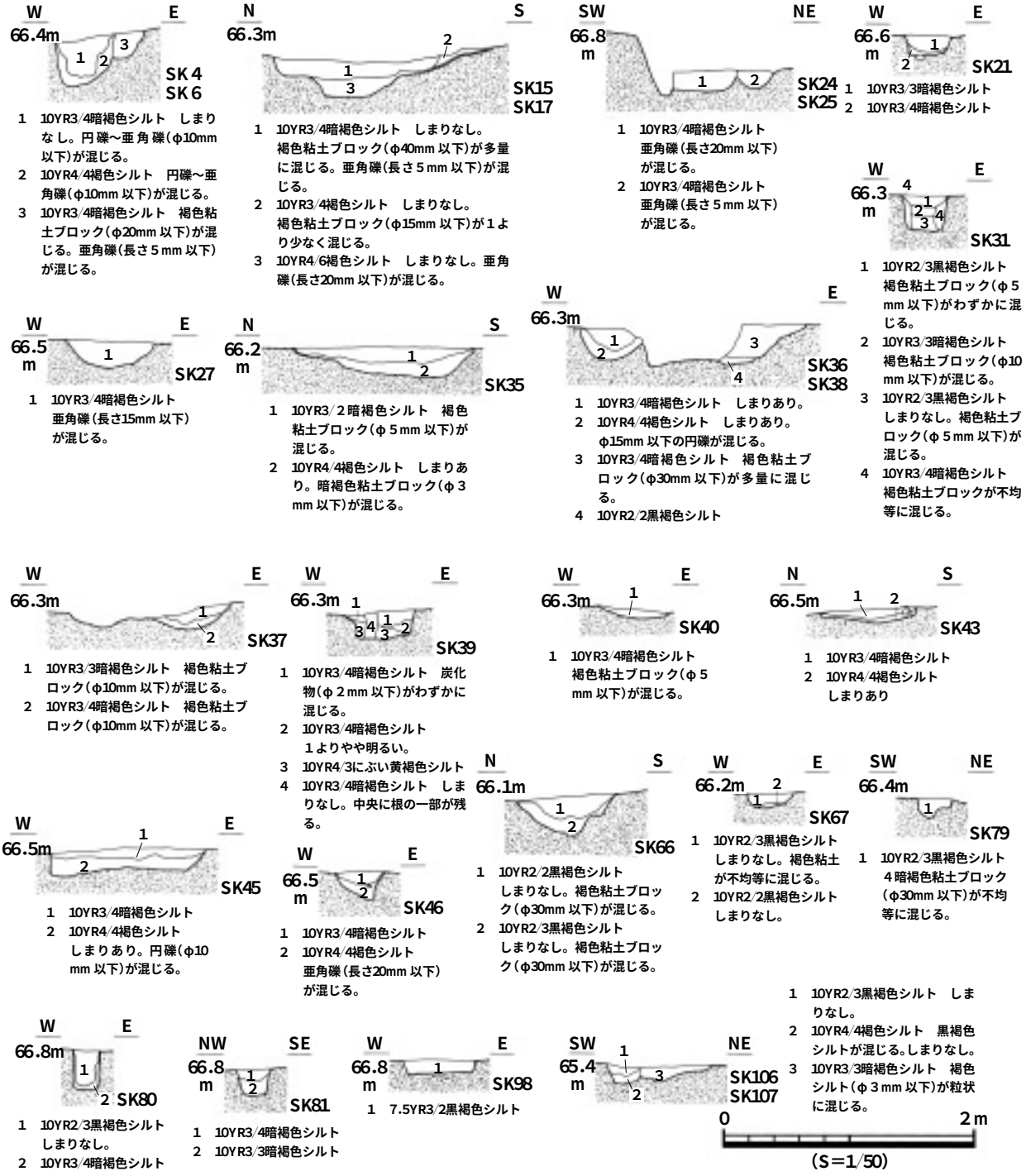


図28　縄文時代の土坑（２）

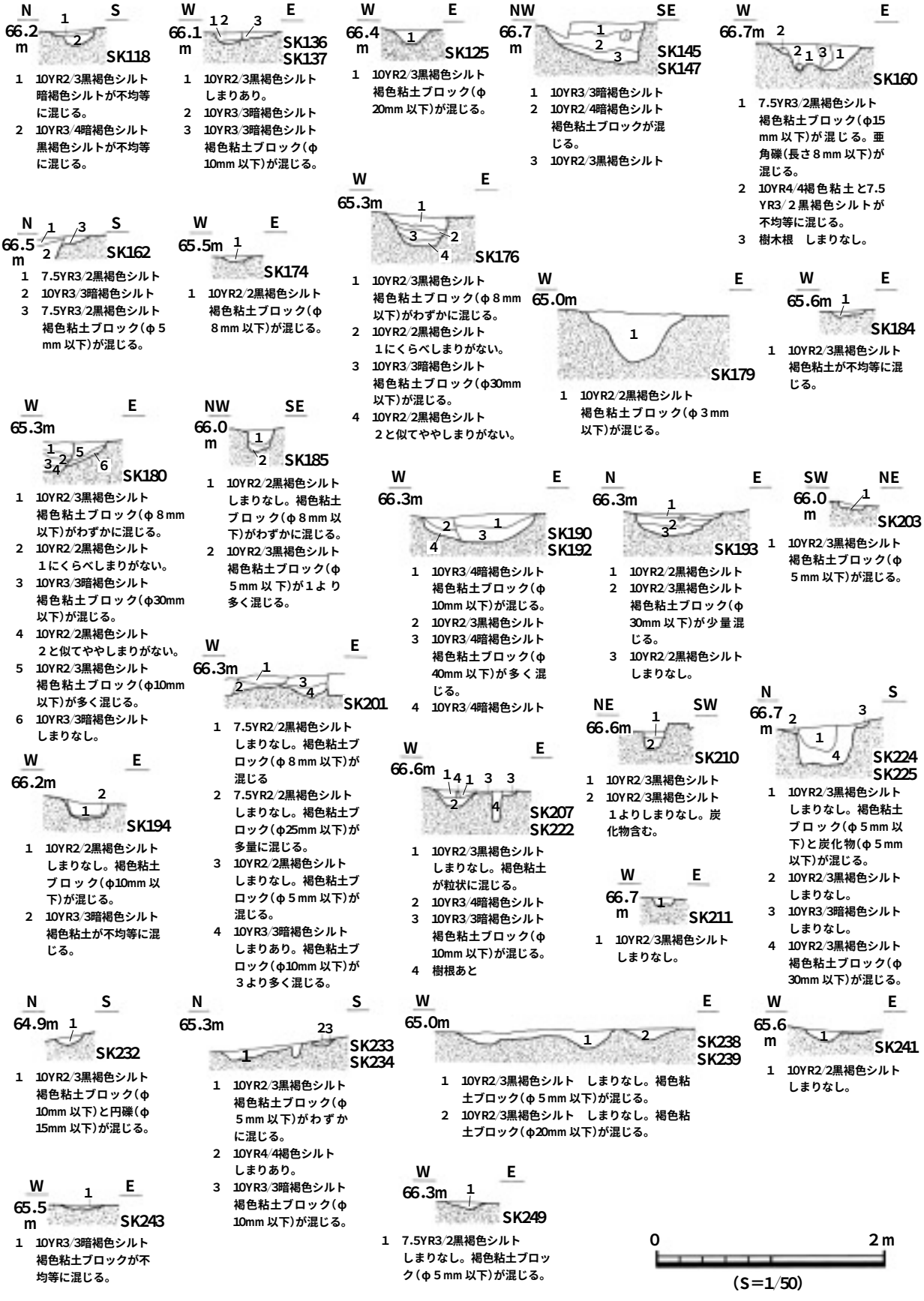
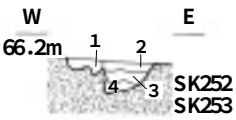


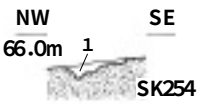
図29　縄文時代の土坑（３）

1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ20㎜以下)が混じる。
2　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土が不均等に混じる。

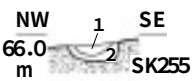
1　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ５㎜以下)がわずかに混じる。
2　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ20㎜以下)が混じる。



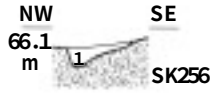
1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ３㎜以下)が粒状に混じる。
2　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ10㎜以下)が混じる。
3　10YR3/3黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ30㎜以下)が混じる。
4　10YR3/4暗褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ５㎜以下)が混じる。



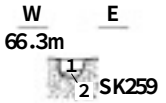
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10㎜以下)が混じる。



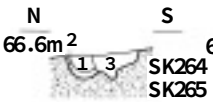
1　10YR3/2暗褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ５㎜以下)がわずかに混じる。
2　10YR4/4褐色シルトしまりあり。



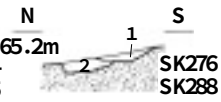
1　10YR3/4暗褐色シルト　褐色粘土が不均等に混じる。



1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。
2　10YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土が不均等に混じる。

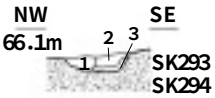


1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ３㎜以下)がわずかに混じる。
2　10YR3/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ５㎜以下)が混じる。
3　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ３㎜以下)がわずかに混じる。

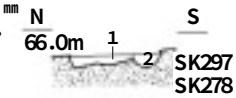


1　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ８㎜以下)が混じる。
2　10YR3/4暗褐色シルト　褐色粘土が不均等に混じる。

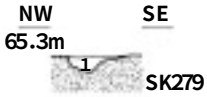
1　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ20㎜以下)が混じる。
2　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10㎜以下)が混じる。



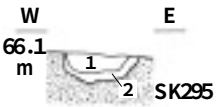
1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ15㎜以下)が混じる。
2　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ５㎜以下)が混じる。
3　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　２がわずかに粒状に混じる。



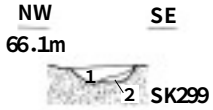
1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ５㎜以下)がわずかに混じる。
2　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ15㎜以下)が多く混じる。



1　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ５㎜以下)が混じる。

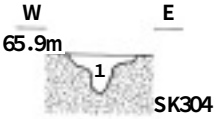


1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。
2　10YR3/4暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ30㎜以下)が不均等に混じる。

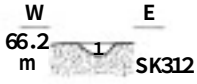


1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ８㎜以下)がわずかに混じる。
2　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ15㎜以下)が混じる。

1　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ３㎜以下)が混じる。
2　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ５㎜以下)が混じる。

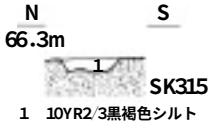


1　10YR3/4暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10㎜以下)が混じる。

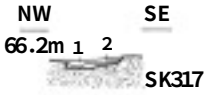


1　10YR3/3暗褐色シルト

1　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ３㎜以下)が混じる。
2　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土が不均等に混じる。

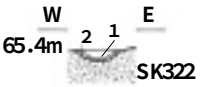


1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ５㎜以下)が混じる。



1　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ15㎜以下)が混じる。
2　10YR3/4暗褐色シルト

1　10YR2/2黒褐色シルト
2　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ30㎜以下)が混じる。



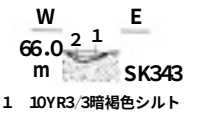
1　10YR3/3暗褐色シルト
2　10YR3/4暗褐色シルトしまりあり。

1　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ15㎜以下)が混じる。
2　10YR2/3黒褐色シルト

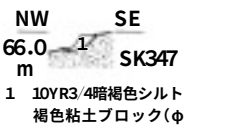
1　10YR2/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ５㎜以下)が混じる。
2　10YR3/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10㎜以下)が多く混じる。
3　10YR3/3暗褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ５㎜以下)が混じる。

1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色シルトが粒状に混じる。
2　10YR4/4褐色シルト

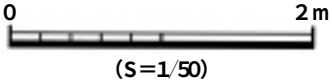
1　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ３㎜以下)がわずかに混じる。
2　10YR2/2黒褐色シルト
3　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ８㎜以下)が混じる。



1　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ３㎜以下)がわずかに混じる。
2　10YR3/4暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ５㎜以下)が混じる。



1　10YR3/4暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ４㎜以下)が混じる。



(S＝1/50)

図30　縄文時代の土坑（４）

４　出土遺物（図31～36）

SB４（１～69）　１～63は縄文土器、64～69は石器である。

１～59は深鉢である。１～３はＡ１類であり、１は口縁端部を外側に折り返し区画内に条線を施し、３は波状口縁で交互刺突文を施す。４はＡ２類であり、沈線により渦巻文を施す。５～９はＡ３類である。口縁端部直下には、横位の沈線文が７は３条、５・６・９は１条施し、８は沈線文がなく、５と９は押引沈線文である。区画内は６が押引沈線状の刺突、７が連続刺突文をそれぞれ充填する。10・11はＢ類である。10は隆帯上面と区画内に縄文を充填する。12～16はＣ１ａ類である。12・15・16は口縁部と胴部の境に沈線文を施し、その境を明確に表現している。16は肥厚部の幅が広く、工具Ａ(Ｂ・Ｃ）により縦位の短直線文を施す。17～20はＣ１ｂ類である。17・18は口縁部直下に幅広の沈線文を施し、胴部は条線地で垂下沈線文を描く。19・20は器壁が薄く、折り返しの幅が狭い。21～28はＣ２類である。22～24は波状口縁を呈し、24は幅広の隆帯を貼り付け、その周囲に縦位の条線を施す。22・23は白色粒を多く含む。29は山形口縁を呈し、口縁端部に沿って工具Ｄによる沈線文を施す。30～32・35・36はキャリパー形口縁の立ち上がり部分である。いずれも渦巻文があり、その左右に36は横位隆帯と沈線文、30・31・35は横位沈線文をそれぞれ施す。34は隆帯と沈線文で区画された内部を斜位の沈線文で充填する。37は円形刺突と沈線文を施し、外面にベンガラが付着している（ベンガラについては第４章を参照されたい)。38は工具Ｃによる連続刺突文を弧状に配置する。39は縄文地に工具Ａにより横位に連続刺突文を配置し、その上部に工具Ａによる平行沈線文を施す。40は断面台形の幅広の隆帯上面に縄文を充填する。41は橋状把手である。粘土紐により縁取りし、部分的に粘土紐が分かれて渦巻文を形成する。また、工具Ｅ（Ｆ）により斜位の押引沈線状の刺突を充填する。42～46は同一個体の可能性が高い。隆帯と沈線により渦巻文を形成し、隆帯間を工具Ｅ（Ｆ）による押引沈線状の刺突で充填する。42は橋状把手が斜めに付けられ、隣接する場所にも把手の剥離が認められる。47～51は胴上部に工具Ａ（Ｂ・Ｃ）により連弧文沈線を施し、47のみ波状文と連弧文が並列する。56～59は底部破片であり、いずれも平底である。

60～62は壺である。口縁部は外反しており、端部は肥厚し平坦面を有する。橋状把手は幅広の粘土帯を粘土紐で縁取りしている。61・62は60と同一個体の可能性が高く、隆帯と沈線文により装飾を施し、部分的に工具Ｅ（Ｆ）による押引沈線状の刺突で隆帯間を充填する。

63は釣手土器である。直径約２㎝の円孔が２箇所につくと思われる。口縁部文様帯は斜行沈線文と渦巻文を施した粘土帯により三角形状の区画を呈する。区画内には２条の隆帯と押引沈線文、隆帯から分かれる渦巻文を施し、内部を右下がりの集合沈線文で充填する。

64は石錐で裏面にバルヴァスカーが発達している。基部は肉厚で、刃部は尖る。68はＵＦで左右側縁に細かい剥離がみられるが、その大きさや切り合い関係が不規則であることから、使用による剥離と思われる。69は打製石斧であり、素材の剥片の表裏面と側面をほとんど調整せず、刃部に細かい剥離を施すのみである。

SK22（70～78）　いずれも縄文土器深鉢である。70はＡ１類である。キャリパー部の平面形は八角形になると思われ、角の上に続く内彎部に隆帯と押引沈線文で渦巻文を施し、その間を工具Ａ（Ｂ）により連続刺突文で充填する。口縁部は外反し、渦巻文から縦位に隆帯ないし工具Ｂによる刺突文を施し、その間に横位の隆帯を４本貼り付け、間を３本の押引沈線文で充填する。71・72はＡ２類で

ある。71は短直線文、72は渦巻文と楕円形区画文を施す。73は口縁端部を肥厚させる土器であるが、器壁が厚いことからＣ１ａ類とした。75はＣ２類の口縁部であり、隆帯による区画内を条線により充填する。77は工具Ａ（Ｂ・Ｃ）による横位の押引沈線状の刺突文と、工具Ｅ（Ｆ）による斜行する短直線文を施す。

ＳＨ３（79～87）　79～86は縄文土器深鉢である。79・80はＣ２類であるが、79は文様構成が判然としない。81は幅広の隆帯とその内側の沈線文による区画内に、LR の縄文を充填する。82は楕円形区画内に、工具Ｂにより円形の刺突文を施す。83は土器の割れ面から穿孔があると判断した。85は工具Ａ（Ｂ・Ｃ）による垂下沈線文を施す。86は縦位の隆帯があり、隆帯間は無文である。

87は敲石である。扁平な円礫を用い、表面中央と下端～右側縁に敲打痕がみられる。全体的に被熱している。

ＳＫ46（88）　縄文土器深鉢であり、幅2.5㎝の間に工具Ａ（Ｂ・Ｃ）による３本の連弧文を施す。

ＳＫ165（89）　縄文土器深鉢Ｃ１ａ類であり、口縁部に工具Ｄによる横位の沈線文を施す。

ＳＫ259（90）　縄文土器深鉢であり、胴部に縦位の隆帯を施す。

ＳＫ297（91・92）　縄文土器深鉢であり、いずれも工具Ｄにより鋸歯状の文様を施す。このような文様は、今回の調査ではこの２点のみの出土であった。

ＳＫ299（93）　縄文土器深鉢であり、隆帯と沈線文による区画内を短直線文で充填する。なお、胎土中に白色粒を多く含む。

ＳＫ302（95・96）　95は縄文土器深鉢であり、Ａ類の口縁部破片である。楕円形区画内を LR の縄文で充填する。96は RF で、表面に節理面が残る。

ＳＫ341（94）　Ａ類の口縁部破片であり、くびれ部直下に工具Ｅ（Ｆ）による斜位の押引沈線文を施す。

ＳＫ349（97）　弥生土器甕であり、口縁部に指腹による連続押圧突帯が巡る。

ＳＫ280（98～118）　98～117は縄文土器深鉢、118は石器である。98・99はＡ３類である。98は工具Ａにより口縁部沿いに横位沈線文と楕円形区画を施す。99は波状口縁で、口縁部に横位隆帯を３本貼り付け、その間に工具Ａによる押引沈線文を２条施す。その直下には隆帯と工具Ａによる押引沈線文の渦巻文と楕円形区画があり、区画内は LR の縄文を充填する。100～102はＣ１ａ類である。100は隆帯により渦巻文を施し、口縁端部直下は肥厚する。隆帯周辺には弱いナデを施し、口縁端部外面に RL の縄文を充填する。101は口縁部を折り返し、LR の縄文を充填する。102は口縁端部に渦巻文を施し、LR の縄文を充填する。103はＣ１ｂ類である。口縁端部外面には横ナデを施す。106は押引沈線文による区画内に短直線文を充填する。110・111は胴上部片であり、連弧文を施す。104は装飾把手と思われる。粘土紐で縁取りし、工具Ａによる押引沈線文で渦巻文を施す。105は口縁部に工具Ａ(Ｂ・Ｃ)による区画文、その直下に工具Ｄによる横位連続刺突文、胴部に縦位と斜位の短直線文を施し、口縁部と胴部の境を沈線文で区切る。113・114は脚台部である。113は隆帯と沈線により渦巻文を配置する。また、穿孔の上端が確認できる。114は隆帯による区画内に円形若しくは楕円形の透孔がある。

包含層（119～123）　いずれも縄文土器深鉢である。119はＢ類で、口縁部に１条の沈線文を施し、直下に幅広で扁平な隆帯を貼り付ける。内面は先端の丸い工具を用いて横ナデを施す。120は波状口縁を呈し、口縁端部を粘土紐で縁取りし、内部に渦巻文を配置する。123は今回の調査で出土した土器の中で、唯一縄文中期中葉に属する。隆帯上に工具Ｄにより連続刺突文を施す。

SB４（１～29）

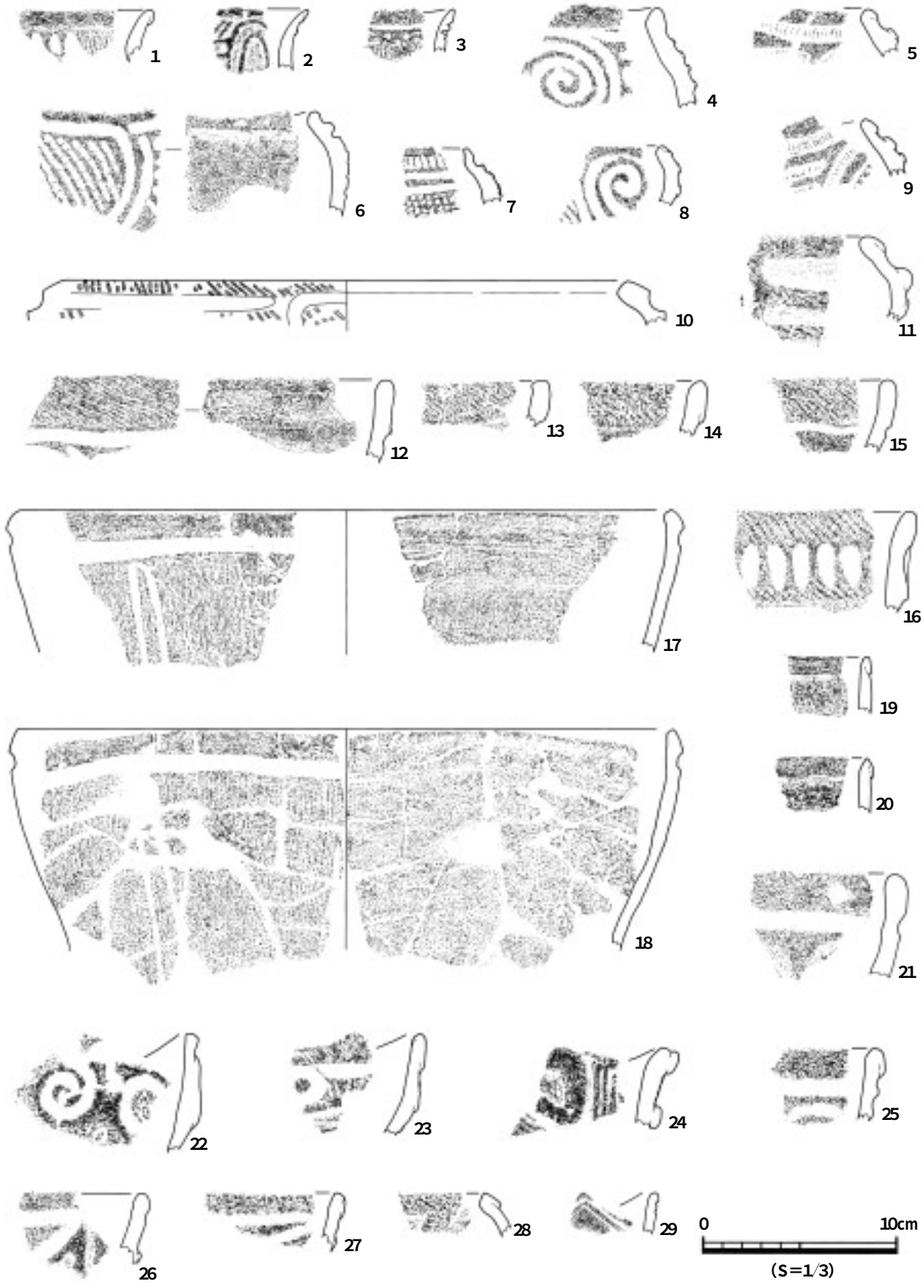


図31　縄文時代の遺構出土遺物（１）

SB４（30～54）

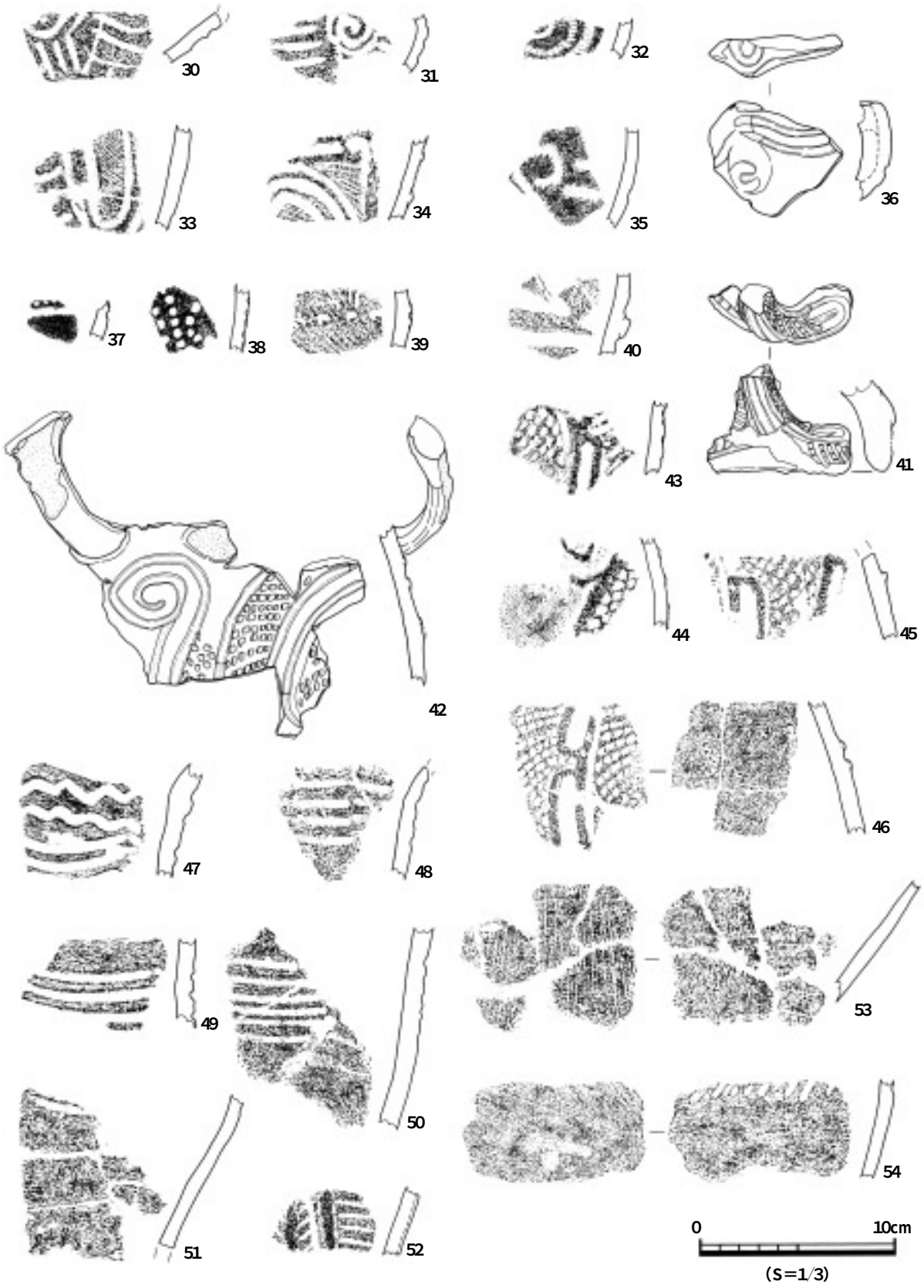


図32　縄文時代の遺構出土遺物（２）

SB４（55～63）

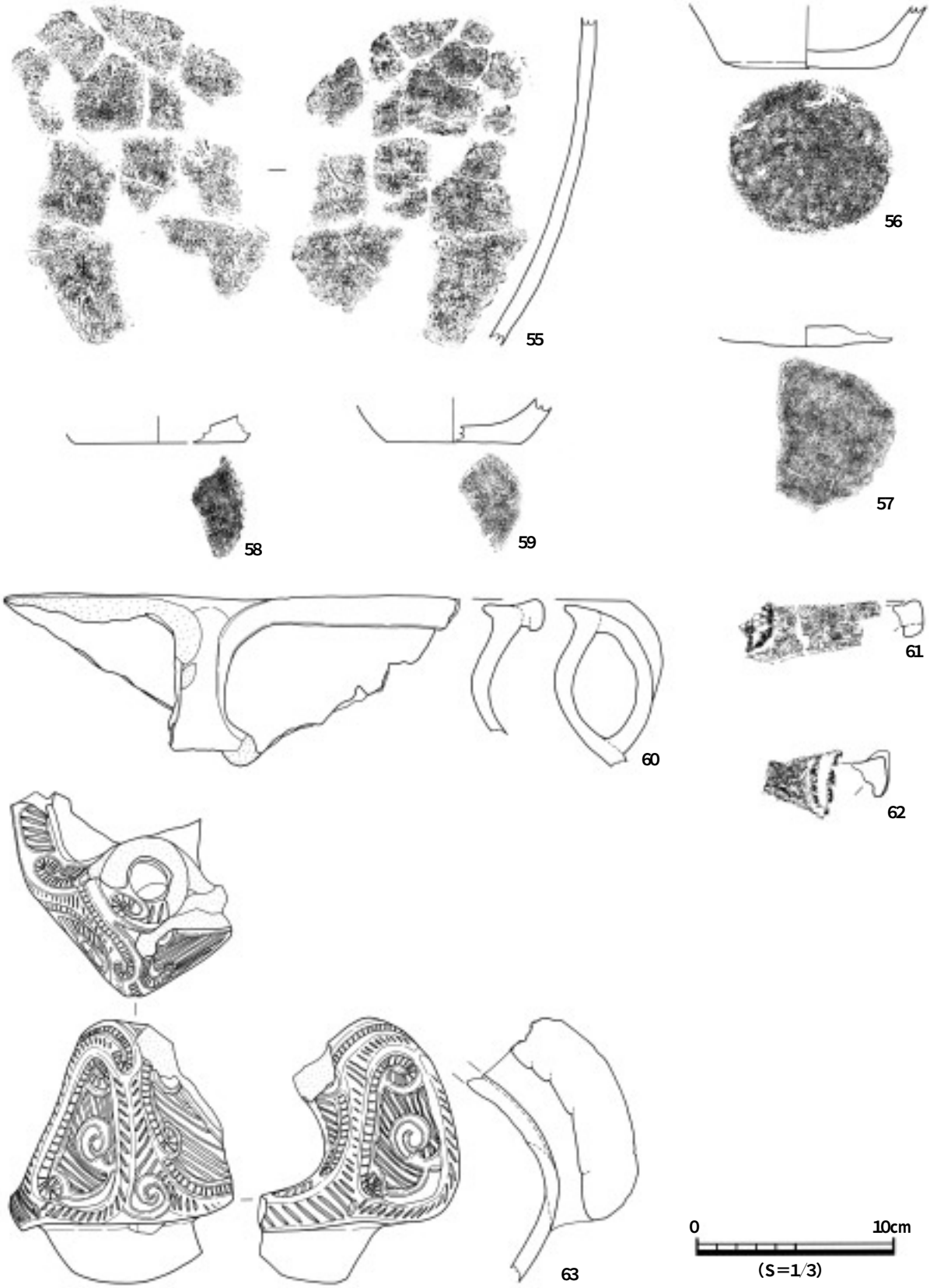


図33　縄文時代の遺構出土遺物（３）

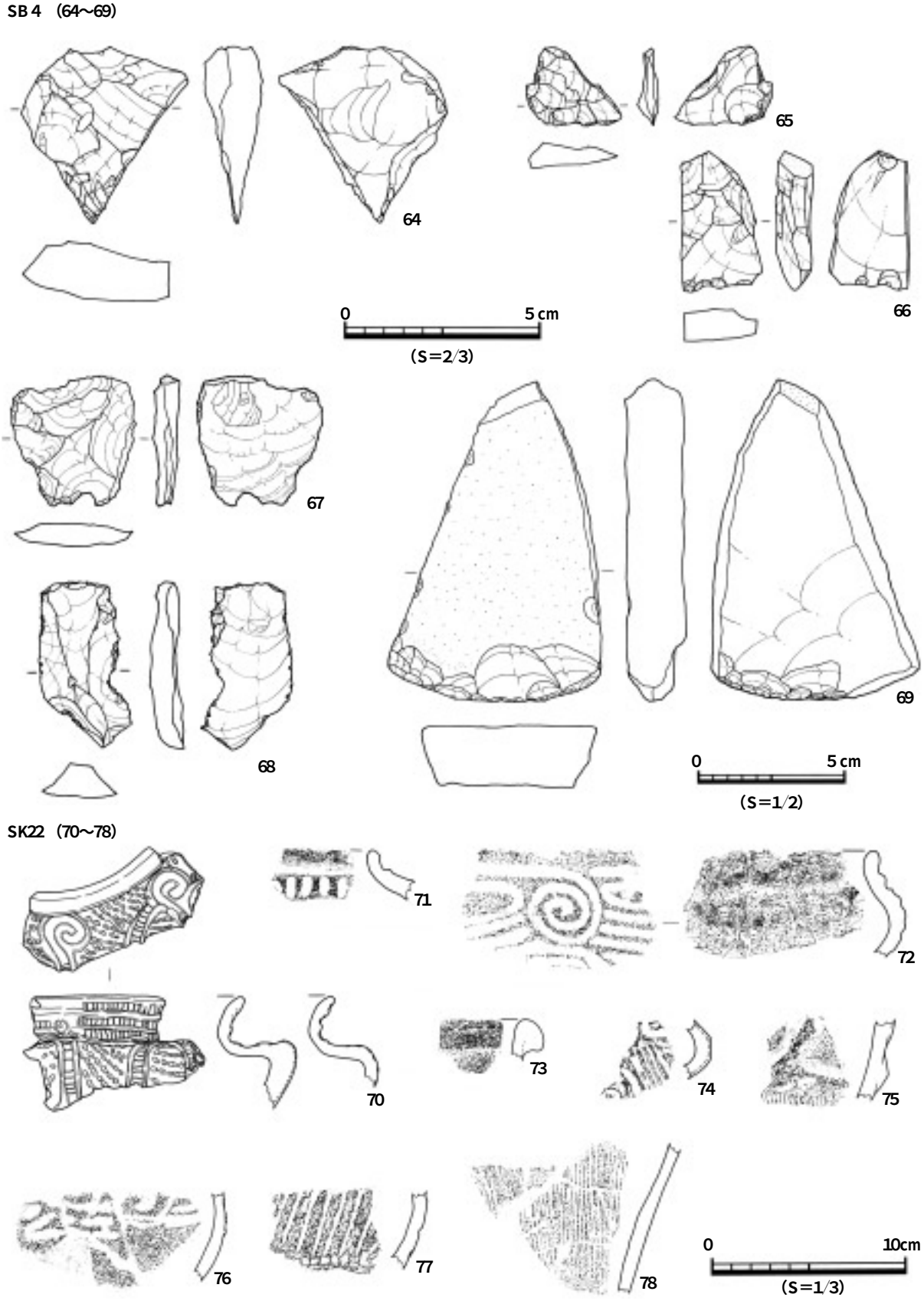


図34　縄文時代の遺構出土遺物（４）

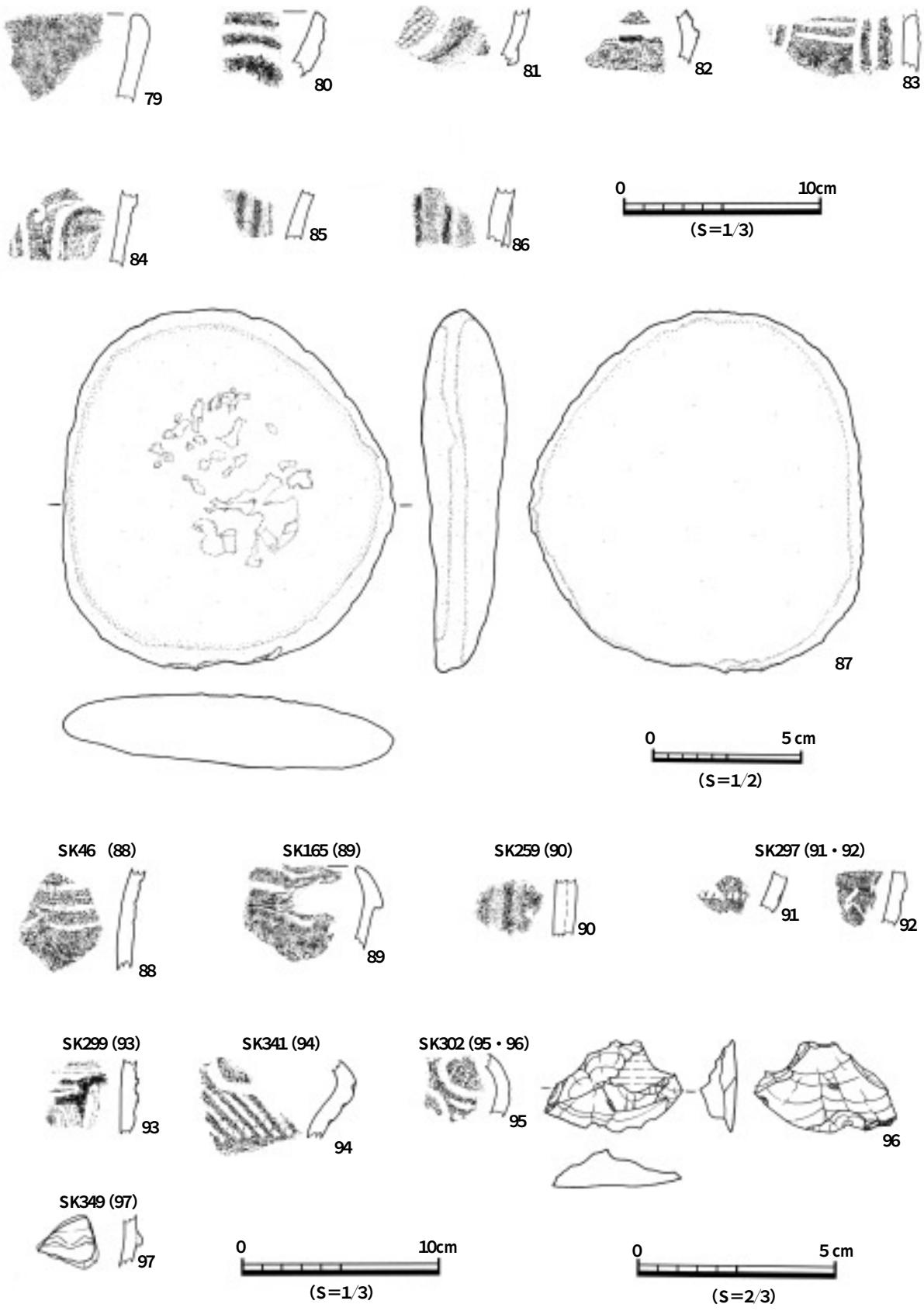


図35　縄文時代の遺構出土遺物（５）

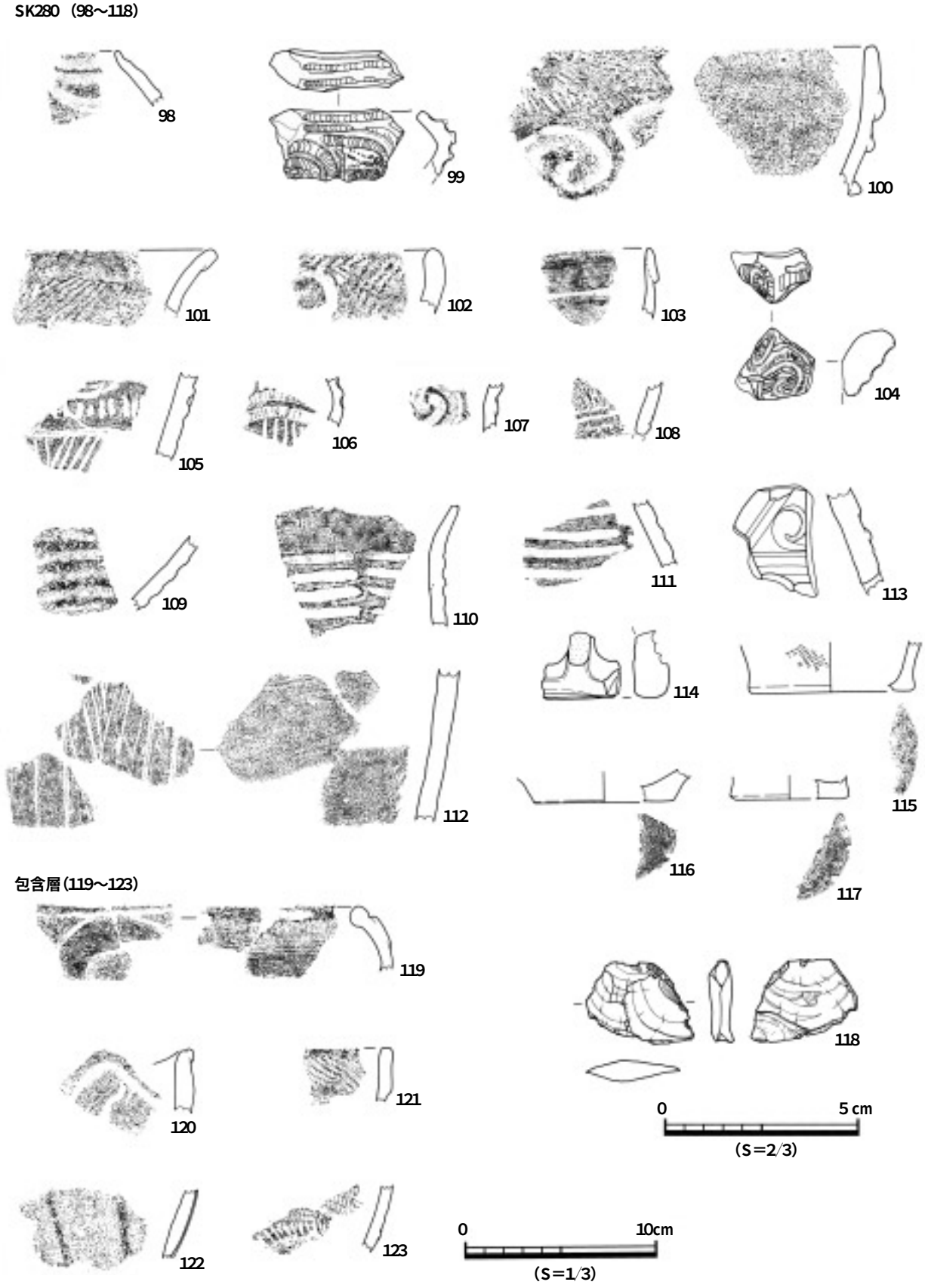


図36　縄文時代の遺構・包含層出土遺物

第４節　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構として、竪穴住居跡３軒（柱穴37基、土坑２基、焼土１基を含む）、掘立柱建物跡２棟（柱穴13基で構成される）、柱列１列（柱穴９基で構成される）、方形周溝墓３基、土坑25基を検出した。本節では竪穴住居跡と掘立柱建物跡、柱列、方形周溝墓、土坑４基の平面図と土層図を提示し、残りの土坑21基は土層図の記録を残した遺構のみ土層図を提示する（平面図は図75参照）。

弥生時代の遺構は、ほぼ調査区全域で検出した（図37）。掘立柱建物跡は調査区中央付近の平坦面に、竪穴住居跡は主に斜面に、方形周溝墓は平坦面に、それぞれ位置している。弥生時代と断定できる土坑は縄文時代と比較して少なく、その分布も散在している。SB２とSH１、SZ３とSH１はそれぞれが重複しているので、後期から終末期の間に少なくとも２～３回の土地利用の変遷が想定できる。

各遺構の分類毎の数量は表８のとおりである。平面形は円形状のもの（a）と楕円形状のもの（b）が多いが、縄文・弥生時代の時期の特定ができない遺構（以下「縄文～弥生時代の遺構」とする）では楕円形状のものが多い。底部断面は丸いもの（A）と平らなもの（B）が多く、縄文～弥生時代の遺構でも同様の傾向がある。土の堆積状況は、単層のもの（１）が目立つ。

弥生土器は接合前破片数が1158点、接合後破片数が820点であり、338点が接合した。1158点のうち、

図37　弥生時代の遺構位置図

表８　弥生時代の遺構分類毎の数量

時　代	遺構種類	平面形				底部断面			堆積状況				
		a	b	c	d	A	B	C	1	2	3	4	5
縄文時代	SB			3			3			3			
	P	21	30		8	31	26	2	22	12	15	5	5
	SK	10	13		2	11	11	3	10	5	6	4	
	SC	1				1				1			
	SD					11			5	2	4		
縄文～弥生時代	SK	52	126	1	17	82	88	26	95	25	46	22	8
合　計		84	169	4	27	136	128	31	132	48	71	31	13

まとまって出土した土器を１点として座標を与えて取り上げ、合計477点のドットマップ（図38）を作成した。その結果、弥生土器が面的に広がるのは調査区中央から西斜面にかけてであり、縄文土器の分布が空白となっている箇所に弥生土器が多く分布する傾向がある。他にSB１とSZ１にドットが集中している。土器の接合状況は、同一遺構内ではSB１が圧倒的に多く、遺構外接合が認められたのはSB１とSB４、SB１とSK177とSZ３、SK51とSK155の３個体である。大半の他の接合土器は、同一の取り上げ地点の接合である。

石器は93点出土し、縄文土器と同様の方法で取り上げ、合計45点の分布図（図39）を作成した。分布は、SB４とSB１（弥生時代）の２箇所に集中し、他は極めて希薄である。なお、縄文時代と弥生時代の石器の識別ができないので、図39では出土した石器をすべて掲載している。

以下、「１竪穴住居跡」、「２掘立柱建物跡」、「３柱列」、４「方形周溝墓」、「５土坑」、「６溝」の順に遺構を説明し、「７出土遺物」として遺構毎に出土遺物の説明を記載する。

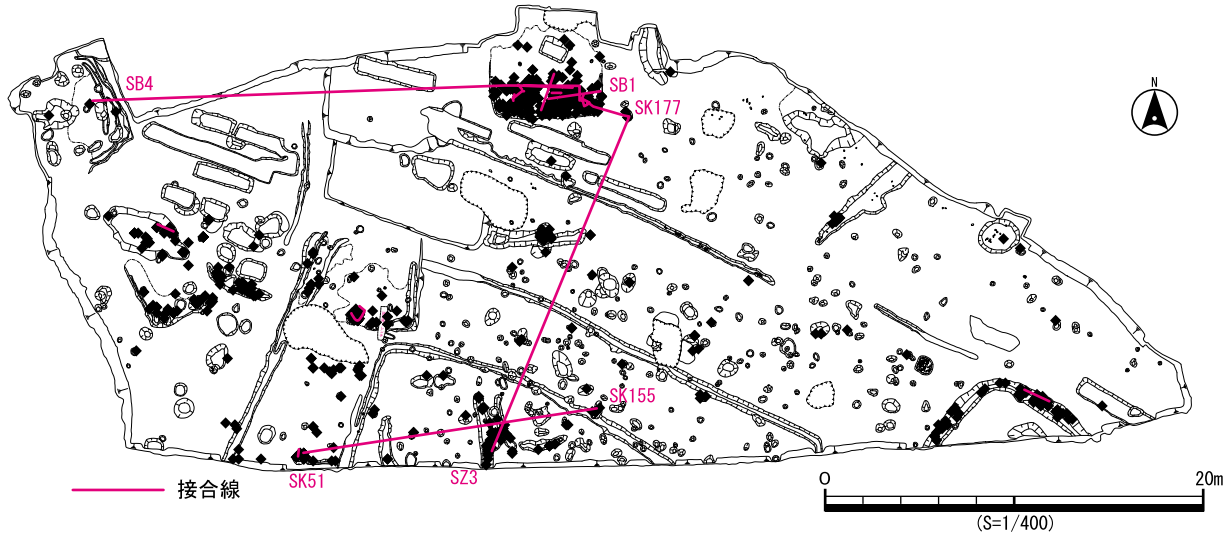


図38　弥生土器の出土位置図

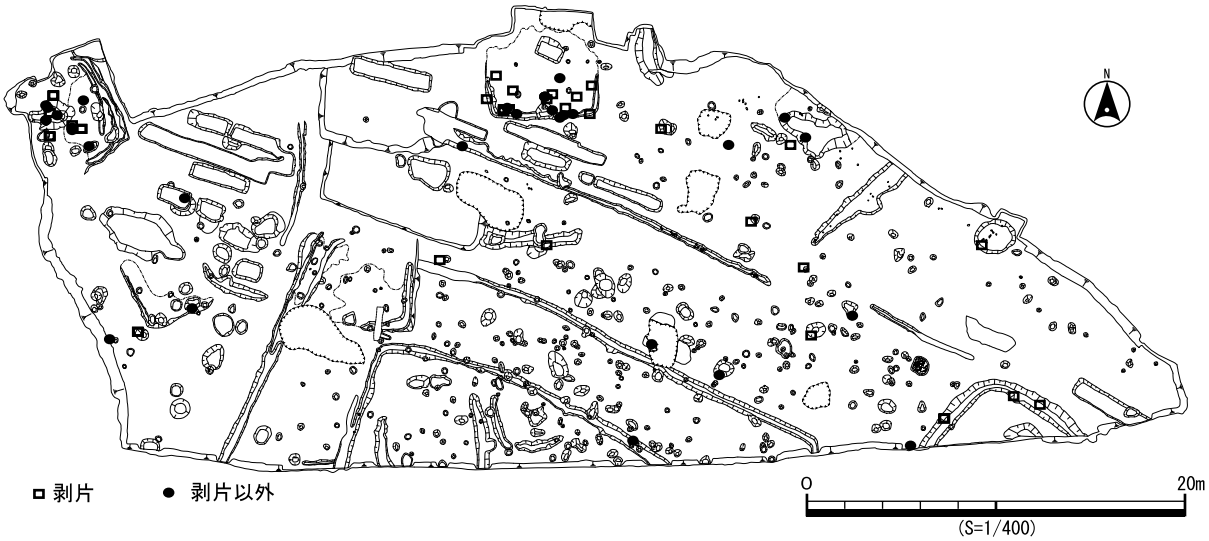


図39　石器の出土位置図

１　竪穴住居跡

SB１（図40～43）

検出状況　Ａ５～Ｂ７グリッドで検出し、検出時に土器片が多数出土していた。南側のプランは明瞭であったが、北側は漸移的に不明瞭となる。これは、本遺構が斜面に位置するため、埋土及び遺構が流失したためと思われる。確認した平面形は方形であるが、柱穴の位置から東西に長い長方形であったと想定され、図40で破線で示した貼床範囲の北端が、竪穴住居跡の北端に近いと思われる。

埋土　基本的に水平堆積であり、どの層位にも地山とした褐色粘土ブロックが入り込んでいる。ブロックの量や大きさに差があることから、人為的に埋められた可能性も考えられる。

壁　南西隅の残りがよく、北東に向かうにつれ残りが悪くなる。南西隅では検出面から0.38m掘り込んでおり、壁面は傾斜している。

床　ほぼ全面にわたり貼床が確認できた。貼床の粘土はきめ細かく、しまりがある。床面については東西方向はほぼ水平であるが、南北方向は南側が平坦で北側が地形に沿って傾斜している。

主柱穴　床面では７基の小穴を検出し、そのうちＰ１～４が主柱穴と考えられる。Ｐ１～４の深さの平均値は0.32ｍと深いが、遺構埋土にしまりがなく、柱痕跡も確認できなかった。柱間距離は心々でＰ１－Ｐ２が2.68m、Ｐ２－Ｐ３が1.60m、Ｐ３－Ｐ４が2.78m、Ｐ４－Ｐ１が1.55mであり、長軸は短軸の約1.7倍の長さである。Ｐ５～７の深さの平均値は0.07ｍと浅く、その性格は不明である。なお、SK370内にも柱穴状の掘り込みがあるが、柱痕跡は確認できなかった。

土坑　南壁中央付近にSK370を検出した。検出面は不定形のプランを呈するが、底面は長方形の平坦面を有する。埋土は竪穴住居跡の埋土と連続しているため、竪穴住居と土坑は同時存在の可能性が高い。また、SK370直下の柱穴状の遺構は埋土の堆積状況より少なくともSK370機能時には埋没していたと思われる。なお、床面北側に位置するSK103は近世～近代の遺構である。

周溝　西壁南寄り、南壁、東壁南寄りにて検出した。最大幅0.44m、深さ約0.05ｍを測り、断面形は三角形状から皿状を呈する。埋土は基本的に単層であり、竪穴住居跡全体の埋土と同一である。貼床上面より掘り込まれており、底面に小ピットなどの特筆すべき遺構は検出できなかった。

炉　床面中央東寄りで、長軸0.60m、短軸0.45ｍの範囲内に焼土を検出したため地床炉と判断した。焼土の堆積は約0.05ｍであり、炉石及び抜き取り穴は確認できなかった。なお、炉を出入り口から離れた場所に構築するという概念を用いれば、本遺構の出入り口は西壁にあったといえる。西壁が残存しているにも関わらず周溝が西壁中央付近で途切れていることは、出入り口などの施設と関連するかもしれない。

出土遺物　縄文土器124点、弥生土器470点、石器29点、近世～近代陶磁器１点が出土した。遺物分布（図43）は、縄文土器、弥生土器、石器ともに住居跡の南側に集中し、北側はわずかである。また、出土標高にも偏りがみられない。遺構内では弥生土器の数点がやや距離をおいて接合している。その標高は、床面直上のものや埋土中のものなど様々である。別遺構の出土遺物と接合できた破片は縄文土器１個体（接合場所Ｄ８グリッドⅡ層）、弥生土器１個体（接合場所SB４、SZ３－SD４、SK177）であった。弥生土器の器種別分布では、壺が住居跡全体に広がるのに対し、甕は周縁部の分布が希薄である。また、SK370内には甕がなく、壺と高杯のみ出土している。

主要遺物の出土位置（図42）は、北壁付近に偏る傾向がある。特に、広口壺（128）、器台（137）、

直口鉢（132）、石包丁（150）、砥石（152～154）などは北壁東寄りからの出土が目立ち、遺物廃棄時に何らかの規制があったのかもしれない。

時期　縄文土器と弥生土器が出土しているが、主柱穴出土の遺物がすべて弥生土器であることから弥生時代と判断でき、土器様式より弥生時代後期～終末期(山中Ⅱ式～廻間Ⅰ式併行期)と考えられる。

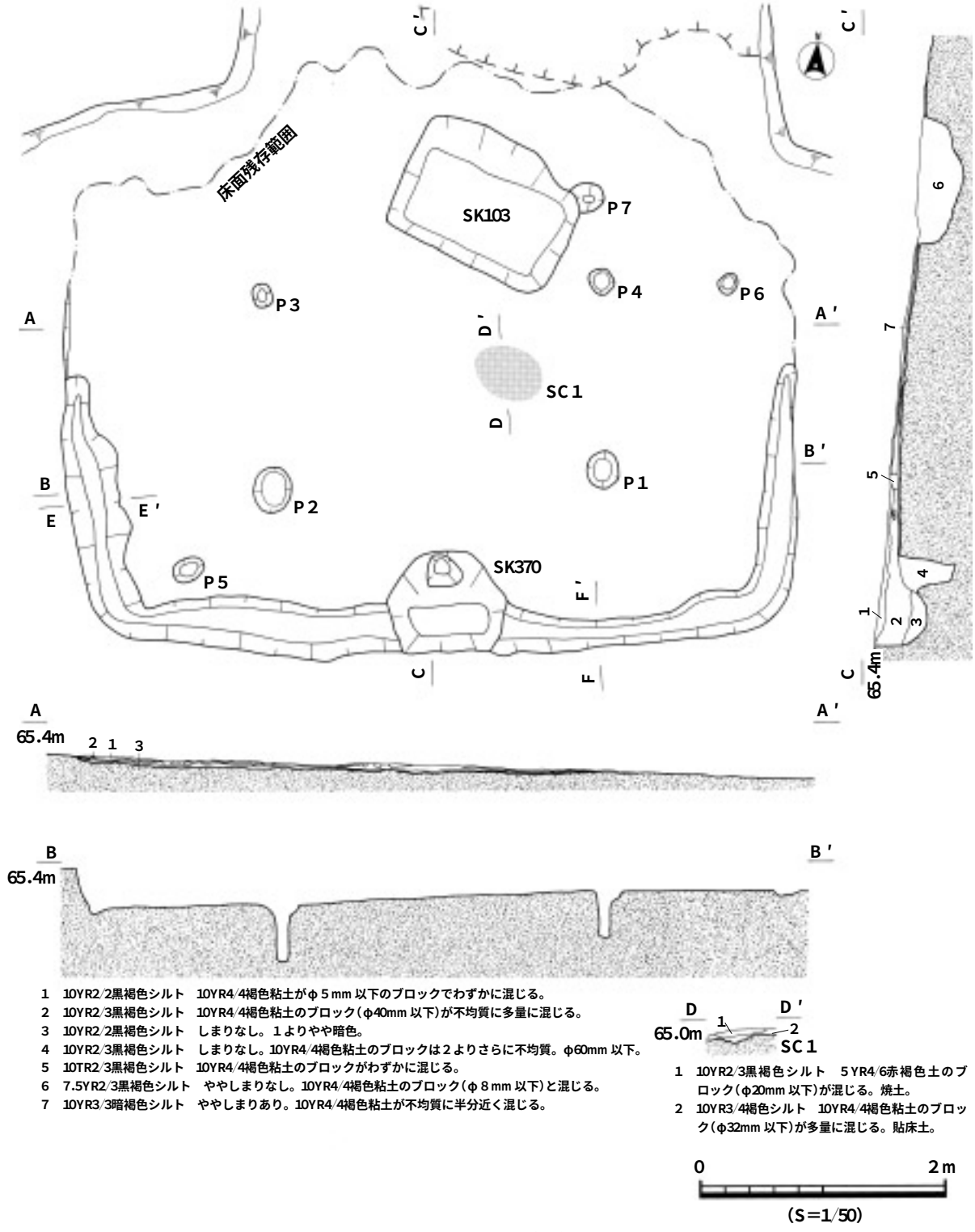


図40　SB1（1）

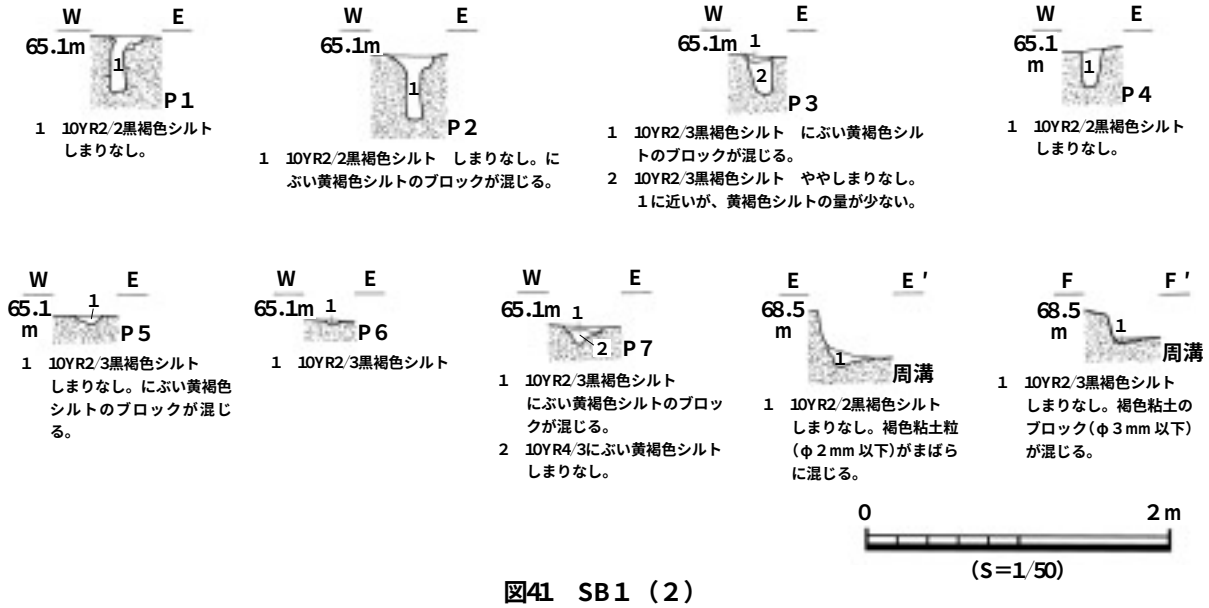


図41　SB１（２）

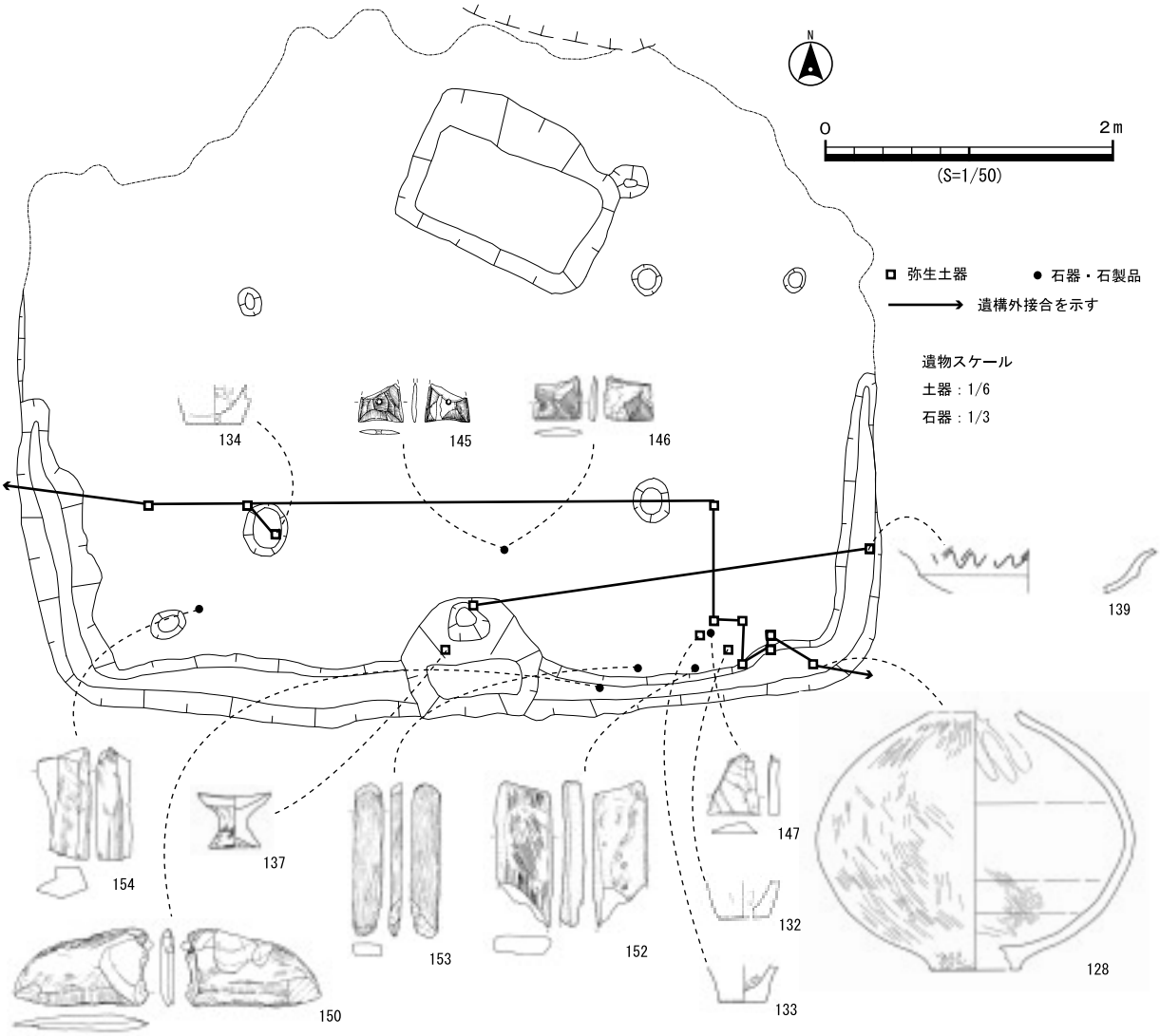


図42　SB１主要遺物出土位置図

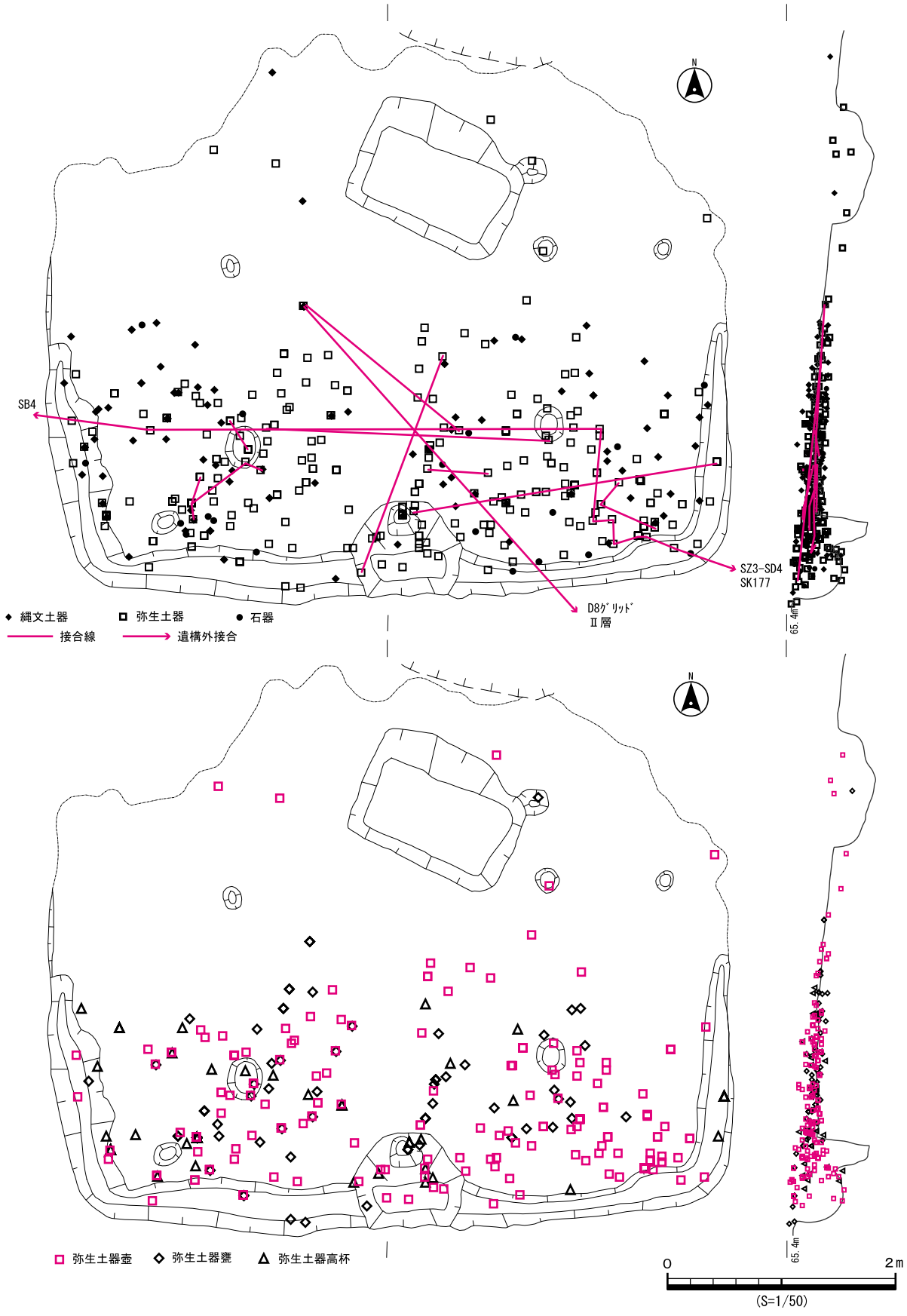


図43　SB１遺物出土位置図・接合図

SB２（図44～47）

検出状況　Ｃ３～Ｄ５グリッドで検出した。試掘確認調査時に南東隅の周溝を確認していたため、最初に試掘坑の土層を確認してから、全体の検出作業を実施した。北西隅と南東隅は竪穴住居跡の埋土がわずかに残っていたが、中央付近はⅠ層直下で床面が確認できた。北西隅を竪穴住居跡のコーナーとすると、東西にやや長い長方形を呈する住居跡といえる。また、検出時の段階でSD10・11、SK55のプランは竪穴住居跡の埋土上面にて明確に確認でき、その埋土が異なるため近世～近代の遺構と判断した。一方、南壁付近ではSH１を構成する柱穴であるP44が竪穴住居跡の周溝底面で検出したため、SH１廃絶後にSB２が構築されたことが判明した。南西隅は現代の攪乱により破壊されている。

埋土　基本的に水平堆積である。

壁　北西隅のみ確認でき、検出面から0.20m掘り込んでいる。壁面は比較的傾斜している。

床　ほぼ全面にわたり貼床が確認できた。床面は東西方向はほぼ水平であるが、南北方向は南側が平坦で北側が地形に沿ってわずかに傾斜している。

主柱穴　床面では19基の小穴を検出し、そのうちＰ８～11が主柱穴と考えられる。Ｐ８～11の深さの平均値は0.39mと深いが、埋土は単層で柱痕跡は確認できなかった。柱間距離は心々でＰ８－P11が3.10m、P11－Ｐ９が3.38m、Ｐ９－P10が3.05m、P10－Ｐ８が3.40mであり、東西方向にやや長い配置である。他の小穴の深さの平均値は0.13mと浅く、柱痕跡が残るものはない。

土坑　南壁中央付近にSK１を検出した。埋土は２層に分けられ、２層上面から土坑底面にかけて弥生土器がまとまって出土した。土器の接合率は比較的高かったが、完形に復原できる個体はない。また土器はいずれも横位で出土しており、意図的に置かれた可能性は低い。出土した器種の内訳は、甕29点、壺10点、高杯10点であり、甕の比率がやや高い。

周溝　南東隅で検出したが、埋土の残りのよい北西隅では確認できなかった。最大幅0.70m、深さ約0.05mを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は基本的に単層であり、竪穴住居跡全体の埋土と同一である。貼床上面より掘り込まれており、底面に小ピットなどの特筆すべき遺構は検出できなかった。

炉　確認できなかった。しかし、中央付近に位置するP76は他の小穴と違い暗褐色の埋土で楕円形状であるため、炉石の抜き取り穴、若しくは炉に関連する穴の可能性もある。

出土遺物　縄文土器１点、弥生土器90点が出土した。遺物分布（図47）は住居跡の埋土が残っていた北西隅、南東隅とSK１周辺にみられる。SK１内において土器が接合しているが、他では接合関係を確認できず、遺構外の遺物とも接合していない。器種別の分布の特徴として、高杯がSK１と周溝のそれぞれの底面からしか出土しておらず、住居跡埋土からの出土がないことが挙げられる。

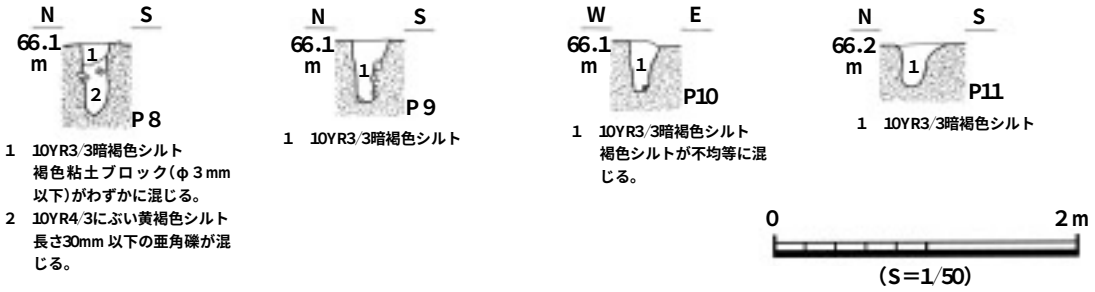
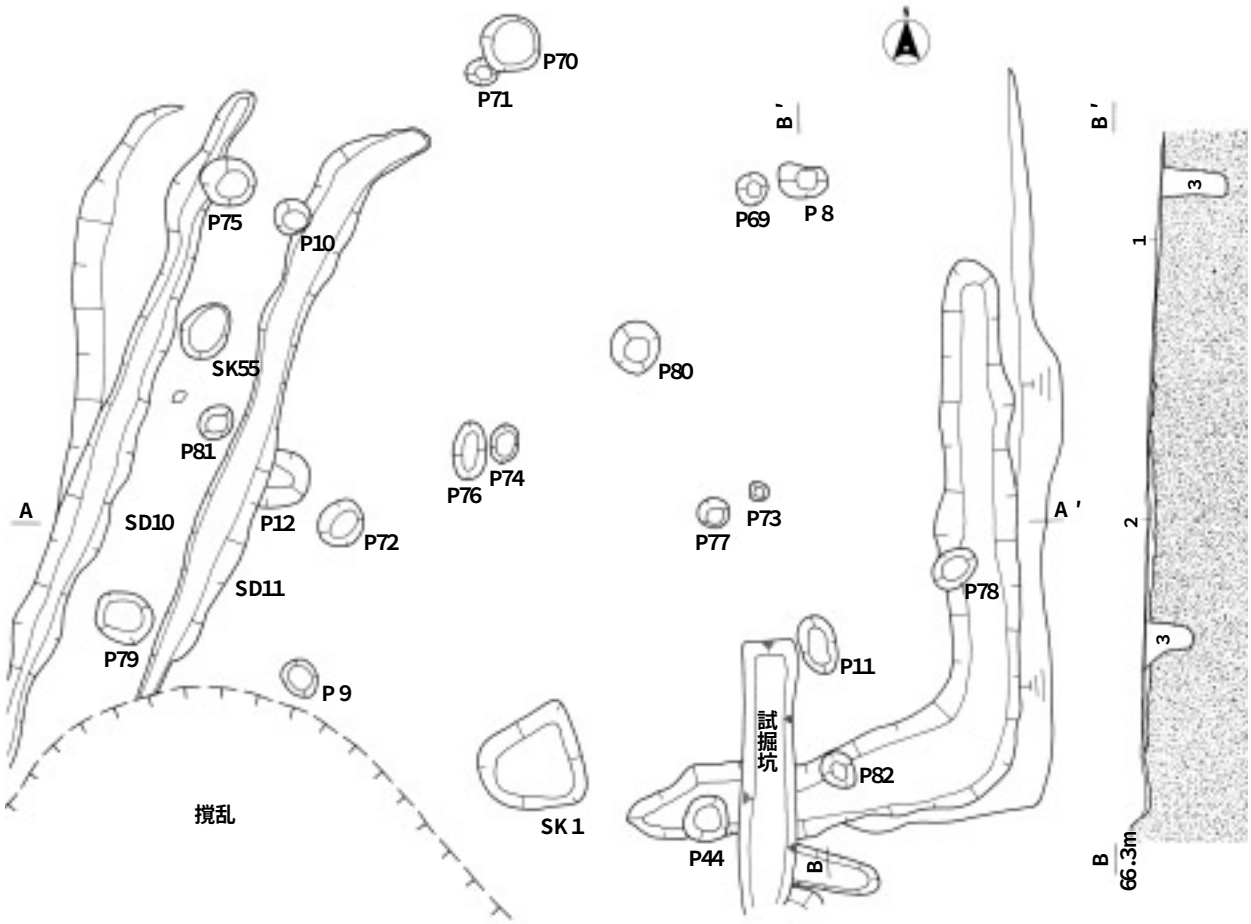


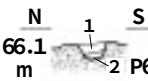
図44　SB２（１）



1　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土が不均等に混じる。
2　10YR3/4～4/6褐色シルト　ややしまりあり。
3　柱穴の埋土
4　近現代の溝埋土

1　10YR2/3黒褐色シルト
2　10YR3/4暗褐色シルト

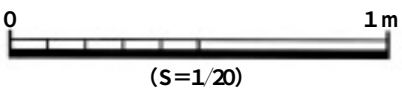
1　10YR3/4暗褐色シルト
2　10YR4/4褐色シルト
　しまりあり。
3　7.5YR3/2黒褐色シルト
　しまりなし。



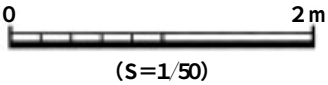
1　10YR3/3暗褐色シルト
　褐色粘土がφ２mm 以下の粒状に混じる。
2　10YR4/4褐色シルト

1　10YR3/4暗褐色シルト
2　10YR3/3暗褐色シルト
3　10YR3/4暗褐色シルト
　１より10YR4/4に近い。

1　10YR3/3暗褐色シルト
　褐色粘土ブロック（φ15mm 以下）が多く混じる。
2　10YR3/4暗褐色シルト
　褐色粘土ブロック（φ10mm 以下）がわずかに混じる。



（S＝1/20）



（S＝1/50）

図45　SB２（２）

時期　縄文土器と弥生土器が出土しているが、弥生土器が圧倒的に多いため本遺構の時期は弥生時代と判断でき、土器様式より弥生時代後期（山中Ⅱ式前半併行期）と考えられる。

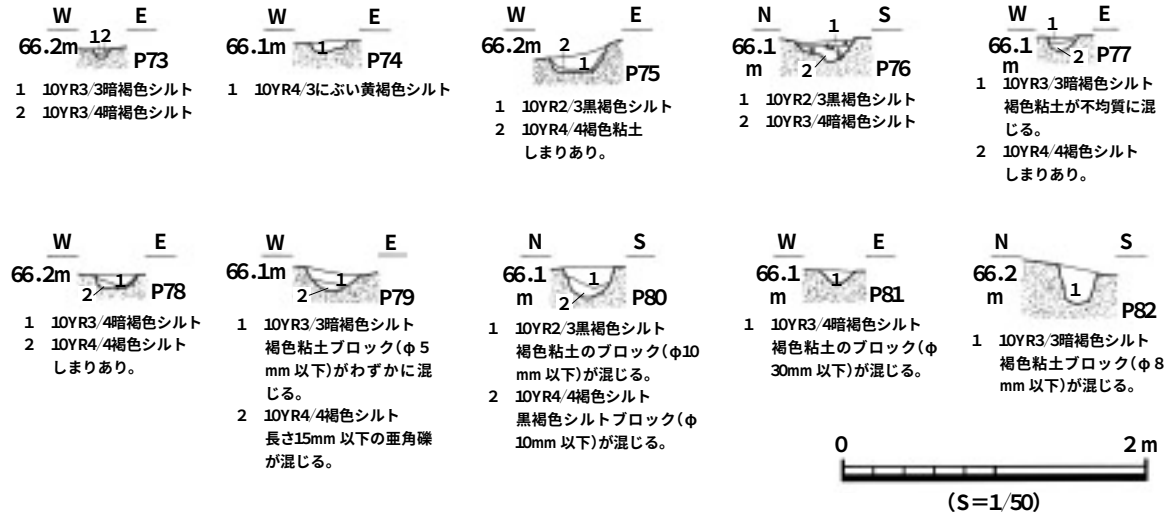


図46　SB２（３）

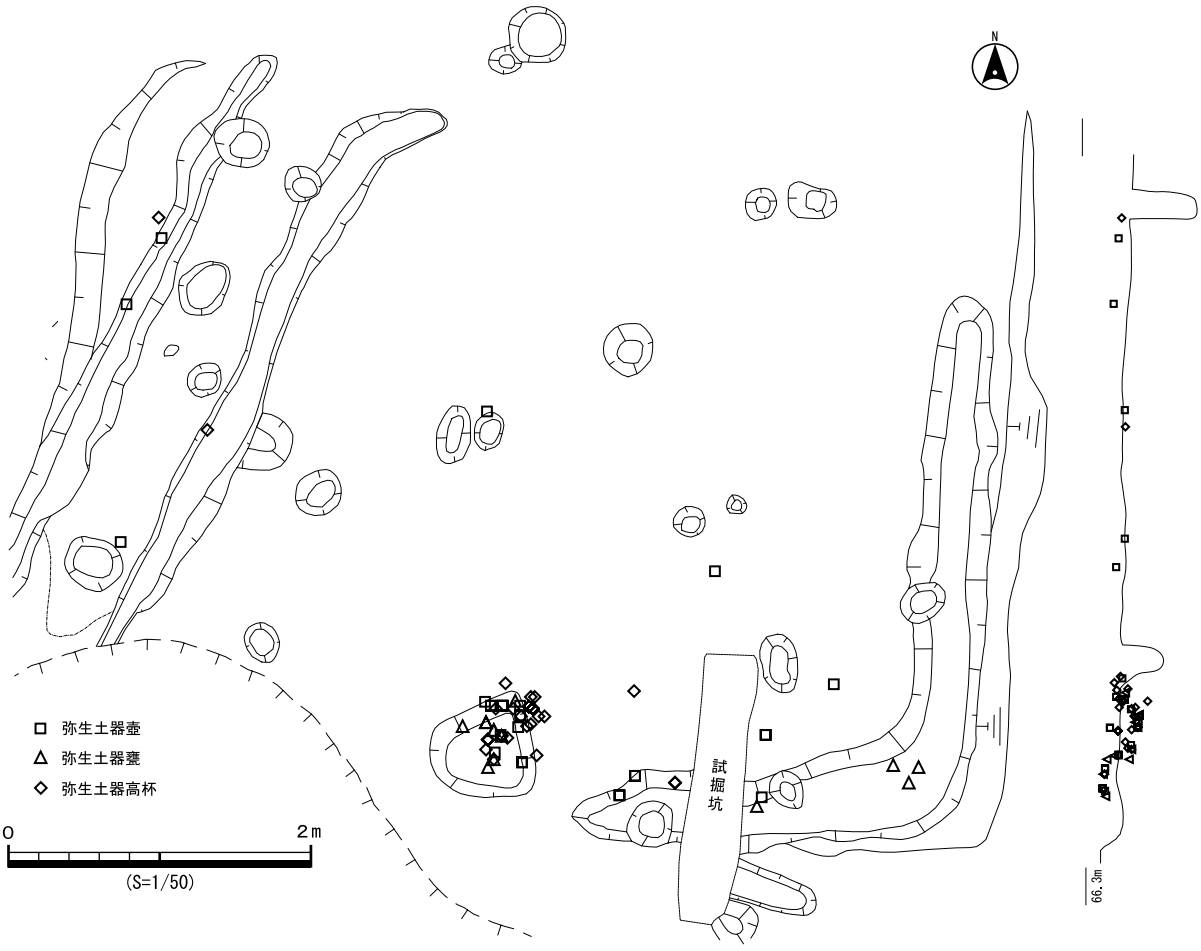


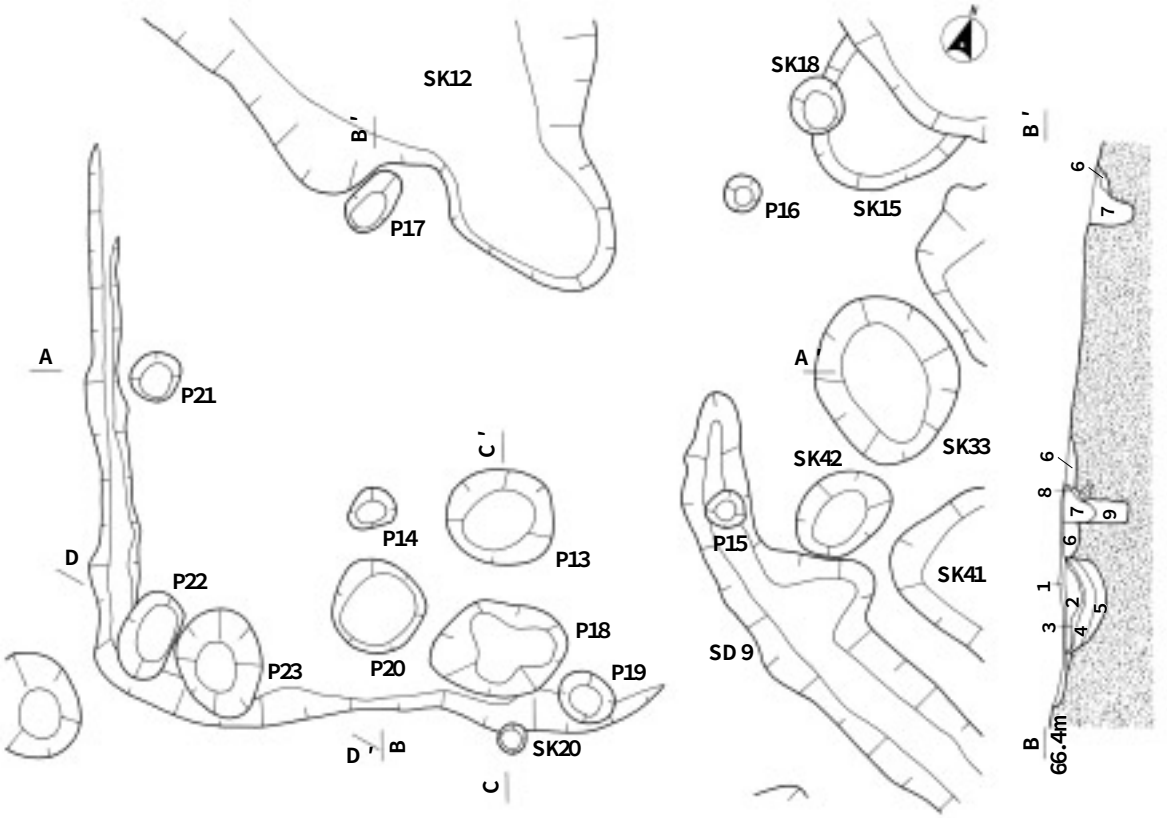
図47　SB２遺物出土位置図

SB３（図48・49）

検出状況　Ｃ２～Ｄ２グリッドで検出した。南西隅は竪穴住居跡の埋土がわずかに残っていたが、他はＩ層直下で床面が確認できた。主柱穴と壁までの距離から判断して、南西―北東に長い長方形を呈する住居跡といえる。

埋土　残存部が少ないことから、堆積状況は不明である。

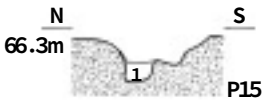
壁　南西隅のみ確認でき、検出面から0.12m掘り込んでいる。壁面はわずかに傾斜している。



1　10YR2/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ10mm 以下）が混じる。
2　10YR2/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ５mm 以下）との亜角礫（長さ15mm 以下）が混じる。
3　10YR3/4暗褐色シルト　しまりあり。
4　10YR4/4褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ15mm 以下）が混じる。しまりあり。
5　10YR3/4暗褐色シルト　しまりあり。亜角礫（長さ15mm 以下）が混じる。
6　10YR4/4褐色粘土　７よりやや明るい。しまりあり。
7　10YR3/4暗褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ５mm 以下）が混じる。亜角礫（長さ10mm 以下）が混じる。
8　10YR4/4褐色シルト
9　10YR3/4暗褐色シルト　しまりなし。亜角礫（長さ10mm 以下）が混じる。

1　10YR3/4暗褐色シルト

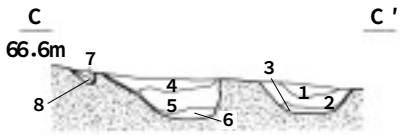
1　10YR2/2黒褐色シルト　暗褐色シルトブロック（φ12mm 以下）が混じる。
2　10YR3/4暗褐色シルト
3　10YR2/3黒褐色シルト
4　10YR4/3にぶい黒褐色シルト　３が不均等に混じる。中央部分は３の混入が少ない。



1　10YR4/3褐色シルト
亜角礫（長さ10mm 以下）が混じる。

（S＝1/50）

図48　SB３



1　10YR3/4暗褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ50mm 以下）が半分程度混じる。
2　10YR3/3暗褐色シルト　暗褐色粘土が不均等に混じる。
3　10YR4/4～６褐色シルト　亜角礫（長さ20mm 以下）が混じる。
4　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ５mm 以下）が混じる。亜角礫（長さ10mm 以下）が混じる。
5　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ５mm 以下）が混じる。亜角礫（長さ５mm 以下）が混じる。
6　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　しまりなし。亜角礫（長さ20mm 以下）が混じる。
7　10YR3/4暗褐色シルト　褐色粘土ブロック（φ５mm 以下）が混じる。
8　10YR4/4褐色粘土　しまりあり。

床　残存状況は悪いが、部分的にしまりのある粘土を使用した貼床を確認した。

主柱穴　床面では11基の小穴を検出し、そのうちP14～17が主柱穴と考えられる。P14～17の深さの平均値は0.34mと深く、埋土の大半は単層で柱痕跡は確認できなかったが、P16の底面には亜角礫が据えてあった。柱間距離は心々でP14－P15が2.32m、P15－P16が2.07m、P16－P17が2.43m、P17－P14が2.02mであり、南西－北東方向にやや長い配置である。他の小穴の深さの平均値は0.20mで、柱痕跡が残るものはない。

土坑　当遺跡における同時代の竪穴住居跡の土坑は南壁中央付近に位置しており、SB３ではP18がその位置にほぼ対応している。その埋土は３層に分けられ、土器が数点出土している。

周溝　西壁で検出したが、南壁沿いでは確認できなかった。最大幅0.32m、深さ約0.05mを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は基本的に単層であり、竪穴住居跡全体の埋土と同一である。

炉　確認できなかった。

出土遺物　縄文土器１点、弥生土器47点、石器１点が出土した。遺物分布（図49）は住居跡の埋土が残っていた南西隅とP18周辺に多い。なお、取り上げ番号の異なる遺物の接合はなかった。

時期　縄文土器と弥生土器が出土しているが、弥生土器が圧倒的に多いため本遺構の時期は弥生時代後期～終末期と考えられる。

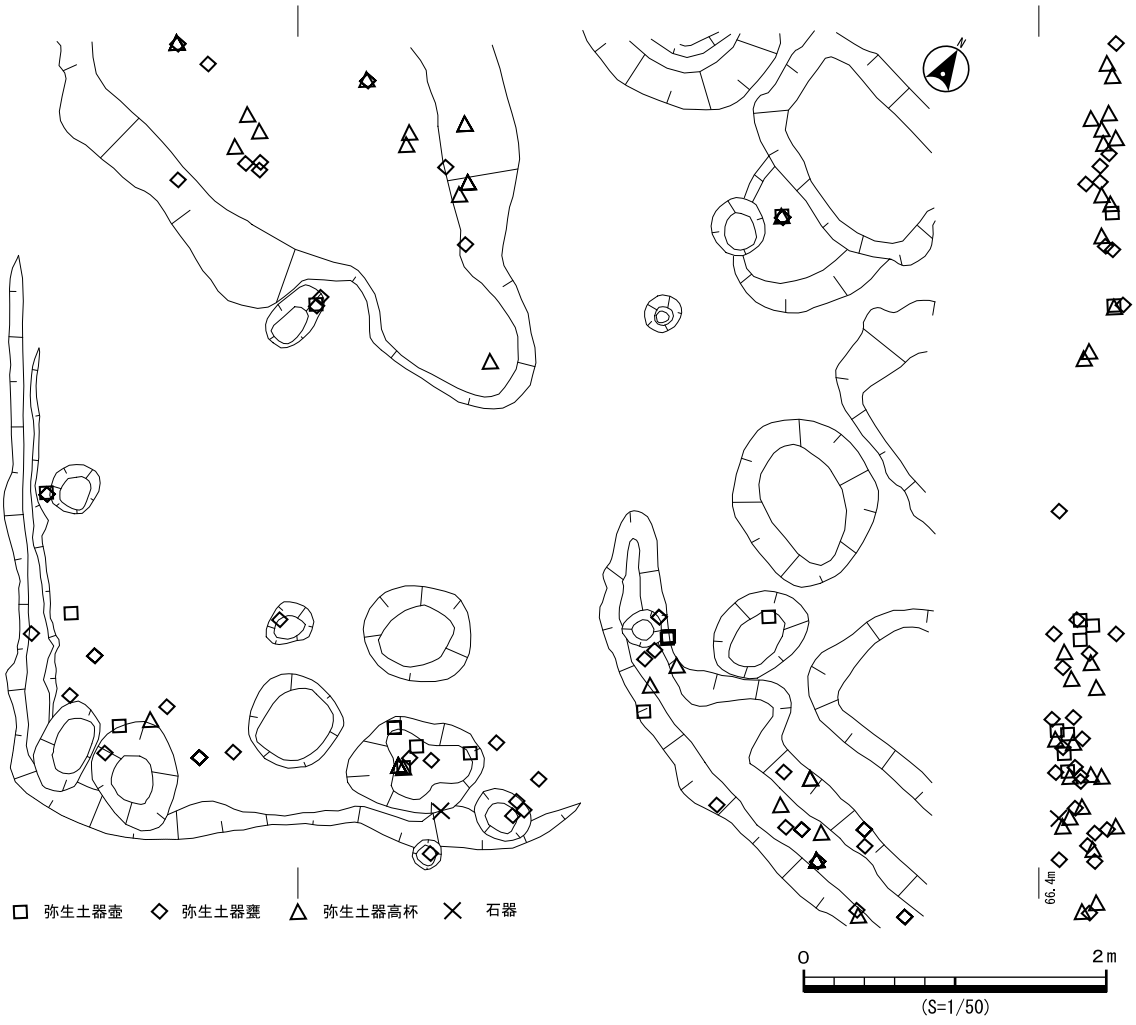


図49　SB３遺物出土位置図

２　掘立柱建物跡

SH１（図50・51）

検出状況　Ｄ４～Ｅ５グリッドで検出した。北隅のP44はSB２の周溝掘削後に検出した柱穴である。

規模　桁行２間×梁行１間の東西掘立柱建物跡であり、規模は桁行約4.44m、梁行約4.00m、床面積17.8㎡である。P41は独立棟持柱の柱穴であり、対応する西側の柱穴は現代の撹乱により破壊されている。建物跡はほぼ等高線に沿って存在している。

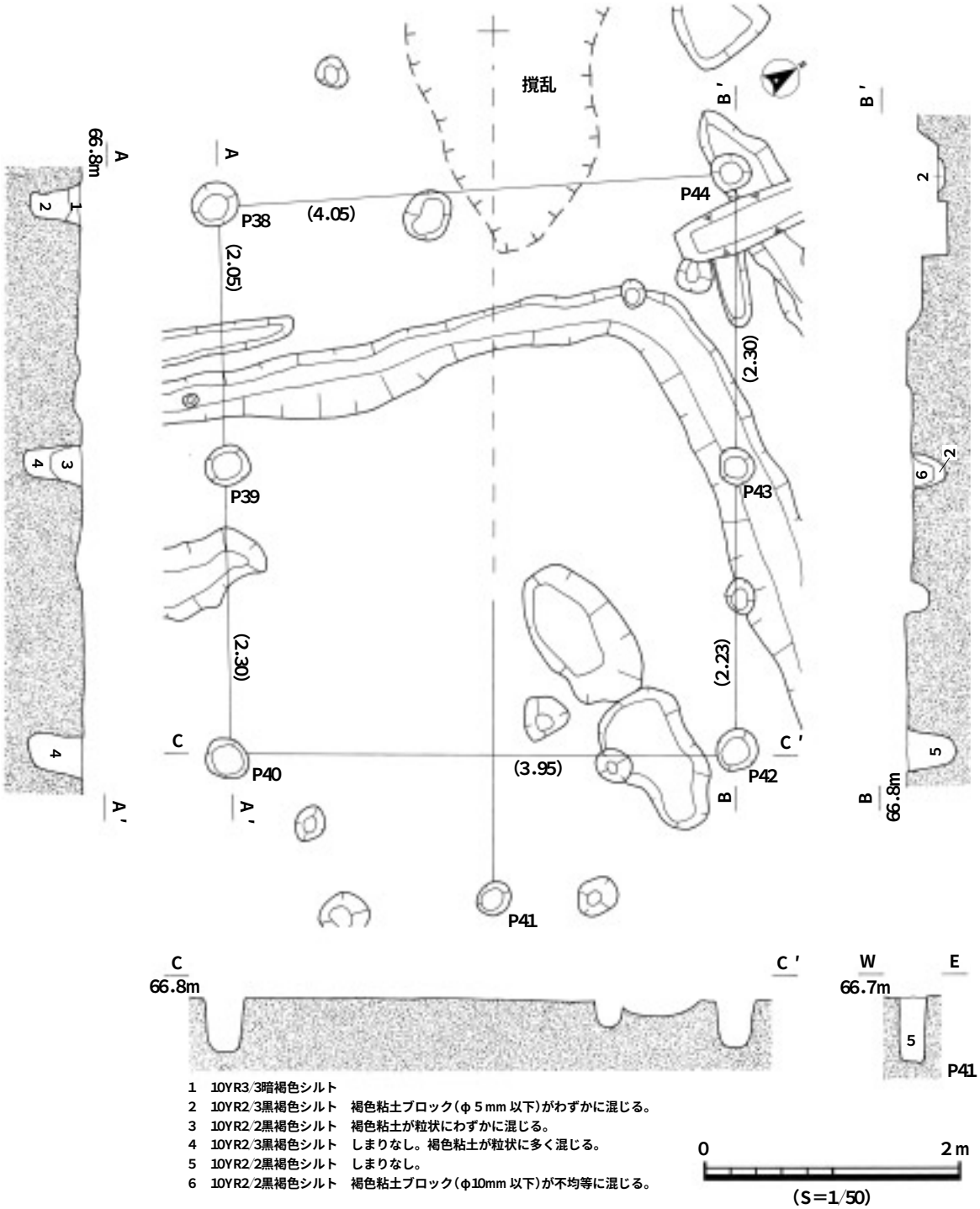


図50　SH１

柱穴　７基の柱穴から成り、その平面形はいずれも円形状で、直径約0.36m、深さ約0.33m である。埋土は単層ないしは２層に分層でき、柱穴底面において柱痕跡と思われる円形状の硬化面を確認した。桁行の柱間距離の平均値は2.22ｍである。

出土遺物　柱穴内より弥生土器５点が出土した。SH１周辺の遺物分布は、SB２と SZ２・３の出土遺物を除くと極めて希薄である。

時期　SB２との切り合い関係より、弥生時代後期（山中Ⅰ式併行期）と考えられる。

SH２（図51・52）

検出状況　C６～C７グリッドで検出した。P47は縄文時代の掘立柱建物跡である SH３を構成する柱穴（P59）を切っており、P46は現代の攪乱除去後に検出した柱穴である。

規模　桁行２間×梁行１間の南北掘立柱建物跡であり、規模は桁行約4.80m、梁行約3.10m、床面積14.8㎡である。

柱穴　６基の柱穴から成り、その平面形は P50を除いていずれも円形状で、直径約0.24m、深さ約0.33ｍである。P50の平面形は不定形であり、南東隅が最も深い。埋土は単層ないしは２～３層に分層できたが、明確な柱痕跡や柱穴底面における硬化面は確認できなかった。桁行の柱間距離の平均値は2.38ｍである。

関連遺構　SH２に関連するか否かは判断できないが、SH２の中央付近に位置する SK108から弥生土器が数点出土している。

出土遺物　柱穴内より弥生土器２点が出土した。SH２周辺の遺物分布は、SB１と SK108の出土遺物を除くと極めて希薄である。

時期　柱穴出土の土器より、弥生時代後期～終末期と考えられる。

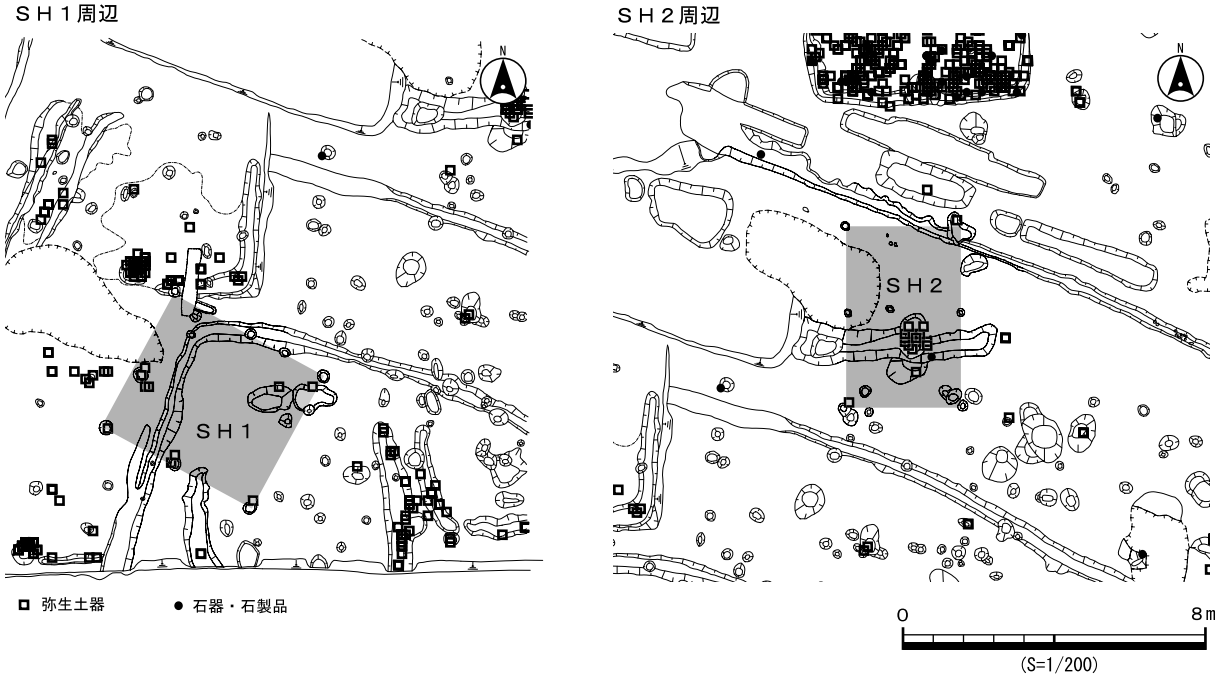
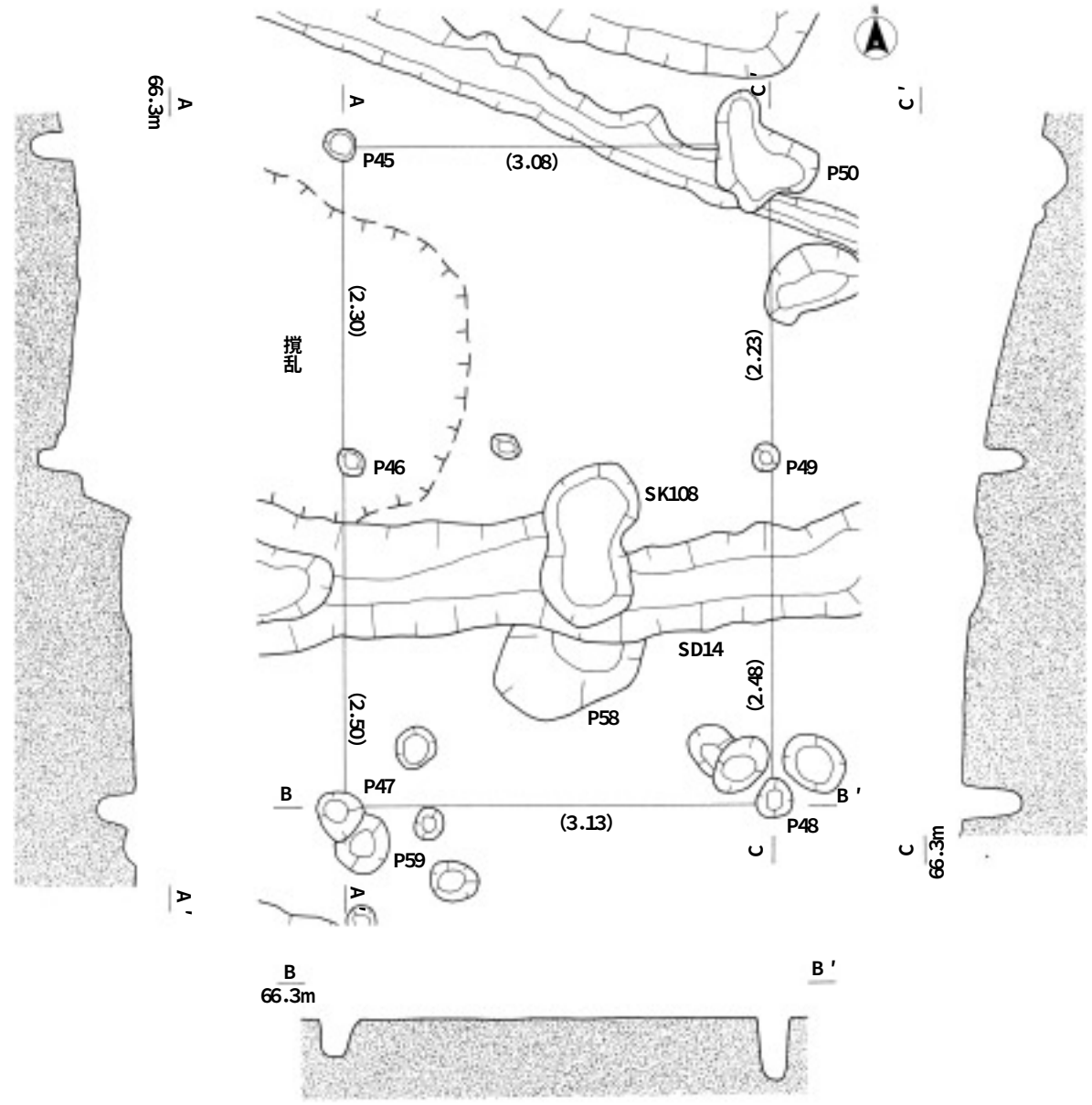
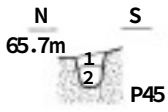
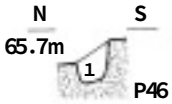


図51　SH１・２周辺遺物出土位置図

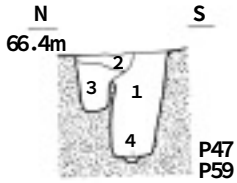




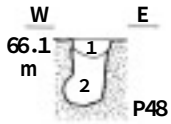
1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土がわずかに粒状に混じる。
2　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土がわずかに粒状に混じる。



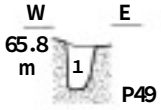
1　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土がわずかに粒状に混じる。



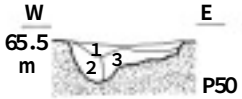
1　10YR2/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が混じる。
2　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ８mm 以下)が混じる。
3　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ30mm 以下)が多量に混じる。しまりあり。
4　10YR4/6褐色粘土　亜角礫(長さ15mm 以下)が混じる。



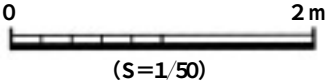
1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土が粒状に混じる。
2　10YR3/3暗褐色シルト　しまりなし。



1　10YR3/3暗褐色シルト　中央部分に暗褐色粘土(直径30mm)がブロック状に混じる。



1　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ２mm 以下)が混じる。
2　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ20mm 以下)が混じる。
3　10YR4/4褐色粘土　しまりあり。



(S＝1/50)

図52　SH２

３　柱列跡

SA１（図53）

検出状況　D８～E７グリッドで検出した。P62は近世～近代の溝であるSD18底面で検出した。

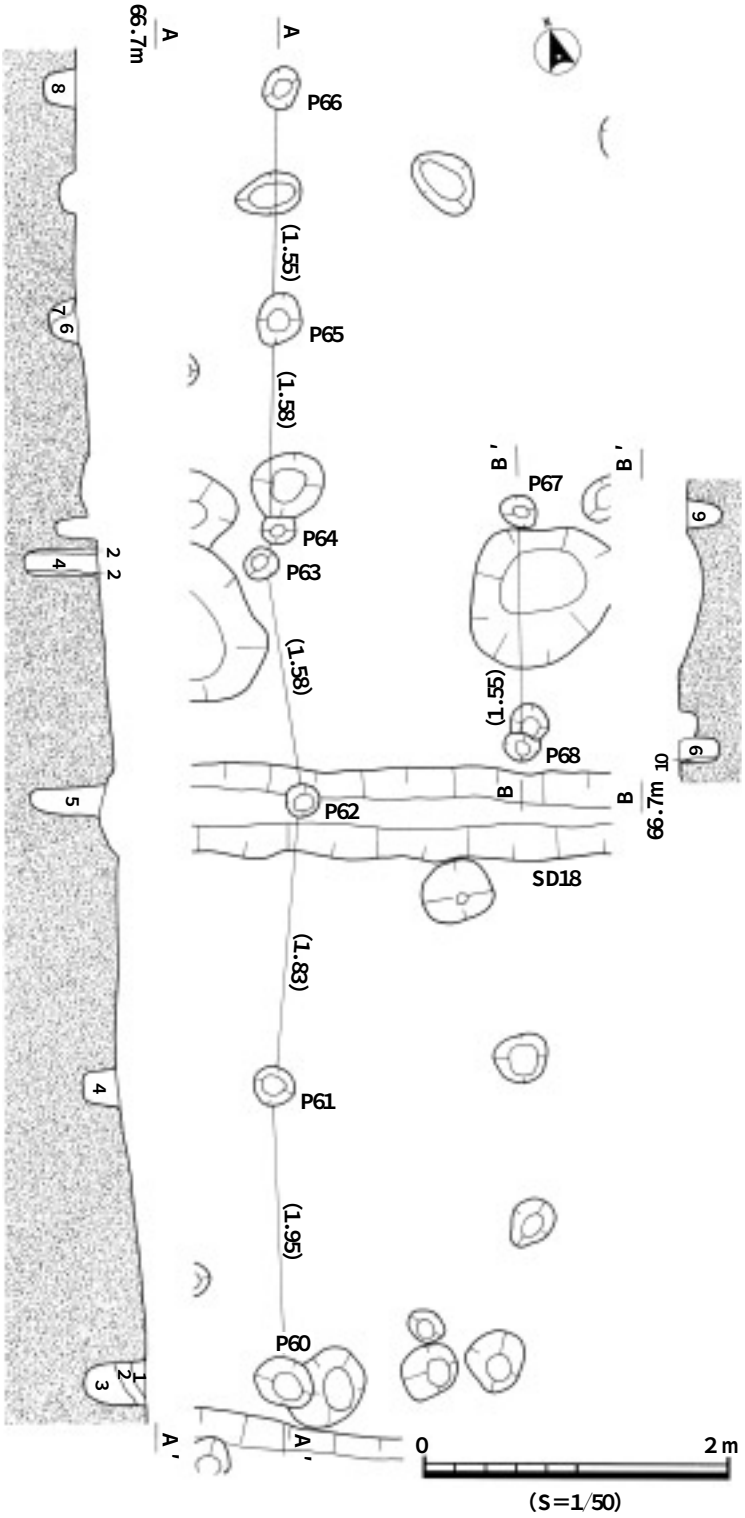
規模　柱間５間以上の南北柱列跡であり、検出した長さは8.80mである。等高線にほぼ直交しており、南側は調査区外に延びている可能性が高い。

柱穴　６基以上の柱穴から成り、その平面形はいずれも円形状で、平均値は直径約0.24m、深さ約0.33mである。柱穴の底面標高はP60とP61、P62とP63、P64からP66がそれぞれ類似し、P62・63が最も深い。P63とP64はいずれも柱穴として機能する断面形態と深さなので、どちらを柱列の構成柱穴とするか判断できない。埋土は単層ないしは２～３層に分層でき、P63とP65には柱痕跡が残る。また、P60のみ南側からの土の流入が認められる。なお、柱間距離の平均値は1.70mである。

関連遺構　SA１に関連するか否かは判断できないが、SA１の東側に位置するP67とP68は比較的深く、P68には柱痕跡が残る。両者はP62とP63（ないしはP64）にほぼ対応する位置にあることから、SA１と関連があると思われる。

出土遺物　柱穴内より縄文土器10点、弥生土器９点が出土した。

時期　柱穴出土の最新の土器様式より、弥生時代後期（山中式併行期）と考えられる。



1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりあり。褐色粘土ブロック(φ５mm以下)が混じる。
2　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり。褐色粘土ブロック(φ５mm以下)が多く混じる。
3　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土が均等に混じる。
4　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ３mm以下)がわずかに混じる。
5　10YR3/3暗褐色シルト
6　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ５mm以下)がわずかに混じる。
7　10YR3/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10mm以下)が混じる。
8　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ20mm以下)が混じる。
9　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ８mm以下)が混じる。
10　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ３mm以下)がわずかに混じる。

図53　SA１

４　方形周溝墓

SZ１（図54・56）

検出状況　E10～E12グリッドで検出し、調査区壁面において地山の粘土ブロックを含む墳丘盛土を確認した。

規模　大半が調査区外に位置するため、規模は不明である。

埋葬施設　中央やや東寄りにSK359がある。SK359がSZ１の埋葬施設の一つか否かは判断できないが、方形周溝墓内にある規模の大きな土坑として、ここでは報告する。検出面では不定形を呈していたが、底面は長方形状を呈し平坦である。壁面は垂直に近く、埋土の６・７層は掘形埋め戻し土の可能性もある。なお、SK359の出土遺物はない。

周溝　最大幅0.51m、深さ約0.50mで、断面形は台形状から三角形状を呈する。東側が深く、西側が浅い。埋土は２～４層に分層でき、いずれの層もしまりが悪い。

出土遺物　SD１内より縄文土器44点、弥生土器56点、石器４点が出土した。遺物の出土位置は溝のコーナー部は希薄で、直線部からが多い。

時期　土器様式より弥生時代後期（山中Ⅰ式新段階併行期）と考えられる。

SZ２（図55・56）

検出状況　E５～F６グリッドで検出した。南辺と西辺の周溝を検出したが、北辺と東辺は確認できなかった。また、墳丘盛土も確認できていない。

規模　北辺と東辺が確認できなかったため、規模は不明である。

埋葬施設　中央やや東寄りにSK182がある。SK182がSZ２の埋葬施設の一つか否かは判断できないが、方形周溝墓内にある規模の大きな土坑として、ここでは報告する。平面形は不定形を呈し、底面は平坦である。壁面は緩やかに傾斜しており、埋土中に炭化物を含む。遺物は縄文土器１点のみ出土している。

周溝　最大幅0.27m、深さ約0.18mで、断面形は台形状から三角形状を呈する。SD２とSD３は約0.１m離れている。

出土遺物　SD２・３内より弥生土器18点、近世～近代陶磁器２点が出土した。

時期　土器様式より弥生時代後期～終末期と考えられる。

SZ３（図55・56）

検出状況　E４～F５グリッドで検出した。南側は調査区外に延び、墳丘盛土は確認できなかった。

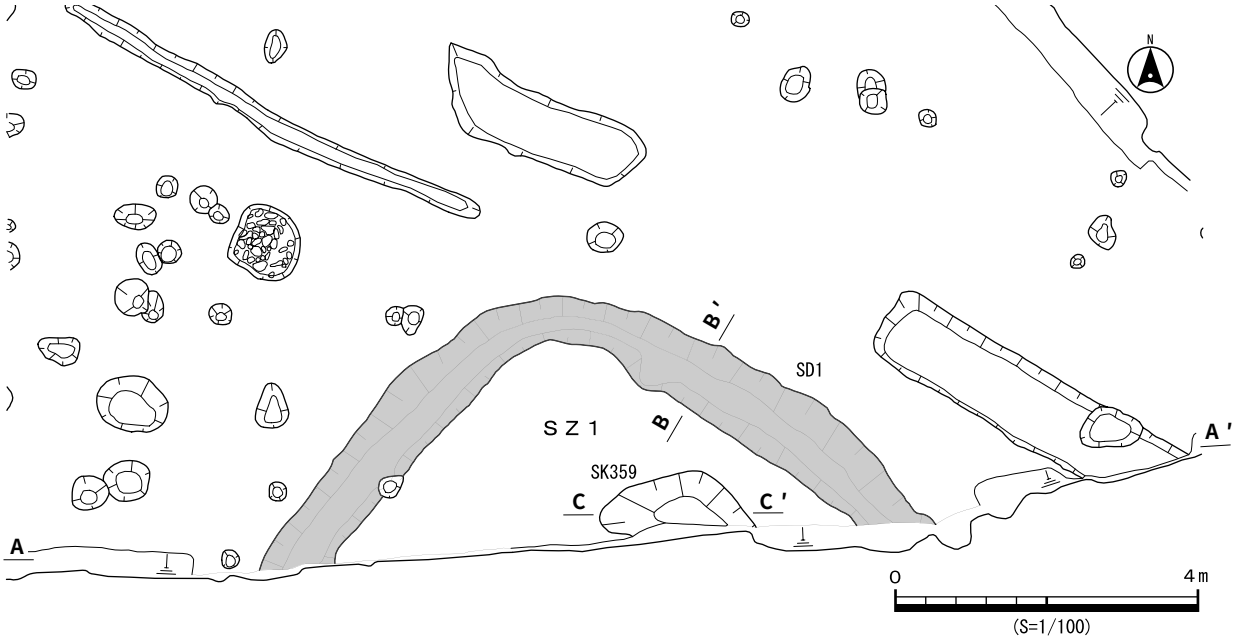
規模　SD４とSD５の心々間の距離は約5.2mである。

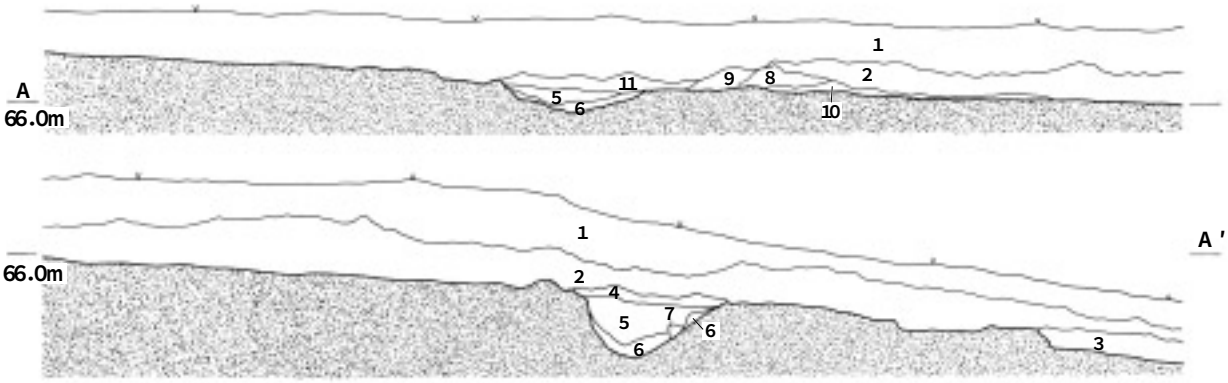
埋葬施設　周溝内側には多数の土坑があるが、埋葬施設を想定できるものは確認できなかった。

周溝　最大幅0.38m、深さ約0.15mで、断面形は台形状を呈する。SD６・７は当初土坑としていたが、SD４・５と埋土や底面形態が類似するために周溝とした。

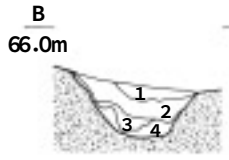
出土遺物　周溝内より弥生土器38点、近世～近代陶磁器１点が出土した。SD５～７に比べてSD４からの出土が目立つ。

時期　弥生時代後期の山中式から弥生時代終末期の廻間Ⅰ式に併行する土器が出土しており、土器の最新時期から弥生時代終末期と考えられる。

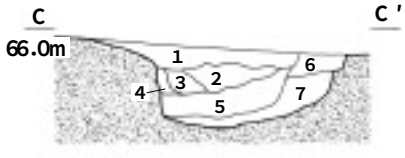




1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ５mm 以下)がわずかに混じる。Ⅰ層。
2　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が１よりも多い。Ⅰ層。
3　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。SK382埋土。
4　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)がわずかに混じる。SD１埋土。
5　10YR2/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ２mm 以下)がわずかに混じる。SD１埋土。
6　10YR2/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ２mm 以下)が粒状に多く混じる。SD１埋土。
7　10YR4/4褐色土　粘性あり。しまりなし。SD１埋土。
8　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ40mm 以下)が不均等に混じる。SZ１盛土。
9　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ20mm 以下)が均等に混じる。SZ１盛土。
10　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が均等に混じる。SZ１盛土。
11　10YR2/2黒褐色シルト　しまりあり。Ⅱ層。



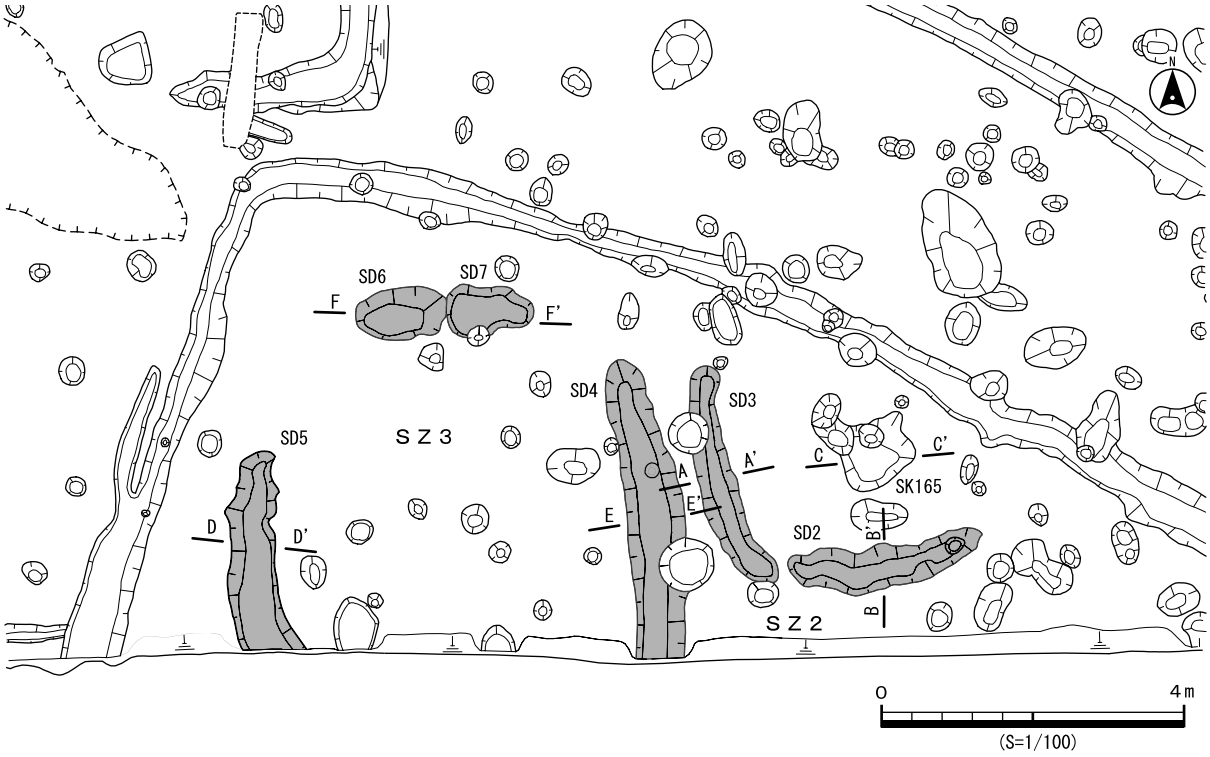
1　10YR2/2黒褐色シルト　しまりなし。
2　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ２mm 以下)が混じる。
3　10YR2/2黒褐色シルト　しまりなし。１よりやや濃色。
4　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。２より褐色粘土ブロックの量が多く、より均質。



1　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ５mm 以下)がわずかに混じる。
2　10YR3/3暗褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が混じる。１よりやや暗色。
3　10YR4/4褐色シルト　しまりあり。
4　10YR3/4暗褐色シルト　２に似るが、１と同程度のしまりあり。
5　10YR3/3暗褐色シルト　１より暗色、褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)がわずかに混じる。
6　10YR3/3暗褐色シルト
7　10YR3/4暗褐色シルト　１に似るが、やや暗色。

0　2m
(S=1/50)

図54　SZ１



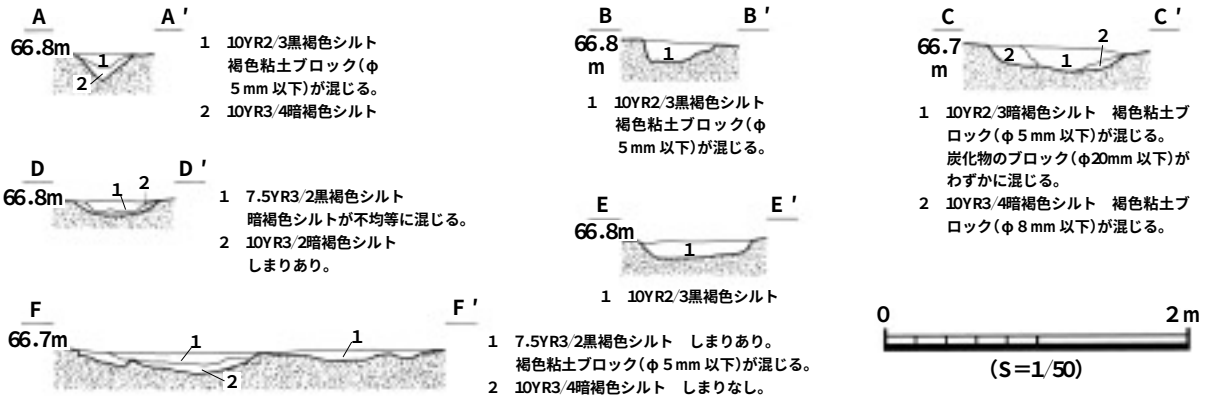


図55　SZ２・３

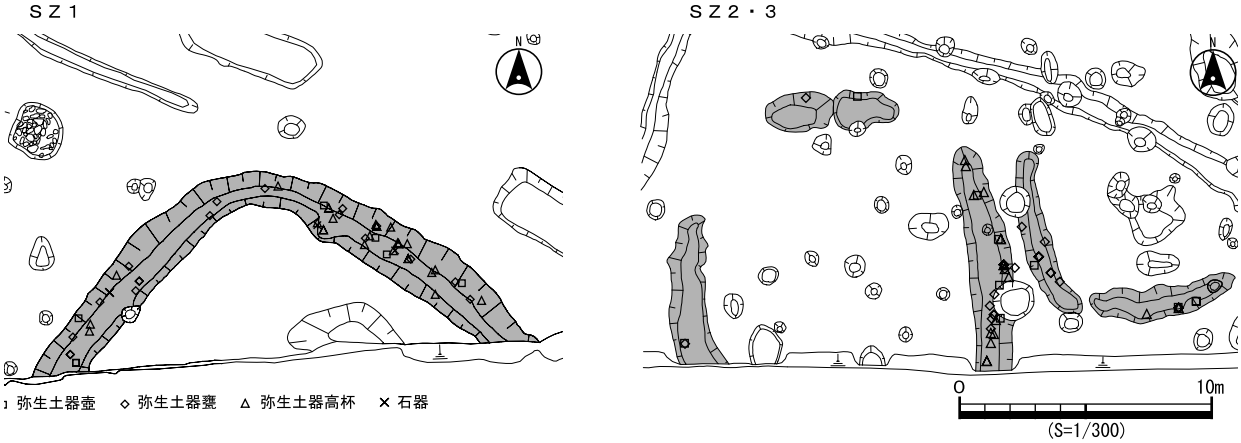


図56　SZ１～３遺物出土位置図

５　土坑（図57・58）

ここでは、遺物が15点以上出土した土坑の平面図と断面図を掲載し、それ以外の土坑は頁数の都合上、土層図のみの掲載とする（平面図は図75参照）。

SK51（図57）

検出状況　Ｆ３グリッドで検出した。平面は円形状、断面は逆台形状を呈し、底面は平らである。遺構の南肩には一段の平坦面がある。

埋土　２層に分層した。ほぼ水平堆積であるが、上層は北側からの土の流れ込みが確認できた。遺物は遺構北側の上層と下層の境付近で多く出土し、いずれも横位から斜位であったことから、北側からの廃棄が想定できる。遺構底面からは、長さ23㎝の亜角礫が横位で出土した。

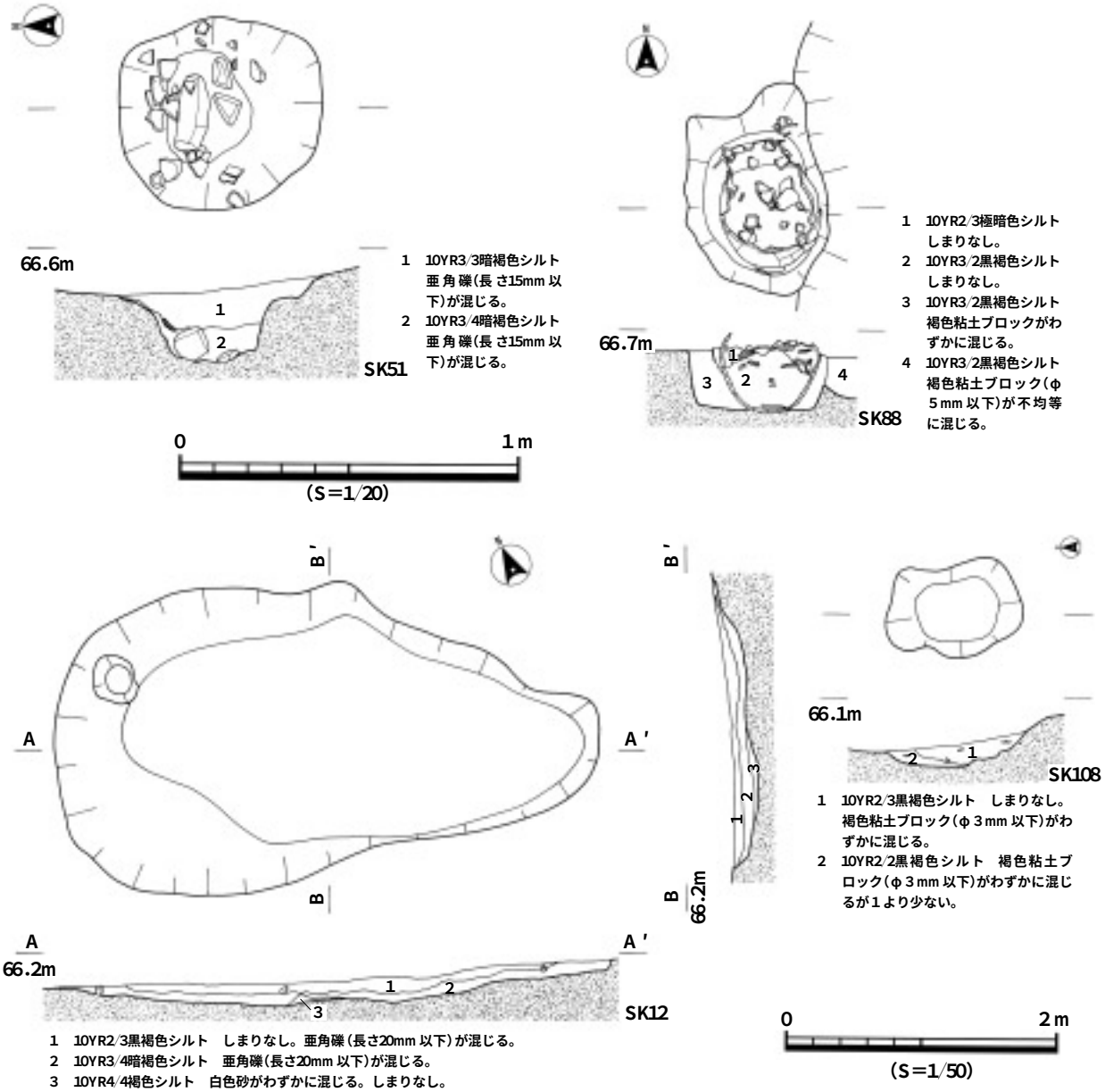


図57　弥生時代の土坑

出土遺物　弥生土器54点が出土した。今回出土した遺物の中で、唯一確認できたＳ字甕や西濃型高杯がある。

時期　廻間Ⅰ式に併行する土器が出土していることから、弥生時代終末期と考えられる。

SK88（図57）

検出状況　Ｅ５グリッドで検出した。平面は不定形状、断面は逆台形を呈する。底面は平らで壁面の立ち上がりは比較的急である。検出時に土器片が環状にみえ、その周囲に掘形埋土を確認した。本遺構は方形周溝墓であるSZ２の周溝を切っており、土器の出土状態から土器棺墓の可能性がある。

埋土　土器内部の埋土は２層に分層した。上下層ともしまりのない土であったが、最下層は灰黄色の粘性の高い土であった。土器の大きさは直径27.7㎝、高さ35.6㎝に復元できる。土器は口縁部を南に向けて約30度傾いて設置されていた。土器の上半は細かく割れており、体部も上からの圧力で潰れたような状態であった。掘形埋め戻し土は単層で、地山である褐色粘土ブロックを含んでいた。

出土遺物　縄文土器３点、弥生土器126点が出土した。弥生土器は甕と高杯（掲載番号185・186）の２個体のみである。

時期　廻間Ⅰ式に併行する土器が出土していることから、弥生時代終末期と考えられる。

SK108（図57）

検出状況　C69グリッドで検出した。平面は不定形状、断面は皿状を呈する。本遺構は弥生時代の掘立柱建物跡であるSH２内に位置している。

埋土　２層に分層した。上層は皿状の堆積である。

出土遺物　縄文土器14点、弥生土器18点が出土した。いずれも小破片である。

時期　柱穴出土の最新の土器様式より、弥生時代後期の山中式に併行する時期と考えられる。

SK12（図57）

検出状況　Ｃ１～Ｃ２グリッドで検出した。平面は不定形状、断面は皿状を呈する。

埋土　２層に分層した。上層は中央が窪む堆積である。大半の遺物は２層直上から出土している。

出土遺物　弥生土器28点が出土した。いずれも小破片である。

時期　出土遺物より、弥生時代後期～終末期と考えられる。

その他の土坑として、出土遺物や遺構の重複関係から弥生時代の遺構と判断できる土坑を以下に報告する。該当する土坑は17基あり、調査区中央南側の平坦面に多く分布する。平面形は円形状若しくは楕円形状のものが多く、規模の平均値は長軸0.47ｍ、短軸0.37ｍ、深さ0.18ｍである。しかし、SK188やSK296のように長軸が１ｍ弱の大型土坑やSK18・82のように、柱穴の可能性がある土坑も存在している（図58）。

６　溝

ここでは、方形周溝墓を構成する溝以外の溝４条を報告する。大半の遺構埋土は中央が窪む堆積で１～２層に分層でき、通水の痕跡は確認できなかった。また、出土遺物数はSD９が弥生土器32点とやや多いが、他はいずれも10点以下の小破片である。そのため、遺構の時期は弥生時代後期か終末期かの識別ができなかった。なお、遺構の位置は図37を参照されたい。以下、各遺構の検出状況や形態を中心に記載する。

SD９（図58）

Ｄ２～Ｄ３グリッドで検出した。主軸はほぼ等高線に沿っており、両端は漸移的に消滅する。北西端がやや屈曲していることから、平面形はＬ字状であった可能性もある。

SD13（図58）

Ｆ３～Ｆ４グリッドで検出した。主軸はほぼ等高線に沿っており、西端は漸移的に消滅し、東端はSD12に切られる。本遺構は単独で機能していたと考えにくく、北側にある柱穴の可能性があるSK48・59や、調査区外の遺構との関連が想定できる。

SD14（図58）

Ｃ５～Ｃ６グリッドで検出した。東西端の立ち上がりが明確であることから、検出した長さで終息している可能性が高い。SH２の柱穴間に存在し主軸はその梁行に平行するが、関連は不明である。

SD17（図58）

B10～Ｃ９グリッドで検出した。主軸はほぼ等高線に直交しており、南端は漸移的に消滅し、北側は調査区外に延びている。

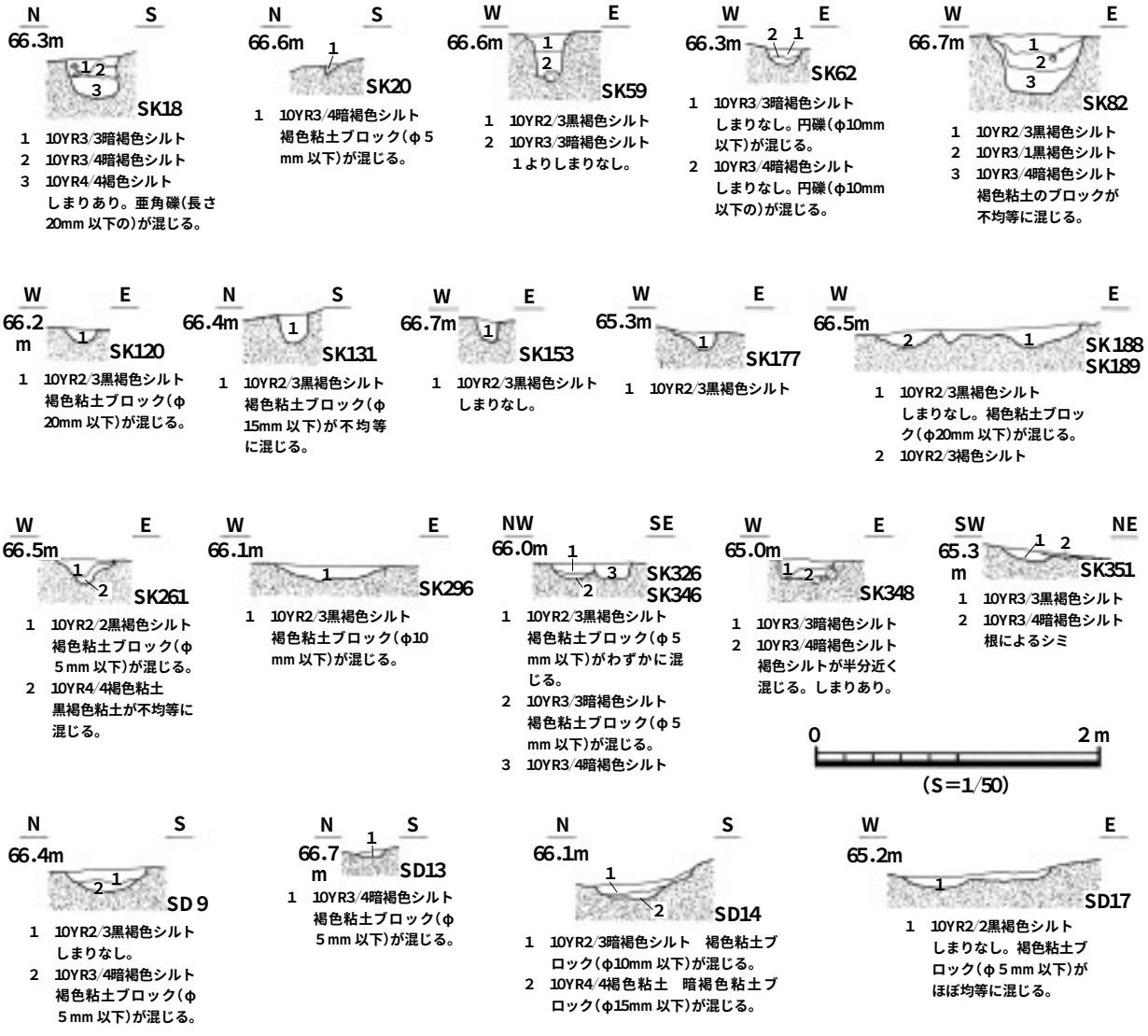


図58　弥生時代の土坑・溝

７　出土遺物（図59～61）

SB１（124～154）　124～139は弥生土器で、124～127・135は甕、128～131・136は壺、132～134は鉢、137・138は器台、139は高杯である。124は125と同一個体の可能性があり、体部下方は内反り気味に立ち上がる。125は底部と体部の接合部分であり、いわゆる擬口縁が明瞭に残り、底部外面には布目圧痕が残る。126は条痕文系の甕であり、底部外面に草本類などの圧痕らしき窪みが残る。128・129は広口壺で、128は体部外面にはハケ調整のみ確認できるが、ハケ調整後にミガキ調整が施されていた可能性が高い。129は体部外面に波状文、横線文、列点文を施し、ハケ調整痕が明瞭に残る。なお、いずれも赤彩は確認できない。130は二重口縁壺の頸部とした。突出部に刻みを施し、穿孔の一部が確認できる。東海地方の土器ではなく、他地域からの搬入品、若しくは模倣品であると思われる。131はパレス壺で、体部外面に櫛による刺突文と、その上下に波状文を施す。文様付近には赤彩の痕跡が残る。胎土中に多くの礫を含んでおり、当遺跡の壺の中では胎土が悪いものである。132～134は直口鉢である。133は外面の調整は定かでないが、内面は縦位の板ナデ後、器面を平滑にしている。134は体部内面には横位の幅の狭い板ナデ痕が残る。いずれも他の弥生土器と比べて胎土中の砂礫が少なく、精選した粘土を使用している。136は器壁が薄いため細頸壺の頸部としたが、高杯の脚部の可能性もある。頸部外面に貝殻による連続刺突文を横位に施す。137は小型器台である。手捏ね成形であり、器壁が厚く、口縁部と底部の歪みが大きい。他の弥生土器と比べて胎土中の砂礫が少なく、精選した粘土を使用している。138は器台としたが高杯の可能性もある。脚端部は上方に突出し、平坦面を有する。139は杯部外面に櫛による波状文を施し、内面上方には煤のような褐色の有機物が付着している。

140～144は縄文土器で、140～143が深鉢、144が浅鉢である。140はＣ１ａ類であり、肥厚部直下に沈線文を施す。142はLRの縄文地に工具Ａ（Ｂ・Ｃ）により押引沈線文を施す。144は口縁端部直下に工具Ｄ（Ｅ・Ｆ）による断面三角形の沈線文を施す。縄文土器はいずれも混入である。

145～154は石器であり、148・149・151は形態や剥離方法から縄文時代のものと思われる。145は有孔磨製石鏃である。基部はわずかに内彎し、中央付近に表裏面から孔を穿つ。表面は全面研磨しているが、裏面は剥片採取時の面が残る。146・147は磨製石鏃未製品である。146は上部が新欠し、下部は剥片採取時の面が残る。表面及び側縁は研磨しているが、裏面は剥離面まで研磨が及んでおらず、側縁も未調整である。147は磨製石鏃未製品、若しくは磨製石鏃作成時の剥片と思われる。145・146と同じ泥岩であり、薄く板状に剥離している。148は尖頭器であり、下方は新欠している。全面丁寧な調整剥離で覆われ、剥離の一単位が大きい。剥離は刃部を作り出すようなものでなく、厚みを減じるような深い剥離である。149は厚みのあるスクレイパーで、裏面に節理面が残る。刃部の角度は約60°である。150は石包丁である。片刃で、背部は丸みを帯びている。刃部の断面形は尖り、細かい剥離を施し、紐部は表裏面から穿つ。刃部付近の擦痕は、表面は刃部に対して垂直、裏面は斜めであるが、成形時のものか使用時のものか判断できない。中央付近で折損しており、折損部に新たな打撃を加えている。背部にも剥離が認められることから、折損後に再加工しているといえる。152～154は砥石である。いずれも小型であるので、手持ち砥石といえる。152の砥面数は１面で、擦痕は長軸方向に対して平行のものと右下がりのものの２方向があり、後者が前者を切る。153の砥面数は４面で、擦痕は基本的に長軸方向に対して平行である。表面中央付近がわずかに緩やかに窪む。154の砥面数

は２面以上で、擦痕方向に規則性はみられない。しかし、右側面には長軸方向に対して水平方向に幅広の溝状の擦痕が数条ある。石材は152・153が泥岩で、154のみ砂岩である。

SB２（155～163）　いずれも弥生土器である。155～157は甕、158～160は壺、161～163は高杯である。155は条痕文系の甕で、体部外面に縦位の櫛条痕を密に施し、下方に炭化物が付着している。156は体部外面に炭化物が付着し、内面に薄い煤状の黒色帯がみられる。157は平底で、底径は5.7㎝と小さい。体部はやや内反り気味に立ち上がり、外面上方に炭化物が付着している。158・159はパレス壺である。158の底部はわずかに上げ底で、体部外面は全面赤彩を施す。159は口縁部外面に凹線が３条巡り、上面に斜位の刺突文がある。凹線付近に赤彩がわずかに残る。161は脚端部が肥厚し、丸く仕上げられる。穿孔の数は不明だが３方向あるものとして図化した。162は１孔１組３穿孔で、脚柱部外面に縦ミガキを施す。163は杯部と口縁部の境が突出し、口縁端部がわずかに肥厚し平坦面を有する。

SB３（164～166）　164・165は弥生土器甕、166は磨製石鏃未製品である。165は底部と体部の接合部分であり、いわゆる擬口縁が明瞭に残っている。166は側縁の成形・研磨は成されているが、表裏面ともに剥片採取時の面が残る。下端部は新欠している。

SH２（167・168）　167は弥生土器広口壺であり、口縁端部に凹線の痕跡が残る。

SZ１（171～174）　いずれも弥生土器である。172は甕であり、口縁端部に刺突文を施す。173は壺であり、口縁部は直立し、端部に平坦面を有する。外面には３条の凹線を施す。174は高杯であり、杯部と口縁部の境は突出し、口縁端部は大きく外反する。

SZ２（169・170）　169は口縁部外面に沈線文があるため壺としたが、鉢の可能性もある。

SZ３（177～179）　いずれも弥生土器である。177は甕の脚部片であり、器壁は厚い。178は広口壺で、体部外面に横線文と連続刺突文を施し、内面に黒色有機物が付着している。179は高杯で、脚端部は上方に突出し、沈線文を施す。器壁が薄いため、器台の可能性もある。

SD９（175・176）　いずれも弥生土器である。175は条痕文系の甕で、口縁部内面に櫛による連続押引文、口縁端部に刺突文を施し、口縁部外面は煤が付着している。176は壺で、底径は2.1㎝に復原できるが、底部と体部の境は不明瞭である。

SK51（183・184）　いずれも弥生土器である。183は高杯で、口縁部内面は肥厚し多条沈線文を施すが、沈線文は平行しておらずやや稚拙な印象を受ける。また、貝殻による連弧文を沈線文間に施す。184は今回の調査で唯一確認できたＳ字甕の破片である。脚端部はわずかに肥厚しているが、折り返しの痕跡は確認できない。

SK62（182）　弥生土器の受口甕としたが、鉢の可能性もある。口縁部は受口状を呈し、端部には平坦面がある。口縁部外面には斜位の刺突文を施す。

SK88（185・186）　いずれも弥生土器である。185は条痕文系の甕で、底部の器壁は厚く、体部の最大径は中程より上位にある。口縁部は直線的に開き、端部は尖り気味である。体部外面には炭化物が流れたような痕跡が残る。186は高杯で、器壁が薄く口縁部はわずかに内彎する。

SK108（180・181）　いずれも弥生土器である。180は壺で、口縁部は受口状を呈し、端部は内傾面を有する。181は高杯で、杯部は椀形を呈し、口縁端部がわずかに肥厚する。

包含層（187）　弥生土器で条痕文系の甕である。口縁部外面に横位の粗い条痕、内面に櫛状工具による刺突文を施す。

SB１（124～149）

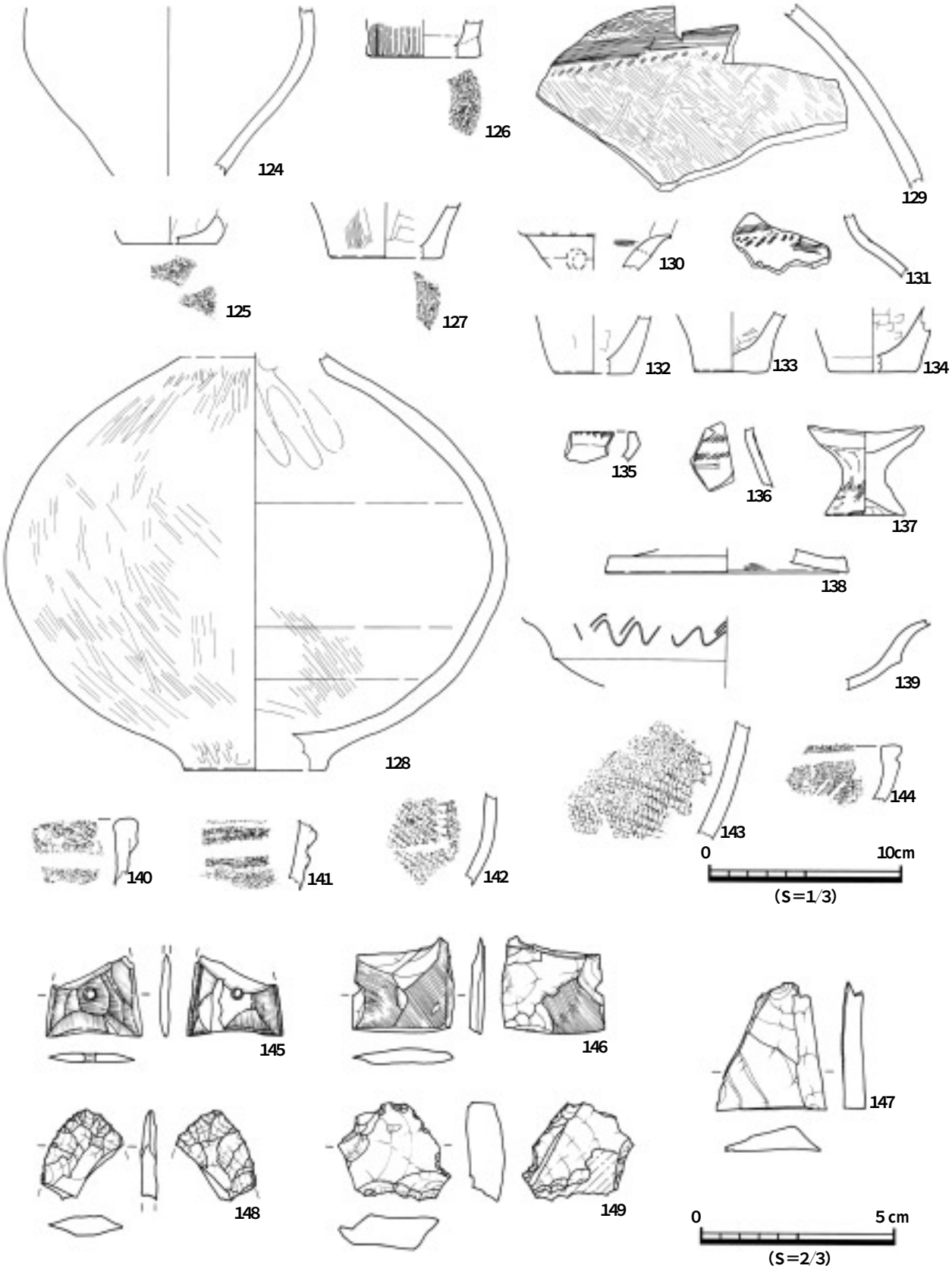
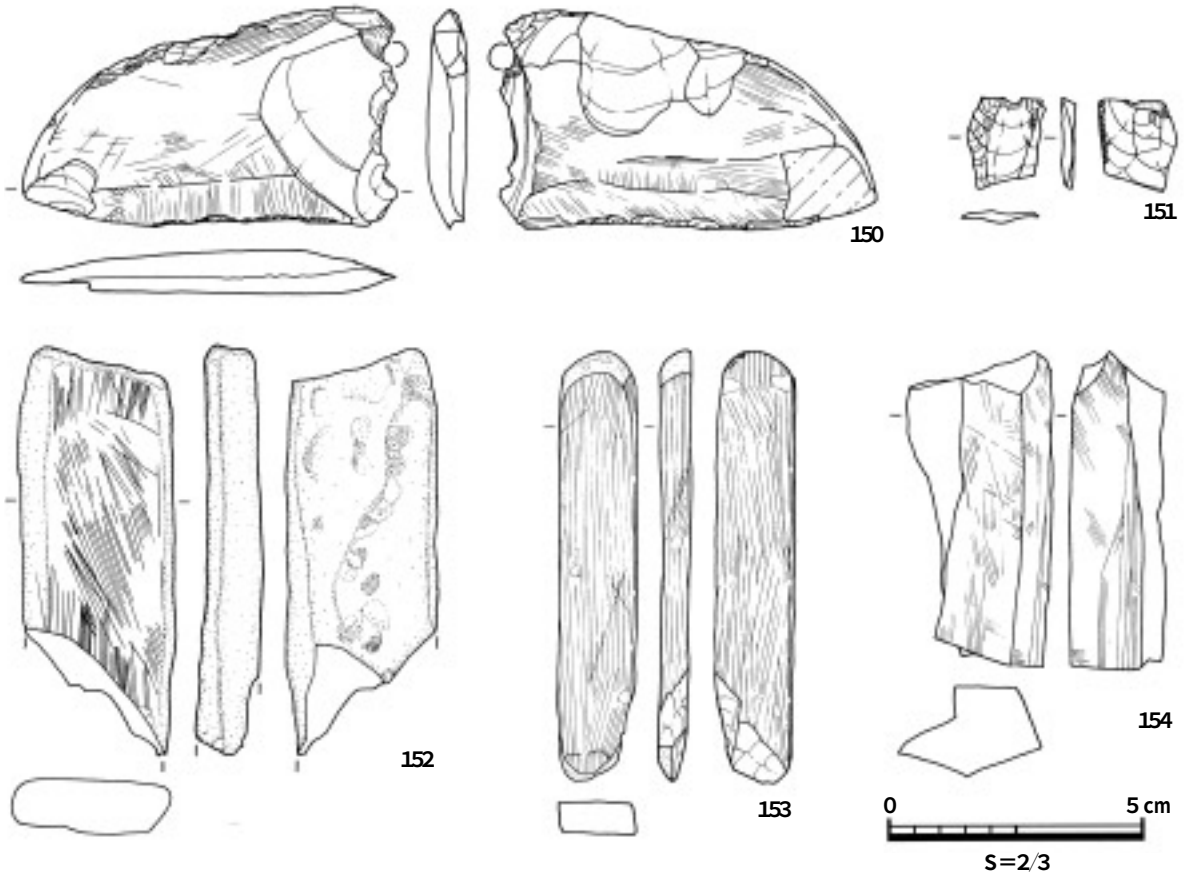


図59　弥生時代の遺構出土遺物（１）

SB１（150～154）



SB２（155～163）

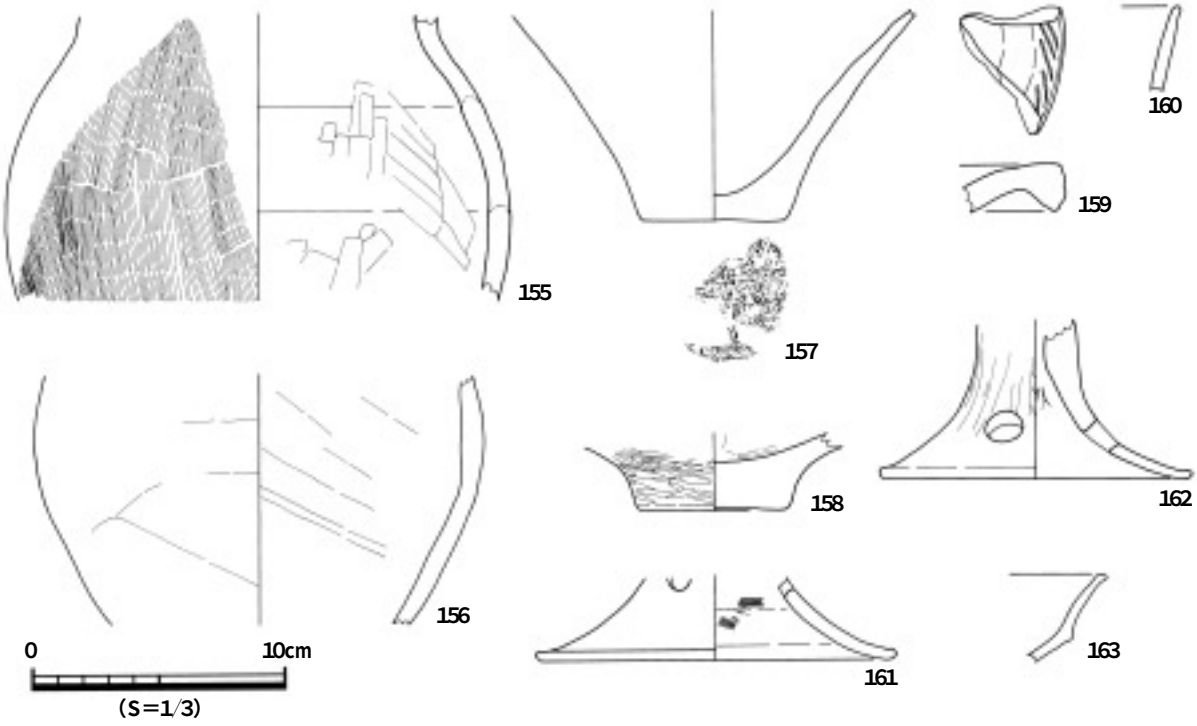


図60　弥生時代の遺構出土遺物（２）

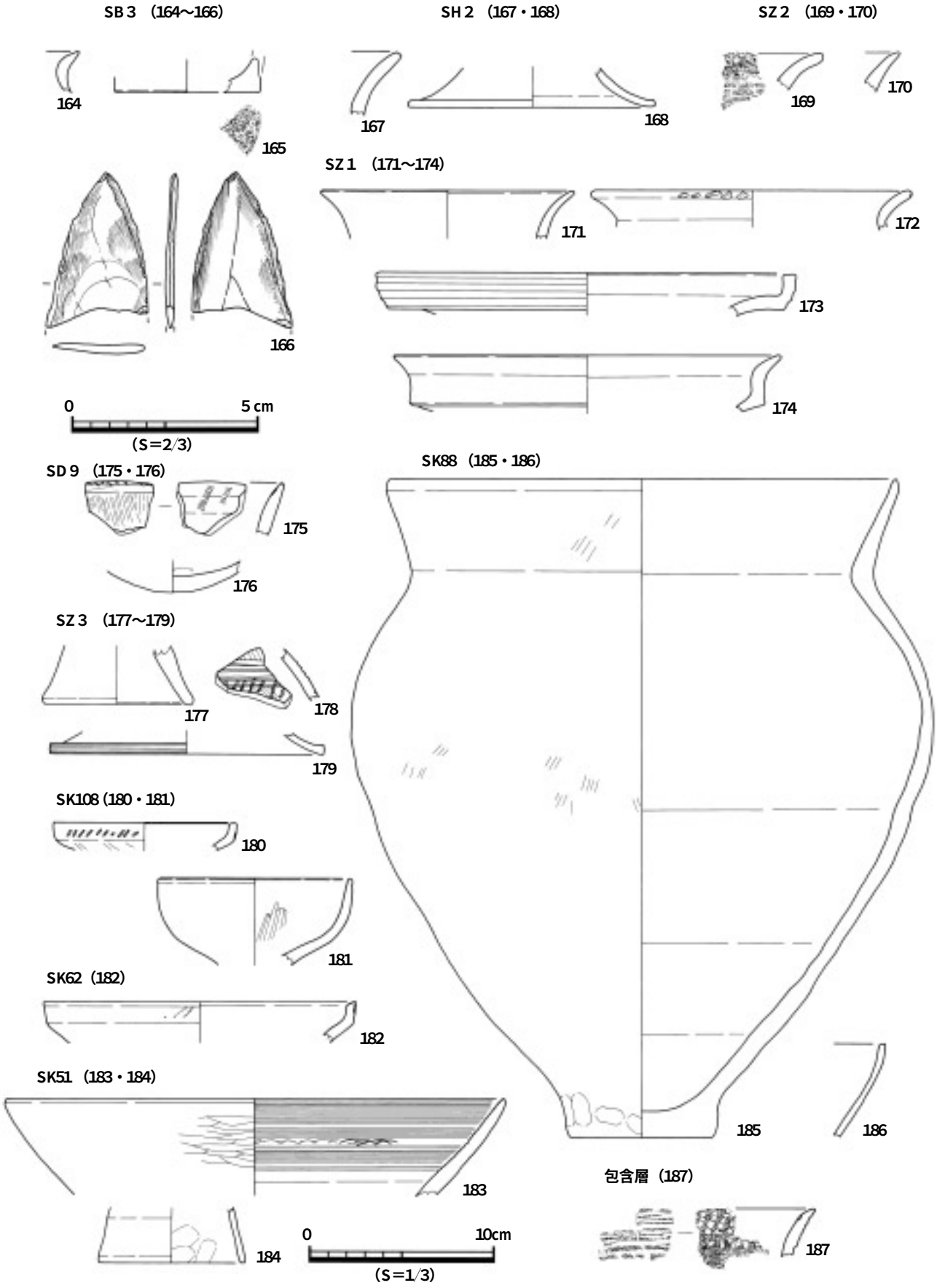


図61　弥生時代の遺構・包含層出土遺物

第５節　縄文時代～弥生時代の遺構と遺物

当遺跡では、近世～近代の遺構埋土と縄文～弥生時代の遺構埋土は明確に異なる。そのため、時代が特定できる遺構との重複関係がなく、近世～近代の遺構以外で出土遺物がない遺構、ないしは石器のみが出土している遺構の帰属時期は、縄文時代～弥生時代となる。本節では、そのような遺構を「縄文時代～弥生時代の遺構」として掲載する。

対象となる遺構は土坑196基である（図62～68）。調査区中央南側の平坦面に多く、斜面には散在している。平面形は円形状若しくは楕円形状のものが多く、規模の平均値は長軸0.35m、短軸0.25m、深さ0.17mである。しかし、SK16・33のように長軸が１ｍを超える大型土坑やSK72・73・138・310・311のように柱穴の可能性がある土坑、SK49・246のように底面が平坦で遺構の肩の傾斜が強い土坑なども存在している。なお遺構図面は、頁数の都合上土層図のみの記載に留める（平面図は図75参照）。

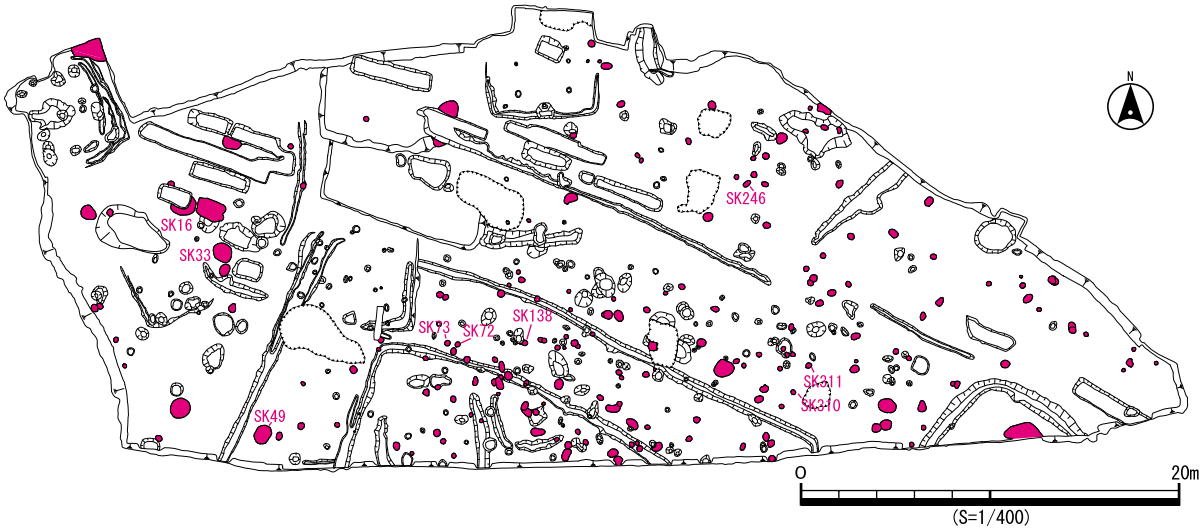


図62　縄文～弥生時代の遺構位置図

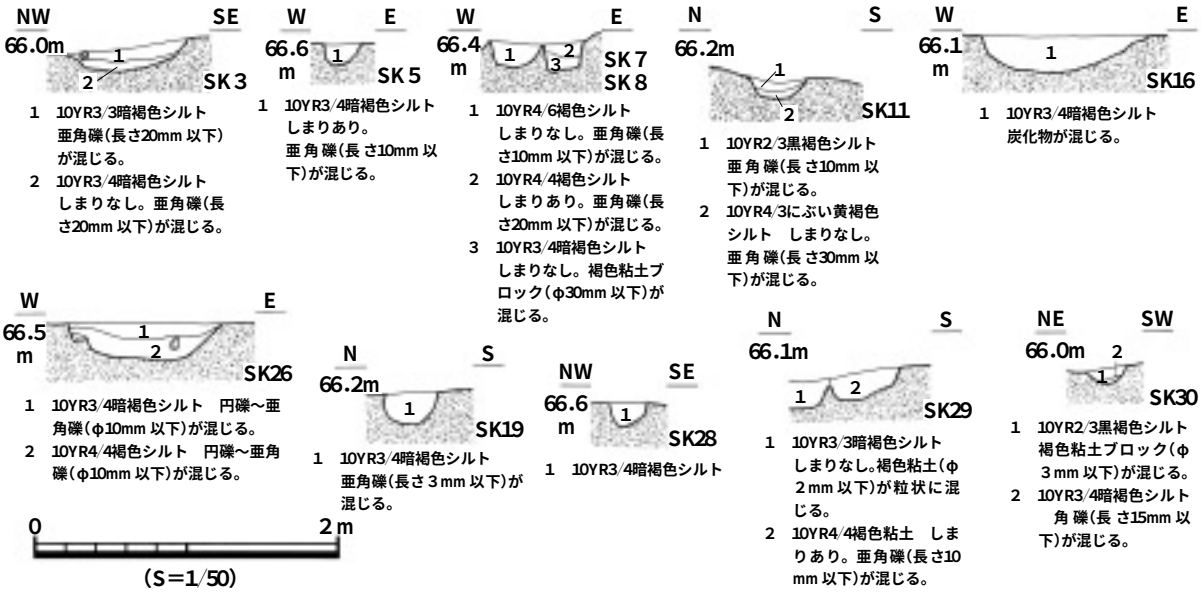
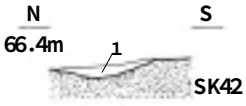
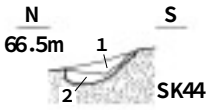


図63　縄文～弥生時代の土坑（１）

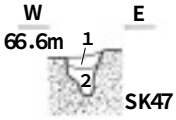
1　10YR3/4暗褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ30mm以下)が混じる。



1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ８mm以下)が混じる。

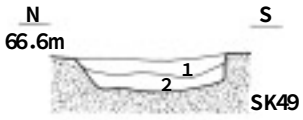


1　10YR3/4暗褐色シルト
2　10YR4/4褐色シルト　しまりあり。

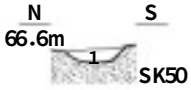


1　10YR2/3黒褐色シルト
2　10YR3/4暗褐色シルト　しまりなし。

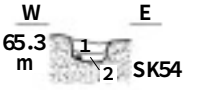
1　10YR3/4暗褐色シルト
2　10YR2/3暗褐色シルト
3　10YR3/3暗褐色シルト



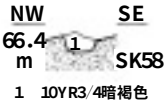
1　10YR2/2黒褐色シルト　亜角礫(長さ30mm以下)が混じる。
2　10YR3/3暗褐色シルト　亜角礫(長さ10mm)が混じる。



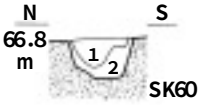
1　10YR3/3暗褐色シルト　亜角礫(長さ20mm)が混じる。



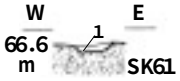
1　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ５mm以下)が混じる。
2　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土が不均等に混じる。



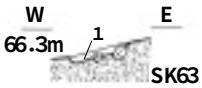
1　10YR3/4暗褐色シルト



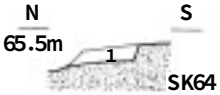
1　7.5YR2/3黒褐色シルト
2　10YR3/4暗褐色シルト



1　10YR3/4暗褐色シルト

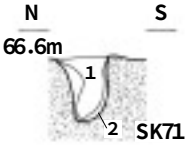


1　10YR2/3黒褐色シルト　亜角礫(長さ20mm以下)が混じる。



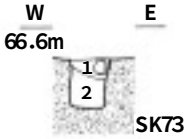
1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土が不均等に混じる。１に近い。

1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ10mm)以下が多く混じる。
2　10YR2/3黒褐色シルト　にぶい黄褐色粘土が不均等に混じる。
3　10YR4/4褐色粘土　しまりあり。

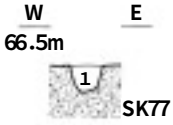


1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。
2　10YR4/3にぶい黄褐色シルト

1　7.5YR3/2黒褐色シルト
2　10YR3/4暗褐色シルト　１のブロックが不均等に混じる。しまりややなし。
3　10YR2/3黒褐色シルト
4　10YR3/4暗褐色シルト　しまりあり。褐色粘土ブロック(φ10mm以下)が混じる。



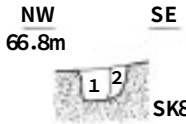
1　7.5YR3/2黒褐色シルト
2　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　黒褐色シルトブロック(φ20mm以下)が混じる。



1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ15mm以下)が混じる。

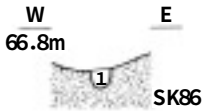
1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ15mm以下)が混じる。

1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。
2　10YR3/4暗褐色シルト　しまりあり。

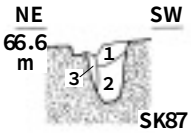


1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ20～40mm以下)が混じる。しまりあり。
2　10YR3/4暗褐色シルト

1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土が不均等に混じる。

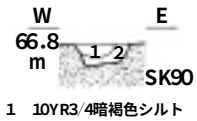


1　10YR2/3黒褐色シルト

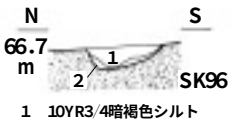


1　10YR2/3黒褐色シルト
2　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土が不均等に混じる。
3　10YR3/4暗褐色シルト

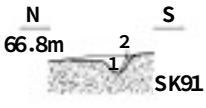
1　10YR3/4暗褐色シルト
2　10YR3/3暗褐色シルト



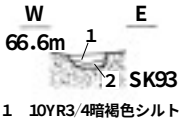
1　10YR3/4暗褐色シルト
2　10YR3/3暗褐色シルト



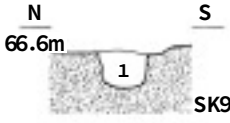
1　10YR3/4暗褐色シルト
2　10YR4/3にぶい黄褐色粘土　しまりあり。１のブロックが不均等に混じる。



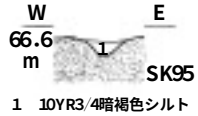
1　10YR3/4暗褐色シルト　しまりなし。
2　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　しまりあり。



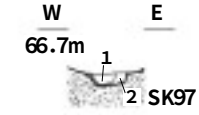
1　10YR3/4暗褐色シルト　しまりあり。
2　10YR4/4褐色シルト　１のブロック(φ５mm以下)がわずかに混じる。



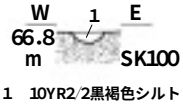
1　10YR2/3黒褐色シルト



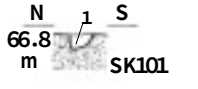
1　10YR3/4暗褐色シルト　しまりあり。



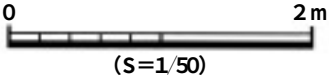
1　10YR3/4暗褐色シルト　２のブロック(φ10mm以下)が混じる。
2　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　しまりあり。



1　10YR2/2黒褐色シルト



1　7.5YR3/2黒褐色シルト



(S＝1/50)

図64　縄文～弥生時代の土坑（２）

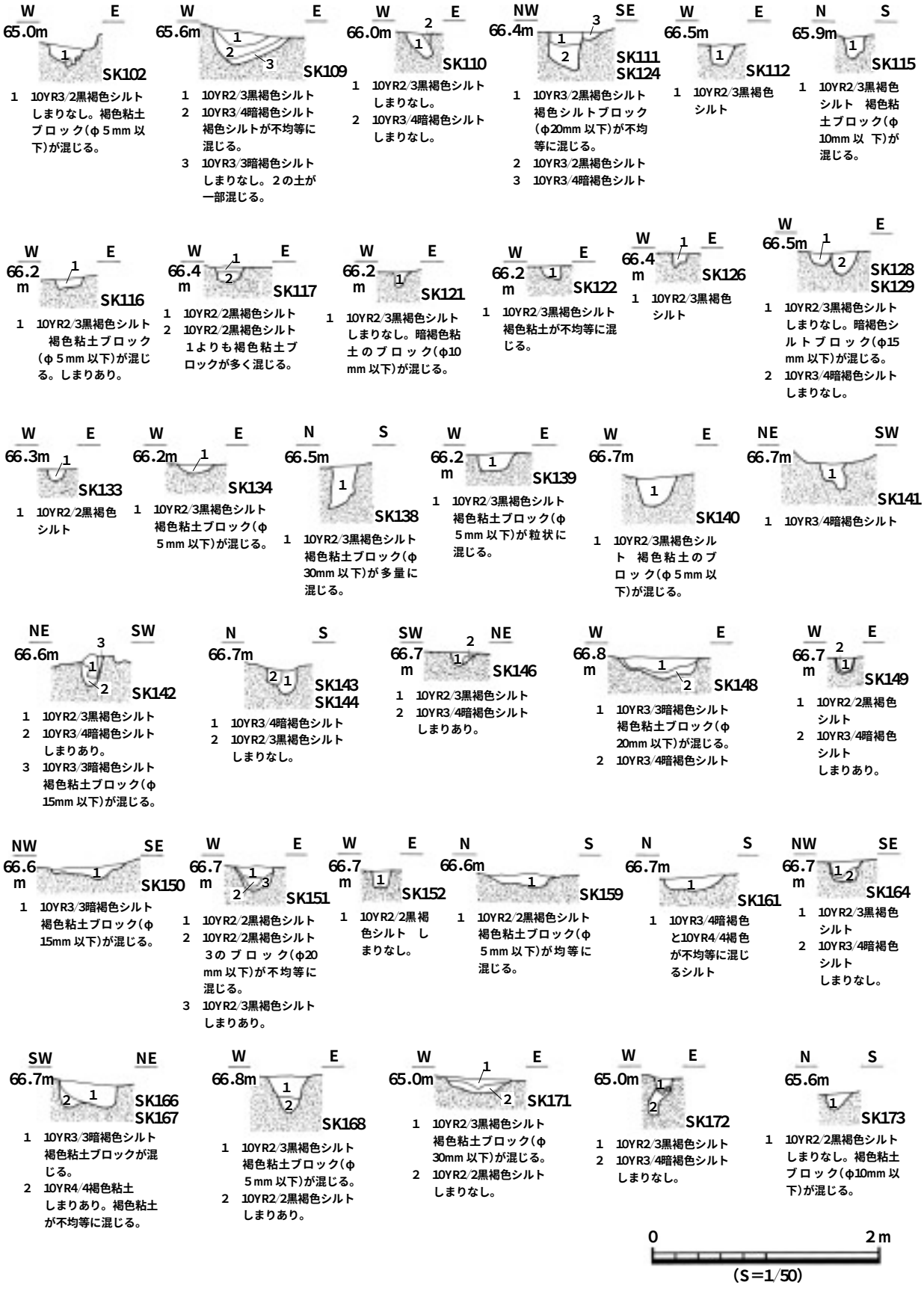
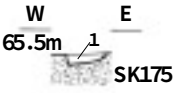
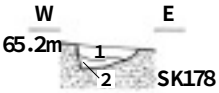


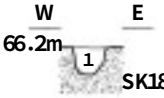
図65　縄文～弥生時代の土坑（３）



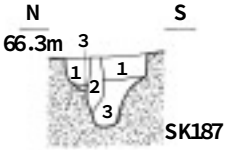
1　10YR2/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ３mm以下)が粒状に混じる。



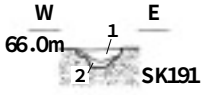
1　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10mm以下)が混じる。
2　10YR3/4暗褐色シルト



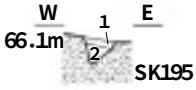
1　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ２mm以下)が粒状にわずかに混じる。



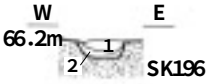
1　10YR2/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ10mm以下)が混じる。
2　7.5YR3/2黒褐色シルトしまりなし。褐色粘土ブロック(φ15mm以下)が混じる。
3　7.5YR3/2黒褐色シルト褐色粘土ブロック(φ15mm以下)がさらに多く均等に混じる。



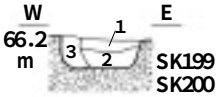
1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ５mm以下)が混じる。
2　10YR3/4暗褐色シルト　しまりあり。



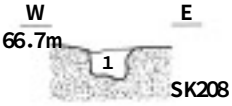
1　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ５mm以下)が混じる。
2　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10mm以下)が混じる。



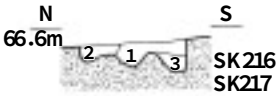
1　10YR2/2黒褐色シルト
2　10YR3/4暗褐色粘土　しまりあり。



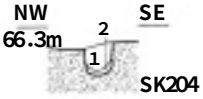
1　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロックがわずかに混じる。
2　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ５mm以下)が１より多く均等に混じる。
3　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ30mm以下)が多量に混じる。



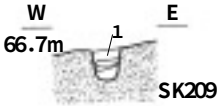
1　10YR3/3暗褐色シルト



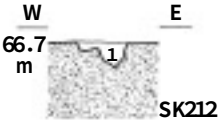
1　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10mm以下)が不均等に混じる。
2　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10mm以下)が不均等に混じる。１よりやや多い。
3　10YR2/2黒褐色シルト　しまりあり。



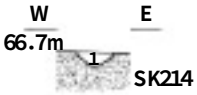
1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ20mm以下)が混じる。
2　10YR3/4暗褐色シルト　褐色粘土が不均等に混じる。



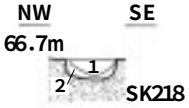
1　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10mm以下)が混じる。



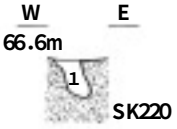
1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり。褐色粘土ブロック(φ５mm以下)が混じる。



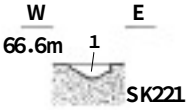
1　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ５mm以下)が混じる。



1　10YR2/2黒褐色シルト
2　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土が不均等に混じる。

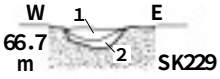


1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。

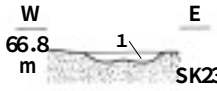


1　10YR2/3黒褐色シルト

1　10YR3/3暗褐色シルト

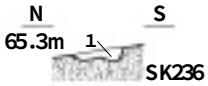


1　10YR2/2黒褐色シルト　しまりなし。
2　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし。

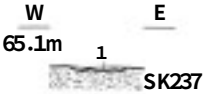


1　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり。

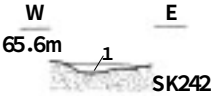
1　10YR3/3暗褐色粘土　しまりなし。
2　10YR2/2黒褐色シルト



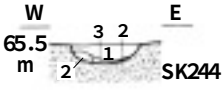
1　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土が不均等に混じる。



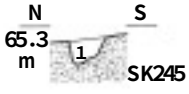
1　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ５mm以下)が混じる。



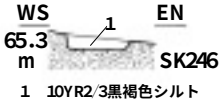
1　10YR3/4暗褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ15mm以下)が混じる。



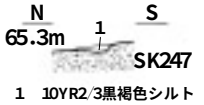
1　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ15mm以下)が混じる。
2　10YR4/4褐色粘土　しまりあり。
3　2.5Y4/4オリーブ褐色シルト　しまりなし。



1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10mm以下)が混じる。

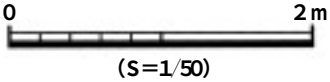


1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10mm以下)が混じる。



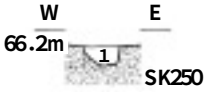
1　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ８mm以下)が混じる。

1　10YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ８mm以下)が混じる。



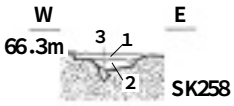
(S=1/50)

図66　縄文～弥生時代の土坑（４）

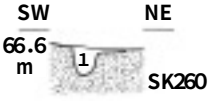


1　10YR2/3黒褐色シルト
しまりなし。褐色粘土
が不均等に混じる。

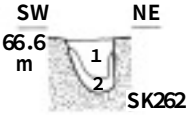
1　10YR2/3黒褐色シルト
しまりなし。
2　10YR3/2黒褐色シルト
しまりなし。褐色粘土
ブロック(φ5mm以
下)が不均等に混じる。



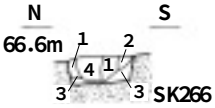
1　10YR2/2黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
5mm以下)がわずか
に混じる。
2　10YR3/2黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
15mm以下)が混じる。
3　10YR3/3黒褐色シルト
しまりなし。



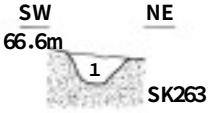
1　10YR2/3黒褐色シルト
しまりなし。褐色粘土
ブロック(φ10mm以
下)が混じる。



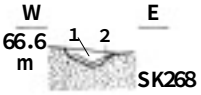
1　10YR2/2黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
8mm以下)が混じる。
2　10YR3/4暗褐色シルト



1　10YR2/3黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
3mm以下)がわずか
に混じる。
2　10YR3/3暗褐色シルト
3　10YR3/4暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
10mm以下)がわずか
に混じる。
4　10YR3/3暗褐色シルト
しまりなし。褐色粘土
が不均等にわずかに混
じる。樹木根のあと
か？

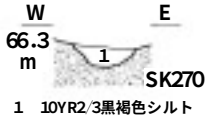


1　10YR2/3黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
10mm以下)が混じる。



1　10YR2/2黒褐色シルト
褐色粘土(φ5mm以
下)が混じる。
2　10YR3/4暗褐色シルト

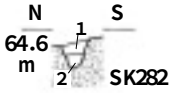
1　10YR2/3黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
20mm以下)が混じる。



1　10YR2/3黒褐色シルト
暗褐色シルトが均等に
斑状に混じる。褐色粘
土ブロック(φ3mm
以下)が混じる。

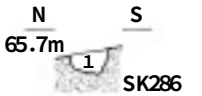
1　10YR2/2黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
3mm以下)が粒状に
混じる。

1　10YR3/3暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
10mm以下)が混じる。

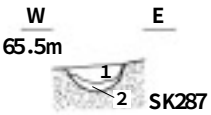


1　10YR2/2黒褐色シルト
しまりなし。
2　10YR3/3暗褐色シルト
褐色粘土ブロックが混
じる。しまりなし。

1　10YR2/2黒褐色シルト

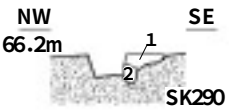


1　10YR2/3黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
30mm以下)が多く混
じる。

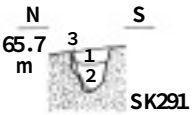


1　10YR2/3黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
3mm以下)が粒状に
混じる。
2　10YR4/4褐色シルト褐
色粘土ブロック(φ10
mm以下)が混じる。

1　10YR2/3黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
5mm以下)が混じる。

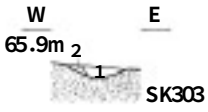


1　10YR3/3暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
5mm以下)がわずか
に混じる。
2　10YR3/4暗褐色シルト

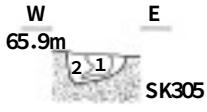


1　10YR2/3黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
5mm以下)が混じる。
2　褐色シルトと黒褐色シ
ルトが半々に混じる
3　10YR4/4褐色シルトし
まりあり。黒褐色シル
トブロック(φ10mm
以下)が混じる。

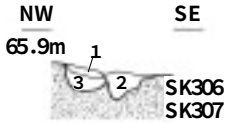
1　10YR2/2黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
5mm以下)が混じる。
2　10YR3/3暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
15mm以下)が混じる。



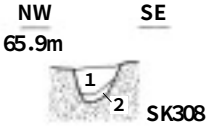
1　10YR2/2黒褐色シルト
しまりなし。
2　10YR2/3黒褐色シルト
しまりあり。



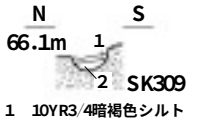
1　10YR2/3黒褐色シルト
2　10YR3/3暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
15mm以下)が混じる。



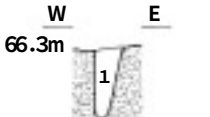
1　10YR2/2黒褐色シルト
しまりなし。
2　10YR3/4暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
30mm以下)が多く混
じる。
3　10YR4/4褐色シルト



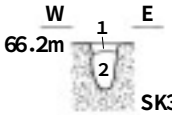
1　10YR3/3暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
3mm以下)が混じる。
2　10YR4/4褐色シルトし
まりあり。暗褐色粘土
ブロック(φ10mm以
下)が混じる。



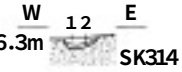
1　10YR3/4暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
3mm以下)が混じる。
2　10YR4/4褐色シルト
1がφ3mm以下のブ
ロックで混じる。



1　10YR3/3暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
15mm以下)が混じる。

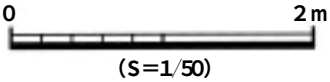


1　10YR2/3黒褐色シルト
褐色粘土(φ2mm以
下)が粒状にわずかに
混じる。
2　10YR3/4暗褐色シルト
しまりあり。



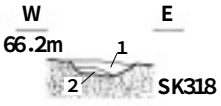
1　10YR2/2黒褐色シルト
褐色粘土(φ3mm以
下)が混じる。
2　10YR4/4褐色シルト
1がφ3mm以下のブ
ロックで混じる。

1　10YR2/3黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ
30mm以下)が粒状に
混じる。

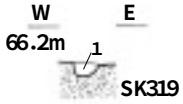


(S=1/50)

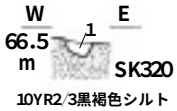
図67　縄文～弥生時代の土坑（５）



1　10YR3/3暗褐色シルト
2　10YR4/4褐色シルト
１がφ15mm 以下のブロックで不均等に混じる。

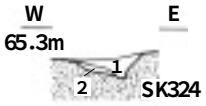


1　10YR2/3黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ５mm 以下)がわずかに混じる。



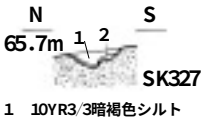
1　10YR2/3黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ５mm 以下)が混じる。

1　10YR2/3黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が混じる。
2　10YR3/3暗褐色シルト
褐色粘土が不均等に混じる。

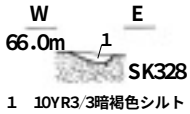


1　10YR2/3黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が混じる。
2　10YR4/4褐色シルト暗褐色粘土ブロック(φ20mm 以下)が混じる。

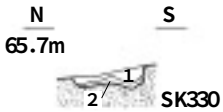
1　10YR3/3暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が混じる。
2　10YR5/4にぶい黄褐色シルト　しまりあり。
3　10YR4/3にぶい黄褐色粘土　一部砂が混じる。しまりなし。



1　10YR3/3暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ３mm 以下)が混じる。
2　10YR4/4褐色シルト
１のブロック(φ５mm 以下)が混じる。

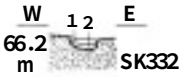


1　10YR3/3暗褐色シルト



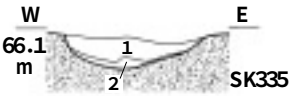
1　10YR2/3黒褐色シルト
暗褐色粘土が不均等に混じる。
2　10YR4/4褐色シルトしまりあり。１が不均等に混じる。

1　10YR3/3暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ５mm 以下)がわずかに混じる。
2　10YR3/4暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ５mm 以下)がわずかに混じる。



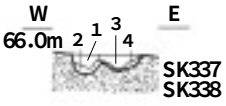
1　10YR2/2黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が混じる。
2　10YR4/4褐色シルトしまりあり。

1　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ15mm 以下)が混じる。
2　10YR3/4暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が混じる。
3　10YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ25mm 以下)が混じる。

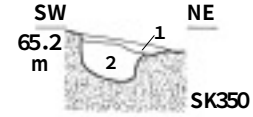


1　10YR3/2黒褐色シルト
しまりなし。
2　10YR4/4褐色シルト
黒褐色シルトブロック(φ10mm 以下)が混じる。

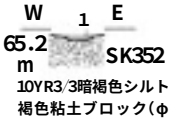
1　10YR2/3黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ15mm 以下)が混じる。



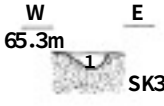
1　10YR3/3暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が混じる。
2　10YR4/4褐色シルト
１のブロック(φ５mm 以下)が混じる。
3　10YR3/2黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ５mm 以下)が混じる。
4　10YR4/4褐色シルト
暗褐色シルトブロック(φ5mm 以下)が混じる。



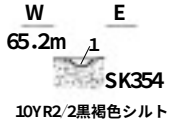
1　10YR3/3暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ５mm 以下)が混じる。
2　10YR2/2黒褐色シルトしまりなし。１のブロック(φ15mm 以下)が混じる。



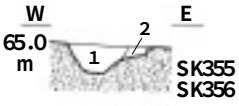
1　10YR3/3暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が混じる。



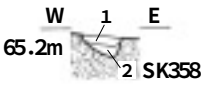
1　10YR3/3暗褐色シルト



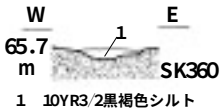
1　10YR2/2黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ９mm 以下)が混じる。



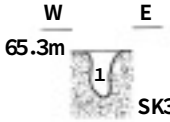
1　10YR3/3暗褐色シルト
2　10YR3/4暗褐色シルト



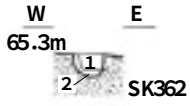
1　10YR2/2黒褐色シルト
暗褐色シルトブロック(φ10mm 以下)が混じる。
2　10YR3/4暗褐色シルト
褐色粘土が不均等に半分ほど混じる。



1　10YR3/2黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が混じる。

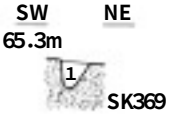


1　10YR2/2黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が混じる。

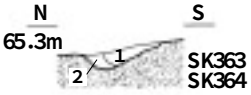


1　10YR2/3黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ５mm 以下)がわずかに混じる。
2　10YR3/4暗褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ５mm 以下)がわずかに混じる。

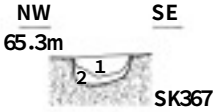
1　10YR2/3黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ５mm 以下)が混じる。



1　10YR3/3黒褐色シルト



1　10YR2/3黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ５mm 以下)が混じる。
2　10YR2/2黒褐色シルト
褐色粘土が不均等に混じる。



1　10YR2/2黒褐色シルト
褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)がわずかに混じる。
2　10YR4/4褐色シルトしまりあり。

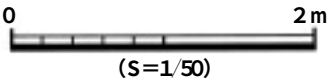


図68　縄文～弥生時代の土坑（６）

出土遺物（図69）

いずれも石器である。

SK５（188）　石鏃である。基部は直線的で、全体形は三角形を呈し、先端が欠落している。裏面に自然面が残るが、他は全面調整剥離を施す。

SK272（189）　UF である。表面右側縁から下面にかけて自然面が残り、下端は直線的で細かい剥離を施す。

SK332（190）　石錘である。小円礫を素材とし、上端には表裏面より１回の剥離を施して紐掛け部を作り出している。下方は欠落している。

包含層（191～194）　191・192は RF、193・194は打製石斧である。193は表面に自然面が残り、裏面は調整剥離を施す。形態から打製石斧としたが、表面右側縁に表裏から細かい剥離を施すことから、直縁刃石器の可能性もある。194は表面に自然面が残り、裏面は調整剥離を施す。刃部に細かい剥離があることから打製石斧としたが、他の打製石斧よりも軽く、表面左側縁は直線的で表裏から細かい剥離を施すことから、193と同様に直縁刃石器の可能性もある。

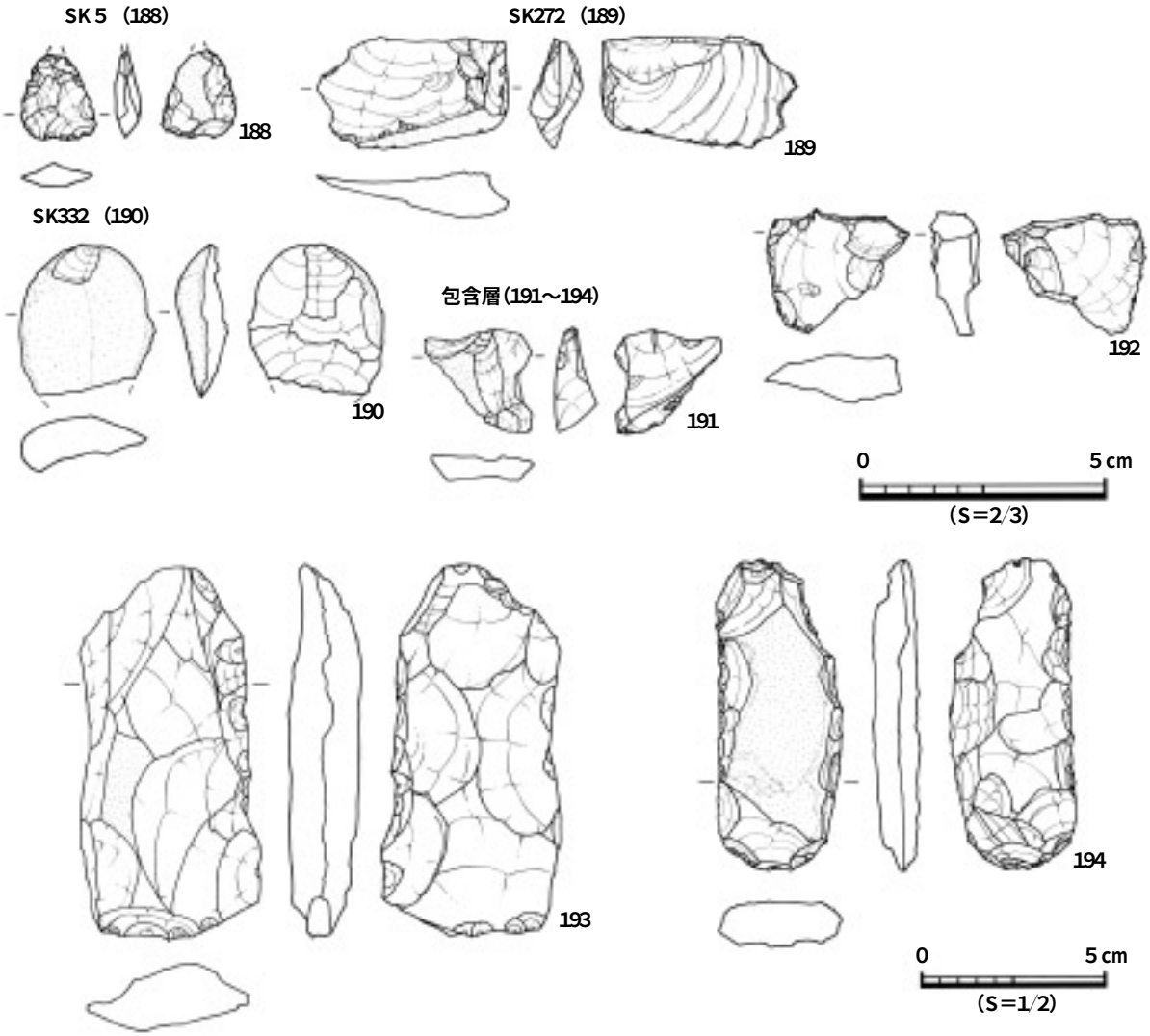


図69　縄文～弥生時代の遺構・包含層出土遺物

第６節　近世～近代の遺構と遺物

近世～近代の遺構として、土坑56基、溝８条を検出した。その分布は調査区中央付近の平坦面とその縁辺部に多く、斜面には少ない（図70）。遺構の性格として大きく４つに分類できる。

一つは土地を区画するように方形に巡る３条の溝（SD８・10・12・15・16・18）である。これらのうち SD10・15は、調査前において平坦面と斜面の境にある段としてすでに認められていたことから、近年の掘削に伴うものと思われ、遺物は明治時代以降の磁器が出土している。その他の溝は、SD10・15にほぼ平行することから耕作などに伴う溝の可能性がある。しかし、出土遺物がないことから細かい時期は特定できず、明治時代の地籍図にも地割りとして表記されていない。

一つは平坦面の縁辺部に展開する長方形の土坑群である。これらは美濃加茂市野笹遺跡などで多数検出されており、その性格として芋穴などの用途が想定されている（(財)岐阜県文化財保護センター2000）。当遺跡のものは、長辺の長さは規則性がないが、短辺はいずれも約0.70～0.80ｍにまとまっている。また、主軸は大半が等高線に沿っている。

一つは平坦面に多く分布する直径約0.3ｍの小穴群である。出土遺物がほとんどなく、その性格は不明である。

最後に E10グリッドで検出した SK344がある。一辺約0.9ｍの隅丸方形を呈する土坑であり、埋土上層に礫が詰められていた。上層は礫の特徴により上・中・下段に分かれる。上段は比較的大型の礫とレンガ、中段は上段より小型の礫、下段はやや丸みを帯びた大型の礫がそれぞれ主体であり、大半は川原石が使用されていた。下層は地山であるⅢ層に近い土質・色調であり、掘形掘削後にすぐに埋めた可能性がある。遺物は金属製品やレンガなどが出土しているが、陶磁器類は全く出土していない。なお、遺構の性格として墓などが想定できるが、詳細は不明である。

なお、近世～近代の遺物は江戸時代末（19世紀前葉～中葉）のものと、明治時代以降のものに分かれる。出土量は後者の方が多い。その分布は SD10・15以南、つまり調査区の平坦面ではほとんど遺物がみられず、大半は平坦面縁辺部の土坑からの出土である。平坦面は近年まで畑地として使用されていたことから、耕作地には遺物の廃棄が少なく縁辺部に捨てていたと思われる。

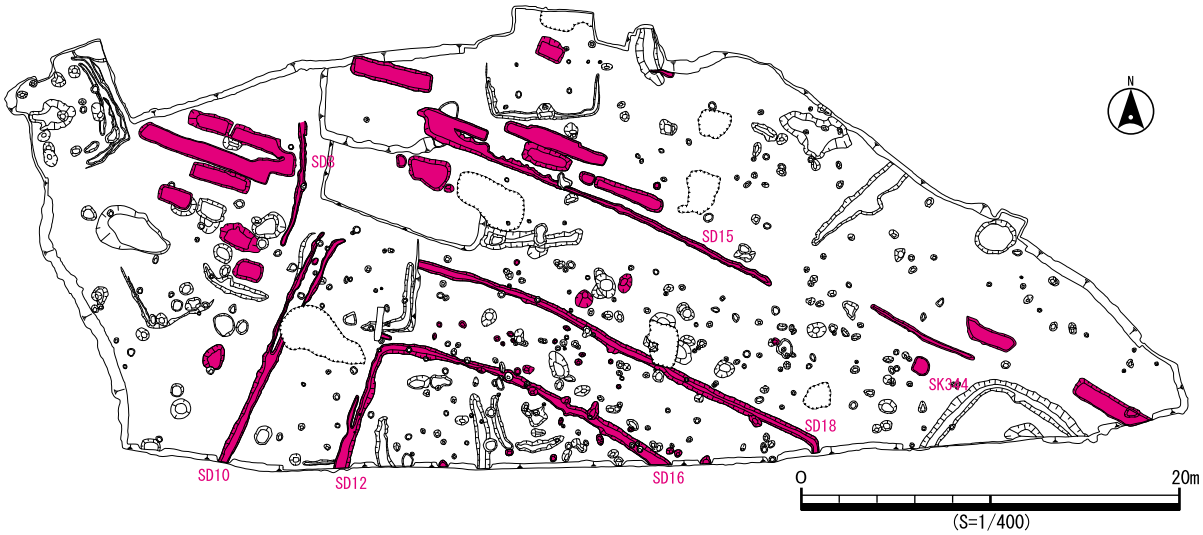


図70　近世～近代の遺構位置図

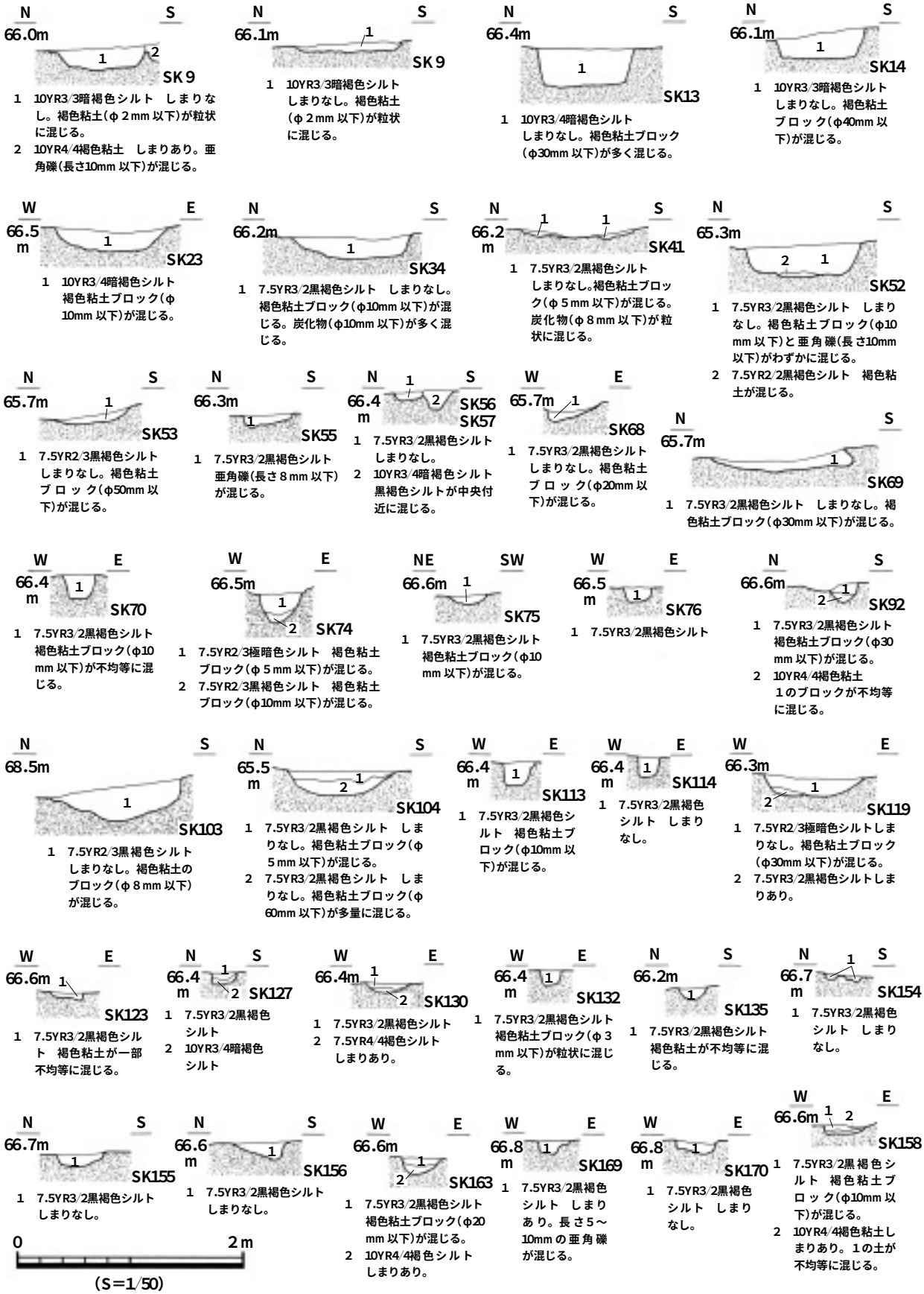
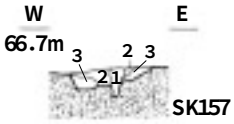
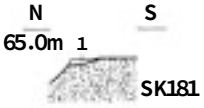

N
S
66.0m
1
2
SK9
1　10YR3/3暗褐色シルト　しまりなし。褐色粘土(φ２mm 以下)が粒状に混じる。
2　10YR4/4褐色粘土　しまりあり。亜角礫(長さ10mm 以下)が混じる。
N
S
66.1m
1
SK9
1　10YR3/3暗褐色シルトしまりなし。褐色粘土(φ２mm 以下)が粒状に混じる。
N
S
66.4m
1
SK13
1　10YR3/4暗褐色シルトしまりなし。褐色粘土ブロック(φ30mm 以下)が多く混じる。
N
S
66.1m
1
SK14
1　10YR3/3暗褐色シルトしまりなし。褐色粘土ブロック(φ40mm 以下)が混じる。
W
E
66.5m
1
SK23
1　10YR3/4暗褐色シルト褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が混じる。
N
S
66.2m
1
SK34
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が混じる。炭化物(φ10mm 以下)が多く混じる。
N
S
66.2m
1
1
SK41
1　7.5YR3/2黒褐色シルトしまりなし。褐色粘土ブロック(φ５mm 以下)が混じる。炭化物(φ８mm 以下)が粒状に混じる。
N
S
65.3m
2
1
SK52
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)と亜角礫(長さ10mm 以下)がわずかに混じる。
2　7.5YR2/2黒褐色シルト　褐色粘土が混じる。
N
S
65.7m
1
SK53
1　7.5YR2/3黒褐色シルトしまりなし。褐色粘土ブロック(φ50mm 以下)が混じる。
N
S
66.3m
1
SK55
1　7.5YR3/2黒褐色シルト亜角礫(長さ８mm 以下)が混じる。
N
S
66.4m
1
2
SK56
SK57
1　7.5YR3/2黒褐色シルトしまりなし。
2　10YR3/4暗褐色シルト黒褐色シルトが中央付近に混じる。
W
E
65.7m
1
SK68
1　7.5YR3/2黒褐色シルトしまりなし。褐色粘土ブロック(φ20mm 以下)が混じる。
N
S
65.7m
1
SK69
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ30mm 以下)が混じる。
W
E
66.4m
1
SK70
1　7.5YR3/2黒褐色シルト褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が不均等に混じる。
W
E
66.5m
1
2
SK74
1　7.5YR2/3極暗色シルト　褐色粘土ブロック(φ５mm 以下)が混じる。
2　7.5YR2/3黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が混じる。
NE
SW
66.6m
1
SK75
1　7.5YR3/2黒褐色シルト褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が混じる。
W
E
66.5m
1
SK76
1　7.5YR3/2黒褐色シルト
N
S
66.6m
2
1
SK92
1　7.5YR3/2黒褐色シルト褐色粘土ブロック(φ30mm 以下)が混じる。
2　10YR4/4褐色粘土１のブロックが不均等に混じる。
N
S
68.5m
1
SK103
1　7.5YR2/3黒褐色シルトしまりなし。褐色粘土のブロック(φ８mm 以下)が混じる。
N
S
65.5m
2
1
SK104
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ５mm 以下)が混じる。
2　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ60mm 以下)が多量に混じる。
W
E
66.4m
1
SK113
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が混じる。
W
E
66.4m
1
SK114
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。
W
E
66.3m
2
1
SK119
1　7.5YR2/3極暗色シルトしまりなし。褐色粘土ブロック(φ30mm 以下)が混じる。
2　7.5YR3/2黒褐色シルトしまりあり。
W
E
66.6m
1
SK123
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　褐色粘土が一部不均等に混じる。
N
S
66.4m
1
2
SK127
1　7.5YR3/2黒褐色シルト
2　10YR3/4暗褐色シルト
W
E
66.4m
1
2
SK130
1　7.5YR3/2黒褐色シルト
2　7.5YR4/4褐色シルトしまりあり。
W
E
66.4m
1
SK132
1　7.5YR3/2黒褐色シルト褐色粘土ブロック(φ３mm 以下)が粒状に混じる。
N
S
66.2m
1
SK135
1　7.5YR3/2黒褐色シルト褐色粘土が不均等に混じる。
N
S
66.7m
1
SK154
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。
N
S
66.7m
1
SK155
1　7.5YR3/2黒褐色シルトしまりなし。
N
S
66.6m
1
SK156
1　7.5YR3/2黒褐色シルトしまりなし。
W
E
66.6m
1
2
SK163
1　7.5YR3/2黒褐色シルト褐色粘土ブロック(φ20mm 以下)が混じる。
2　10YR4/4褐色シルトしまりあり。
W
E
66.8m
1
SK169
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりあり。長さ５～10mm の亜角礫が混じる。
W
E
66.8m
1
SK170
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。
W
E
66.6m
1
2
SK158
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10mm 以下)が混じる。
2　10YR4/4褐色粘土しまりあり。１の土が不均等に混じる。
0
2m
(S＝1/50)

図71　近世～近代の土坑

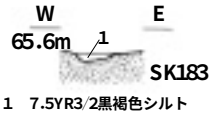


1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。細かい植物の根が混じる。
2　7.5YR3/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10mm以下)が混じる。
3　10YR3/4暗褐色粘土　しまりあり。2が不均等に混じる。

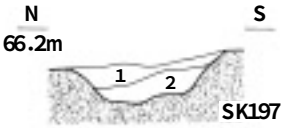


1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ５mm以下)が混じる。

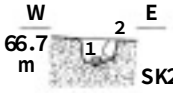
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ10mm以下)が混じる。



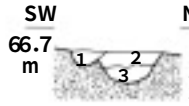
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ15mm以下)が混じる。



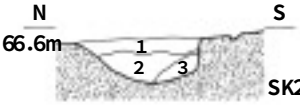
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ40mm以下)が不均等に混じる。
2　10YR2/2黒褐色シルト　しまりなし。



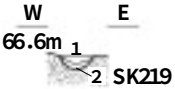
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりあり。
2　7.5YR 褐色シルト　しまりあり。



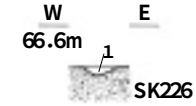
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ５mm以下)が不均等に混じる。
2　10YR2/3黒褐色シルト　しまりあり。
3　10YR3/4暗褐色シルト　しまりあり。褐色粘土ブロック(φ５mm以下)が混じる。



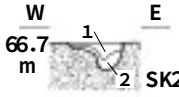
1　10YR2/3黒褐色シルト
2　10YR3/4暗褐色シルト
3　10YR2/3黒褐色シルト　しまりなし



1　7.5YR3/2黒褐色シルト
2　10YR3/4暗褐色シルト

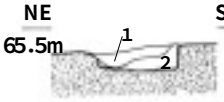


1　7.5YR3/2黒褐色シルト



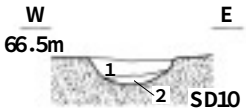
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。
2　10YR3/4暗褐色シルト

1　7.5YR3/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ５～20mm)が混じる。

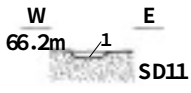


1　7.5YR3/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ30mm以下)が多量に混じる。炭化物(φ５mm以下)が上部に混じる。
2　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ５mm以下)が粒状に細かく混じる。

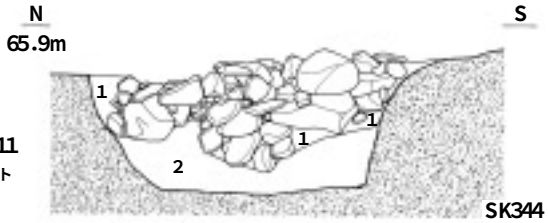
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ５mm以下)が粒状に細かく混じる。



1　10YR3/3暗褐色シルト　しまりなし。
2　10YR3/4暗褐色シルト　粘性あり。

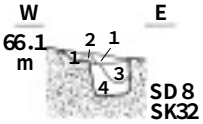


1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。

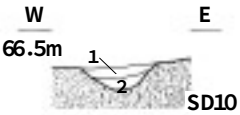


1　10YR3/4暗褐色シルト　しまりなし。
2　10YR4/4褐色シルト　しまりなし。

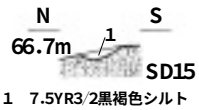
(SK344のみ S＝1/20)



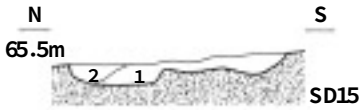
1　7.5YR 黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ３mm以下)が多く粒状に混じる。
2　10YR2/3黒褐色粘土　しまりあり。
3　10YR4/3にぶい黄褐色シルト
4　10YR4/4褐色粘土　しまりあり。亜角礫(長さ３mm以下)がわずかに混じる。



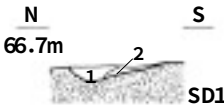
1　10YR3/3暗褐色シルト　しまりなし。
2　10YR3/4暗褐色シルト　1より粘性あり。



1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ10mm以下)が密に混じる。



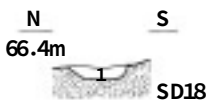
1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ10mm)以下が多く混じる。
2　10YR4/4褐色粘土　しまりあり。



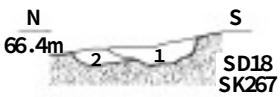
1　7.5YR3/2黒褐色シルト
2　10YR3/3暗褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ８mm以下)が不均等に混じる。

1　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりなし。

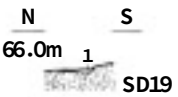
(S＝1/50)



1　7.5YR3/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ３mm以下)が混じる。



1　7.5YR3/2黒褐色シルト　褐色粘土ブロック(φ10mm以下)が混じる。
2　7.5YR3/2黒褐色シルト　しまりあり。



1　7.5YR 黒褐色シルト　しまりなし。褐色粘土ブロック(φ３mm以下)が粒状に混じる。

図72　近世～近代の土坑・溝

出土遺物（図73）

近世～近代に属する遺物以外は、すべて混入である。

SK９（195・196）　いずれも瀬戸美濃産である。195は練鉢であり、口縁部が外折する。196は土瓶であるが、底部外面には煤が付着していない。

SK14（197）　縄文土器深鉢であり、口縁部の折り返し幅は薄い。

SK38（199）　瀬戸美濃産の擂鉢である。口縁端部上面は丸く、同側面には１条の沈線文が巡る。

SK114（198）　縄文土器の底部破片である。

SK197（200・201）　200は縄文土器深鉢Ｂ類である。隆帯で区画文を配し、その内側に工具Ａ（Ｂ・Ｃ）による沈線文と条線を施す。201は弥生土器で、条痕文系の内傾口縁壺とした。口縁端部に約１㎝の平坦面を有し、端部内側はわずかに肥厚する。

SK205（202）　縄文土器深鉢Ａ３で、口縁端部に工具Ａ（Ｂ）による押引沈線文、その直下に粘土紐による格子目文を施す。

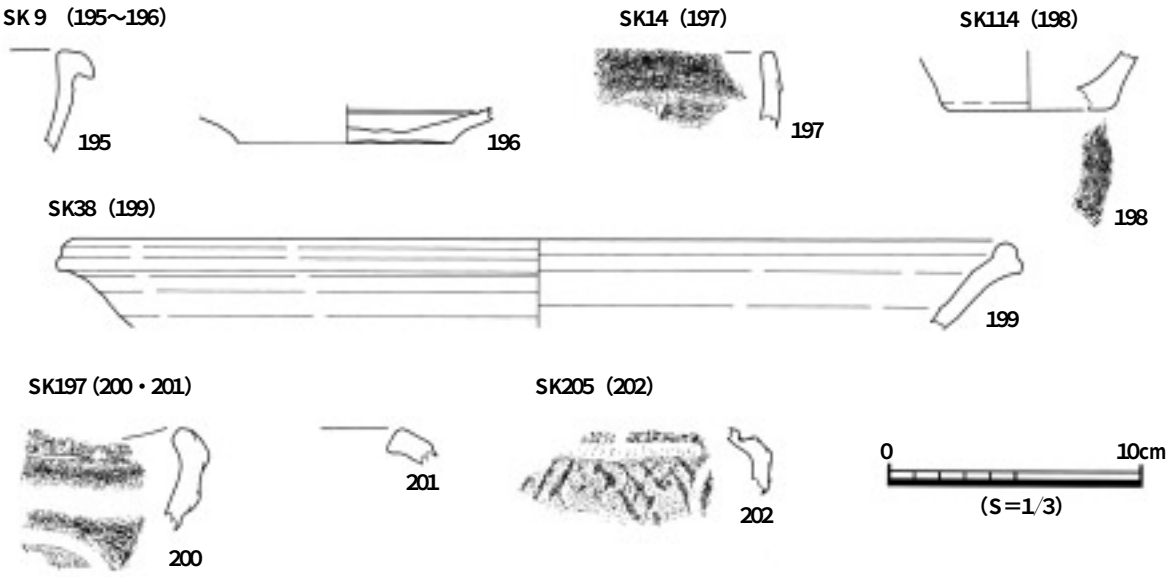


図73　近世～近代の遺構出土遺物

観察表凡例（表９～25）

遺構一覧表（表９～15）のうち、主軸方位は遺構の長軸が短軸の1.3倍以上の遺構について掲載した。平面形、底部断面、堆積状況は図８の分類に従った。規模（長軸・短軸・深さ）のうち、カッコを付した数値は残存値を示す。切り合いは「Ａ＞Ｂ」の場合、Ａの遺構がＢの遺構を切ることを示す。

出土遺物一覧表（表16・17）の数値は、接合前の破片数を示す。

遺物観察表（表18～25）の法量（口径・底径・器高）のうち、カッコを付した数値は推定値を示す。なお、石器の法量は上段より長さ・幅・厚さを示す。

表９　遺構一覧表（１）

遺構番号	区画	時　期	平面形	底部形態	堆積状況	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	主軸方位	切り合い	挿図番号	図版番号	旧遺構名	備　考
SB１	B６	弥生	c	B	2	6.00	(5.00)	0.22	N0°	＜SK103	40～43	4	S001	
SB２	D４	弥生	c	B	2	6.23	(5.25)	0.02	N0°	＞P44.＜SK55, SD10・11	44～47	4	S409/432	
SB３	D２	弥生	c	B	2	(4.30)	(4.00)	0.09	N27°W	＜SK20	48・49	4	S046	
SB４	B１	縄文	c	B	2	(5.80)	(5.20)	0.07	N27°W	＜SK２	21～23	2	S035	
SH１	D４	弥生	—	—	—	4.44	4.00	—	N60°W		50・51	4		
SH２	C６	弥生	—	—	—	4.80	3.00	—	N0°		51・52	4		
SH３	C６	縄文	—	—	—	4.81	4.21	—	N60°W		24～26	3		
SA１	E８	弥生	—	—	—	(8.80)	—	—	N24°E		53			
SZ１	E10	弥生	—	—	—	—	—	—	N57°W		54・56	5		
SZ２	E６	弥生	—	—	—	—	—	—	N10°W		55・56	5		
SZ３	E４	弥生	—	—	—	5.20	—	—	N0°		55・56	5		
P１	B６	弥生	b	B	1	0.30	0.26	0.30			40～43		S487	SB１内
P２	B６	弥生	b	B	1	0.34	0.29	0.44			40～43		S488	SB１内
P３	A６	弥生	b	B	2	0.21	0.20	0.27			40～43		S490	SB１内
P４	A６	弥生	b	B	1	0.23	0.17	0.26	N21°E		40～43		S491	SB１内
P５	B６	弥生	d	A	3	0.19	0.19	0.06			40～43		S489	SB１内
P６	A６	弥生	b	A	3	0.17	0.14	0.03			40～43		S492	SB１内
P７	A６	弥生	b	C	2	0.27	0.20	0.13	N89°E		40～43		S493	SB１内
P８	C４	弥生	b	A	4	0.33	0.20	0.49	N77°W		44～47		S412	SB２内
P９	D４	弥生	b	A	1	0.24	0.22	0.42			44～47		S425	SB２内
P10	C４	弥生	d	B	1	0.22	0.22	0.34			44～47		S427	SB２内
P11	D４	弥生	b	A	3	0.37	0.23	0.29	N21°W		44～47		S505	SB２内
P12	D４	弥生	b	A	3	(0.36)	0.35	0.12			44～47		S515	SB２内
P13	D２	弥生	d	A	3	0.70	0.60	0.20			48・49		S052	SB３内
P14	D２	弥生	b	B	3	0.32	0.25	0.44			48・49		S054	SB３内
P15	D２	弥生	a	B	1	0.25	0.25	0.29		＜SD９	48・49		S517	SB３内
P16	C２	弥生	a	B	1	0.23	0.23	0.32			48・49		S518	SB３内
P17	C２	弥生	b	B	1	0.38	0.22	0.29	N11°E		48・49		S519	SB３内
P18	D２	弥生	b	B	2	0.88	0.60	0.38	N61°E		48・49		S523	SB３内
P19	D２	弥生	b	A	1	0.37	0.30	0.19			48・49		S524	SB３内
P20	D２	弥生	d	A	3	0.60	0.60	0.32			48・49		S527	SB３内
P21	D２	弥生	b	A	1	0.34	0.31	0.22			48・49		S529	SB３内
P22	D２	弥生	b	B	3	(0.32)	0.30	0.08			48・49		S530	SB３内
P23	D２	弥生	b	A	3	0.64	(0.42)	0.12	N30°W		48・49		S531	SB３内
P24	B１	縄文	b	B	1	0.87	0.60	0.27	N1°E	＜P25	21～23		S532	SB４内
P25	B１	縄文	b	B	1	0.76	0.72	0.22		＞P24	21～23		S533	SB４内
P26	A１	縄文	d	A	5	0.65	0.59	0.43			21～23		S551	SB４内
P27	B１	縄文	b	B	3	0.63	0.39	0.10	N89°W	＜SK23	21～23		S554	SB４内
P28	B１	縄文	b	B	2	1.00	0.63	0.46	N2°W		21～23		S558	SB４内
P29	B１	縄文	b	A	2	1.10	0.72	0.27	N25°W		21～23		S559	SB４内
P30	B１	縄文	b	B	1	0.69	0.49	0.12	N42°E		21～23		S560	SB４内
P31	B１	縄文	b	B	4	0.54	0.51	0.29			21～23		S561	SB４内
P32	B１	縄文	b	A	1	0.52	0.40	0.19	N89°E		21～23		S562	SB４内
P33	B１	縄文	a	B	1	0.34	0.31	0.11			21～23		S563	SB４内
P34	B１	縄文	a	A	1	0.39	0.37	0.24			21～23		S564	SB４内
P35	B１	縄文	d	A	1	0.99	0.53	0.34			21～23		S565	SB４内
P36	B１	縄文	b	A	4	0.90	0.45	0.44	N42°E		21～23		S568	SB４内
P37	B１	縄文	a	B	5	0.40	0.30	0.29			21～23		S569	SB４内
P38	E４	弥生	b	B	2	0.37	0.33	0.42			50・51		S420	SH１内
P39	E４	弥生	a	A	5	0.34	0.30	0.46			50・51		S379	SH１内
P40	E５	弥生	a	A	1	0.34	0.32	0.43			50・51		S376	SH１内
P41	E５	弥生	b	B	1	0.29	0.22	0.51	N16°W		50・51		S381	SH１内
P42	E５	弥生	a	A	5	0.30	0.29	0.36			50・51		S389	SH１内
P43	D５	弥生	a	A	3	0.29	0.26	0.27		＜SD12	50・51		S466	SH１内
P44	D４	弥生	d	B	3	0.27	0.25	0.11		＜SB２	50・51		S511	SH１内
P45	C６	弥生	a	B	2	0.23	0.22	0.23			51・52		S350	SH２内
P46	C６	弥生	b	B	1	0.24	0.13	0.29	N65°W		51・52		S447	SH２内
P47	D６	弥生	b	B	4	0.27	0.22	0.37		＞P59	51・52		S463	SH２内
P48	D６	弥生	a	B	3	0.26	0.26	0.44			51・52		S336	SH２内
P49	C６	弥生	d	B	1	0.21	0.20	0.33			51・52		S343	SH２内
P50	C６	弥生	d	A	5	0.93	0.80	0.29		＜SD15	51・52		S349	SH２内
P51	D５	縄文	b	B	3	0.97	0.64	0.82	N28°E		24～26	3	S403	SH３内
P52	D６	縄文	b	B	4	0.82	0.41	0.77	N11°E	＜SK131・138	24～26		S323	SH３内
P53	E６	縄文	b	B	3	1.62	0.90	1.06	N17°W	＞SK162	24～26	3	S278	SH３内
P54	D６	縄文	d	B	3	0.59	0.47	0.69			24～26		S312	SH３内
P55	D７	縄文	b	B	3	1.30	0.80	0.80	N24°W	＞P56, SK198	24～26	3	S300	SH３内
P56	D７	縄文	b	B	3	(0.60)	0.50	0.79		＜P55	24～26		S302	SH３内
P57	D６	縄文	b	B	3	0.44	0.35	0.57			24～26		S337	SH３内
P58	C６	縄文	b	B	3	1.10	(0.77)	0.69	N33°E	＜SD14	24～26	3	S333	SH３内
P59	D６	縄文	b	B	2	0.39	0.34	0.73		＜P47	24～26		S330	SH３内

表10　遺構一覧表（２）

遺構番号	区画	時　期	平面形	底部形態	堆積状況	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	主軸方位	切り合い	挿図番号	図版番号	旧遺構名	備　考
P60	E７	弥生	a	A	4	0.31	0.29	0.39		＞SK212	53		S241	SA１内
P61	E７	弥生	a	B	3	0.25	0.24	0.24			53		S281	SA１内
P62	E８	弥生	a	B	1	0.20	0.20	0.49		＜SD18	53		S496	SA１内
P63	D８	弥生	a	B	5	0.21	0.20	0.50			53		S187	SA１内
P64	D８	弥生	a	A	4	0.18	0.18	0.31			53		S186	SA１内
P65	D８	弥生	a	A	3	0.29	0.28	0.19			53		S184	SA１内
P66	D８	弥生	b	B	3	0.24	0.22	0.20			53		S182	SA１内
P67	E８	弥生	d	A	1	0.20	0.19	0.24			53		S147	SA１内
P68	E８	弥生	a	A	5	0.20	0.20	0.27		＜SK271	53		S144－２	SA１内
P69	C４	弥生	a	A	2	0.22	0.21	0.10			44～47		S413	SB２内
P70	C４	弥生	a	A	2	0.37	0.37	0.13		＞P71	44～47		S414	SB２内
P71	C４	弥生	a	A	1	(0.18)	0.18	0.07		＜P70	44～47		S415	SB２内
P72	D４	弥生	b	A	2	0.30	0.29	0.16			44～47		S426	SB２内
P73	D４	弥生	a	A	2	0.14	0.12	0.07			44～47		S498	SB２内
P74	D４	弥生	b	B	1	0.25	0.17	0.07	N20°E		44～47		S499	SB２内
P75	C４	弥生	b	B	1	0.37	0.31	0.16			44～47		S502	SB２内
P76	D４	弥生	b	A	2	0.39	0.21	0.16	N13°E		44～47		S506	SB２内
P77	D４	弥生	a	A	2	0.20	0.16	0.10			44～47		S507	SB２内
P78	D４	弥生	b	A	1	0.31	0.25	0.09			44～47		S508	SB２内
P79	D３	弥生	b	A	2	0.39	0.35	0.16			44～47		S512	SB２内
P80	D４	弥生	a	A	4	0.35	0.32	0.21			44～47		S513	SB２内
P81	D４	弥生	b	C	1	0.25	0.20	0.09			44～47		S516	SB２内
P82	D４	弥生	b	B	1	0.27	0.20	0.26			44～47		S553	SB２内
SC１	B６	弥生	a	A	2	0.60	0.45	0.05	N68°W		40～43		―	SB１内
SC２	B１	縄文	d	C	3	2.47	1.60	0.57	N81°E		21～23	2	S555	SB４内
SK１	D４	弥生	d	B	3	0.73	0.69	0.19			44～47	4	S503	SB２内
SK２	A１	縄文～弥生	b	A	1	(1.55)	(1.30)	0.10		＞SB４			S552	
SK３	C１	縄文～弥生	b	A	2	0.80	0.68	0.21			63		S036	
SK４	D１	縄文	d	A	3	0.56	0.47	0.36		＞SK６	28		S521	
SK５	D１	縄文～弥生	a	A	1	0.24	0.25	0.20			63		S047	
SK６	D１	縄文	b	A	1	0.93	0.67	0.21	N１°W	＜SK４	28		S051	
SK７	D１	縄文～弥生	b	B	1	0.40	0.36	0.17			63		S087	
SK８	D１	縄文～弥生	a	B	2	(0.29)	0.30	0.17			63		S522	
SK９	B２	近世～近代	c	B	1	8.55	0.90	0.17	N71°W	＞SK29	71		S042	
SK10	B２	近世～近代	c	B	1	2.30	0.95	0.05	N71°W				S055	
SK11	C１	縄文～弥生	b	B	3	0.37	0.29	0.20		＜SK12	63		S520	
SK12	C２	弥生	b	B	3	4.95	2.42	0.36	N62°W	＞SK11	57		S037	
SK13	C２	近世～近代	c	B	1	1.72	0.89	0.31	N76°W	＞SK16/19	71		S040	
SK14	C２	近世～近代	c	B	1	3.23	0.90	0.23	N75°W		71		S041	
SK15	C２	縄文	b	B	1	(0.67)	0.76	0.10		＜SK17・18	28		S045	
SK16	C２	縄文～弥生	d	A	1	1.23	(0.34)	0.33	N81°E	＜SK13	63		S525	
SK17	C２	縄文～弥生	c	A	2	1.50	1.00	0.29	N69°W	＞SK15	28		S526	
SK18	C２	弥生	a	B	2	0.36	0.32	0.30		＞SK15	58		S528	
SK19	C２	縄文～弥生	a	A	1	0.36	(0.16)	0.21	N７°E	＜SK13	63		S547	
SK20	D２	弥生	a	C	4	0.18	0.17	0.11		＞SB３	58		S050	
SK21	D２	縄文	a	B	3	0.37	0.39	0.17			28		S043	
SK22	D２	縄文	a	B	2	0.67	0.65	0.36			27	2	S048	
SK23	E２	近世～近代	b	B	1	1.40	1.03	0.21	N27°E	＞P27	71		S044	
SK24	E２	縄文	b	B	1	1.00	0.60	0.16	N85°W	＜SK25	28		S540	
SK25	E２	縄文～弥生	d	A	1	0.38	0.27	0.16	N62°W	＞SK24	28		S541	
SK26	E２	縄文～弥生	a	A	3	1.08	1.02	0.26			63		S542	
SK27	E２	縄文	a	A	1	0.70	0.70	0.21			28		S543	
SK28	E２	縄文～弥生	b	C	1	0.24	0.18	0.16	N28°W		63		S545	
SK29	B３	縄文～弥生	b	B	1	1.02	0.60	0.24	N72°W	＜SK９	63		S445	
SK30	B３	縄文～弥生	a	A	4	0.28	0.23	0.10			63		S446	
SK31	C３	縄文	b	B	5	0.40	0.34	0.29			28		S436	
SK32	C３	縄文～弥生	b	A	4	0.30	0.27	0.27		＜SD８	72		S537	
SK33	C３	縄文～弥生	b	C	1	1.10	0.91	0.27			64		S437	
SK34	C３	近世～近代	b	B	3	2.26	1.10	0.20	N67°W		71		S438	
SK35	C３	縄文	b	B	2	0.72	0.59	0.30			28		S439	
SK36	C３	縄文	b	B	3	0.50	0.36	0.26	N86°W		28		S440	
SK37	C３	縄文	a	A	4	0.63	0.59	0.20			28		S442	
SK38	C３	縄文	b	A	4	1.14	(0.57)	0.36	N75°W		28		S443	
SK39	C３	縄文	b	B	5	0.54	0.43	0.21			28		S444	
SK40	D３	縄文	b	B	1	0.55	0.44	0.10			28		S429	
SK41	D３	近世～近代	c	B	1	1.36	1.00	0.09	N71°W		71		S433	
SK42	D３	縄文～弥生	b	A	3	0.68	0.47	0.16	N21°E		64		S514	
SK43	D３	縄文	b	B	2	0.77	0.58	0.11	N15°E		28		S534	
SK44	D３	縄文～弥生	b	A	4	0.47	0.38	0.13			64		S535	
SK45	D３	縄文	b	B	4	1.22	1.00	0.17			28		S536	

表11　遺構一覧表（３）

遺構番号	区画	時　期	平面形	底部形態	堆積状況	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	主軸方位	切り合い	挿図番号	図版番号	旧遺構名	備　考
SK46	E 2	縄文	a	C	3	0.41	0.40	0.21			28		S544	
SK47	E 3	縄文～弥生	b	B	2	0.24	0.18	0.27	N49°W		64		S423	
SK48	E 3	縄文～弥生	d	B	3	0.36	0.33	0.24			64		S538	
SK49	E 3	縄文～弥生	b	B	3	1.00	0.76	0.21	N66°E		64		S417	
SK50	E 3	縄文～弥生	b	B	1	0.37	0.27	0.11	N18°E		64		S422	
SK51	F 3	弥生	a	B	2	0.60	0.57	0.26			57		S003	
SK52	A 4	近世～近代	c	B	2	4.40	1.03	0.27	N75°W		71		S458	
SK53	B 4	近世～近代	b	A	1	0.67	0.51	0.07	N11°W		71		S451	
SK54	B 4	縄文～弥生	b	B	2	0.27	0.27	0.14			64		S455	
SK55	C 4	近世～近代	b	A	4	0.43	0.30	0.11	N28°E	＞SB 2	71		S428	
SK56	D 4	近世～近代	b	B	1	0.57	0.24	0.04	N70°W	＞SK57	71		S410	
SK57	D 4	縄文～弥生	b	B	1	0.34	0.30	0.17		＜SK56	71		S411	
SK58	D 4	縄文～弥生	a	B	1	0.20	0.18	0.13			64		S481	
SK59	E 4	弥生	b	B	2	0.47	0.32	0.30	N59°W		58		S418	
SK60	E 4	縄文～弥生	b	B	4	0.44	0.36	0.27			64		S378	
SK61	E 4	縄文～弥生	a	B	1	0.25	0.23	0.04			64		S419	
SK62	E 4	弥生	b	B	2	0.26	0.21	0.11			58		S504	
SK63	E 4	縄文～弥生	b	B	1	0.40	0.35	0.06			64		S510	
SK64	B 5	縄文～弥生	b	B	1	0.20	0.19	0.21		＜SD15	64		S454	
SK65	B 5	縄文～弥生	b	B	1	(0.72)	1.00	0.16		＜SD15	64		S457	
SK66	C 5	縄文	b	C	3	0.87	0.62	0.33			28		S347	
SK67	C 5	縄文	b	A	4	0.38	0.35	0.11			28		S408	
SK68	C 5	近世～近代	b	C	1	0.45	0.45	0.07			71		S449	
SK69	C 5	近世～近代	b	B	1	2.30	1.20	0.09	N72°W		71		S450	
SK70	D 5	近世～近代	a	B	1	0.30	0.29	0.23			71		S328	
SK71	D 5	縄文～弥生	d	B	1	0.36	0.29	0.40			64		S395	
SK72	D 5	縄文～弥生	d	A	2	0.24	0.24	0.21			64		S396	
SK73	D 5	縄文～弥生	a	B	4	0.27	0.27	0.33			64		S397	
SK74	D 5	近世～近代	b	C	3	0.37	0.31	0.29			71		S461	
SK75	D 5	近世～近代	b	A	3	0.34	0.19	0.11	N10°E		71		S399	
SK76	D 5	近世～近代	a	B	1	0.26	0.24	0.13			71		S400	
SK77	D 5	縄文～弥生	b	A	1	0.31	0.23	0.17	N45°E		64		S404	
SK78	D 5	縄文～弥生	b	A	1	0.31	0.26	0.13			64		S405	
SK79	D 5	縄文	b	C	4	0.37	0.26	0.17	N10°E		28		S406	
SK80	E 5	縄文	a	B	3	0.21	0.21	0.31			28		S371	
SK81	E 5	縄文	b	B	3	0.27	0.23	0.21			28		S375	
SK82	E 5	弥生	b	B	3	0.69	0.53	0.41	N84°E		58		S380	
SK83	E 5	縄文～弥生	d	B	3	0.19	0.19	0.16			64		S382	
SK84	E 5	縄文～弥生	b	B	5	0.39	0.36	0.21			64		S386	
SK85	E 5	縄文～弥生	b	B	3	0.33	0.27	0.40			64		S390	
SK86	E 5	縄文～弥生	a	A	1	0.16	0.16	0.21		＜SD 4	64		S464	
SK87	E 5	縄文～弥生	b	A	5	0.35	0.25	0.39	N12°W	＜SK150	64		S473	
SK88	E 5	弥生	b	B	1	0.62	0.43	0.16		＞SD 4	57	5	S370	
SK89	E 5	縄文～弥生	b	A	4	0.29	0.23	0.14			64		S373	
SK90	E 5	縄文～弥生	a	B	4	0.37	0.37	0.14			64		S374	
SK91	E 5	縄文～弥生	b	C	5	0.50	0.26	0.17	N8°E		64		S391	
SK92	E 5	近世～近代	b	A	2	0.50	0.23	0.17	N83°W	＜SD16	71		S392	
SK93	E 5	縄文～弥生	b	B	2	0.29	0.21	0.09	N40°W		64		S393	
SK94	E 5	縄文～弥生	b	A	1	0.33	0.27	0.24		＜SD16	64		S394	
SK95	E 5	縄文～弥生	b	A	3	0.27	0.19	0.14	N49°E	＜SD 7	64		S462	
SK96	E 5	弥生	a	A	1	0.51	0.50	0.14		＞SD 3	64		S467	
SK97	E 5	縄文～弥生	b	B	4	0.55	0.25	0.09	N67°W		64		S468	
SK98	F 5	縄文	d	B	1	(0.64)	0.59	0.10			28		S016	
SK99	F 5	近世～近代	b	B	1	(0.30)	(0.39)	0.08					S017	
SK100	F 5	縄文～弥生	b	A	1	0.23	0.21	0.07			64		S372	
SK101	F 5	縄文～弥生	a	C	1	0.17	0.17	0.11			64		S377	
SK102	A 6	縄文～弥生	b	C	1	0.37	0.31	0.14			65		S368	
SK103	A 6	近世～近代	c	A	1	1.45	1.07	0.30	N66°W	＞SB 1	71		S494	
SK104	B 6	近世～近代	c	A	2	2.55	0.93	0.20			71		S351	
SK105	B 6	近世～近代	c	B	1	0.24	0.17	0.10	N71°W				S352	
SK106	B 6	縄文	d	C	1	(0.70)	0.57	0.13		＜SK107	28		S354	
SK107	B 6	縄文～弥生	b	A	3	0.31	0.26	0.13		＞SK106	28		S475	
SK108	C 6	弥生	d	A	4	1.20	0.66	0.14	N4°E	＞SD14	57		S344	
SK109	C 6	縄文～弥生	b	C	4	0.75	0.48	0.30	N55°E		65		S348	
SK110	C 6	縄文～弥生	b	A	4	0.24	0.17	0.20	N65°W		65		S546	
SK111	D 6	縄文～弥生	a	C	2	0.33	0.30	0.34		＞SK124	65		S315	
SK112	D 6	縄文～弥生	b	C	1	0.22	0.20	0.19			65		S316	
SK113	D 6	近世～近代	b	B	1	0.34	0.26	0.20	N64°W		71		S326	
SK114	D 6	近世～近代	b	B	1	0.23	0.20	0.17			71		S327	
SK115	D 6	縄文～弥生	a	A	1	0.21	0.19	0.20			65		S486	

表12　遺構一覧表（４）

遺構番号	区画	時　期	平面形	底部形態	堆積状況	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	主軸方位	切り合い	挿図番号	図版番号	旧遺構名	備　考
SK116	D６	縄文～弥生	d	B	3	0.25	0.26	0.10		＜SD18	65		S495	
SK117	D６	縄文～弥生	a	A	2	0.25	0.23	0.14			65		S279	
SK118	D６	縄文	b	C	2	0.39	0.30	0.13	N11°E		29		S307	
SK119	D６	近世～近代	d	A	4	0.91	0.85	0.16			71		S308	
SK120	D６	弥生	a	A	3	0.21	0.20	0.14			58		S309	
SK121	D６	縄文～弥生	a	C	1	0.20	0.17	0.13			65		S310	
SK122	D６	縄文～弥生	b	C	1	0.19	0.18	0.11			56		S311	
SK123	D６	近世～近代	b	B	1	0.31	0.19	0.07	N89°W		71		S313	
SK124	D６	縄文～弥生	a	A	3	0.21	0.18	0.11		＜SK111	65		S314	
SK125	D６	縄文	a	B	1	0.35	0.31	0.13			29		S317	
SK126	D６	縄文～弥生	a	C	1	0.14	0.13	0.14			65		S318	
SK127	D６	近世～近代	b	B	3	0.24	0.20	0.11			71		S319	
SK128	D６	縄文～弥生	b	A	1	(0.23)	0.22	0.20			65		S320	
SK129	D６	縄文～弥生	a	A	1	0.22	0.22	0.10			65		S321	
SK130	D６	近世～近代	b	A	2	0.40	0.19	0.09	N63°W		71		S322	
SK131	D６	弥生	a	A	1	(0.23)	0.21	0.20		＞P52	58		S324	
SK132	D６	近世～近代	a	B	1	0.20	0.20	0.13			71		S325	
SK133	D６	縄文～弥生	a	A	1	0.19	0.18	0.10			65		S329	
SK134	D６	縄文～弥生	d	A	1	0.33	0.27	0.07			65		S331	
SK135	D６	近世～近代	d	A	1	0.28	0.28	0.10			71		S332	
SK136	D６	縄文	a	C	2	(0.23)	0.30	0.10		＜SK137	29		S334	
SK137	D６	縄文	b	B	1	0.43	0.30	0.06	N55°E	＞SK136	29		S335	
SK138	D６	縄文～弥生	b	B	1	0.29	0.24	0.37		＞P52	65		S471	
SK139	D６	縄文～弥生	b	B	1	0.39	0.34	0.16			65		S571	
SK140	E６	縄文～弥生	d	A	3	0.43	0.39	0.26			65		S460	
SK141	E６	縄文～弥生	b	B	1	0.24	0.19	0.23			65		S469	
SK142	E６	縄文～弥生	d	A	4	0.24	0.18	0.27	N45°W	＜SK150	65		S474	
SK143	E６	縄文～弥生	b	A	1	0.15	0.14	0.13		＜SD16	65		S484	
SK144	E６	縄文～弥生	a	A	1	0.21	0.20	0.21		＜SD16	65		S485	
SK145	E６	縄文	d	B	2	0.86	0.48	0.36	N51°W		29		S248	
SK146	E６	縄文～弥生	b	A	5	0.24	0.24	0.11			65		S251	
SK147	E６	縄文～弥生	b	A	2	0.35	0.33	0.26			29		S252	
SK148	E６	縄文～弥生	b	A	3	0.73	0.40	0.20	N81°W		65		S254	
SK149	E６	縄文～弥生	a	B	1	0.16	0.16	0.13			65		S257	
SK150	E６	縄文～弥生	b	C	1	0.65	0.31	0.10	N13°W	＞SK87・142	65		S258	
SK151	E６	縄文～弥生	b	B	3	0.36	0.27	0.23	N48°W		65		S259	
SK152	E６	縄文～弥生	b	B	1	0.14	0.13	0.14			65		S260	
SK153	E６	弥生	a	A	1	0.19	0.16	0.14			58		S261	
SK154	E６	近世～近代	b	B	1	0.37	0.18	0.04	N17°E		71		S262	
SK155	E６	近世～近代	d	B	1	0.47	0.41	0.10		＞SD16	71		S264	
SK156	E６	近世～近代	b	C	1	0.57	0.50	0.16			71		S265	
SK157	E６	近世～近代	b	B	1	0.56	0.40	0.19	N80°E		72		S266	
SK158	E６	近世～近代	a	B	2	0.35	0.33	0.07			71		S267	
SK159	E６	縄文～弥生	b	A	1	0.56	0.27	0.16	N9°W	＜SD16	65		S268	
SK160	E６	縄文	b	B	4	0.80	0.53	0.30	N64°E		29		S275	
SK161	E６	縄文～弥生	b	A	1	0.55	0.41	0.11	N14°E		65		S276	
SK162	E６	縄文	b	A	1	0.45	0.30	0.07	N80°W	＜P53	29		S277	
SK163	E６	近世～近代	b	A	1	0.33	0.34	0.14			71		S280	
SK164	E６	縄文～弥生	b	B	4	0.30	0.21	0.17	N30°W		65		S470	
SK165	E６	縄文	b	A	3	0.98	0.90	0.16		＜SK167	56		S566	
SK166	E６	縄文～弥生	b	B	1	0.53	0.24	0.19	N66°W	＞SK167	65		S567	
SK167	E６	縄文～弥生	b	B	1	0.53	0.30	0.24	N24°W	＞SK165.＜SK166	65		S570	
SK168	F６	縄文～弥生	b	A	2	0.64	0.38	0.33	N23°E		65		S243	
SK169	F６	近世～近代	b	B	1	0.36	0.29	0.11			71		S244	
SK170	F６	近世～近代	b	C	1	0.38	0.32	0.10			71		S245	
SK171	A７	縄文～弥生	b	A	3	0.58	0.33	0.11	N3°E		65		S366	
SK172	A７	縄文～弥生	a	A	2	0.19	0.16	0.36			65		S367	
SK173	B７	縄文～弥生	b	C	1	0.24	0.19	0.16			65		S353	
SK174	B７	縄文	b	B	1	0.28	0.23	0.06			29		S358	
SK175	B７	縄文～弥生	b	B	1	0.27	0.18	0.06	N61°W		66		S359	
SK176	B７	縄文	b	B	2	0.78	0.51	0.27	N65°W	＞SK180	29		S360	
SK177	B７	弥生	b	C	4	0.47	0.44	0.13			58		S361	
SK178	B７	縄文～弥生	b	B	2	0.41	0.28	0.16	N55°E		66		S362	
SK179	B７	縄文	b	B	3	1.57	1.11	0.50	N7°W	＜SK181	29		S365	
SK180	B７	縄文	b	C	4	(0.86)	0.70	0.29		＜SK176	29		S479	
SK181	B７	近世～近代	d	B	1	1.33	0.30	0.03	N81°W	＞SK179	72		S483	
SK182	C７	近世～近代	c	B	1	3.90	0.88	0.10	N70°W		72		S355	
SK183	C７	近世～近代	d	B	1	0.37	0.35	0.06			72		S356	
SK184	C７	縄文	b	B	2	0.36	0.32	0.11			29		S357	
SK185	D７	縄文	a	B	3	0.25	0.25	0.20			29		S298	

表13　遺構一覧表（５）

遺構番号	区画	時　期	平面形	底部形態	堆積状況	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	主軸方位	切り合い	挿図番号	図版番号	旧遺構名	備　考
SK186	D７	縄文～弥生	a	B	1	0.21	0.10	0.20	N24°W		66		S303	
SK187	D７	縄文～弥生	b	B	5	0.54	0.37	0.46	N25°W		66		S304	
SK188	D７	弥生	b	A	1	0.94	0.80	0.15		＞SK189	58		S188	
SK189	D７	弥生	b	A	1	0.78	0.47	0.15		＜SK188	58		S189	
SK190	D７	縄文	b	B	3	1.02	0.64	0.24	N52°W	＞SK192	29		S191	
SK191	D７	縄文～弥生	b	B	3	0.32	0.25	0.13			66		S193	
SK192	D７	縄文	b	B	3	0.63	(0.27)	0.20	N55°E	＜SK190	29		S293	
SK193	D７	縄文	b	A	3	1.25	0.70	0.20	N71°W		29		S294	
SK194	D７	縄文	b	B	3	0.52	0.39	0.19	N74°E		29		S295	
SK195	D７	縄文～弥生	b	C	2	0.20	0.16	0.17			66		S296	
SK196	D７	縄文～弥生	b	B	3	0.31	0.24	0.11			66		S297	
SK197	D７	近世～近代	b	B	4	1.00	0.61	0.26	N25°E		72		S299	
SK198	D７	縄文	b	A	1	(0.80)	0.66	0.45		＜P55			S301	
SK199	D７	縄文～弥生	a	B	2	0.53	0.43	0.21		＞SK200	66		S305	
SK200	D７	縄文～弥生	a	B	1	0.43	(0.43)	0.21		＜SK199	66		S306	
SK201	D７	縄文～弥生	b	B	3	(0.42)	(0.40)	0.20			29		S338	
SK202	D７	縄文	b	A	3	0.60	0.55	0.20					S339	
SK203	D７	縄文	b	B	1	0.28	0.25	0.05			29		S340	
SK204	D７	縄文～弥生	a	B	3	(0.20)	0.21	0.05		＜SD２	66		S459	
SK205	E７	近世～近代	b	A	4	0.53	0.29	0.24	N14°W		72		S246	
SK206	E７	近世～近代	a	A	1	0.27	0.23	0.20		＞SK215	72		S270	
SK207	E７	縄文	b	B	1	0.45	0.37	0.29		＜SK222	29		S287	
SK208	E７	縄文～弥生	b	B	1	0.28	0.28	0.20		＞SD16	66		S476	
SK209	E７	縄文～弥生	b	B	1	0.21	0.20	0.21		＞SD16	66		S477	
SK210	E７	縄文	b	B	2	(0.16)	0.16	0.24			29		S480	
SK211	E７	縄文	d	B	1	0.21	0.21	0.09			29		S239	
SK212	E７	縄文～弥生	b	C	1	0.40	0.36	0.20		＜P60	66		S240	
SK213	E７	近世～近代	b	B	3	0.89	0.41	0.31	N24°E	＞SD16	72		S263	
SK214	E７	縄文～弥生	a	C	3	0.26	0.21	0.11			66		S269	
SK215	E７	縄文～弥生	b	A	2	0.61	0.37	0.20	N50°W	＜SK206	72		S271	
SK216	E７	縄文～弥生	b	A	4	0.73	0.51	0.21	N87°W	＜SK217	66		S273	
SK217	E７	縄文～弥生	a	C	1	0.24	0.24	0.11		＞SK216	66		S274	
SK218	E７	縄文～弥生	b	B	3	0.36	0.23	0.13	N34°W		66		S282	
SK219	E７	近世～近代	a	A	3	0.22	0.21	0.09			72		S283	
SK220	E７	縄文～弥生	d	A	1	0.23	0.23	0.30			66		S284	
SK221	E７	縄文～弥生	b	A	1	0.30	0.26	0.16			66		S285	
SK222	E７	弥生	b	A	3	(0.40)	0.36	0.16		＞SK207	29		S286	
SK223	E７	縄文～弥生	b	B	3	0.31	0.26	0.14					S289	
SK224	E７	縄文～弥生	b	B	1	(0.17)	0.11	0.06	N88°E	＞SK225	29		S290	
SK225	E７	縄文	a	B	3	0.63	0.53	0.34		＜SK224	29		S291	
SK226	E７	近世～近代	a	A	2	0.21	0.21	0.10			72		S292	
SK227	E７	縄文～弥生	b	B	1	0.27	0.24	0.07		＜SD16	66		S478	
SK228	F７	近世～近代	b	A	3	0.38	0.30	0.17			72		S238	
SK229	F７	縄文～弥生	b	A	3	0.45	0.40	0.14		＞SK92・94・143・144・159・208・209・227.＜SK155・213	66		S026	
SK230	F７	近世～近代	b	A	1	0.41	0.34	0.10			72		S237	
SK231	F７	縄文～弥生	b	A	2	0.52	0.38	0.21	N70°E		66		S242	
SK232	B８	縄文	b	A	1	0.28	0.22	0.07	N65°E		29		S211	
SK233	B８	縄文～弥生	a	A	3	0.23	0.22	0.06			29		S218	
SK234	B８	縄文	b	B	1	0.74	0.33	0.09	N17°E		29		S219	
SK235	B８	縄文～弥生	a	C	5	0.33	0.31	0.06			66		S220	
SK236	B８	縄文～弥生	b	B	1	0.35	0.23	0.09	N8°W		66		S228	
SK237	B８	縄文～弥生	a	B	2	0.42	0.36	0.06			66		S229	
SK238	B８	縄文	b	B	1	1.49	0.67	0.14	N60°W		29		S500	
SK239	B８	縄文～弥生	b	B	1	0.62	0.47	0.10	N38°E		29		S501	
SK240	C８	縄文	b	B	1	1.08	0.51	0.10	N10°E	＜SK241	30		S202	
SK241	C８	縄文	b	A	1	0.57	(0.40)	0.10	N58°W	＞SK240	29		S204	
SK242	C８	縄文～弥生	b	B	1	0.50	0.44	0.06			66		S208	
SK243	C８	縄文	b	B	3	0.47	0.45	0.06			29		S209	
SK244	C８	縄文～弥生	b	A	3	0.38	0.30	0.13			66		S210	
SK245	C８	縄文～弥生	a	C	1	0.24	0.23	0.16			66		S212	
SK246	C８	縄文～弥生	b	B	1	0.42	0.23	0.09	N45°E		66		S213	
SK247	C８	縄文～弥生	a	B	2	0.31	0.29	0.09			66		S214	
SK248	C８	縄文～弥生	b	A	1	0.33	0.23	0.07	N79°W		66		S216	
SK249	D８	縄文	a	A	2	0.35	0.35	0.07			29		S150	
SK250	D８	縄文～弥生	a	B	1	0.26	0.22	0.13			67		S151	
SK251	D８	縄文	b	B	1	0.70	0.70	0.14		＜SK290・292	30		S161	
SK252	D８	近世～近代	d	B	2	0.36	0.33	0.21		＞SK253	30		S162	
SK253	D８	縄文	d	B	1	0.37	(0.26)	0.10	N72°E	＜SK252	30		S163	

表14　遺構一覧表（６）

遺構番号	区画	時　期	平面形	底部形態	堆積状況	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	主軸方位	切り合い	挿図番号	図版番号	旧遺構名	備　考
SK254	D８	縄文	d	C	1	0.45	0.42	0.11			30		S177	
SK255	D８	縄文	b	B	3	0.36	0.27	0.10	N89°W		30		S178	
SK256	D８	縄文	b	C	1	0.43	0.33	0.13	N11°W		30		S179	
SK257	D８	縄文～弥生	b	B	3	0.42	0.25	0.06	N76°W		67		S183	
SK258	D８	縄文～弥生	d	B	3	0.45	0.40	0.19			67		S185	
SK259	D８	縄文	b	B	2	0.21	0.18	0.13			30		S190	
SK260	E８	縄文～弥生	b	A	1	0.37	0.19	0.20	N24°E		67		S136	
SK261	E８	弥生	a	C	3	0.44	0.39	0.20			58		S139	
SK262	E８	縄文～弥生	b	A	3	0.33	0.24	0.36	N57°E		67		S236	
SK263	E８	縄文～弥生	b	B	3	0.40	0.30	0.21	N35°E		67		S132	
SK264	E８	縄文	a	A	1	0.30	0.30	0.17		＞SK265	30		S133	
SK265	E８	縄文	a	A	3	0.21	(0.20)	0.16		＜SK264	30		S134	
SK266	E８	縄文～弥生	b	A	5	0.44	0.29	0.17	N3°W		67		S135	
SK267	E８	近世～近代	b	B	1	0.74	0.69	0.11		＞SD18	72		S137	
SK268	E８	縄文～弥生	b	A	1	0.33	0.30	0.07			67		S138	
SK269	E８	縄文～弥生	b	B	1	0.44	0.31	0.10	N67°E		67		S142	
SK270	E８	縄文～弥生	b	B	1	0.40	0.32	0.14			67		S143	
SK271	E８	弥生	a	A	1	0.24	0.22	0.10		＞P68	67		S144	
SK272	E８	縄文～弥生	b	B	1	1.02	0.88	0.18					S145	
SK273	E８	縄文～弥生	b	B	1	0.34	0.22	0.06	N11°W		67		S148	
SK274	E８	縄文～弥生	b	A	1	0.22	0.19	0.06			67		S149	
SK275	F８	近世～近代	b	B	1	(0.45)	(0.53)	0.13					S029	
SK276	B９	縄文	b	B	1	0.40	(0.32)	0.07		＜SK288	30		S222	
SK277	B９	縄文	b	B	1	0.35	(0.30)	0.07		＜SK278	30		S223	
SK278	B９	縄文	b	A	1	0.50	0.44	0.07		＞SK277	30		S224	
SK279	B９	縄文	b	A	4	0.36	0.25	0.11	N3°W		30		S225	
SK280	B９	縄文	d	B	2	3.72	(2.80)	0.45	N71°W		27	2	S227	
SK281	B９	縄文～弥生	b	B	1	(0.60)	0.17	0.06	N59°W				S230	
SK282	B９	縄文～弥生	a	A	2	0.18	0.17	0.17			67		S234	
SK283	B９	縄文～弥生	a	A	1	0.25	0.20	0.05			27		S556	
SK284	B９	縄文～弥生	a	A	1	0.55	0.31	0.04	N55°E		27		S557	
SK285	B９	縄文～弥生	a	A	1	0.36	0.24	0.07	N21°E		27		S557－２	
SK286	C９	縄文～弥生	d	B	3	0.28	0.27	0.20			67		S205	
SK287	C９	縄文～弥生	d	A	3	0.36	0.31	0.17			67		S206	
SK288	C９	縄文	b	B	1	0.48	0.33	0.07	N65°W	＞SK276	30		S221	
SK289	C９	縄文～弥生	b	B	4	0.45	0.30	0.11	N40°E		67		S226	
SK290	D９	縄文～弥生	b	A	4	0.28	0.20	0.20	N48°W	＞SK251	67		S158	
SK291	D９	縄文～弥生	a	A	2	0.28	0.24	0.27			67		S200	
SK292	D９	縄文～弥生	b	A	1	0.36	(0.20)	0.20	N18°W	＞SK251			S159	
SK293	D９	縄文	b	B	3	0.31	0.22	0.11	N38°E	＜SK294	30		S164	
SK294	D９	縄文～弥生	b	B	1	0.25	0.24	0.09		＞SK293	30		S165	
SK295	D９	縄文	b	B	3	0.49	0.33	0.27	N86°W		30		S166	
SK296	D９	弥生	b	B	1	0.99	0.74	0.16	N79°E		58		S167	
SK297	D９	縄文	b	B	1	(0.41)	0.37	0.06		＜SK298	30		S168	
SK298	D９	縄文	a	A	1	0.19	0.18	0.11		＞SK297	30		S169	
SK299	D９	縄文	b	B	4	0.50	0.26	0.11	N38°W		30		S170	
SK300	D９	縄文～弥生	b	C	3	0.45	0.30	0.17	N66°E		67		S171	
SK301	D９	縄文	d	A	2	0.29	0.22	0.11	N53°W		30		S173	
SK302	D９	縄文	d	A	3	1.00	0.69	0.20	N12°W		27		S174	
SK303	D９	縄文～弥生	b	A	3	0.41	0.31	0.13	N61°E		67		S176	
SK304	D９	縄文	d	C	1	0.46	0.32	0.26	N88°W		30		S194	
SK305	D９	縄文～弥生	b	B	5	0.40	0.27	0.20	N55°E		67		S195	
SK306	D９	縄文～弥生	a	B	4	0.31	(0.26)	0.14		＜SK307	67		S197	
SK307	D９	縄文～弥生	b	C	1	0.35	0.32	0.19		＞SK306	67		S198	
SK308	D９	縄文～弥生	b	A	4	0.30	0.24	0.23			67		S201	
SK309	D９	縄文～弥生	b	A	2	0.26	0.20	0.10	N21°W		67		S549	
SK310	E９	縄文～弥生	a	A	1	0.25	0.20	0.46			67		S141	
SK311	E９	縄文～弥生	a	A	2	0.22	0.20	0.30			67		S157	
SK312	E９	縄文	b	A	3	0.42	0.42	0.09			30		S127	
SK313	E９	縄文	b	B	2	0.53	0.36	0.11	N73°W		30		S129	
SK314	E９	縄文～弥生	b	A	3	0.22	0.20	0.07			67		S140	
SK315	E９	縄文	d	B	2	0.39	0.32	0.13			30		S152	
SK316	E９	縄文～弥生	b	B	2	0.30	0.26	0.06			67		S153	
SK317	E９	縄文	b	B	2	0.40	0.25	0.06	N20°W		30		S154	
SK318	E９	縄文～弥生	b	B	4	0.43	0.38	0.11			68		S155	
SK319	E９	縄文～弥生	a	A	1	0.16	0.15	0.10			68		S156	
SK320	F８	縄文～弥生	d	B	3	0.24	0.20	0.09			68		S030	
SK321	C10	縄文	b	C	3	0.71	0.52	0.21	N69°E		30		S115	
SK322	C10	縄文	b	A	3	0.32	0.30	0.05			30		S116	
SK323	C10	縄文～弥生	b	B	3	0.32	0.25	0.09			68		S117	

表15　遺構一覧表（７）

遺構番号	区画	時　期	平面形	底部形態	堆積状況	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	主軸方位	切り合い	挿図番号	図版番号	旧遺構名	備　考
SK324	C10	縄文～弥生	b	B	4	0.52	0.34	0.16	N70°W		68		S119	
SK325	C10	縄文～弥生	b	B	1	0.48	0.33	0.23	N30°E		68		S122	
SK326	D10	弥生	a	B	2	(0.32)	0.31	0.10		＞SK346	58		S093	
SK327	D10	縄文～弥生	b	A	3	0.36	0.23	0.09	N20°E		68		S110	
SK328	D10	縄文～弥生	b	A	1	0.30	0.24	0.07			68		S111	
SK329	D10	縄文	b	A	4	0.44	0.27	0.10	N49°E		30		S113	
SK330	D10	縄文～弥生	b	B	4	0.50	0.29	0.14	N38°E		68		S114	
SK331	E10	縄文～弥生	a	A	3	0.22	0.21	0.19			68		S075	
SK332	E10	縄文～弥生	d	B	2	0.22	0.21	0.09			68		S009	
SK333	E10	縄文～弥生	b	C	3	0.46	0.40	0.13		＜SK334	68		S076	
SK334	E10	縄文～弥生	b	A	1	0.54	0.27	0.14	N68°E	＞SK333	68		S077	
SK335	E10	縄文～弥生	b	A	3	0.90	0.70	0.21			68		S078	
SK336	E10	縄文～弥生	b	B	1	0.60	0.40	0.09	N2°W		68		S079	
SK337	E10	縄文～弥生	a	B	3	0.24	0.19	0.13		＜SK338	68		S081	
SK338	E10	縄文～弥生	b	C	3	0.35	0.25	0.10		＞SK337	68		S082	
SK339	E10	縄文	a	A	4	0.48	0.46	0.20		＞SK340	30		S084	
SK340	E10	縄文	b	A	1	0.20	0.34	0.11		＜SK339			S085	
SK341	E10	縄文	a	B	4	0.28	0.26	0.14			30		S086	
SK342	E10	縄文	b	B	2	0.40	0.26	0.11	N30°W		30		S088	
SK343	E10	縄文	b	A	3	0.27	0.26	0.05			30		S089	
SK344	E10	近世～近代	c	B	3	0.93	0.90	0.37			72		S091	
SK345	E10	縄文	b	C	3	0.51	0.29	0.16	N81°E		27		S092	
SK346	E10	縄文～弥生	a	A	1	0.29	0.23	0.10		＜SK326	58		S094	
SK347	E10	縄文	b	A	1	0.32	0.21	0.10	N45°E	＞SD１	30		S497	
SK348	C11	弥生	b	B	4	0.46	0.30	0.13	N86°W		58		S120	
SK349	C11	縄文	b	B	3	2.72	2.15	0.19			27	2	S121	
SK350	D11	縄文～弥生	b	B	3	0.55	0.34	0.29	N52°E		68		S100	
SK351	D11	弥生	d	A	1	0.49	0.40	0.07			58		S098	
SK352	D11	縄文～弥生	a	A	3	0.22	0.20	0.06			68		S101	
SK353	D11	縄文～弥生	a	C	1	0.28	0.27	0.11			68		S102	
SK354	D11	縄文～弥生	d	C	1	0.14	0.11	0.06			68		S103	
SK355	D11	縄文～弥生	b	B	1	0.40	0.35	0.20		＞SK356	68		S104	
SK356	D11	縄文～弥生	b	B	1	0.40	(0.25)	0.10	N89°E	＜SK355	68		S105	
SK357	D11	近世～近代	c	B	1	3.00	0.83	0.03	N67°W				S107	
SK358	D11	縄文～弥生	b	C	4	0.25	0.20	0.14			68		S118	
SK359	E11	縄文～弥生	b	B	3	2.02	(0.68)	0.51	N83°W		54		S068	
SK360	E11	縄文～弥生	b	B	1	0.41	0.35	0.10			68		S083	
SK361	D12	縄文～弥生	a	A	1	0.24	0.20	0.30			68		S063	
SK362	D12	縄文～弥生	a	B	4	0.21	0.20	0.14			68		S062	
SK363	D12	縄文～弥生	b	A	1	0.37	0.35	0.10		＞SK364	68		S064	
SK364	D12	縄文～弥生	b	B	1	0.34	0.20	0.11	N1°W	＜SK363	68		S065	
SK365	E12	近世～近代	c	B	1	(4.05)	0.94	0.10	N60°W		72		S034	
SK366	E12	近世～近代	b	B	4	0.66	0.66	0.14			72		S057	
SK367	E12	縄文～弥生	b	B	3	0.39	0.30	0.19	N49°W		68		S058	
SK368	E12	縄文～弥生	a	A	1	0.17	0.14	0.19			68		S059	
SK369	E12	縄文～弥生	a	A	1	0.18	0.17	0.19			68		S061	
SK370	B６	弥生	b	A	1	0.30	0.26	0.47			40～43	4	S550	SB１内
SD１	E11	弥生	—	A	3	9.75	1.00	0.43	N55°W	＞P４	54・56		S002	SZ１内
SD２	E６	弥生	—	A	1	2.60	0.58	0.14	N79°E	＞SK204	55・56		S253	SZ２内
SD３	E６	弥生	—	A	3	3.00	0.50	0.17	N13°W	＜SK96	55・56		S256	SZ２内
SD４	E５	弥生	—	A	1	(4.00)	0.76	0.23	N6°W		55・56		S008	SZ３内
SD５	E４	弥生	—	A	3	(2.60)	0.65	0.08	N1°E		55・56		S013	SZ３内
SD６	E５	弥生	—	A	3	1.14	0.72	0.19	N1°E		55・56		S385	SZ３内
SD７	E５	弥生	—	A	1	1.12	0.72	0.09	N89°E	＞SK95	55・56		S388	SZ３内
SD８	C３	近世～近代	—	A	1	6.60	0.30	0.06	N8°E	＞SK32	72		S441	
SD９	D３	弥生	—	A	2	3.80	0.72	0.16	N70°W	＞P15	58		S434	
SD10	E３	近世～近代	—	A	3	(13.30)	0.85	0.11	N23°E	＞SB２	72		S431	
SD11	D４	近世～近代	—	A	1	(4.15)	0.35	0.05	N27°E	＞SB２	72		S430	
SD12	E４	近世～近代	—	A	3	(6.90)	1.20	0.10	N21°E	＞P43			S012	
SD13	F４	弥生	—	A	1	1.65	0.20	0.04	N3°E	＞SK86.＜SK88	58		S005	
SD14	C６	弥生	—	A	2	5.35	0.82	0.10	N89°W	＞P58.＜SK108	58		S345	
SD15	C７	近世～近代	—	A	3	20.25	0.35	0.10	N66°W	＞P50, SK64・65	72		S548	
SD16	F７	近世～近代	—	A	3	(16.50)	1.20	0.10	N60°W		72		S028	
SD17	C９	弥生	—	A	1	5.90	1.30	0.31	N50°E		58		S207	
SD18	F９	近世～近代	—	A	1	(24.00)	0.51	0.16	N64°W	＞P62, SK116.＜SK267	72		S032	
SD19	D10	近世～近代	—	A	1	6.15	0.24	0.04	N62°W		72		S106	

表16　出土遺物一覧表（１）

遺構名	縄文土器	弥生・土師器	須恵器	近世～近代陶磁器	石器	金属製品	その他	合計
SB１	123	453		1	27		3	607
SB１（P２）		7						7
SB１（P４）		1						1
SB１（P５）		3						3
SB１（P７）		1						1
SB1（SK370）	1	5			2			8
SB１小計	124	470		1	29		3	627
SB２		36					3	39
SB２		5						5
SB２（P75）	1							1
SB２（SK1）		49						49
SB２小計	1	90					3	94
SB３	1	24			1			26
SB３（P14）		1						1
SB３（P16）		8						8
SB３（P17）		2						2
SB３（P18）		10						10
SB３（P19）		2						2
SB３小計	1	47			1			49
SB４	554	4		3	14		6	581
SB４（P24）	27							27
SB４（P26）	22						2	24
SB４（P28）	24							24
SB４（P30）	2							2
SB４（P31）	1							1
SB４（P34）	1							1
SB４（P36）	10							10
SB４（SC２）	362				12		3	377
SB４小計	1003	4		3	26		11	1047
SH１（P38）		1						1
SH１（P39）		2						2
SH１（P40）		2						2
SH１小計		5						5
SH２（P47）		1						1
SH２（P50）		1		4				5
SH２小計		2		4				6
SH３（P51）	2							2
SH３（P52）	3	1						4
SH３（P53）	57				2			59
SH３（P54）	1							1
SH３（P55）	9							9
SH３（P56）	35							35
SH３（P57）	11							11
SH３（P58）	3	2						5
SH３（P59）	9							9
SH３小計	130	3			2			135
SA１（P60）		2						2
SA１（P63）	3	6						9
SA１（P64）	1							1
SA１（P65）	4	1						5
SA１（P66）	1							1
SA１（P67）	1							1
SA１小計	10	9						19
SZ１（SD１）	44	56			4		7	111
SZ２（SD２）		7		2			2	11
SZ２（SD３）		11						11

遺構名	縄文土器	弥生・土師器	須恵器	近世～近代陶磁器	石器	金属製品	その他	合計
SZ２小計		18		2			2	22
SZ３（SD４）		34		1				35
SZ３（SD５）		2						2
SZ３（SD６）		1						1
SZ３（SD７）		1						1
SZ３小計		38		1				39
SK４	1							1
SK５					1			1
SK６	4							4
SK９				3				3
SK12		28						28
SK13				1			7	8
SK14	2							2
SK15	2							2
SK17					1			1
SK18		5						5
SK20		1						1
SK21	6	1						7
SK22	130				3			133
SK23	1	1		1				3
SK24	1							1
SK27	1							1
SK31	1							1
SK34	1	2				2		5
SK35	1							1
SK36	2							2
SK37	2							2
SK38				1				1
SK39	8							8
SK40	1							1
SK41				1		2	3	6
SK43	1							1
SK45	1							1
SK46	2							2
SK51		54					1	55
SK59		1						1
SK62		1						1
SK66	2							2
SK67	3				1			4
SK79	1							1
SK80	1							1
SK81	3							3
SK82	1	1						2
SK88	3	126						129
SK98	3							3
SK104	7	2	1	1				11
SK105				1				1
SK106	1							1
SK108	14	18						32
SK114	2							2
SK118	1							1
SK119	1							1
SK120		1						1
SK123	1							1
SK125	1							1
SK127	2							2

表17　出土遺物一覧表（２）

遺構名	縄文土器	弥生・土師器	須恵器	近世～近代陶磁器	石器	金属製品	その他	合計
SK130		2						2
SK131	2	1						3
SK136	1							1
SK137	4							4
SK145	2							2
SK153		2						2
SK160	10	1						11
SK162	8							8
SK165	1							1
SK169	1							1
SK170		2						2
SK174	1							1
SK176	3				1			4
SK177	4	4						8
SK179	3							3
SK180	1							1
SK181	1	1						2
SK182			1			2	1	4
SK184	1							1
SK185	1							1
SK188	2	2						4
SK189		5						5
SK190	1							1
SK193	3							3
SK194	8							8
SK197	2	2						4
SK198	1							1
SK201					1			1
SK202	1							1
SK203	1							1
SK205	4							4
SK207	2							2
SK209					1			1
SK210	2							2
SK211	2							2
SK213	5	4						9
SK222	5	1						6
SK225	1							1
SK228	4							4
SK232	1							1
SK234	3							3
SK238	4							4
SK241	2							2
SK243	1				1			2
SK249	7							7
SK251	6							6
SK253	4							4
SK254	9							9
SK255	2							2
SK256	1							1
SK259	3							3
SK261		4						4
SK264	4							4
SK265	4							4
SK272					1			1
SK276	1							1

遺構名	縄文土器	弥生・土師器	須恵器	近世～近代陶磁器	石器	金属製品	その他	合計
SK277	2							2
SK278	6	1						7
SK279	1							1
SK280	216				4			220
SK288	3							3
SK291					1			1
SK293	7							7
SK295	13							13
SK296	10	3			1			14
SK297	5							5
SK298	1							1
SK299	9	1						10
SK301	1							1
SK302	44				2			46
SK304	5							5
SK312	1							1
SK313	2							2
SK315	2							2
SK317	1							1
SK321	4							4
SK322	3							3
SK326		1						1
SK329	1							1
SK332					1			1
SK339	4							4
SK341	7					1		8
SK342	1							1
SK343	2							2
SK344	2	5			1	5		13
SK345	15							15
SK347	1							1
SK348	2	1						3
SK349	37	1			1		1	40
SK351	1	1						2
SK357	1							1
SK365	1	6						7
SD８				1				1
SD９		32						32
SD11		5						5
SD13		1						1
SD14	2	1			1		5	9
SD16	1							1
SD17	5	6						11
SD18	1							1
SD19				1				1
Ⅰ層	49	17	1	7	6		8	88
Ⅱ層	88	55		2	2		13	160
撹乱	1	6		1				8
合計	2226	1158	3	32	93	12	65	3589

表18　遺物観察表（１）

掲載番号	出土位置	器　種	口径底径器高	成形・調整	胎　土	焼成	色　調	備　考	挿図番号	図版番号	整理番号
1	SB４	縄文土器 深鉢Ａ１	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面不明	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒色(7.5YR 2/1)	沈線（幅0.6cm）	31	6	87
2	SB４	縄文土器 深鉢Ａ１	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色(10YR 2/1)	隆帯（幅0.3cm）、 押引沈線（幅0.5cm）	31	6	122
3	SB４-P24	縄文土器 深鉢Ａ１	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	橙色(５YR6/6)	沈線（幅0.3cm）、 刺突（幅0.3cm）	31	6	99
4	SB４	縄文土器 深鉢Ａ２	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒色(7.5YR 2/1)	隆帯（幅0.3cm）、 沈線（幅0.6cm）	31	6	116
5	SB４	縄文土器 深鉢Ａ３	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色(7.5 YR3/1)	押引沈線（幅0.3cm）	31	6	112
6	SB４	縄文土器 深鉢Ａ３	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面不明	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英、雲母を多く含む	普通	橙色(５YR6/6)	隆帯（幅0.5cm）、 押引沈線（幅0.3cm）	31	6	106
7	SB４	縄文土器 深鉢Ａ３	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	橙色（7.5YR 6/6）	隆帯（幅0.4cm）、 沈線（幅0.5cm）、 押引沈線（幅0.7cm）	31	6	100
8	SB４-SC２	縄文土器 深鉢Ａ３	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色(10YR 2/1)	隆帯（幅0.5cm）、 沈線（幅0.4cm）	31	6	105
9	SB４	縄文土器 深鉢Ａ３	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面不明	やや粗、直径４㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒褐色(10YR 3/1)	隆帯（幅0.6cm）、 沈線（幅0.6cm）	31	6	102
10	SB４	縄文土器 深鉢Ｂ１	― (29.0) ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面縄文	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒色（7.5YR 1.7/1）	沈線（幅1.3cm）	31	6	180
11	SB４	縄文土器 深鉢Ｂ１	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒色（7.5YR 2/1）	隆帯（幅1.4cm）、 沈線（幅1.4cm）	31	6	109
12	SB４	縄文土器 深鉢Ｃ１ａ	― ― ―	胴部内面横ナデ、ケズリ、胴部外面撚糸？	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	黒色（7.5YR 2/1）	隆帯（幅0.3cm）、 沈線（幅0.6cm）	31	6	113
13	SB４-SC２	縄文土器 深鉢Ｃ１ａ	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面縄文	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色(10YR 3/1)		31	6	107
14	SB４-SC２	縄文土器 深鉢Ｃ１ａ	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	明黄褐色（10 YR7/6）		31	6	121
15	SB４-SC２	縄文土器 深鉢Ｃ１ａ	(22.8) ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面縄文	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	橙色（7.5YR 7/6）	沈線（幅0.4cm）	31	6	120
16	SB４-SC２	縄文土器 深鉢Ｃ１ａ	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面縄文	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色(10YR 3/1)	沈線（幅0.8cm）	31	6	96
17	SB４	縄文土器 深鉢Ｃ１ｂ	(33.8) ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面条線	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色(５YR 2/1)	沈線（幅0.8cm）	31	6	169
18	SB４	縄文土器 深鉢Ｃ１ｂ	(33.8) ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面条線	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒色（7.5YR 1.7/1）	沈線（幅0.8cm）	31	6	177
19	SB４	縄文土器 深鉢Ｃ１ｂ	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色(10YR 3/1)		31	6	146
20	SB４	縄文土器 深鉢Ｃ１ｂ	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒 褐 色（7.5 YR3/1）		31	6	147
21	SB４	縄文土器 深鉢Ｃ２	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒色（7.5YR 1.7/1）	沈線（幅0.9cm）	31	6	108
22	SB４	縄文土器 深鉢Ｃ２	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石を幾つか含む	普通	褐灰色(10YR 4/1)	隆帯（幅1.3cm）、 沈線（幅0.6cm）	31	6	174
23	SB４	縄文土器 深鉢Ｃ２	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石を多く含む	普通	褐灰色(10YR 4/1)	隆帯（幅0.7cm）、 沈線（幅0.8cm）	31	6	159
24	SB４	縄文土器 深鉢Ｃ２	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面条線	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	にぶい赤褐色（５YR4/4）	隆帯（幅1.1cm）、 押引沈線（幅0.3cm）	31	6	156
25	SB４	縄文土器 深鉢Ｃ２	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	褐灰色(５YR 4/1)	隆帯（幅0.7cm）、 沈線（幅0.8cm）	31	6	117
26	SB４-SC２	縄文土器 深鉢Ｃ２	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒色（7.5YR 2/1）	隆帯（幅0.8cm）、 沈線（幅0.9cm）	31	6	118

表19　遺物観察表（２）

掲載番号	出土位置	器　種	口径底径器高	成形・調整	胎　土	焼成	色　調	備　考	挿図番号	図版番号	整理番号
27	SB４-SC２	縄文土器 深鉢Ｃ２	(21.2) ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒色（7.5YR 2/1）	隆帯（幅0.8㎝）、 沈線（幅0.5㎝）	31	6	158
28	SB４	縄文土器 深鉢Ｃ２	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面縄文	やや粗、直径1.5㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒色（５YR2/1）	隆帯（幅1.1㎝）、 沈線（幅0.5㎝）	31	6	155
29	SB４	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒褐色（５YR 3/1）	沈線（幅0.2㎝）	31	6	110
30	SB４	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒色（7.5YR 2/1）	沈線（幅0.4㎝）	32	6	133
31	SB４-SC２	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径1.5㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒色（7.5YR 2/1）	沈線（幅0.5㎝）	32	6	143
32	SB４	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	明褐色（7.5YR5/6）	隆帯（幅0.7㎝）、 押引沈線（幅0.3㎝）	32	6	153
33	SB４-SC２	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面条線	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰黄褐色（10YR5/2）	沈線（幅0.7㎝）	32	6	144
34	SB４-P24	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面不明	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色（10YR 3/1）	隆帯（幅0.5㎝）、 沈線（幅0.6㎝）	32	6	150
35	SB４-SC２	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	暗褐色（7.5YR3/3）	沈線（幅0.6㎝）	32	6	82
36	SB４	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒色（7.5YR 2/1）	隆帯（幅0.6㎝）、 沈線（幅0.5㎝）	32	6	134
37	SB４-SC２	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	橙色（7.5YR 6/6）	沈線（幅0.4㎝）、 刺突（幅0.3㎝）	32	6	132
38	SB４	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面不明	粗、直径３㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	にぶい黄橙色（10YR7/4）	沈線（幅0.6㎝）、 刺突（幅0.4㎝）	32	6	131
39	SB４	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面縄文	やや粗、直径２㎜以下の長石を幾つか含む	普通	褐灰色（５YR 4/1）	沈線（幅0.2㎝）	32	6	165
40	SB４-SC２	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色（５YR 2/1）	隆帯（幅1.2㎝）、 沈線（幅0.7㎝）	32	6	167
41	SB４-SC２	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒褐色（2.5YR3/1）	隆帯（幅0.6㎝）、 押引沈線(幅0.3㎝)、 沈線（幅0.3㎝）	32	7	130
42	SB４	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色（10YR 3/1）	隆帯（幅0.8㎝）、 押引沈線(幅0.4㎝)、 沈線（幅0.4㎝）	32	8	178
43	SB４	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色（10YR 3/1）	隆帯（幅0.6㎝）、 押引沈線(幅0.4㎝)、 沈線（幅0.4㎝）	32	7	128
44	SB４	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英、雲母を多く含む	普通	黒褐色（2.5Y3/1）	隆帯（幅0.8㎝）、 押引沈線（幅0.4㎝）	32	7	129
45	SB４	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面不明	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色（2.5Y3/1）	隆帯（幅0.8㎝）、 押引沈線(幅0.4㎝)、 沈線（幅0.9㎝）	32	7	140
46	SB４-SC２	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面不明	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色（2.5Y3/1）	隆帯（幅0.6㎝）、 押引沈線(幅0.4㎝)、 沈線（幅0.9㎝）	32	7	139
47	SB４	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色（10YR 3/1）	沈線（幅0.5㎝）	32	7	141
48	SB４	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色（7.5YR3/1）	沈線（幅0.5㎝）	32	7	124
49	SB４-SC２	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、ケズリ、胴部外面横ナデ	やや粗、直径2.5㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒褐色（５YR 3/1）	沈線（幅0.5㎝）	32	7	151
50	SB４	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒褐色（10YR 3/1）	沈線（幅0.4㎝）	32	7	123
51	SB４-SC２	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径４㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒色（7.5YR 2/1）	沈線（幅0.5㎝）	32	7	161
52	SB４-P24	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径1.5㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒褐色（7.5YR3/1）	隆帯（幅0.7㎝）、 沈線（幅0.3㎝）	32	7	152

表20　遺物観察表（３）

掲載番号	出土位置	器　種	口径 底径 器高	成形・調整	胎　土	焼成	色　調	備　考	挿図番号	図版番号	整理番号
53	SB４	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面条線	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	褐灰色（7.5YR5/1）		32	7	145
54	SB４-SC２	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面斜めナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒色（7.5YR2/1）	沈線（幅0.4㎝）	32	7	160
55	SB４-SC２	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径４㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒褐色（10YR3/1）		33	7	179
56	SB４	縄文土器 深鉢	― 8.5 ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色（7.5YR3/1）		33	7	176
57	SB４-P28	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面指圧痕、 胴部外面不明	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色（10YR3/1）		33	7	136
58	SB４-SC２	縄文土器 深鉢	― (8.5) ―	胴部内面不明、 胴部外面不明	やや粗、直径６㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒色（7.5YR2/1）		33	7	135
59	SB４	縄文土器 深鉢	― (6.8) ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色（10YR3/1）		33	7	138
60	SB４-SC２	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、ケズリ、胴部外面横ナデ	やや粗、直径４㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒褐色（10YR3/1）		33	7	104
61	SB４-SC２	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色（7.5YR3/1）	隆帯（幅0.5㎝）、 押引沈線（幅0.5㎝）	33	7	126
62	SB４	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英、雲母を多く含む	普通	黒褐色（10YR3/1）	隆帯（幅0.5㎝）、 沈線（幅0.6㎝）	33	7	127
63	SB４-SC２	縄文土器 釣手土器	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒色（10YR1.7/1）	隆帯（幅0.5㎝）、 押引沈線（幅0.5㎝）	33	8	103
64	SB４	石器 石錐	4.6 4.3 1.6	基部と刃部の境が明瞭でない	チャート製		重量26.0g	完形	34	8	308
65	SB４	石器 UF	2.0 2.5 0.7		チャート製		重量2.4g		34	8	318
66	SB４	石器 UF	3.6 1.9 8.5		チャート製		重量8.3g		34	8	316
67	SB４	石器 RF	3.3 3.2 0.6		チャート製		重量6.9g		34	8	309
68	SB４	石器 UF	4.3 2.3 0.9		チャート製		重量7.9g		34	8	317
69	SB１	石器 打製石斧	11.0 7.2 2.1	基端部は尖る	砂岩製		重量209.6g	刃部幅7.2㎝、刃部角57度、上部欠損	34	8	334
70	SK22	縄文土器 深鉢Ａ１	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石を幾つか含む	普通	褐灰色（10YR4/1）	隆帯（幅0.4㎝）、 沈線（幅0.5㎝）	34	8	115
71	SK22	縄文土器 深鉢Ａ２	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒褐色（7.5YR3/1）	沈線（幅0.6㎝）	34	8	101
72	SK22	縄文土器 深鉢Ａ２	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒色（５YR1.7/1）	沈線（幅0.4㎝）	34	8	114
73	SK22	縄文土器 深鉢Ｃ１ａ	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石を幾つか含む	普通	褐灰色（10YR4/1）		34	8	111
74	SK22	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面不明	やや粗、直径４㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色（7.5YR3/1）	隆帯（幅0.4㎝）、 押引沈線（幅0.2㎝） 沈線（幅0.5㎝）	34	8	173
75	SK22	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	褐灰色（7.5YR4/1）	隆帯（幅1.0㎝）	34	8	168
76	SK22	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	粗、直径３㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	褐灰色（10YR4/1）	隆帯（幅0.6㎝）、 沈線（幅0.4㎝）	34	8	175
77	SK22	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石を幾つか含む	普通	褐灰色（10YR5/1）	押引沈線（幅0.6㎝）、 沈線（幅0.2㎝）	34	8	172
78	SK22	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面条線	やや粗、直径２㎜以下の長石を幾つか含む	普通	にぶい橙色（7.5YR7/4）		34	8	170

表21　遺物観察表（４）

掲載番号	出土位置	器　種	口径底径器高	成形・調整	胎　土	焼成	色　調	備　考	挿図番号	図版番号	整理番号
79	SH３-P53	縄文土器 深鉢Ｃ２	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒色（7.5YR 1.7/1）		35	9	83
80	SH３-P53	縄文土器 深鉢Ｃ２	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面不明	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英、雲母を多く含む	普通	暗褐色（５YR 3/3）	沈線（幅0.7㎝）	35	9	84
81	SH３-P55	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面縄文	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	褐灰色（7.5YR4/1）	隆帯（幅1.5㎝）	35	9	65
82	SH３-P59	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英、赤色酸化土粒を多く含む	普通	黒色（7.5YR 2/1）	隆帯（幅0.6㎝）、 沈線（幅0.6㎝）	35	9	149
83	SH３-P53	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石を幾つか含む	普通	黒褐色（10YR 3/1）	沈線（幅0.5㎝）、 穿孔あり	35	9	85
84	SH３-P53	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径４㎜以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	灰褐色（7.5YR6/2）	沈線（幅0.5㎝）	35	9	86
85	SH３-P57	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面縦ナデ、 胴部外面縦ナデ	粗、直径３㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	褐灰色（10YR 4/1）	沈線（幅0.5㎝）	35	9	63
86	SH３-P55	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面不明	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒褐色（10YR 3/1）	隆帯（幅0.8㎝）	35	9	64
87	SH３-P53	石器 敲石	12.2 11.3 2.9	敲打部は表面中央部と下部のみ	砂岩製		重量499.0g	表面敲打部の長さ約6.1㎝、幅約5.7㎝	35	9	322
88	SK46	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	褐灰色（10YR 4/1）	沈線（幅0.4cm）、 内面に炭化物付着	35	9	53
89	SK165	縄文土器 深鉢Ｃ１ａ	― ― ―	胴部内面横～斜めナデ、胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を多く含む	普通	橙色（５YR6/6）	沈線（幅0.5㎝）	35	9	55
90	SK259	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	粗、直径１㎜以下の長石を多く含む	普通	黒褐色（10YR 3/1）	隆帯（幅1.0㎝）	35	9	92
91	SK297	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色（10YR 3/1）	刺突文（幅0.5㎝）、 沈線文（幅0.1㎝）	35	9	181
92	SK297	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰黄褐色（10YR4/2）	沈線文（幅0.1㎝）	35	9	182
93	SK299	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径４㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	褐灰色（10YR 4/1）	隆帯（幅0.5㎝）、 沈線（幅0.3㎝）	35	9	142
94	SK341	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	褐灰色（10YR 4/1）	沈線（幅0.3㎝）	35	9	94
95	SK302	縄文土器 深鉢	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面縄文	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰褐色（7.5YR4/2）	沈線（幅0.5㎝）	35	9	88
96	SK302	石器 RF	2.3 3.5 0.9		チャート製		重量4.8g		35	8	312
97	SK349	弥生土器 甕	― ― ―	胴部内面体部外面横ナデ、内面横方向の板ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石を幾つか含む	普通	灰褐色（10YR 5/2）	体部外面に貼付突帯	35	9	90
98	SK280	縄文土器 深鉢Ａ３	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	粗、直径３㎜以下の長石を多く含む	普通	黒色（2.5Y2/1）	隆帯（幅0.6㎝）	36	9	67
99	SK280	縄文土器 深鉢Ａ３	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面不明	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒褐色（５YR 3/1）	隆帯（幅0.4cm）、 押引沈線（幅0.7㎝）	36	9	72
100	SK280	縄文土器 深鉢Ｃ１ａ	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面縄文	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒褐色（５YR 3/1）	隆帯（幅1.0㎝）	36	9	68
101	SK280	縄文土器 深鉢Ｃ１ａ	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面縄文	やや粗、直径２㎜以下の長石を幾つか含む	普通	黒褐色（10YR 3/1）	擬口縁が残る	36	9	71
102	SK280	縄文土器 深鉢Ｃ１ａ	― ― ―	胴部内面横ナデ、 胴部外面縄文	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	にぶい黄褐色（10YR5/3）	沈線（幅0.7㎝）	36	9	70
103	SK280	縄文土器 深鉢Ｃ１ｂ	― ― ―	胴部内面横ナデ、胴部外面横ナデ、ケズリ	やや粗、直径１㎜以下の長石を幾つか含む	普通	褐灰色（10YR 4/1）		36	9	74

表22　遺物観察表（５）

掲載番号	出土位置	器　種	口径底径器高	成形・調整	胎　土	焼成	色　調	備　考	挿図番号	図版番号	整理番号
104	SK280	縄文土器 深鉢	— — —	胴部内面不明、 胴部外面不明	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	黒褐色（10YR 3/1）	隆帯（幅0.4cm）、 押引沈線（幅0.5cm）	36	9	73
105	SK280	縄文土器 深鉢	— — —	胴部内面横～斜めナデ、胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石を幾つか含む	普通	灰　色（５Y6/1）	沈線（幅0.3cm）、 刺突（幅0.4cm）	36	9	58
106	SK280	縄文土器 深鉢	— — —	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を多く含む	普通	灰褐色（7.5 YR4/2）	押引沈線（幅0.7cm）、 沈線（幅0.3cm）	36	9	57
107	SK280	縄文土器 深鉢	— — —	胴部内面横ナデ、 胴部外面不明	やや粗、直径５㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	褐灰色（10YR 4/1）	隆帯（幅0.3cm）、 沈線（幅0.7cm）	36	9	60
108	SK280	縄文土器 深鉢	— — —	胴部内面横ナデ、 胴部外面撚糸	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰黄褐色 （10YR4/2）	沈線（幅0.2cm）	36	9	79
109	SK280	縄文土器 深鉢	— — —	胴部内面横ナデ、 胴部外面不明	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒褐色（10YR 3/1）	隆帯（幅0.6cm）、 沈線（幅0.7cm）	36	9	66
110	SK280	縄文土器 深鉢	— — —	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰黄褐色 （10YR5/2）	沈線（幅0.7cm）	36	9	78
111	SK280	縄文土器 深鉢	— — —	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰黄褐色 （10YR5/2）	沈線（幅0.6cm）	36	9	59
112	SK280	縄文土器 深鉢	— — —	胴部内面横ナデ、 胴部外面条線	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	灰黄褐色 （10YR5/2）		36	9	171
113	SK280	縄文土器 深鉢	— — —	胴部内面斜めナデ、 胴部外面不明	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英、雲母を多く含む	普通	明黄褐色（10 YR7/6）	隆帯（幅0.7cm）、沈線（幅0.6cm）	36	9	69
114	SK280	縄文土器 深鉢	— — —	胴部内面横ナデ、 胴部外面不明	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	赤褐色（５YR 4/6）		36	9	81
115	SK280	縄文土器 深鉢	— (8.0) —	胴部内面横ナデ、 胴部外面縄文	やや粗、直径１㎜以下の長石を幾つか含む	普通	褐 灰 色（7.5 YR4/1）		36	9	76
116	SK280	縄文土器 深鉢	— (7.2) —	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	褐灰色（10YR 4/1）		36	9	75
117	SK280	縄文土器 深鉢	— (5.6) —	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石を幾つか含む	普通	黒褐色（10YR 3/1）		36	9	77
118	SK280	石器 RF	2.1 2.8 0.6		チャート製		重量3.3g		36	8	310
119	包含層	縄文土器 深鉢Ｂ１	(31.8) — —	胴部内面横ナデ、 胴部外面横ナデ	やや粗、直径４㎜以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	褐 色（7.5YR 4/4）	隆帯（幅1.9cm）、 沈線（幅0.2cm）	36	9	98
120	包含層	縄文土器 深鉢Ｃ２	— — —	胴部内面横ナデ、 胴部外面不明	やや粗、直径１㎜以下の長石を多く含む	普通	黒 色（7.5YR 2/1）	隆帯（幅0.6cm）、 沈線（幅0.5cm）	36	9	91
121	包含層	縄文土器 深鉢Ｃ１ａ	— — —	胴部内面横ナデ、 胴部外面縄文	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒色（2.5Y 2/1）		36	9	154
122	包含層	縄文土器 深鉢	— — —	胴部内面不明、 胴部外面不明	粗、直径２㎜以下の長石を多く含む	普通	黒褐色（10YR 3/1）	隆帯（幅1.0cm）	36	9	61
123	包含層	縄文土器 深鉢	— — —	胴部内面横ナデ、 胴部外面縄文	やや粗、直径３㎜以下の長石を幾つか含む	普通	黒褐色（10YR 3/1）	隆帯（幅1.0cm）、 刺突（幅0.2cm）	36	9	89
124	SB１	弥生土器 甕	— — —	体部外面調整不明、内面横～斜め方向の板ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	にぶい黄褐色 （10YR5/3）	最大幅15.2cm	59	10	17
125	SB１	弥生土器 甕	— (5.0) —	底部内面横方向の板ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	にぶい黄褐色 （10YR5/3）	底部外面布目圧痕、いわゆる擬口縁が明瞭に残る	59	10	25
126	SB１	弥生土器 甕	— (5.5) —	体部外面縦位条痕、内面横ナデ、底部外面不明	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	橙 色（7.5YR 7/6）		59	10	2
127	SB１	弥生土器 甕	— (5.5) —	底部外面調整不明、体部外面縦位櫛条痕、内面横方向の板ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石を多く含む	普通	黒 褐 色（2.5 Y3/1）		59	10	26
128	SB１	弥生土器 広口壺	— — —	底部外面縦ミガキ、体部外面斜め～縦ハケ、内面上方指圧痕、下方斜めハケ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英、雲母を多く含む	普通	橙 色（7.5YR 7/6）	最大幅26.0cm	59	10	16

表23　遺物観察表（６）

掲載番号	出土位置	器　種	口径 底径 器高	成形・調整	胎　土	焼成	色　調	備　考	挿図番号	図版番号	整理番号
129	SB１	弥生土器 壺	－ － －	体部外面斜めハケ、内面横方向の板ナデ	やや粗、直径3.5㎜以下の長石、石英、赤色酸化土粒を多く含む	普通	浅黄橙色（10YR8/3）	体部外面に波状文、横線文、列点文	59	10	20
130	SB１	弥生土器 二重口縁壺	－ － －	頸部外面調整不明、内面横ハケ	密、直径0.1㎜以下の長石を幾つか含む	普通	浅黄橙色（7.5YR8/6）	穿孔有り、内外面に煤付着	59	10	18
131	SB１	弥生土器 パレス壺	－ － －	体部内外面調整不明、内面横ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	褐色（7.5YR4/4）	外面に波状文と刺突文、赤彩	59	10	22
132	SB１	弥生土器 直口鉢	－ （4.0） －	底部外面調整不明、体部外面縦方向の板ナデ、内面横方向板ナデ	密、直径１㎜以下の長石を幾つか含む	普通	橙色（５YR6/6）		59	10	28
133	SB１	弥生土器 直口鉢	－ 3.8 －	底部外面板ナデ後指圧、体部外面縦方向の板ナデ、内面斜めハケ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英をわずかに含む	普通	褐灰色（7.5YR6/1）		59	10	27
134	SB１	弥生土器 直口鉢	－ （4.4） －	底部外面調整不明、体部外面横ナデ、内面横方向の板ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石をわずかに含む	普通	にぶい橙色（５YR6/4）		59	10	29
135	SB１	弥生土器 甕	－ － －	口縁部内外面横ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	にぶい黄褐色（10YR5/3）	口縁端部に刺突文、外面に煤付着	59	10	148
136	SB１	弥生土器 細頸壺	－ － －	肩部外面横ミガキ、内面横ナデ	やや粗、礫をほとんど含まない	普通	黄橙色（10YR8/6）	肩部外面に貝殻による刺突文	59	10	24
137	SB１	弥生土器 小型器台	（6.0） 4.1 4.6	脚部内面指圧痕、外面指圧後不定方向のヘラナデ、杯部外面指圧痕、口縁部内外面横ナデ	密、直径１㎜以下の長石をわずかに含む	普通	灰色（N4/0）		59	10	23
138	SB１-SK370	弥生土器 器台	－ （12.5） －	脚部外面横ナデ、内面斜めハケ後横ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	にぶい褐色（7.5YR5/3）		59	10	19
139	SB１	弥生土器 高杯	－ － －	杯部内外面調整不明	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黄橙色（10YR8/6）	杯部外面に波状文、内部上方煤付着	59	10	21
140	SB１	縄文土器 深鉢Ｃ１ａ	－ － －	胴部内面横ナデ、胴部外面縄文	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒褐色（10YR3/1）		59	10	97
141	SB１	縄文土器 深鉢	－ － －	胴部内面横ナデ、胴部外面横ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英、雲母を多く含む	普通	橙色（7.5YR7/6）	隆帯（幅0.8㎝）、沈線（幅0.7㎝）	59	10	162
142	SB１	縄文土器 深鉢	－ － －	胴部内面横ナデ、胴部外面縄文	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	橙色（7.5YR6/6）	押引沈線（幅0.5㎝）	59	10	164
143	SB１	縄文土器 深鉢	－ － －	胴部内面斜めナデ、胴部外面縄文	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	黒色（10YR2/1）		59	10	163
144	SB１	縄文土器 深鉢	－ － －	胴部内面横ナデ、胴部外面横ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	黒褐色（2.5Y3/2）	沈線（幅0.5㎝）	59	10	119
145	SB１	石器 有孔磨製石鏃	（2.1） 2.5 0.3	全面に横、縦、斜め方向の研磨が施される	泥岩製		重量1.3g	孔径0.2㎝、上部欠損	59	11	328
146	SB１	石器 磨製石鏃未製品	（2.5） 2.6 0.4	横から斜め方向に研磨が施される	泥岩製		重量3.4g	上下欠損	59	11	329
147	SB１	石器 磨製石鏃未製品	3.3 2.9 0.6	側縁から浅い剥片剥離が施される	泥岩製		重量6.0g	研磨なし	59	11	332
148	SB１	石器 尖頭器	（2.3） （2.1） 4.5	単位の大きい調整剥離を施す	チャート製		重量1.9g	先端角約50度、下部欠損	59	11	320
149	SB１	石器 スクレイパー	3.1 2.6 0.9	刃部数は１で、平面形は内彎する	チャート製		重量6.9g	刃部長2.1㎝、幅0.3㎝、刃部角約60度	59	11	307
150	SB１	石器 石包丁	4.3 （7.5） 0.9	背部及び折損部に調整剥離あり	泥岩製		重量34.6g	刃部残存長5.4㎝、幅0.8㎝、刃部角22度、中央で折損	60	11	327
151	SB１	石器 UF	1.8 1.4 0.2		チャート製		重量0.7g		60	11	315
152	SB１	石器 砥石	（8.1） 2.9 1.1	４面で構成され、そのうち砥面数は１面である	泥岩製		重量49.2g	表面の砥面の現存長5.8㎝、幅2.2㎝	60	11	324
153	SB１	石器 砥石	8.5 1.5 0.6	４面で構成され、そのうち砥面数は４面である	泥岩製		重量16.5g	表面の砥面の長さ7.9㎝、幅1.5㎝	60	11	325

表24　遺物観察表（７）

掲載番号	出土位置	器　種	口径 底径 器高	成形・調整	胎　土	焼成	色　調	備　考	挿図番号	図版番号	整理番号
154	SB１	石器 砥石	(6.3) (2.8) (1.8)	２面以上で構成され、現存している面はすべて使用されている	砂岩製		重量37.6g	表面の砥面の現存長5.4㎝、幅1.5㎝	60	11	326
155	SB２-SK１	弥生土器 甕	— — —	体部外面縦方向の櫛条痕、内面不定方向の板ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	にぶい褐色（7.5YR5/4）	体部外面下方に炭化物付着	60	12	10
156	SB２-SK１	弥生土器 甕	— — —	体部内外面横～斜め方向の板ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	にぶい褐色（7.5YR3/5）	最大幅17.8cm 体部外面に炭化物付着	60	10	12
157	SB２-SK１	弥生土器 甕	— (5.7) —	体部内外面横～斜め方向の板ナデ	やや粗、直径５㎜以下の長石、石英、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	浅黄橙色（10YR8/3）	体部外面に煤付着	60	10	11
158	SB２	弥生土器 パレス壺	— — —	体部外面横ミガキ、体部内面横方向の板ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、赤色酸化土粒を多く含む	普通	橙色（５YR6/6）	体部外面赤彩	60	12	6
159	SB２-SK１	弥生土器 パレス壺	— — —	頸部内外面不明、口縁部外面横ミガキ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	橙色（7.5YR7/6）	口縁部内面に刺突文、赤彩	60	12	5
160	SB２-SK１	弥生土器 細頸壺	(6.4) — —	口頸部内外面調整不明	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を多く含む	普通	浅黄橙色（10YR8/3）		60	12	9
161	SB２-SK１	弥生土器 高杯	— (13.8) —	脚部外面調整不明、脚裾部内面横方向の板ナデ後ミガキ、脚柱部内面横～斜ハケ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	浅黄橙色（10YR8/3）	孔数不明	60	12	8
162	SB２-SK１	弥生土器 高杯	— 12.0 —	脚部外面縦ミガキ、内面調整不明	やや粗、直径１㎜以下の長石を多く含む	普通	灰黄色(2.5Y7/2)	１孔３組３穿孔	60	10	4
163	SB２	弥生土器 高杯	(15.4) — —	口縁部内外面不明	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英、赤色酸化土粒を多く含む	普通	浅黄橙色(7.5YR8/4)		60	12	7
164	SB３	弥生土器 甕	(9.0) — —	口縁部内外面調整不明	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	灰黄褐色（10YR4/2）		61	12	15
165	SB３	弥生土器 甕	— (7.8) —	底体部内外面調整不明	やや粗、直径3.5㎜以下の長石､石英､チャートを幾つか含む	普通	黒褐色(10YR3/2)	いわゆる擬口縁が明瞭に残る	61	12	14
166	SB３	石器 磨製石鏃 未製品	(4.2) (2.5) 0.3	側縁は横方向、先端と基部は縦方向に研磨が施される	泥岩製		重量3.5g	先端角約60度、 下部欠損	61	11	330
167	SH２-P50	弥生土器 広口壺	— — —	口縁部外面縦ミガキ、内面調整不明	やや粗、直径１㎜以下の長石、赤色酸化土粒をわずかに含む	普通	黄橙色(10YR8/6)	口縁端部に一条の凹線	61	12	40
168	SH２-P50	弥生土器 高杯	— (13.2) —	脚部内外面調整不明	粗、直径１㎜以下の長石を幾つか含む	普通	橙色（7.5YR7/6）		61	12	43
169	SZ２-SD３	弥生土器 壺	— — —	口縁部外面横ハケ、内面不明	粗、直径４㎜以下の長石を幾つか含む	普通	にぶい黄褐色（10YR4/3）		61	12	39
170	SZ２-SD２	弥生土器 壺	— — —	口頸部内外面調整不明	やや粗、直径５㎜以下の長石、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	黄灰色(2.5Y5/1)		61	12	38
171	SZ１-SD１	弥生土器 高杯	(13.9) — —	口縁部内外面横ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	にぶい黄橙色（10YR7/3）		61	12	35
172	SZ１-SD１	弥生土器 甕	17.1 — —	口縁部内外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石を幾つか含む	普通	黄灰色(2.5Y5/1)	口縁端部に刺突文	61	12	34
173	SZ１-SD１	弥生土器 壺	(23.0) — —	口頸部内外面調整不明	やや粗、直径10.1㎜以下の長石、チャート、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	浅黄橙色(7.5YR8/6)	口縁部外面に凹線文	61	12	37
174	SZ１-SD１	弥生土器 高杯	21.0 — —	杯部内外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	褐灰色(10YR5/1)		61	12	36
175	SD９	弥生土器 甕	— — —	口縁部外面縦位櫛条痕、内面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	にぶい褐色（7.5YR5/4）	口縁部内面に櫛による押し引き刺突文、口縁端部に刺突文、口縁部外面煤付着	61	12	32
176	SD９	弥生土器 壺	— 2.1 —	底部外面調整不明、内面横方向の板ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	にぶい黄橙色（10YR7/4）		61	12	33
177	SZ３-SD４	弥生土器 甕	— (8.0) —	脚部内外面調整不明	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	にぶい橙色（５YR7/4）		61	12	48

表25　遺物観察表（８）

掲載番号	出土位置	器　種	口径底径器高	成形・調整	胎　土	焼成	色　調	備　考	挿図番号	図版番号	整理番号
178	SZ３-SD４	弥生土器 広口壺	― ― ―	体部外面斜めハケ、内面横ハケと横方向の板ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、赤色酸化土粒をわずかに含む	普通	灰白色（10YR7/1）	体部外面に横線文と刺突文、内面に黒色有機物付着	61	12	45
179	SZ３-SD４	弥生土器 高杯	― ― ―	脚部内外面調整不明	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英、赤色酸化土粒を多く含む	普通	浅黄橙色（10YR8/4）	脚端部に沈線	61	12	47
180	SK108	弥生土器 壺	(10.0) ― ―	頸部外面斜め方向の板ナデ、内面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	浅黄橙色（10YR8/4）	口縁部外面に刺突文	61	12	41
181	SK108	弥生土器 高杯	(10.6) ― ―	杯部外面調整不明、内面横ミガキ	やや粗、直径２㎜以下の長石を多く含む	普通	褐灰色（10YR5/1）		61	12	42
182	SK62	弥生土器 受口甕	(17.0) ― ―	口縁部内外面横ナデ	やや粗、直径６㎜以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	暗灰黄色(2.5Y4/2)	口縁部外面に刺突文	61	12	13
183	SK51	弥生土器 高杯	(27.0) ― ―	杯部内外面横ミガキ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英、雲母を幾つか含む	普通	橙色（５YR7/8）	口縁部内面に多条沈線、連弧文	61	12	31
184	SK51	弥生土器 甕	― (7.8) ―	脚部内外面調整不明	粗、直径１㎜以下の長石を多く含む	普通	黒 褐 色（2.5Y3/1）		61	12	30
185	SK88	弥生土器 甕	(27.7) 7.6 35.6	底部外面不明、体部外面斜めハケ、内面不明	やや粗、直径９㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	浅黄橙色（10YR8/4）	最大幅31.5cm、体部外面中程と内面下方に炭化物付着	61	10	49
186	SK88	弥生土器 高杯	― ― ―	杯部内外面調整不明	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英、赤色酸化土粒を幾つか含む	普通	黄橙色（10YR8/6）		61	12	44
187	包含層	弥生土器 甕	― ― ―	口縁部外面横位条痕、内面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	灰 褐 色（7.5YR4/2）	口縁部内面に刺突文	61	12	1
188	SK５	石器 石鏃	(1.8) 1.5 0.5	裏面に自然面が残る	安山岩製		重量1.1g	先端角48度、上部欠損	69	12	319
189	SK272	石器 UF	2.3 3.9 0.9		チャート製		重量6.9g		69	12	314
190	SK332	石器 石錘	(3.1) 2.8 0.9	自然面が多く残る	砂岩製		重量8.6g	網掛け部の長さ0.7㎝、幅0.9㎝、下 部と裏面欠損	69	12	321
191	包含層	石器 RF	2.1 2.2 0.9		黒曜石製		重量2.8g		69	12	313
192	包含層	石器 RF	2.5 2.9 1.0		チャート製		重量5.6g		69	12	311
193	包含層	石器 打製石斧	10.2 4.3 1.8	基端部は尖る	ホルンフェルス製		重量110.7g	刃部幅3.4㎝、刃部角56度	69	12	302
194	包含層	石器 打製石斧	8.5 3.5 1.3	基端部は尖る。左側面に細かい調整剥離あり	ホルンフェルス製		重量51.2g	刃部幅2.6㎝、刃部角52度	69	12	303
195	SK９	瀬戸美濃 練鉢	― ― ―	口縁部～体部内外面回転ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石をわずかに含む	普通	淡 黄 色(7.5Y8/3)	全面に灰釉	73	12	51
196	SK９	瀬戸美濃 土瓶	― (8.5) ―	底部外面回転ヘラ削り、体部内外面回転ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を幾つか含む	普通	淡 黄 色(2.5Y8/4)	内面錆釉か	73	12	52
197	SK14	縄文土器 深鉢Ｃ１ｂ	― ― ―	胴部内面横ナデ、胴部外面横ナデ	やや粗、直径３㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	黒褐色（10YR2/1）		73	12	93
198	SK114	縄文土器 深鉢	― (6.0) ―	胴部内面横ナデ、胴部外面横ナデ	粗、直径２㎜以下の長石を幾つか含む	普通	黒 色(2.5Y2/1)		73	12	54
199	SK38	瀬戸美濃 擂鉢	(38.2) ― ―	口縁部内外面回転ナデ	やや粗、直径１㎜以下の長石、石英をわずかに含む	普通	にぶい黄橙色（10YR7/4）	全面に錆釉	73	12	50
200	SK197	縄文土器 深鉢Ｂ１	― ― ―	胴部内面横ナデ、胴部外面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石、石英を多く含む	普通	褐灰色（10YR4/1）	隆帯（幅1.0㎝）、沈線（幅0.5㎝）	73	12	95
201	SK197	弥生土器 内傾口縁壺	― ― ―	口縁部外面横ミガキ、内面横ナデ	やや粗、直径２㎜以下の長石を多く含む	普通	にぶい褐色（7.5YR5/4）		73	12	3
202	SK205	縄文土器 深鉢Ａ３	― ― ―	胴部内面横ナデ、胴部外面不明	粗、直径２㎜以下の長石を多く含む	普通	黒 褐 色（2.5Y3/1）	隆帯（幅0.5㎝）、押引沈線（幅0.6㎝）	73	12	56

第４章　自然科学的手法による報告・検討

第１節　土器の胎土分析

藤根　久・今村美智子（パレオ・ラボ）

１　はじめに

土器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の特徴から、これら砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定することは容易でない。

土器胎土は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料は比較的良質とも思える粘土層から採取され、混和材としての砂粒物は、これら粘土採取の際に粘土層の上下層に分布する砂層などを採取したことが、粘土採掘坑の調査から推察される。

東海地域には、弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器が知られており、これらパレススタイル土器の約３分の１では、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれる（藤根、1998；車崎ほか、1996)。これら火山ガラスは、粘土採取の際に近接地に分布するテフラ層を採取したことが予想される。このように、胎土中の混和材は地層の特徴である可能性が高く、現河川砂とは大きく異なることから、現在の河川砂との比較では問題が大きい。

土器胎土は、第一に土器に使用した粘土や混和材がどのような特徴を持つかを十分理解することが重要であり、こうした特徴を持つと思われる粘土層や砂層などと比較検討すべきと考える。

ここでは、大杉西遺跡の調査において検出された山中及び廻間Ⅰ式併行期の土器の胎土材料について検討した。

２　試料と方法

試料は、廻間Ⅰ式併行期の土器棺墓の可能性のある遺構（SK88）から出土した甕１試料、山中式併行期の竪穴住居跡（SB１・２）から出土した甕及び壺の６試料、廻間Ⅰ式併行期の土坑（SK51・88）から出土した高杯２試料である（表26)。

これら土器は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片（プレパラート）を作成した。

（１）試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。

（２）さらに、研磨機及びガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着した。

（３）その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02㎜前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

試料は、薄片全面について微化石類（放散虫化石、骨針化石、珪藻化石、胞子化石、植物珪酸体化石）や大型粒子などの特徴について観察・記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

［放散虫化石］

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウム又は珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中によく見られる。

［骨針化石］

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

［珪藻化石］

珪酸質の殻を持つ微小な藻類で、その大きさは10～数百μm程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境を持つ。最近では、小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（？）とした。なお、各胎土中の珪藻化石は、その詳細を記載した。

［胞子化石］

胞子状粒子は、珪酸質と思われる直径10～30μm程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

［植物珪酸体化石］

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50μm前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

［石英・長石類］

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類（雲母）は、黄色などの細粒雲母類が包含される石英又は長石類である。

［長石類］

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などのSiO_2％の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

［雲母類］

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）に沿って板状には剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などのSiO_2％の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩及び堆積岩にも含まれる。

なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

［輝石類］

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビールびんのような淡褐色及び淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO２％が少ない深成岩、SiO２％が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO２％が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO２％の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

［角閃石類］

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO２％が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

［ガラス質］

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさん持つガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。なお、濁ガラスは、非晶質でやや濁りのあるガラスで、火山岩類などにも見られる。

［流紋岩質］

流紋岩質は、顕著な斑晶質を示し基質は著しく細粒である。複合石英類（微細）に類似した構造を示すが、基質部ではガラス質を伴うことから区別される。これらの構造を示す岩石は、流紋岩のほか石英斑岩などであるが、火山岩類の一部と考えられる。

［斑晶質・完晶質］

斑晶質は斑晶(鉱物の結晶)状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるもの､完晶質は､ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質､完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い。

［凝灰岩質］

凝灰岩質は、ガラスや鉱物、火山岩片などの火山砕屑物が固化したもので、非晶質でモザイックな文様構造を示す。起源となる火山により鉱物組成は変わる。溶結凝灰岩とは、高温で固結した凝灰岩で流理構造状の組織が見られる。

［複合鉱物類］

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類（含雲母類)、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類（含輝石類)、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類（角閃石類）とした。

［複合石英類］

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質(マトリックス)の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒のものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01㎜未満のものを微細、0.01～0.05㎜のものを小型、0.05～0.1㎜のものを中型、0.1㎜以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類（等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

［砂岩質・泥岩質］

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分を持つもので、含まれる粒子の大きさが約0.06㎜以上のものを砂岩質とし、約0.06㎜未満のものを泥岩質とする。

［不透明・不明］

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

３　各胎土の特徴及び計数の結果

微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1㎜前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

№１：100～800μm が多い（最大粒径2.6㎜）。石英・長石類＞流紋岩質＞複合石英類（微細）》複合石英類、斜長石（双晶）、単斜輝石、角閃石類、砂岩質、雲母類、凝灰岩質、［斑晶質、ガラス質］、ジルコン、淡黒色粒子、珪藻化石（湖沼沼沢湿地指標種群 *Melosira　ambigua*、淡水種 *Pinnularia* 属、不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石

№２：50～700μm が多い（最大粒径1.5㎜）。石英・長石類＞流紋岩質＞複合石英類（微細）、凝灰岩質、［ガラス質］、単斜輝石、胞子化石、植物珪酸体化石

№３：50μm 以下が多く非常に微細（最大粒径2.8㎜）。石英・長石類＞流紋岩質、複合石英類（微細）、砂岩質、ガラス質、珪藻化石（淡水種 *Eunotia　biareofera*、*Diplneis* 属、*Cymbella* 属、不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石

№４：60～700μm が多い（最大粒径1.4㎜）。石英・長石類＞流紋岩質＞複合石英類（微細）、砂岩質、角閃石類、（斑晶質）、ガラス質、珪藻化石（淡水種 *Eunotia* 属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

№５：50～600μm が多い（最大粒径1.6㎜）。石英・長石類＞流紋岩質＞複合石英類（微細）＞（斑晶質）、角閃石類、珪藻化石（淡水種沼沢湿地付着生指標種群 *Pinnularia viridis*、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）

№６：50～350μm が多い（最大粒径1.1㎜）。石英・長石類＞複合石英類（微細）＞ガラス質、ジルコン、（凝灰岩質）、放散虫化石（４個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属／*Thalassiosira* 属、淡水種 *Eunotia* 属、*Diploneis* 属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）

№７：60～200μm が多い（最大粒径500μm）。石英・長石類＞複合石英類（微細）、ガラス質、ジルコン、角閃石類、珪藻化石（淡水種 *Eunotia* 属）、植物珪酸体化石

№８：60～500μm が多い（最大粒径800μm）。石英・長石類＞流紋岩質＞複合石英類（微細）＞凝灰岩質、ガラス質、単斜輝石、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

№９：50～400μm が多い（最大粒径900μm）。石英・長石類＞流紋岩質＞複合石英類（微細）、単斜輝石、ジルコン、珪藻化石（淡水種 *Pinnularia* 属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石やや多い

４　考察

（１）微化石による材料粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、放散虫化石や珪藻化石あるいは骨針化石などが検

出された。これら微化石類の大きさは、放散虫化石が数百μm、珪藻化石が10～数100μm、骨針化石が10～100μm前後である。なお、植物珪酸体化石が10～50μm前後である。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9μm以下、シルトが約3.9～62.5μm、砂が62.5μm～２㎜である（地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981）。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれていること、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した胎土は、微化石類により、a）淡水成粘土を用いた胎土、b）水成粘土を用いた胎土、c）その他の粘土を用いた胎土、に分類される。以下では、分類される胎土についてその特徴を述べる。

a）淡水成粘土を用いた胎土（７胎土）

これらの胎土中には、淡水種珪藻化石が明瞭に検出された。また、不明種珪藻化石や骨針化石なども検出された。なお、試料№６の壺胎土中には、外洋性堆積物起源の放散虫化石が明瞭に検出され、その他海水種珪藻化石も付随して出現した。

b）水成粘土を用いた胎土（１胎土）

この胎土中には、水成堆積物に由来する骨針化石が検出された。なお、珪藻化石は含まれていなかった。

c）その他の粘土を用いた胎土（１胎土）

この胎土中には、水成環境を指標するような微化石類は含まれていなかった。

（２）砂粒組成による分類

ここで設定した複合鉱物類は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った。起源岩石の推定は、砂岩質や複合石英類（微細）が堆積岩類、斑晶質や完晶質が火山岩類、ガラス質がテフラ（火山噴出物）、複合石英類（大型）や複合鉱物類（含雲母類など）が深成岩類、凝灰岩質が凝灰岩類、流紋岩質が流紋岩類である。

砂粒組成の分類は、最も多く出現する分類群（第１出現群）と次いで多く出現する分類群（第２出現群）の組合せに従った（表28）。

その結果、流紋岩類を主体として堆積岩類を伴うFc群が６胎土検出された。その他では、堆積岩類を主体として凝灰岩類を伴うCe群、堆積岩類を主体として流紋岩類を伴うCf群、堆積岩類を主体としてテフラを伴うCg群が各１胎土検出された（表27）。

（３）周辺の粘土及び砂粒組成と胎土材料の比較

当遺跡は、美濃加茂盆地の西側端部の台地上に位置する。また、坂祝町東野周辺では、木曽川泥流堆積物などから構成される中位段丘堆積物が堆積する（鹿野、1990）。

この中位段丘面を構成する堆積物中には、粘土層の存在が知られており、坂祝町深萱とその北方に分布する深萱粘土層、富加駅付近に分布する富加粘土層、関市黒屋南部の田園地帯に分布する黒屋粘土層と呼ばれ、灰色～灰白色～青灰色を呈する粘土層である（鹿野、前出）。また、同時異層の田原礫層はチャートを主体として礫岩や濃飛流紋岩を僅かに含み、同様に関礫層はチャートや花こう岩類

を含む（鹿野、前出）。

土器の胎土材料のうち、粘土材料は粘土に付随する珪藻化石の存在から水成粘土層の粘土を利用していたことが指摘できるが、混和材としての砂粒物は同時か又は付随する上下層の砂層の砂を利用している可能性が考えられる。

ここで検討した弥生時代の土器の胎土材料は、試料№６の壺を除いて多くの胎土中において淡水成粘土を使用し、砂粒組成が流紋岩質の砂粒から構成される。こうした砂粒組成からみて大きくは木曽川流域の砂粒組成と考えられるが、当遺跡周辺の砂粒組成とも考えられる。詳細な調査が必要であるが、前述の中位段丘を構成する深萱粘土層や富加粘土層あるいは黒屋粘土層は、これら土器の粘土材料であることが考えられる。これは、同時異層の田原礫層が流紋岩類の砂礫を含むことと矛盾しない。

一方、試料№６の壺は、淡水成粘土を利用した胎土であるが放散虫化石を含むこと、砂粒組成が堆積岩類を主体として凝灰岩類からなる組成を示すことから、他の土器とは胎土の特徴が異なる。類似した胎土は、可児市宮之脇遺跡Ａ地点出土製塩土器においてほぼ同様の特徴が見られたことから（藤根・今村・小村、2001）、この遺跡周辺の材料を反映している可能性が考えられる。

５　おわりに

土器作りは、一般的に微化石類を良好に含むことから、相当良質の粘土層を利用したことが考えられるが、第一に該当する地域において材料として利用できる粘土層が如何なる範囲で分布しているかを把握する必要がある。そこで、こうした利用可能な粘土層の分布域において、粘土層の堆積環境や上下層の砂層の鉱物・岩石の特徴を調べるといった方法を採用する。

今後、材料として良質の粘土層の広域的な地質調査が不可欠であり、こうした粘土に伴う砂層の岩石学的特徴を検討する事により、土器作りあるいは製作地などについての詳細を明らかにしたいと考える。

引用文献

安藤一男1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42、2、73-88.

地学団体研究会・地学事典編集委員会編1981『増補改訂　地学事典』平凡社　1612p

藤根　久1998「東海地域（伊勢―三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料」『第６回東海考古学フォーラム岐阜大会、土器・墓が語る』108-117.

藤根　久・今村美智子2001「第３節　土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴」『波志江中宿遺跡』、日本道路公団・伊勢崎市・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団、p. 262-277.

藤根　久・今村美智子・小村美代子2001「弥生土器・製塩土器・土師器の胎土材料」『愛知県埋蔵文化財センター報告書「八王子遺跡報告編」』、財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター、161-186.

小杉正人1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27、１-20.

車崎正彦・松本　完・藤根　久・菱田　量・古橋美智子1996「(39) 土器胎土の材料―粘土の起源を中心に―」『日本考古学協会第62回大会研究発表要旨』、153-156.

鹿野勘次1990「美濃加茂周辺地域の第四系」『岐阜県地学教育』１、26、11-24.

表26　土器の詳細とその肉眼的特徴

分析№	器種	掲載遺物№	遺構	時期	色相 明度／彩度	色	中黒層の有無	混入粒子の肉眼的特徴					
								白色粒子	透明結晶	雲母類	赤色粒子	黒灰色粒子	その他
1	甕	185	SK88	廻間Ⅰ	2.5Y7/4	浅黄	なし	◎	△			○	白色・黒灰色粒子大型多い
2	甕	155	SB2-SK1	山中	7.5YR5/4	にぶい褐	茶黒	◎	○			△	白色特徴的に多い
3	甕	157	SB2-SK1	山中	10YR7/3	にぶい黄橙	なし	△	△		△		砂粒が細粒
4	広口壺	128	SB1	山中	10YR7/6	明黄褐	有	○	△			○	
5	甕	124	SB1	山中	5YR6/6	にぶい黄橙	有	◎	○		△		
6	壺	129	SB1	山中	2.5Y8/4	淡黄	表面側のみ黒	○	○		△	△	
7	直口鉢	134	SB1	山中	7.5YR6/3	にぶい褐	なし	△	△			△	砂粒が細粒
8	高杯	183	SK51	廻間Ⅰ	7.5YR5/8	明褐	なし	◎	△			△	
9	高杯	186	SK88	廻間Ⅰ	10YR7/6	明黄褐	有	◎		△		△	砂粒が細粒

多産、○多い、△少ない

表27　土器胎土の粘土及び砂粒の特徴

分析№	粘土の特徴									砂粒の特徴								鉱物の特徴					その他の特徴
	分類	種類	放散虫化石	海水種珪藻化石	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	胞子化石	植物珪酸体化石	分類	堆積岩類	深成岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	片岩類	テフラ	角閃石類	輝石類	ジルコン	ザクロ石類	雲母類	
1	○	淡水成			○	◎	△	△	△	Fc	++	+	(+)	+	+++		(+)	+	+	(+)			
2		その他							△	Fc	+			+	++		(+)		+				
3	○	淡水成			○	○		△	○	(Cf)	+				+		+	+					砂粒は細粒
4	○	(淡水成)			△	△		△	○	Fc	+		(+)		++		+	+	+				
5	○	(淡水成)			△	○	△	△	○	Fc	+			+	++		(+)	+		+			
6	○	淡水成	○	△	○	○	△	△	◎	Ce	++			+			+	+					
7	○	(淡水成)			△				○	(Cg)	+						+	+		+			砂粒は細粒
8	□	水成					△		△	Fc	+			+	++		+		+				
9	○	(淡水成)			△		△	△	○	Fc	+			+	++		(+)		+	+			砂粒は細粒

※分析№は表26に対応する　　◎多産、○多い、△少ない、＋＋＋多い、＋＋やや多い、＋含まれる、(＋) 若干含まれる

表28　胎土中岩石片の分類と組み合わせ

			第１出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第２出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Ef	Fg	

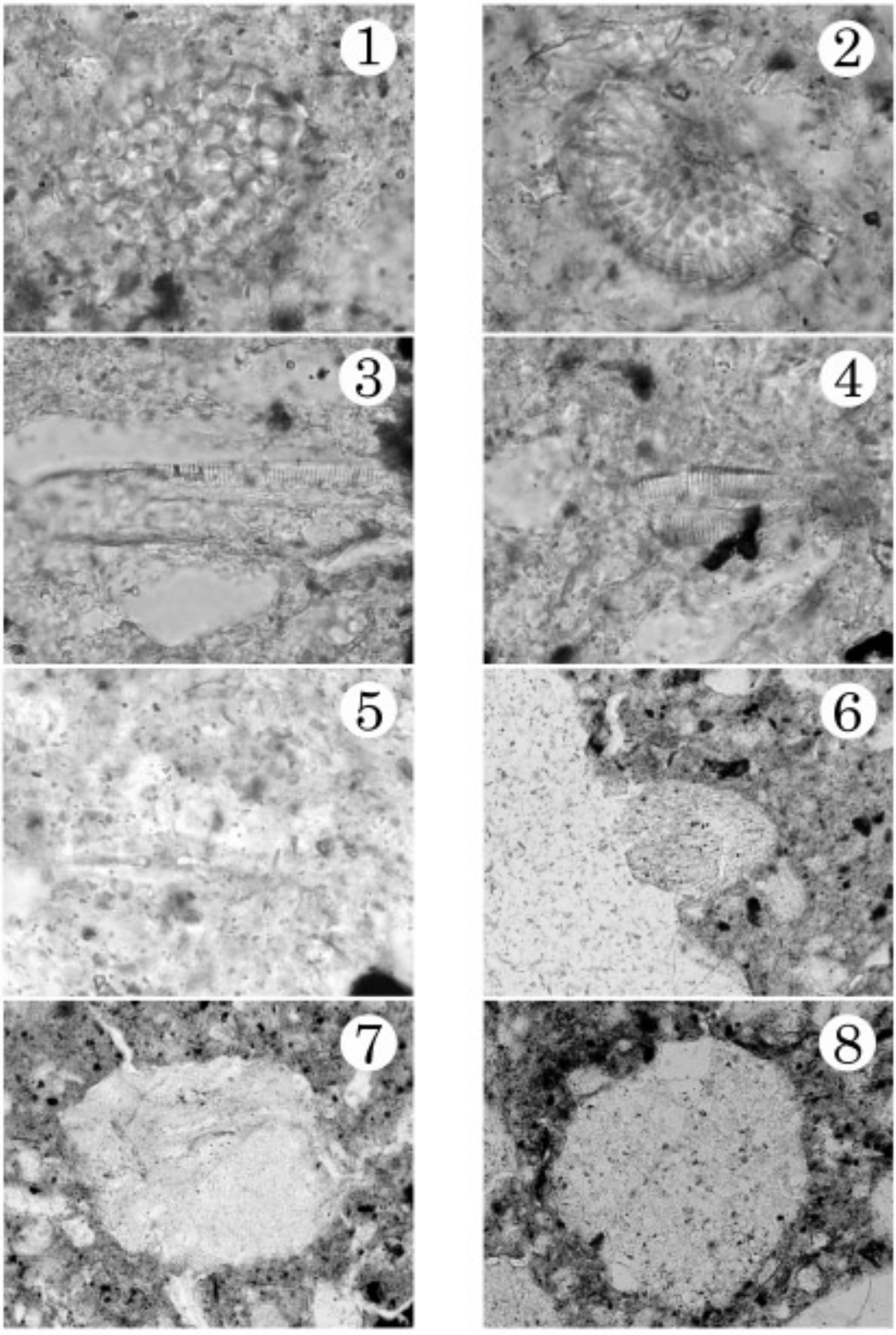


写真４　胎土中の粒子顕微鏡写真（スケール：№１・２・３が26μm、№３・４が20μm、№６～８が100μm）

１．放散虫化石（№６）　２．放散虫化石（№６）　３．珪藻化石（Pinnularia 属、№１）
４．珪藻化石（Pinnualria 属、№１）　５．珪藻化石（Pinnularia 属、№３）　６．斑晶質（№１）
７．凝灰岩質（№１）　８．流紋岩質（№１）

第２節　赤彩土器の赤色顔料

藤根　久（パレオ・ラボ）

１　はじめに

大杉西遺跡の調査では、赤彩した縄文時代中期の土器が出土した。この時代の土器は、全国的にベンガラを使用する場合が多いようであるが、水銀朱を用いた場合も予想されることから、赤色顔料の材料について調べた。ここでは、X 線分析顕微鏡を用いて元素マッピング分析を行った。

２　試料と方法

試料は、出土した縄文時代中期の赤彩した土器片１試料（掲載番号37）である。

最初に、主要な元素の平面分布を調べるために蛍光 X 線分析計を用いて元素マッピング測定を行った。対象とした主な元素は、アルミニウム Al、ケイ素 Si、カリウム K、カルシウム Ca、マンガン Mn、鉄 Fe、水銀 Hg などである。さらに、元素マッピングの結果、赤色顔料の元素でその輝度の高い位置についてポイント測定を行った。

測定は、㈱堀場製作所製 XGT-5000Type Ⅱを用いた。元素マッピングは、X 線導管径100μm、電圧50KV、測定時間10000秒である。また、ポイント測定は、X 線導管径100μm、電圧50KV、電流自動、測定時間500sec である。定量計算は、標準試料を用いない FP 法（ファンダメンタルパラメータ法）で半定量分析を行った。

３　結果

元素マッピング分析の結果、赤色部分は鉄 Fe であることが判明した。なお、水銀 Hg は全く検出されなかった。元素マッピング分析において、鉄の輝度が最も高い場所（含有量が高い）におけるポイント分析では、鉄 Fe が約21.08%であった。このことから、赤色顔料の材料は、鉄を主成分としたベンガラである。

なお、付随する元素として、リン P が約0.87%、イオウが約0.79%検出されている。

表29　鉄の輝度が最も高い場所（図版矢印位置）のポイント分析結果

元 素	ライン	質量濃度[%]	2σ[%]	強度[cps/mA]	化学式	質量濃度[%]
13 Al	K	11.38	0.81	66.82	Al 2 O 3	21.51
14 Si	K	24.39	0.83	303.43	SiO 2	52.17
15 P	K	0.38	0.15	7.62	P 2 O 5	0.87
16 S	K	0.32	0.06	14.68	SO 3	0.79
19 K	K	1.20	0.11	53.24	K 2 O	1.45
20 Ca	K	0.14	0.04	8.85	CaO	0.19
22 Ti	K	1.09	0.08	120.44	TiO 2	1.81
25 Mn	K	0.04	0.02	7.20	MnO	0.05
26 Fe	K	14.75	0.54	3392.41	Fe 2 O 3	21.08
30 Zn	K	0.02	0.01	3.72	ZnO	0.02
37 Rb	K	0.01	0.01	3.12	Rb 2 O	0.01
38 Sr	K	0.01	0.01	2.78	SrO	0.01
40 Zr	K	0.02	0.01	6.46	ZrO 2	0.02

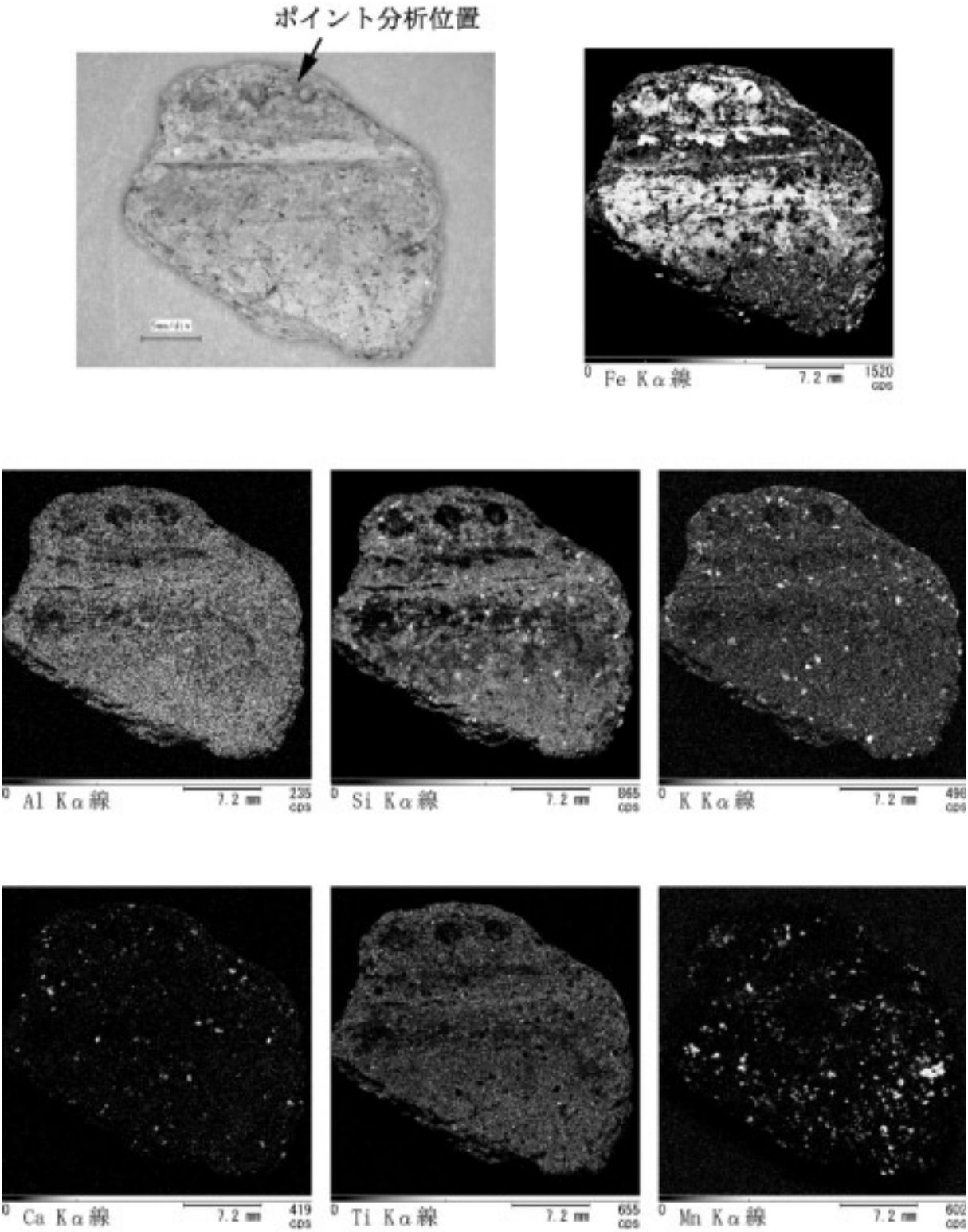


写真５　赤彩土器の元素マッピング

第５章　ま　と　め

今回の調査では、縄文時代以降の遺構と遺物を発見した。縄文時代では中期の掘立柱建物跡と竪穴住居跡などの居住域を、弥生時代では後期～終末期の掘立柱建物跡や竪穴住居跡、柱列跡などの居住域と、方形周溝墓・土器棺墓のある墓域を検出した。古墳時代の遺構と遺物は未発見であるが、奈良時代の遺物はわずかに出土している。その後、平安時代から江戸時代中期までの遺構と遺物は確認できなかったが、江戸時代後期から近代までの土坑や溝などを検出した。本章では、当遺跡における縄文時代と弥生時代の遺構の特徴と変遷、配置などを概観し、まとめとする。

１　遺構の特徴

縄文時代では、竪穴住居跡（SB４）と掘立柱建物跡（SH３）などを検出した。SB４の平面形は方形状で、中央付近に地床炉を有する。また、SH３は桁行２間、梁行２間の近接棟持柱建物跡で、四隅の柱穴が中間の柱穴より大きいという特徴がある。今回の調査では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡ともに１基しか検出していないことから、ここでは当遺跡周辺における縄文時代中期の遺跡で検出された遺構と比較する。当遺跡から半径約10㎞の範囲内において縄文時代中期の遺構が調査された遺跡として関市塚原遺跡、重竹遺跡、美濃加茂市仲迫間遺跡などがある[*1]。このうち、竪穴住居跡と掘立柱建物跡が検出された遺跡は塚原遺跡のみである。塚原遺跡では竪穴住居跡17軒、掘立柱建物跡19棟などが検出され、竪穴住居跡の平面形は方形状で、石囲炉を有し、埋甕が全くないことが特徴である。また、掘立柱建物跡はいずれも桁行２～４間、梁行１間である（関市教育委員会1989）。当遺跡の竪穴住居跡は平面形や埋甕の無いことが塚原遺跡と類似するが、掘立柱建物跡は桁行２間、梁行２間であり、塚原遺跡にはない形態である。また、岐阜県内の他の縄文時代中期の掘立柱建物跡はいずれも桁行２間以上、梁行１間であることから[*2]、当遺跡における桁行２間、梁行２間という掘立柱建物跡の形態は現在までのところ特異といえる。

弥生時代では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、柱列跡、方形周溝墓などを検出した。このうち、竪穴住居跡３軒はいずれも平面形が長方形を呈し、４本柱で、南壁中央付近に土坑を有するという特徴がある。なかでも、SB１は直口鉢や小型器台、磨製石鏃など非日常的な遺物が出土している点で他の竪穴住居跡と様相が異なっている。また、磨製石鏃の未製品と製品が出土したことは、量の多寡が不明であるものの当住居内で磨製石鏃を製作していたことを裏付ける。さらに器種別の出土量は壺198点、甕86点、高杯・器台52点、鉢３点（いずれも接合後破片数）であり、壺が全体の58.4%を占めている。岐阜県内の弥生時代後期～古墳時代の集落遺跡では甕の出土比率が高い遺跡が多く[*3]、当遺跡においても同様の結果を得ている（本書19頁―表５参照）。しかし、SB１の壺の比率が高いことは通常の土器組成とは異なり、この住居跡の特異性を土器組成においても確認できたといえる。

また、今回検出した方形周溝墓は竪穴住居跡に隣接しており、当遺跡と同じ関市内にある重竹遺跡A地点、松ヶ洞遺跡[*4]でも墓域と集落域が隣接しているという共通性がある。

2　遺構の変遷と配置

縄文時代の主要遺構であるSB４とSH３は、いずれも等高線に沿って構築されている。また、弥生時代の遺構のうち、後期中葉（山中Ⅰ式併行期）の遺構であるSH１とSZ１は、縄文時代と同様に等高線に沿って構築されているが、後期後葉～終末期（山中Ⅱ式～廻間Ⅰ式併行期）の遺構であるSB１・２、SZ３、SK88は、いずれもほぼ真北を主軸としている。つまり、遺構の主軸は弥生時代後期後葉～終末期において、「等高線に沿うもの」から「真北を主軸とするもの」へと変化している。斜面で竪穴住居跡や掘立柱建物跡を構築するには、等高線に沿って掘形を掘削すると床面の水平が得られやすく、また、掘削しやすいという利点があるが、それらを無視してあえて方位を優先した社会背景を今後考慮していくべきであろう。

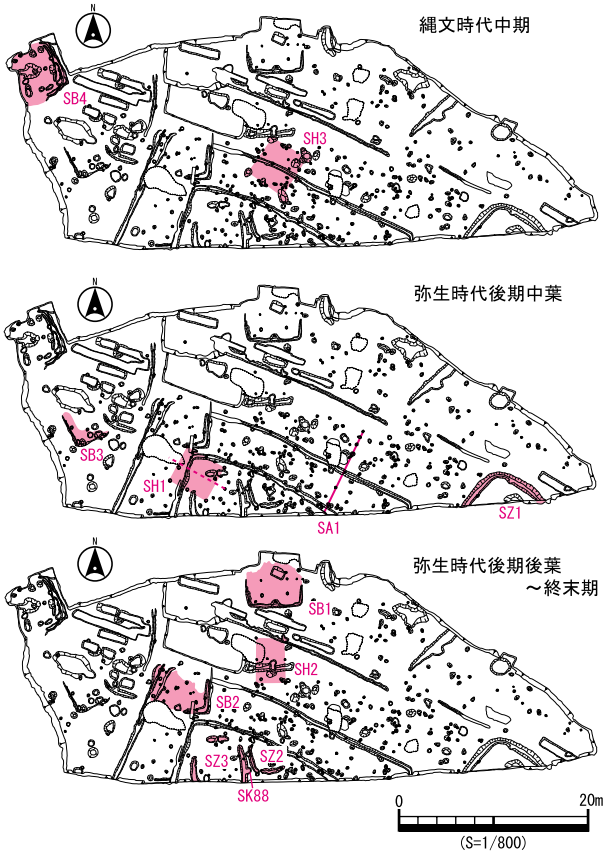


図74　遺構変遷図

なお、弥生時代の他の主要遺構の時期は出土遺物や遺構の重複関係から判断できないが、主軸の方向と時期が関連すると仮定すると、SA１とSB３は後期中葉、SH２とSZ２は後期後葉～終末期となる（図74）。

次に各時代の遺構配置について考えたい。

縄文時代の遺構は、掘立柱建物跡（SH３）は調査区の平坦面に、竪穴住居跡（SB４）は斜面にそれぞれ位置するが、いずれも単独で検出されたため両者の関係は不明である。

弥生時代後期中葉の遺構は、平坦面に独立棟持柱建物（SH１）と区画施設（SA１）があり、平坦面から斜面に移行する付近に方形周溝墓（SZ１）と竪穴住居（SB３）が位置するという配置になる。独立棟持柱建物は、集落の中心に位置すること、銅鐸などに描かれることが多いことなどから、祭式儀礼に関わる建物であった可能性が指摘されている（宮本1991）。当遺跡においては、祭式儀礼に直接関わる資料を得ることができなかったが、独立棟持柱建物跡に隣接して区画施設であるSA１が伴うことは留意すべきである。

一方、弥生時代後期後葉～終末期の遺構は、平坦面に方形周溝墓（SZ２・３）と土器棺墓（SK88）があり、斜面に掘立柱建物（SH２）と竪穴住居（SB１・２）が位置するという配置となり、平坦面に墓域が営まれている。また、方形周溝墓SZ３埋没後に、周溝を再掘削して土器棺墓を構築していることから、この場が一定期間墓域として認識され続けたといえる。

当遺跡周辺では、平成16年現在も関市教育委員会が大杉遺跡の調査を実施しており、今後はその成果を加味した上で大杉遺跡と大杉西遺跡の動向を検討し、その歴史的意義づけを行うべきであろう。

＊１　春日井・長谷川2003より検索した。

＊２　各務原市炉畑遺跡Ｂ地区、揖斐郡藤橋村櫨原村平遺跡などがある（各務原市埋蔵文化財調査センター2003、㈶岐阜県教育　文化財団文化財保護センター2004）。

＊３　岐阜県大垣市今宿遺跡（㈶岐阜県文化財保護センター1998）、岐阜市堀田城之内遺跡（㈶岐阜県文化財保護センター1997）、可児市宮之脇遺跡Ａ地点（可児市教育委員会1994）など。

＊４　松ヶ洞遺跡においては、報告書（関市教育委員会1976）では溝状遺構とされているが、近年の研究では恩田氏が方形周溝墓　としている（恩田2004）。

引用・参考文献

赤塚次郎　1990「廻間式土器」『廻間遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　1992「山中式土器について」『山中遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター

石黒立人　2003「中部地方の土器」『考古資料大観１　弥生・古墳時代　土器Ⅰ』小学館

泉拓良・家根祥多　1985「第１章　北白川追分町遺跡出土の縄文土器」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ―北白川追分町縄文遺跡の調査―』京都大学埋蔵文化財研究センター

泉拓良　1988a「咲畑・醍醐式土器様式」『縄文土器大観』３　小学館

泉拓良　1988b「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観』３　小学館

内堀信雄　1995「第５章　遺物２（土器・陶磁器等）」『御望遺跡』岐阜市教育委員会

宇野隆夫　1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集

恩田知美　2004「美濃地域のムラと墓」『伊勢湾岸における弥生時代後期を巡る諸問題』第11回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会

各務原市埋蔵文化財調査センター　2003『炉畑遺跡Ｂ地区発掘調査現地説明会資料』

春日井恒・長谷川幸志　2003「岐阜県美濃地方における縄文時代建物遺構の変遷」『関西縄文時代の集落・墓地と生業　関西縄文論集』１　関西縄文文化研究会編

可児市教育委員会　1994『川合遺跡群』

岐阜県教育委員会　2002『改訂版　岐阜県遺跡地図』

㈶岐阜県文化財保護センター　1997『堀田城之内遺跡』

㈶岐阜県文化財保護センター　2000『野笹遺跡』Ⅰ

㈶岐阜県文化財保護センター　2002『後平茶臼古墳・後平遺跡』

㈶岐阜県教育文化財団文化財保護センター　2004「櫨原村平遺跡発掘調査概要」『岐阜県新発見考古速報2004』

国立歴史民俗博物館　1997『農耕開始期の石器組成』

佐原眞　1981「縄文施文法入門」『縄文土器大成３　後期』

関市教育委員会　1976『関市松ヶ洞遺跡発掘調査報告書』

関市教育委員会　1989『塚原遺跡・塚原古墳群』

関市教育委員会　1994『新修　関市史　考古・文化財編』

関市教育委員会　1996『新修　関市史　民俗編』

関市教育委員会　2002『大杉遺跡第９次発掘調査現地説明会資料』

多治見市教育委員会　1993『美濃窯の焼き物』
広瀬和雄　1998「弥生時代の「神殿」」『都市と神殿の誕生』新人物往来社
藤澤良祐　1998『瀬戸市史　陶磁史篇六』愛知県瀬戸市
町田章　1995「石器の研究法―報告書作成に伴う観察・記録法②―」『長野県埋蔵文化財センター紀要』4
町田章　1996「石器の研究法―報告書作成に伴う観察・記録法①―」『長野県の考古学』
㈶長野県埋蔵文化財センター
宮本長二郎　1991「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会
宮本長二郎　1996『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版

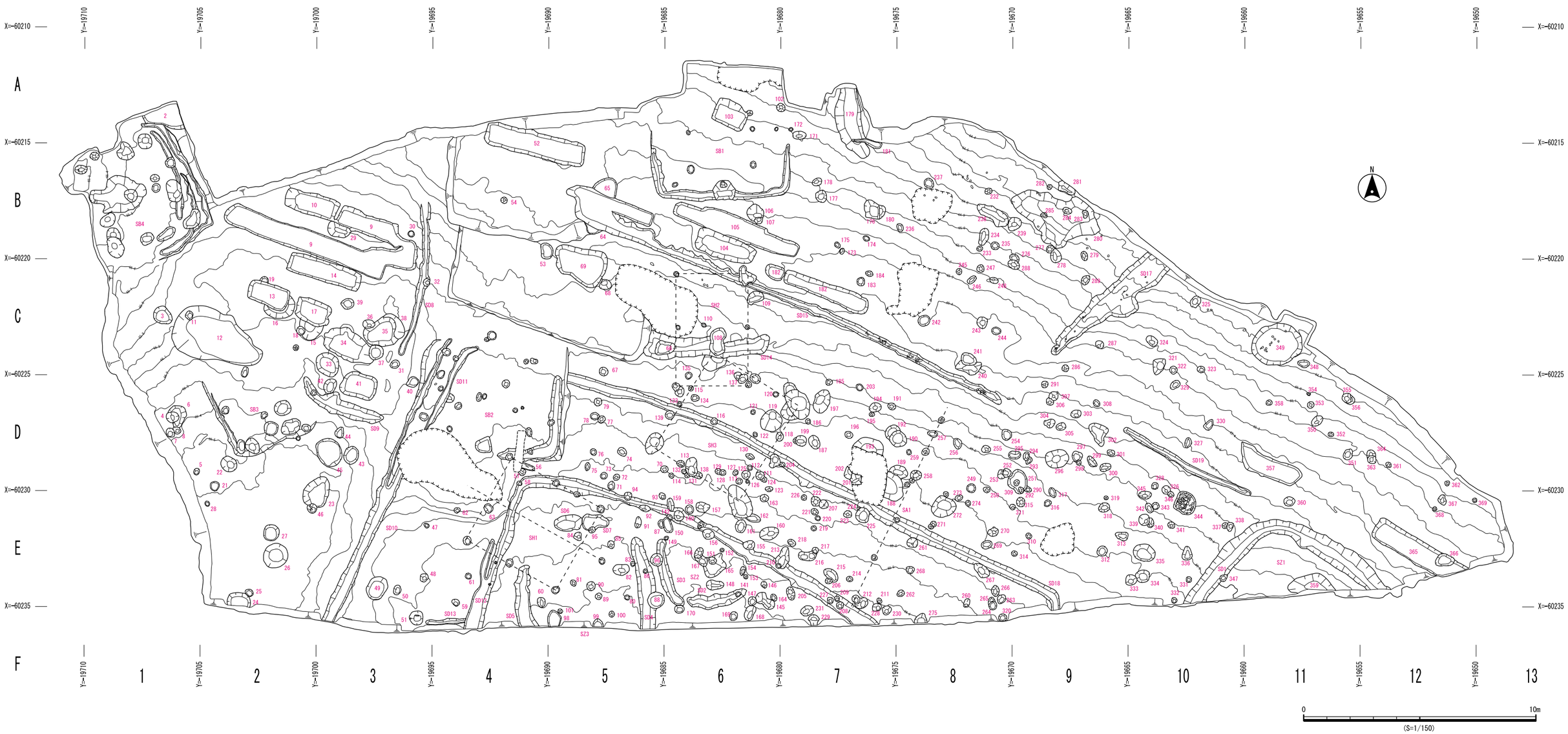


図75　遺構配置図

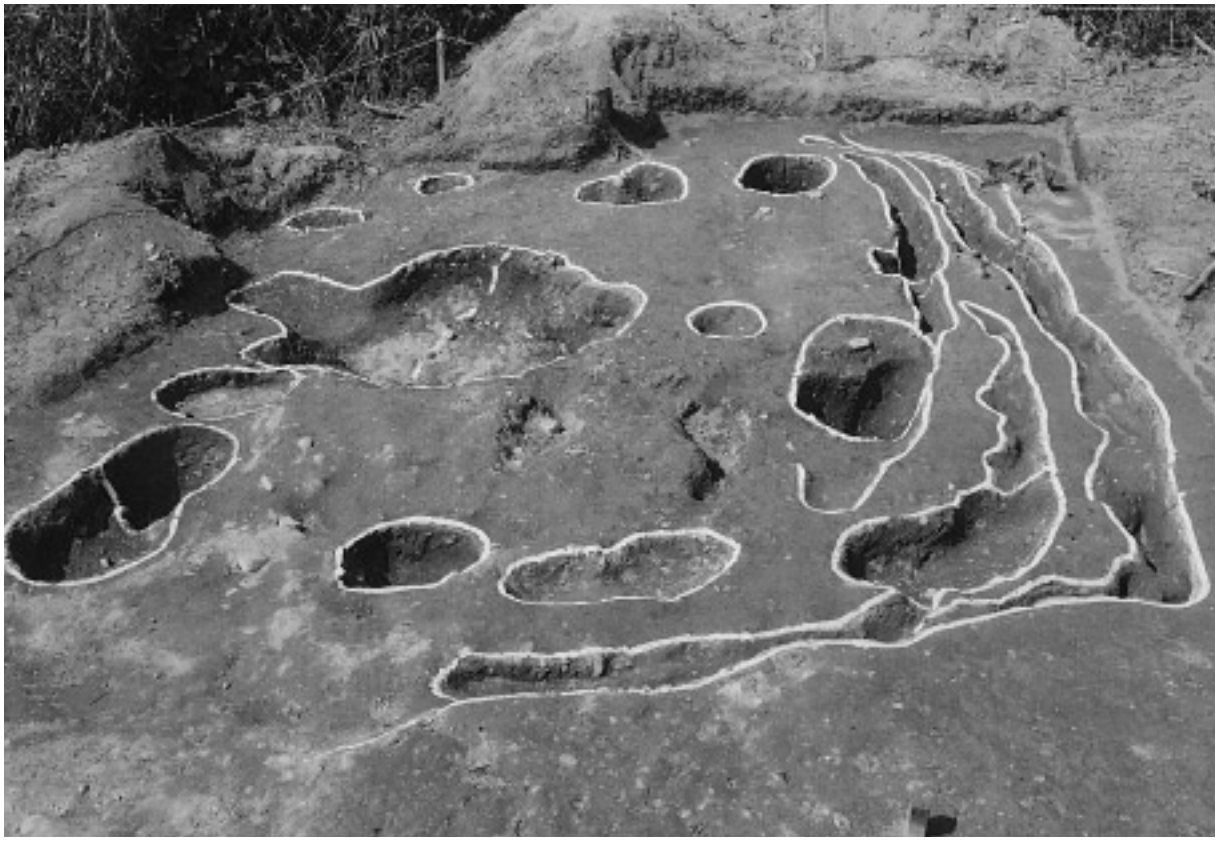
竪穴住居跡内の遺構番号と掘立柱建物跡・柱列跡を構成する柱穴番号はそれぞれ付していない。
土坑は SK という頭文字を省略している。

写 真 図 版

調査区近景（西から）

調査区近景（上から）

図版２　縄文時代の遺構（１）



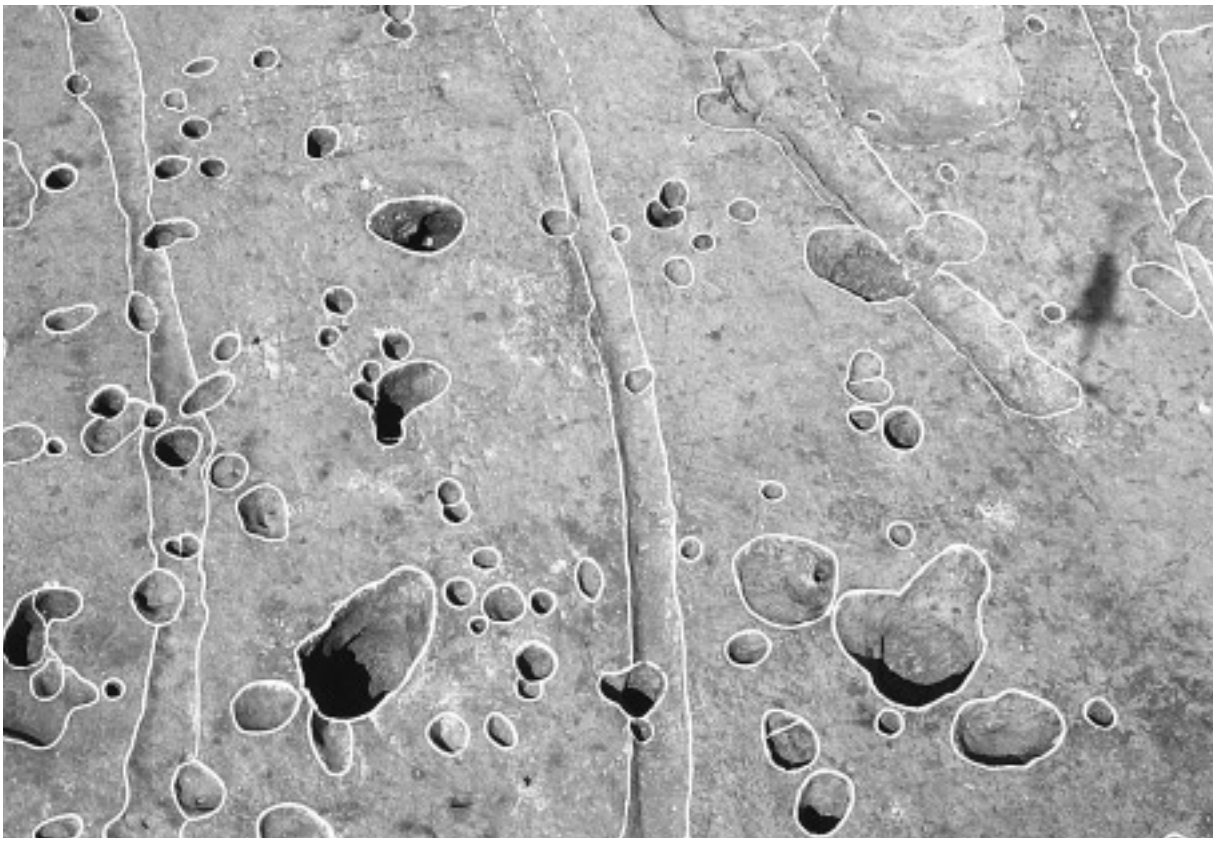
SB４完掘状況（南東から）

SB４−SC２土器出土状況（南西から）

SK22土器出土状況（南から）

SK280完掘状況（東から）

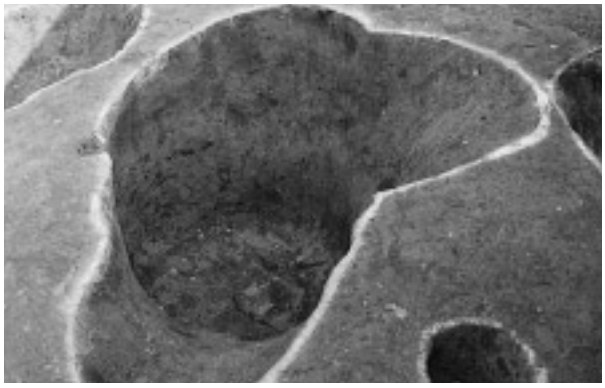
SK349土器出土状況（南西から）



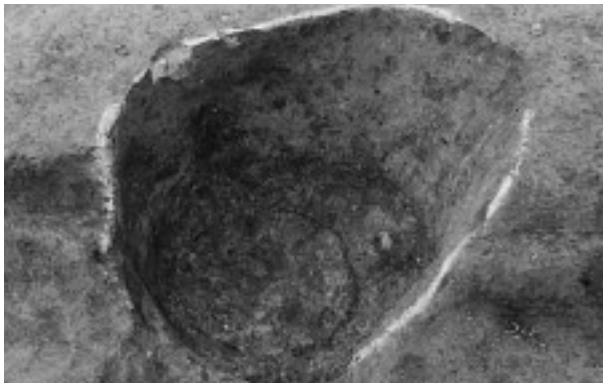
SH３完掘状況（南東から）

SH３−P51完掘状況（北西から）

SH３−P53完掘状況（北東から）

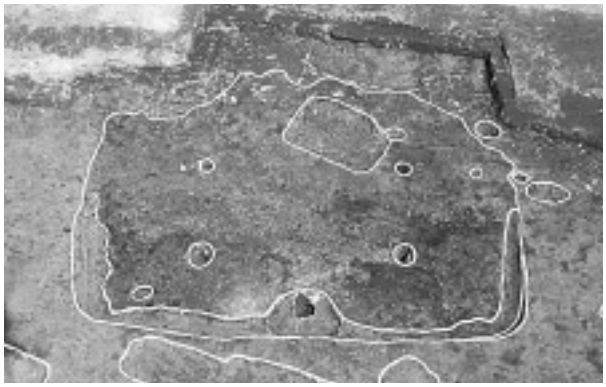


SH３−P55完掘状況（北から）

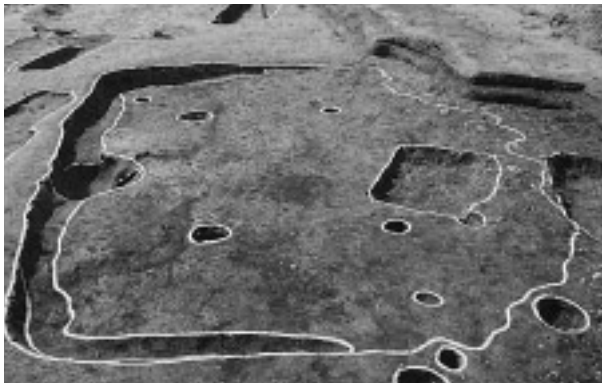


SH３−P58完掘状況（北西から）

図版４　弥生時代の遺構（１）



SB１完掘状況（南から）



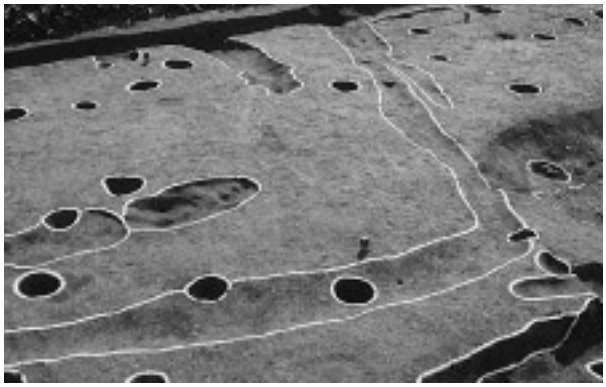
SB１完掘状況（東から）

SB１−SK370土層（東から）

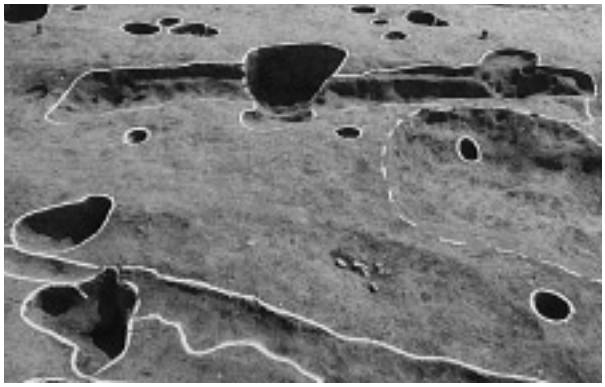
SB２完掘状況（東から）

SB２−SK１土器出土状況（西から）

SB３完掘状況（北西から）

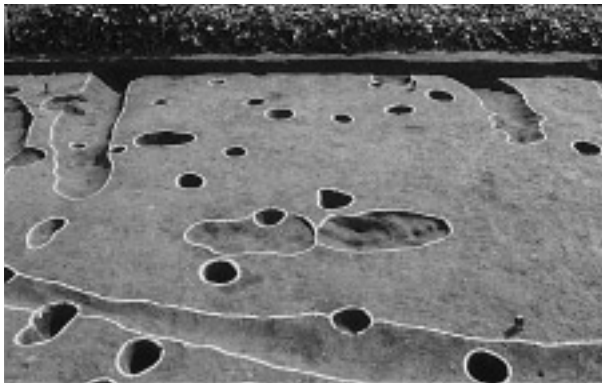


SH１完掘状況（北東から）

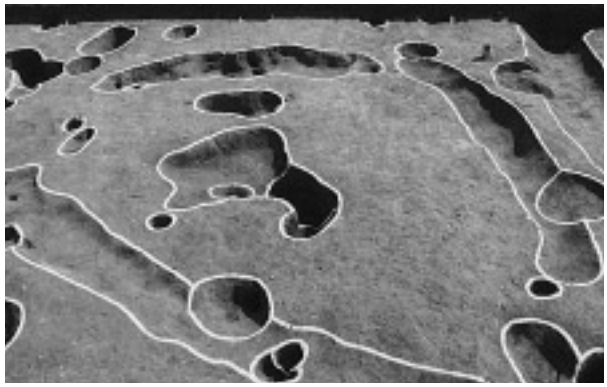


SH２完掘状況（北から）

SZ１完掘状況（東から）

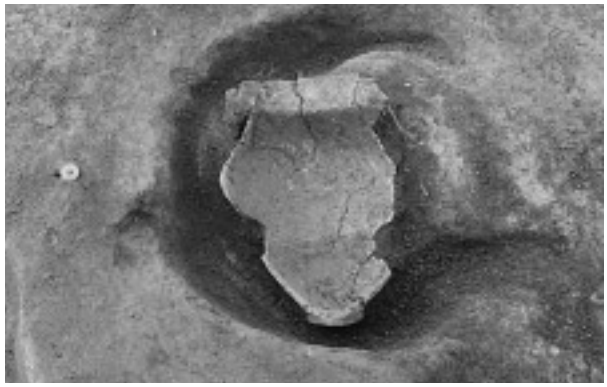


SZ３完掘状況（北から）



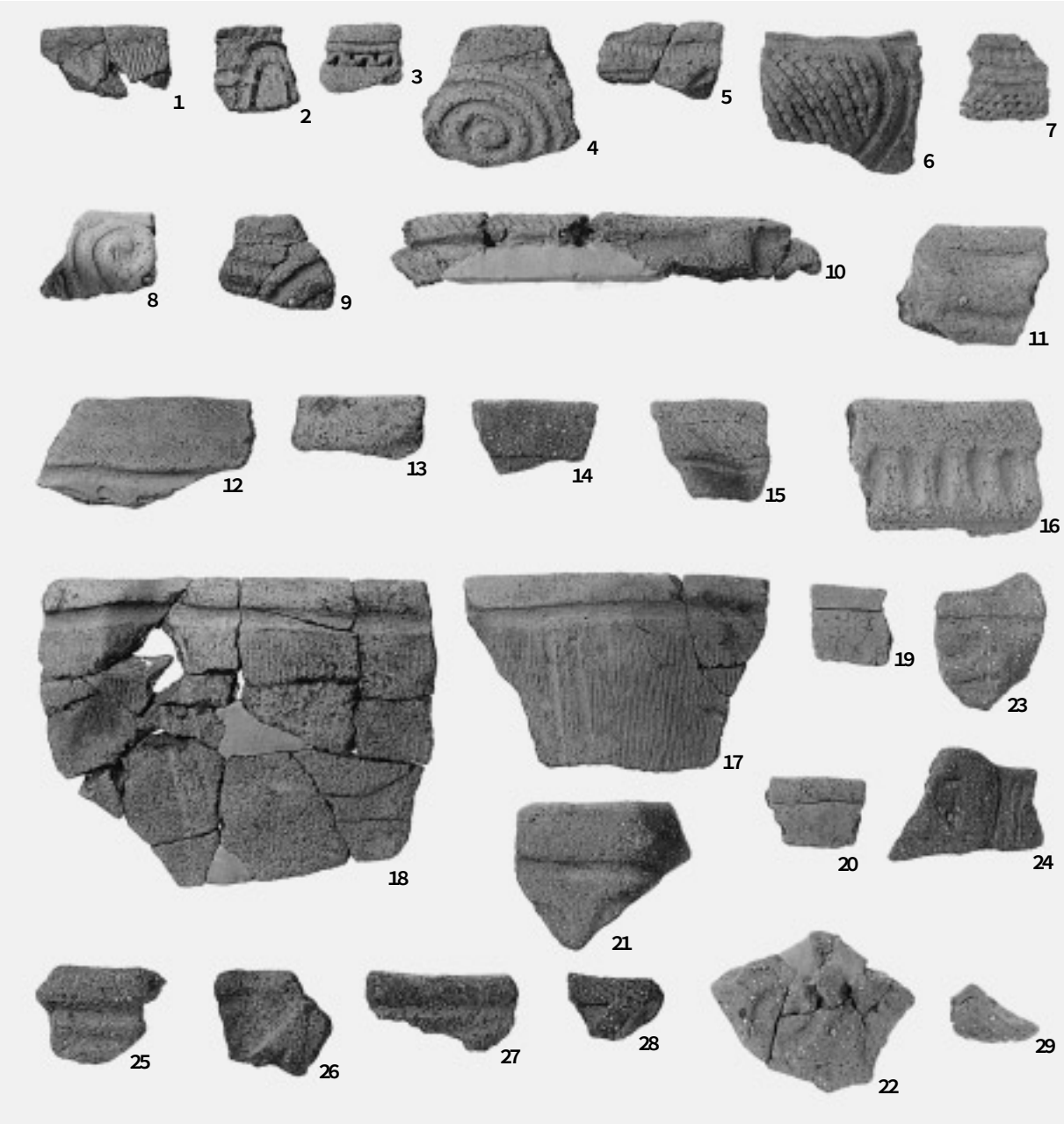
SZ２完掘状況（北から）

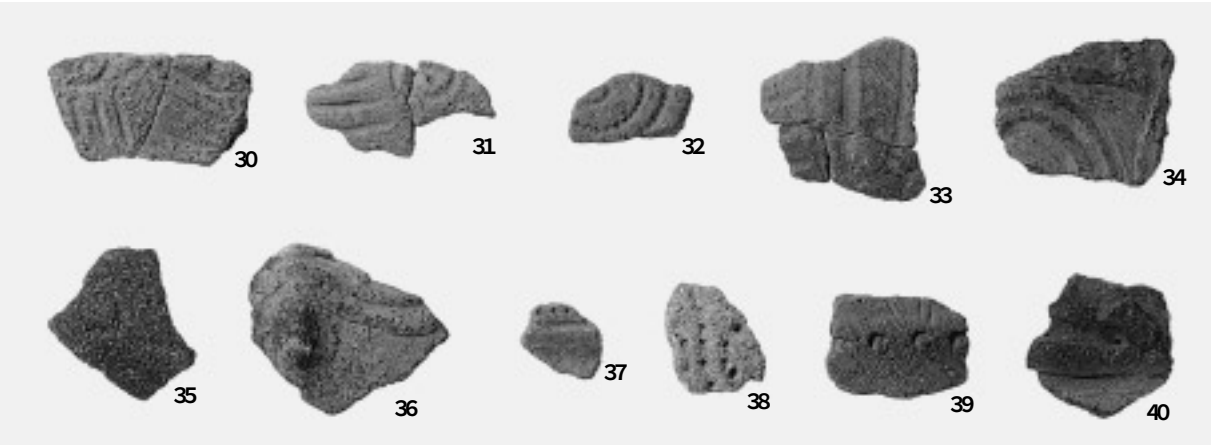
SK88土層（北から）

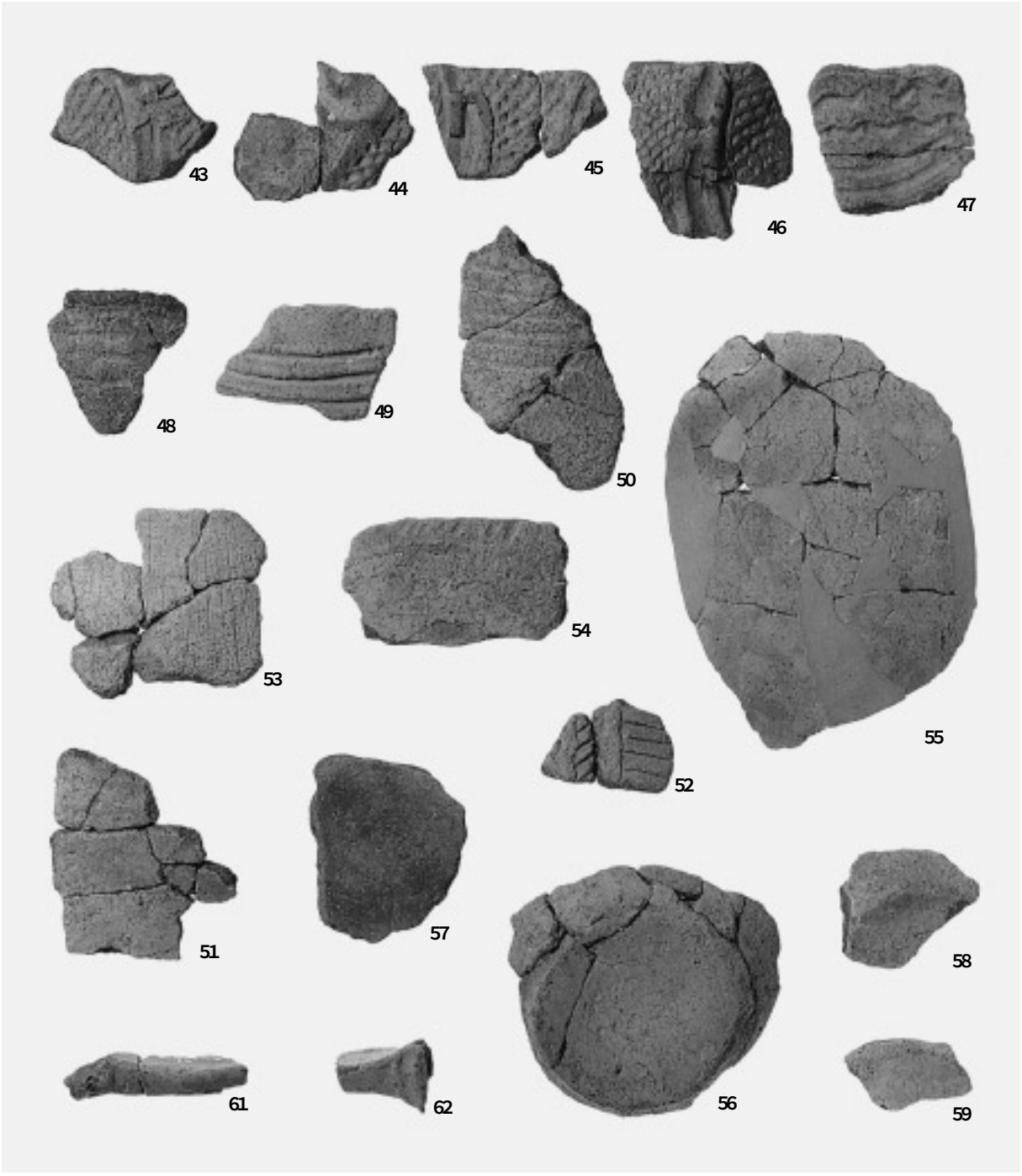


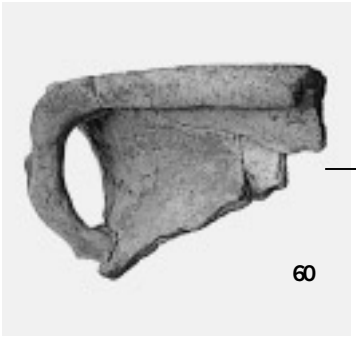
SK88土器出土状況（北から）

図版６　縄文時代の遺構出土遺物（１）

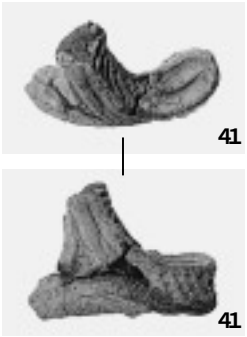





43
44
45
46
47
48
49
50
53
54
55
52
51
57
58
61
62
56
59


60

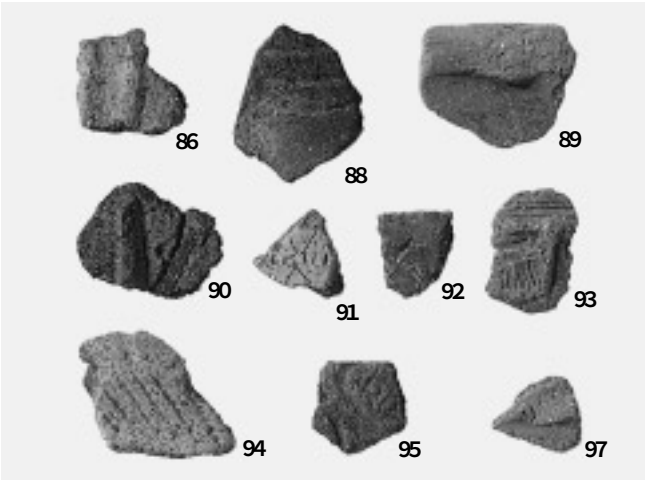
60

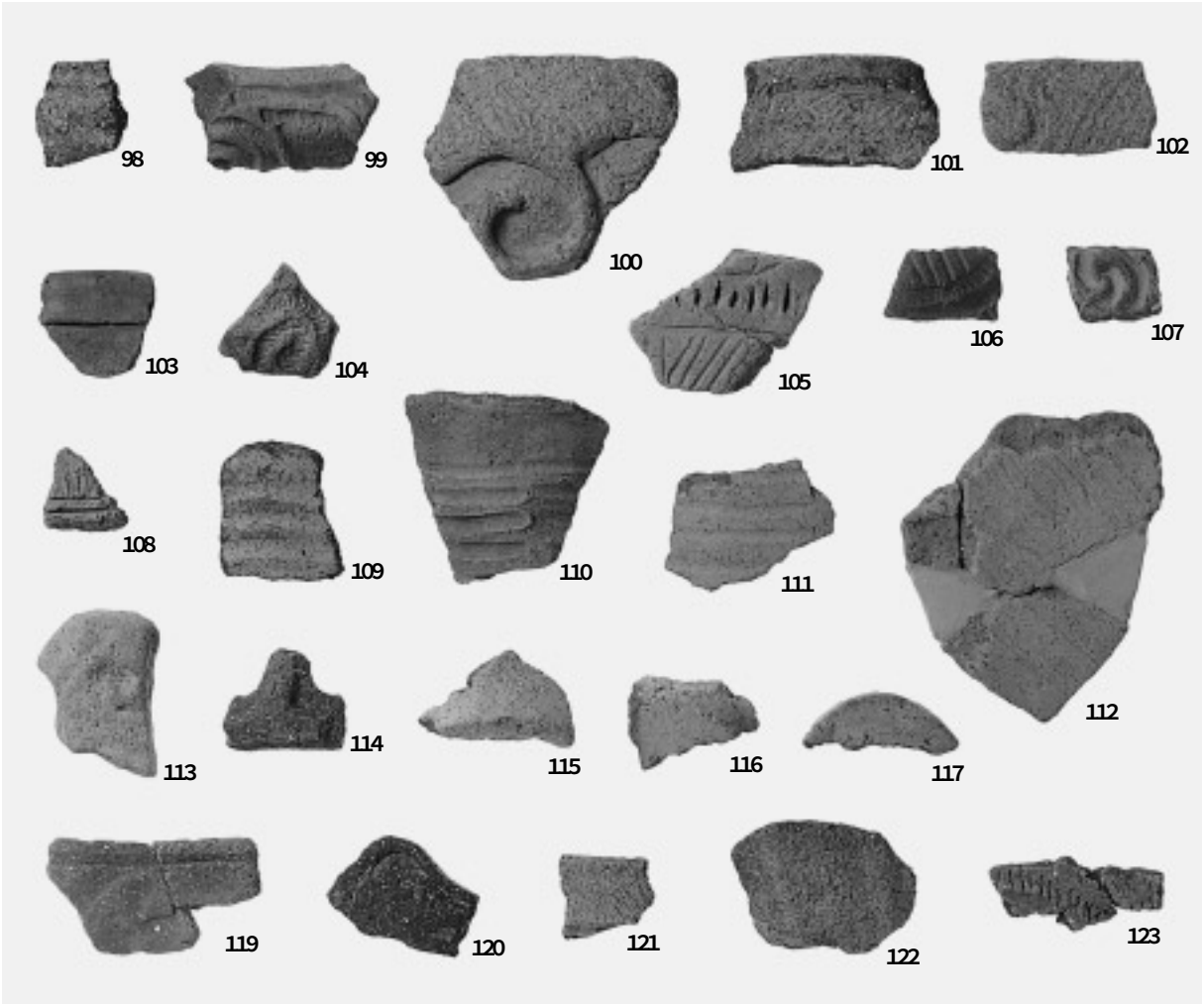

41
41

図版８　縄文時代の遺構出土遺物（３）

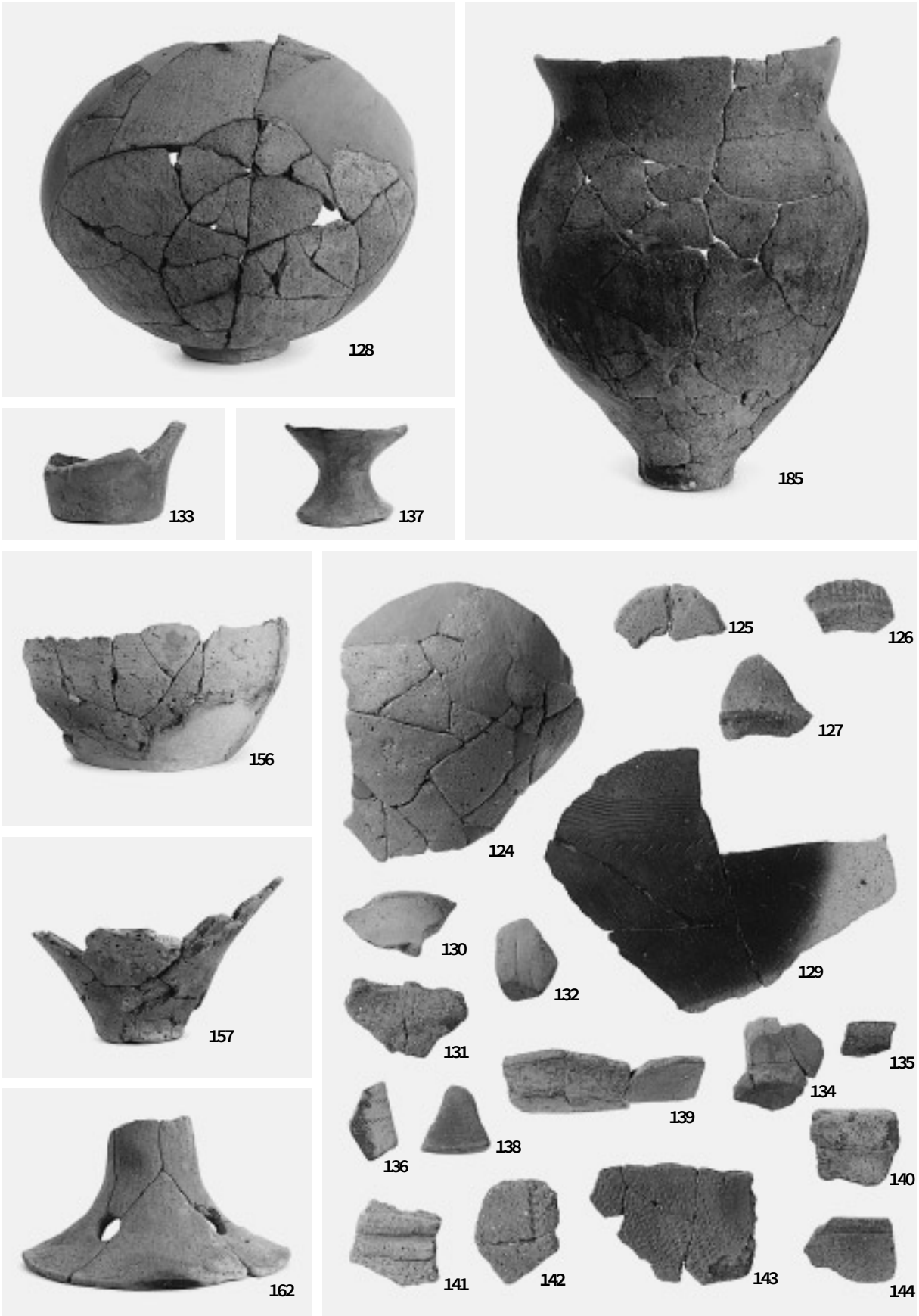
79
80
81
82
83
84
85

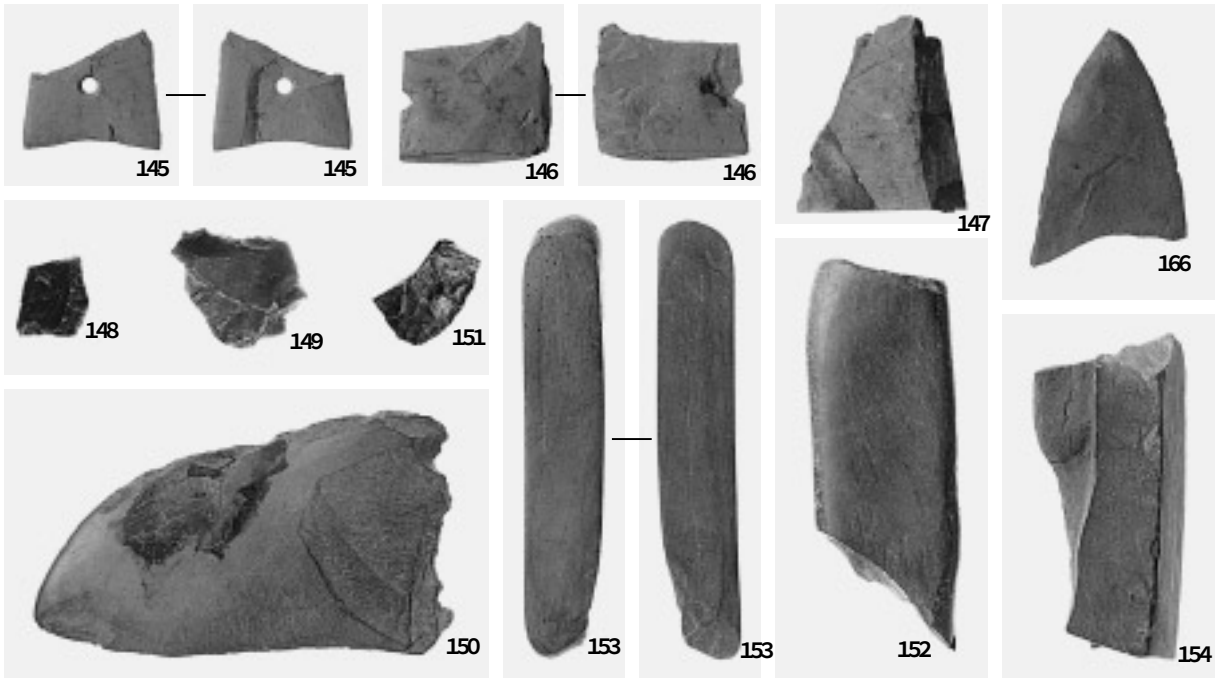
87


86
88
89
90
91
92
93
94
95
97


98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
119
120
121
122
123

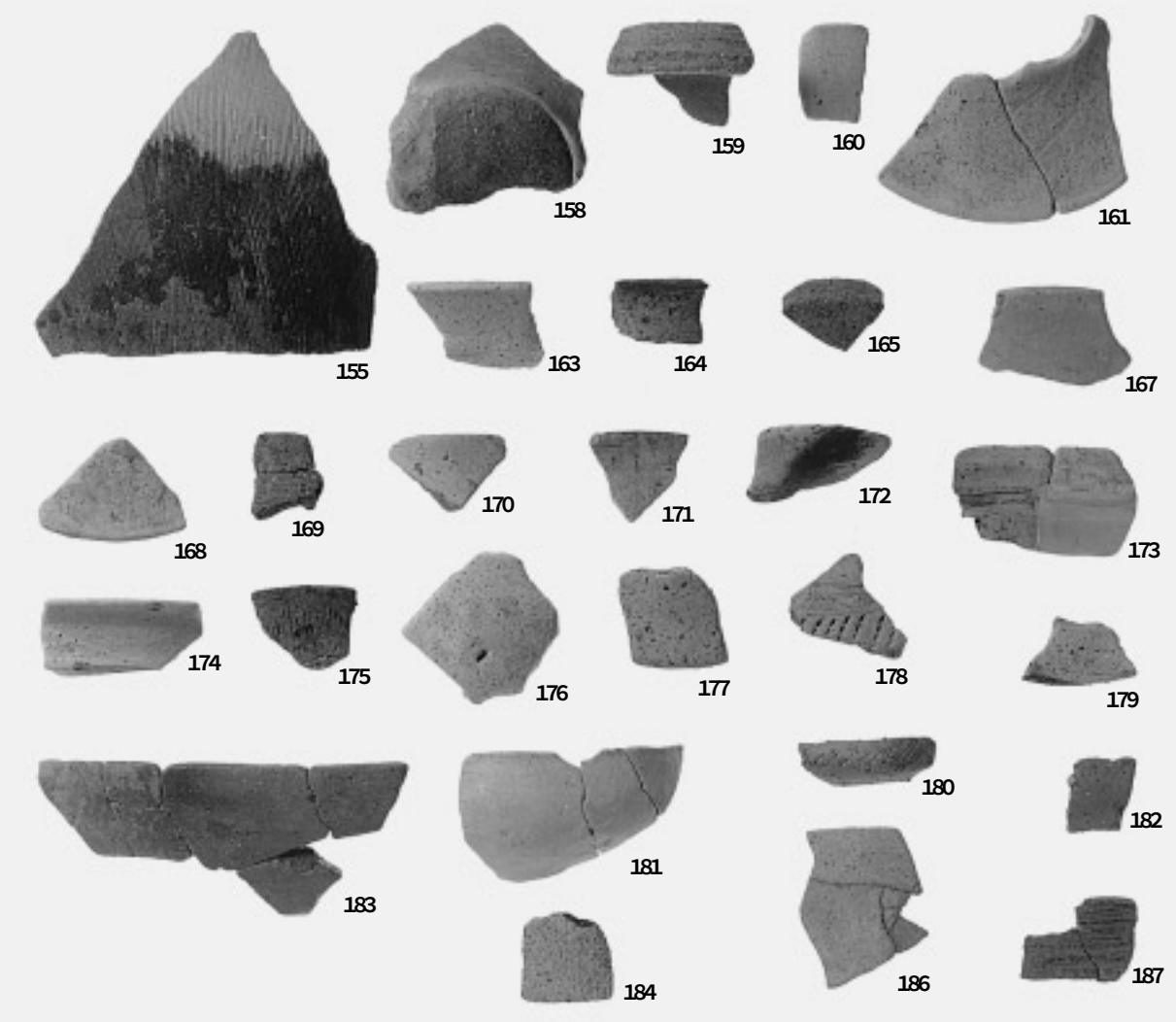
図版10　弥生時代の遺構出土遺物（１）

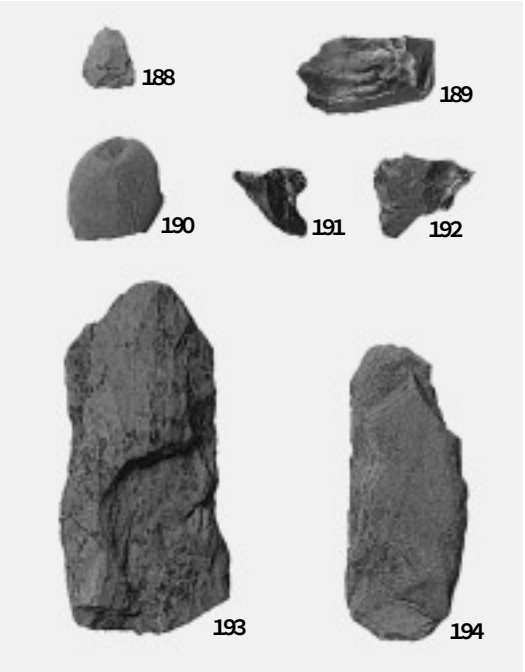


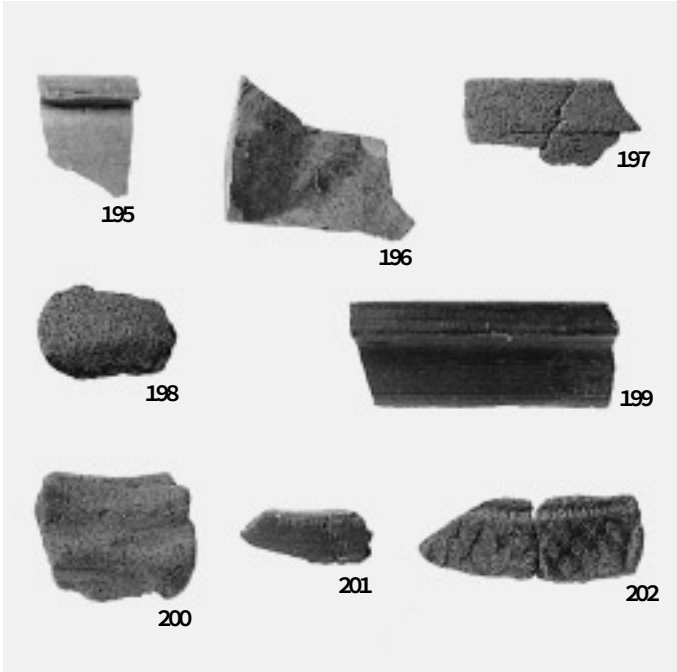


弥生時代の遺物

図版12　縄文～弥生時代・近世～近代の遺構出土遺物







報 告 書 抄 録

ふりがな	おおすぎにしいせき
書　　名	大杉西遺跡
シリーズ名	岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書
シリーズ番号	第96集
編著者名	小野木学、總山俊行、藤岡比呂志
編集機関	財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
所在地	〒502-0003　岐阜市三田洞東１-26-１　℡058-237-8550
発行年月日	西暦2006年３月１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おおすぎにしいせき 大杉西遺跡	ぎふけんせきしおおすぎ 岐阜県関市大杉	21205	10132	35° 27′ 14″	136° 57′ 00″	20030507 ～ 20030930	1,000	一般国道248号関バイパス道路改良工事に伴う

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大杉西遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡１軒 掘立柱建物跡１棟	縄文土器 石器・石製品	縄文中期末の掘立柱建物跡を検出
		弥生時代	竪穴住居跡３軒 掘立柱建物跡２棟 方形周溝墓３基	弥生土器 石器・石製品	弥生時代後期～終末期の居住域と墓域を検出
		近世～近代	土坑56基 溝８条	陶磁器 金属製品	耕作地か

要　約

今回の調査の主な成果は、縄文時代から弥生時代にかけての集落域と墓域を検出したことである。

縄文時代では、時期が中期後葉～末の竪穴住居跡（SB４）と、中期末の掘立柱建物跡（SH３）などを検出した。SB４の平面形は方形状で、中央付近に地床炉を有する。また、SH３は桁行２間、梁行２間の近接棟持柱建物跡で、四隅の柱穴が中間の柱穴より大きいという特徴がある。岐阜県内における縄文中期の掘立柱建物跡を検出した遺跡としては４例目の報告となる。

弥生時代では、竪穴住居跡３軒のうち１軒（SB１）は、直口鉢や小型器台、磨製石鏃など非日常的な遺物が出土している点、磨製石鏃の未製品と製品が出土した点、壺の出土比率が高い点などから、他の竪穴住居跡とは異なる様相を呈している。また、掘立柱建物跡２棟のうち、１棟（SH１）は独立棟持柱建物跡である。なお、検出した遺構の主軸は、後期後葉から終末期において、等高線に沿うものから真北となるものへと変化していることが判明した。

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書　第96集

大　杉　西　遺　跡

2006年３月１日

編集・発行　財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
印　　刷　西濃印刷株式会社